庄（庄・蔵本）遺跡

－徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う
発掘調査報告書、弓道場建設に伴う立会調査報告書－

徳　島　県　教　育　委　員　会
国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
2011 年

庄（庄・蔵本）遺跡

－徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う
発掘調査報告書、弓道場建設に伴う立会調査報告書－

徳　島　県　教　育　委　員　会
国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
2011 年

課外活動共用施設地点遺物包含層出土打製石斧（弥生前期）

医療技術短期大学地点第 5 層胴部穿孔弥生前期土器出土状況

医療技術短期大学地点土坑 SK302 遺物出土状況

同　　上

医療技術短期大学地点土坑 SK303 遺物出土状況

医療技術短期大学地点現地説明会

序　　文

このたび、徳島大学蔵本団地の再開発に際して、徳島県教育委員会によって実施された埋蔵文化財発掘調査報告書の第４冊目が、徳島県教育委員会と徳島大学埋蔵文化財調査室の共同事業として刊行されることとなった。本報告刊行事業は、これによって完了することとなる。

今回報告されるのは、いずれも蔵本団地内に所在する地点である。それぞれ、昭和59年（1984年）に調査した課外活動共用施設地点と、昭和62年（1987年）調査の医療技術短期大学地点、そして、昭和58年（1983年）に実施した弓道場建設に伴う立会調査の、計３か所の調査成果である。これらの調査でも、他の地点と同様貴重な成果がえられている。

課外活動共用施設地点は、平成17年（2005年）報告の体育館地点、昨年度報告の体育館器具庫地点に隣接しており、体育館地点・体育館器具庫地点同様、弥生時代前期末から中期初頭（約2,400年前）ごろのゴミ穴が検出されており、当時の集落像の一端をあきらかにするとともに、調査面積が比較的狭いにもかかわらず、土器・石器が多量に出土した。

医療技術短期大学地点では、おもに弥生時代前期から古墳時代中期にかけての土器や石器など、質量とも豊富な資料が出土した。弥生時代前期の遺構は、付近に住居が存在したことをうかがわせる内容となっている。また、弥生時代中期前葉の溝から多量の土器が出土した。古墳時代中期の溝からは、勾玉形石製品が出土しており、当時の祭祀の跡と考えられる。

これらの報告内容をみると、蔵本団地が、弥生時代から現在にいたる、県下屈指の貴重な遺跡であることと、古来県域の活動の最先端を担う地区であった事実をあらためて実感できる。今後も、学生の教材や市民への普及活動などの資料として、地域貢献に有効活用していきたい。

それぞれの発掘調査がおこなわれてから、諸般の事情によって報告書刊行までに長い期間を要した。これらの実現にご尽力いただいた、発掘調査担当の徳島県教育委員会教育文化政策課（当時文化課）、遺物の保管・展示にあたられた公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター、報告書作成業務を担当した本学施設マネジメント部ならびに同埋蔵文化財調査室の諸氏をはじめ、様々な形でこれらの調査、調整および報告書作成に貢献された皆様に心より御礼申しあげる。

平成23年3月18日

国　立　大　学　法　人
徳島大学埋蔵文化財調査室長
中村　　豊

例　　言

1　本報告書は、徳島市庄遺跡徳島大学蔵本団地内課外活動共用施設、医療技術短期大学（現医学部保健学科）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、課外活動共用施設地点の試掘調査である「部室トレンチ」出土資料も、課外活動共用施設地点に含めて報告している。また、弓道場建設に伴う立会調査出土資料の報告もあわせておこなった。

2　遺跡の所在地は、徳島市庄町１丁目78番地の１・徳島市蔵本町２丁目50番地の１である。

3　本報告書は、調査担当の徳島県教育委員会文化課（現教育文化政策課）と整理担当の徳島大学埋蔵文化財調査室の合意に基づく共同刊行物の第４冊目である。詳細な経緯は、2005年３月末刊行の『庄（庄・蔵本）遺跡－徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書－』を参照されたい。

4　考察編は後年刊行の予定である。

5　本遺跡は、平成18年刊行『徳島県遺跡地図』においては、「蔵本遺跡」として登録されている。しかし、

〇調査当時から平成18年より前は「庄遺跡」として登録されていた。

〇蔵本団地が、明治初期の地籍上庄町・蔵本町にまたがることから、本学においては独自に 「庄・蔵本遺跡」と呼称している。

以上２点の理由から、混乱をさけるために、便宜上表題を「庄（庄・蔵本）遺跡」とし、本文中は庄遺跡としている。

6　〇課外活動共用施設地点の発掘調査担当者は、福家清司（当時徳島県教育委員会文化課主事)、久保脇美朗・西谷俊則（以上当時徳島県教育委員会文化課文化財調査員）である。

〇医療技術短期大学地点の発掘調査担当者は、羽山久男（当時徳島県教育委員会文化課主事)、久保脇美朗・北原雅代・小山雅雄・竹治寿人（以上当時徳島県教育委員会文化課文化財調査員）である。

〇弓道場建設に伴う立会調査の担当者は、島巡賢二（当時徳島県教育委員会文化課主事）である。

7　遺物の整理作業は、徳島県教育委員会文化課、財団法人徳島県埋蔵文化財センターならびに徳島大学埋蔵文化財調査室にて実施し、発掘調査担当者のほか中村　豊（徳島大学埋蔵文化財調査室長・准教授・調査員)、山本愛子・加登哲子・岸本多美子・板東美幸（以上同施設マネジメント部技術補佐員）がおもに分担し、中原　計・遠部　慎（同埋蔵文化財調査室助教・調査員)、堺　圭子・中原尚子・安山かおり・溝渕寿美礼・上田敦子・前田千夏（以上同施設マネジメント部技術補佐員）がこれを助けた。

8　本書の写真撮影は、現場においては調査担当者がおこない、遺物の写真撮影は中村　豊・板東美幸・岸本多美子がおもに分担した。

9　図面のトレースは、山本愛子・加登哲子・岸本多美子・板東美幸がおもに分担した。

10　本書の編集・執筆は中村　豊がおこなった。

11　土器実測図の断面は、それぞれ白抜きは弥生土器・土師器を、黒塗りは須恵器・陶磁器を、トーンは瓦質土器を示している。また、赤彩はトーンで示している。

12　本書に収録した資料、実測図、記録類、写真は徳島県立埋蔵文化財総合センターで保管している。広く活用されることを望むものである。

13　整理作業、本書の編集に際しては、上記の諸氏のほかにも多数の方々にご協力いただいた。記して謝意を表するものである（50 音順、敬称略）。

東　　潮、天羽利夫、石井伸夫、一山　典、植地岳彦、氏家敏之、岡山真知子、大川沙織、大北和美、大橋育順、勝浦康守、栗林誠治、近藤　玲、定森秀夫、重見高博、重見美緒子、島田豊彰、下田智隆、菅原康夫、田川　憲、高島芳弘、瀧山雄一、辻　佳伸、西本和哉、早渕隆人、原多賀子、原　芳伸、藤川智之、北條芳隆、三木弘幸、宮城一木、三宅良明、森　清治、山本正弘、湯浅利彦。

本　文　目　次

第１部　課外活動共用施設建設に伴う発掘調査 …… 1
第１章　調査・整理にいたる経緯 …… 3
第１節　概　　要 …… 3
第２節　調査・整理体制 …… 3
第２章　遺跡の立地と環境 …… 5
第３章　調査の成果 …… 8
第１節　基本層序 …… 8
第２節　遺構と遺物 …… 12
１　第３遺構面 …… 12
２　第２遺構面 …… 16
３　第１遺構面 …… 28
４　遺物包含層等出土遺物 …… 33
第４章　小　　結 …… 39

第２部　医療技術短期大学建設に伴う発掘調査 …… 41
第１章　調査・整理にいたる経緯 …… 43
第１節　概　　要 …… 43
第２節　調査・整理体制 …… 43
第２章　調査の成果 …… 44
第１節　基本層序 …… 44
第２節　遺構と遺物 …… 46
１　第３遺構面 …… 46
２　第２遺構面 …… 58
３　第１遺構面 …… 81
４　遺物包含層等出土遺物 …… 81
第３章　小　　結 …… 92

第３部　弓道場建設に伴う立会調査 …… 93
第１章　概　　要 …… 95
第２章　調査の成果 …… 95
第１節　基本層序 …… 95
第２節　出土遺物 …… 95
第３章　小　　結 …… 95

ま と め …… 98

挿 図 目 次

第１図　調査地の位置…… 4
第２図　周辺の遺跡…… 6
第３図　基本層序１…… 9
第４図　基本層序２……10
第５図　確認トレンチ土層断面図……11
第６図　第３遺構面検出遺構……13
第７図　不明遺構 SX301 ……14
第８図　不明遺構 SX301 出土遺物 ……15
第９図　第２遺構面検出遺構……17
第10図　溝 SD201、流路 SR201、竪穴住居 SB201 ……18
第11図　溝 SD201 出土遺物１ ……19
第12図　溝 SD201 出土遺物２ ……20
第13図　土坑 SK202・SK203・SK301、ピット SP201 ～ SP206 ……21
第14図　ピット SP207 ～ SP215 ……22
第15図　ピット SP216 ～ SP226 ……23
第16図　ピット SP227 ～ SP235 ……24
第17図　ピット SP236 ～ SP247 ……25
第18図　土坑 SK201（36）、竪穴住居 SB201（37・38）出土遺物 ……26
第19図　ピット SP201（39・40）、ピット SP202（41）出土遺物 ……27
第20図　第１遺構面検出遺構……29
第21図　溝 SD101・SD102、井戸 SE101 ……30
第22図　溝 SD101、溝 SD101・SD102 分岐点出土遺物１ ……31
第23図　溝 SD101、溝 SD101・SD102 分岐点出土遺物２ ……32
第24図　溝 SD102 出土遺物 ……35
第25図　遺物包含層等出土遺物１……36
第26図　遺物包含層等出土遺物２……37
第27図　遺物包含層等出土遺物３……38
第28図　基本層序……45
第29図　第３遺構面検出遺構……47
第30図　溝 SD301・SD302 ……48
第31図　土坑 SK301・SK304・SK305 ……49
第32図　土坑 SK302 ……50
第33図　溝 SD301（1・2）出土遺物、土坑 SK302（3 ～ 8）出土遺物１……51
第34図　土坑 SK302 出土遺物２ ……52
第35図　土坑 SK302 出土遺物３ ……53
第36図　土坑 SK303 ……54
第37図　土坑 SK303 出土遺物１ ……55
第38図　土坑 SK303（30 ～ 39）・土坑 SK304（40・41）出土遺物 ……56
第39図　第２遺構面検出遺構……59
第40図　土坑 SK207、溝 SD202・SD203 ……60
第41図　溝 SD204・SD205・SD207……61
第42図　溝 SD205 遺物出土状況 ……62
第43図　溝 SD205 出土遺物１ ……63
第44図　溝 SD205 出土遺物２ ……64
第45図　溝 SD205 出土遺物３ ……65
第46図　溝 SD205 出土遺物４ ……66
第47図　溝 SD205 出土遺物５ ……67
第48図　溝 SD207 出土遺物１ ……69
第49図　溝 SD207 出土遺物２ ……70
第50図　溝 SD207 出土遺物３ ……71
第51図　溝 SD207 出土遺物４ ……72

第52図　溝 SD207 出土遺物 5 ……73
第53図　溝 SD209 出土遺物 1 ……75
第54図　溝 SD209 出土遺物 2 ……76
第55図　土坑 SK201 ～ SK206 ……77
第56図　掘立柱建物 SA201 ……78
第57図　竪穴住居 SB201 ……79
第58図　第 1 遺構面検出遺構……82
第59図　溝 SD102 ……83
第60図　溝 SD202（125）、竪穴住居 SB201（126）、土坑 SK206（127）、溝 SD102（128 ～ 131）・
SD101（132 ～ 136）出土遺物 ……84
第61図　土坑 SK101 ……85
第62図　第 5 層（弥生前期包含層）遺物出土状況……86
第63図　土坑 SK101（137 ～ 140）、第 5 層（弥生前期包含層：141・142）出土遺物 1……88
第64図　第 5 層（弥生前期包含層）出土遺物 2 ……89
第65図　第 5 層（弥生前期包含層）出土遺物 3 ……90
第66図　第 5 層（弥生前期包含層：152）出土遺物 4、その他（153 ～ 161）の出土遺物 ……91
第67図　弓道場立会調査……96
第68図　弓道場立会調査出土遺物……97

図 版 目 次

巻頭図版 1　課外活動共用施設地点遺物包含層出土打製石斧（弥生前期）、医療技術短期大学地点第 5 層胴部穿孔弥生前期土器出土状況
巻頭図版 2　医療技術短期大学地点土坑 SK302 遺物出土状況、同上
巻頭図版 3　医療技術短期大学地点土坑 SK303 遺物出土状況、医療技術短期大学地点現地説明会

課外活動共用施設建設に伴う発掘調査
図版 1　作業風景（南より）、完掘状況（北より）
図版 2　第 2 遺構面全景（北より）、第 2 遺構面全景（南より）
図版 3　第 1 遺構面全景（北より）、課外活動共用施設の現状（北西より）
図版 4　不明遺構 SX301 遺物出土状況 1、不明遺構 SX301 遺物出土状況 2、不明遺構 SX301 土層
図版 5　弥生前期包含層出土打製石斧、竪穴住居 SB201、溝 SD201
図版 6　溝 SD201 遺物出土状況、流路 SR201、流路 SR201 土層
図版 7　土坑 SK201、土坑 SK203、ピット SP201 遺物出土状況 1
図版 8　ピット SP201 遺物出土状況 2、溝 SD101・SD102・井戸 SE101、溝 SD101
図版 9　溝 SD101 集石、溝 SD102、井戸 SE101
図版10　課外活動共用施設地点出土遺物 1
図版11　課外活動共用施設地点出土遺物 2
図版12　課外活動共用施設地点出土遺物 3
図版13　課外活動共用施設地点出土遺物 4
図版14　課外活動共用施設地点出土遺物 5
図版15　課外活動共用施設地点出土遺物 6

医療技術短期大学建設に伴う発掘調査
図版16　第 3 遺構面全景（南より）、第 2 遺構面検出状況（北西より）
図版17　第 2 遺構面全景（南より）、第 2 遺構面北半（北西より）
図版18　第 1 遺構面全景（北西より）、第 1 遺構面東半（北より）
図版19　現地説明会、医療技術短期大学（現医学部保健学科）現状（東より）
図版20　溝 SD301、溝 SD301 遺物出土状況
図版21　溝 SD302、土坑 SK302 検出状況
図版22　土坑 SK302 遺物出土状況 1、土坑 SK302 遺物出土状況 2、土坑 SK302 遺物出土状況 3
図版23　土坑 SK302 遺物出土状況 4、土坑 SK302 遺物出土状況 5、土坑 SK302 遺物出土状況 6
図版24　土坑 SK302 遺物出土状況 7、土坑 SK302 遺物出土状況 8、土坑 SK302 遺物出土状況 9
図版25　土坑 SK302 遺物出土状況10、土坑 SK303 遺物出土状況 1、土坑 SK303 遺物出土状況 2
図版26　土坑 SK303 遺物出土状況 3、第 5 層（弥生前期包含層）出土土器 A，第 5 層（弥生前期包含層）出土土器 B
図版27　第 5 層（弥生前期包含層）出土土器 C、第 5 層（弥生前期包含層）出土打製石庖丁、第 5 層（弥生前期包含層）出土磨製石庖丁
図版28　溝 SD201 ～ SD204・SD210、溝 SD205 ～ SD209 検出状況、溝 SD205 ～ SD209
図版29　溝 SD205 土層、溝 SD205 遺物出土状況 1、溝 SD205 遺物出土状況 2
図版30　溝 SD205 遺物出土状況 3、溝 SD205 遺物出土状況 4、溝 SD205 遺物出土状況 5

図版31　溝 SD205 勾玉形石製品出土状況、溝 SD205 全景
図版32　溝 SD207 検出状況、溝 SD207 全景、溝 SD 207 土層
図版33　溝SD207遺物出土状況1、溝SD207遺物出土状況 2、溝 SD207 遺物出土状況 3
図版34　溝SD207遺物出土状況4、溝SD207遺物出土状況 5、溝 SD207 遺物出土状況 6
図版35　溝SD209遺物出土状況1、溝SD209遺物出土状況 2、溝 SD209 遺物出土状況 3
図版36　土坑 SK203、土坑 SK204、土坑 SK205
図版37　土坑 SK206、竪穴住居 SB201、溝 SD102 集石 1
図版38　溝SD102集石2、溝SD102出土鏡、溝SD 102 出土漆椀
図版39　溝 SD102 出土木製品、土坑 SK101、土坑 SK101
図版40　医療技術短期大学地点出土遺物 1
図版41　医療技術短期大学地点出土遺物 2
図版42　医療技術短期大学地点出土遺物 3
図版43　医療技術短期大学地点出土遺物 4
図版44　医療技術短期大学地点出土遺物 5
図版45　医療技術短期大学地点出土遺物 6
図版46　医療技術短期大学地点出土遺物 7
図版47　医療技術短期大学地点出土遺物 8
図版48　医療技術短期大学地点出土遺物 9
図版49　医療技術短期大学地点出土遺物10
図版50　医療技術短期大学地点出土遺物11

弓道場建設に伴う立会調査

図版51　弓道場立会調査（西より）、弓道場立会調査（東より）、弓道場現況（北より）
図版52　弓道場立会調査出土遺物

表 目 次

第 1 表　課外活動共用施設地点　土器・陶磁器遺物観察表……103
第 2 表　課外活動共用施設地点　土製品・金属製品遺物観察表……105
第 3 表　課外活動共用施設地点　石器・石製品遺物観察表……105
第 4 表　医療技術短期大学地点　土器・陶磁器遺物観察表……106
第 5 表　医療技術短期大学地点　土製品・金属製品遺物観察表……110
第 6 表　医療技術短期大学地点　石器・石製品遺物観察表……111
第 7 表　弓道場立会調査地点　土器・陶磁器遺物観察表……112

本　　文

第１部
課外活動共用施設建設に伴う発掘調査

第１章　調査・整理にいたる経緯

第１節　概　　要

2011 年３月現在、徳島大学蔵本団地において実施された埋蔵文化財発掘調査は、立会調査を除いて 22 件を数える (第１図)。このうち、第１次調査体育館器具庫地点から第５次調査動物実験施設地点、および第７次調査医療技術短期大学校舎地点は徳島県教育委員会の担当のもとに実施された。それ以外は徳島大学による。今回報告するのは、第３次調査課外活動共用施設建設に伴う発掘調査（第１図３）の成果である。

昭和 59 年（1984 年)、徳島大学では、蔵本団地に、課外活動共用施設の建設をおこなうこととなった。蔵本団地は、既知の埋蔵文化財包蔵地であったため、当時発掘調査担当部門をもたなかった徳島大学では、徳島県教育委員会文化課（現教育文化政策課）に事前発掘調査を依頼した。調査は昭和 59 年（1984 年）７月３日から８月 10 日にかけておこなわれた。調査面積は 157 ㎡である。

第２節　調査・整理体制

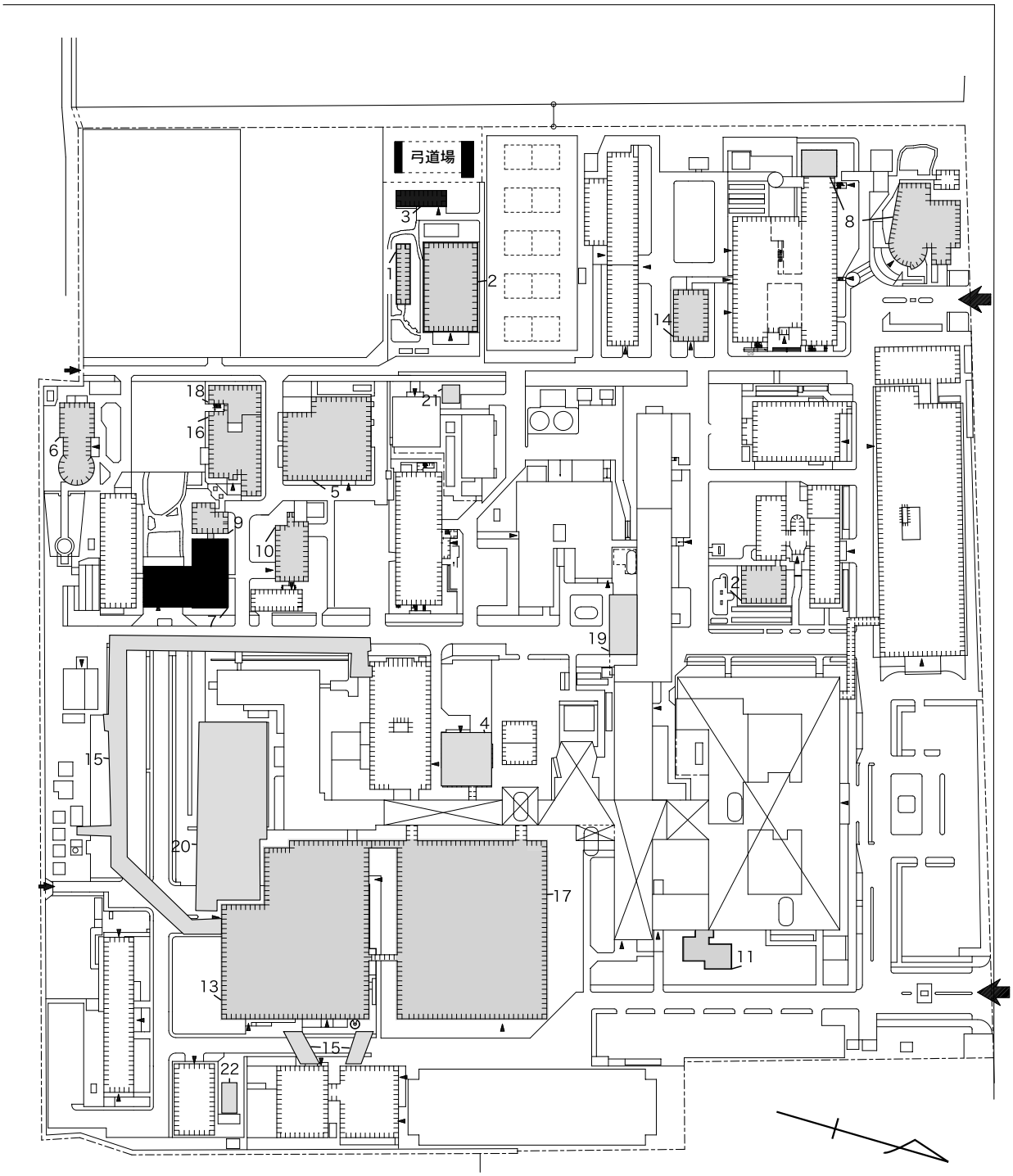
徳島県教育委員会による昭和 59 年度当時の調査体制は下記のとおりである。

昭和 59 年度

調査担当	徳島県教育委員会文化課	主　事	福家　清司
	同　上	文化財調査員	久保脇美朗
	同　上	同　上	西谷　俊則

徳島大学による平成 21 ～ 22 年度の整理体制は下記のとおりである。

整理業務担当	埋蔵文化財調査室	室長・調査員	中村　　豊（埋蔵文化財調査室准教授）
		整理員	山本　愛子（施設マネジメント部技術補佐員）
		同　上	加登　哲子（同上）
		同　上	岸本多美子（同上）
		同　上	板東　美幸（同上）
		同　上	溝渕寿美礼（同上、22 年５月 31 日まで）
		同　上	前田　千夏（同上、22 年６月１日から）



1	体育館器具庫	8	長井記念ホール・薬学部実験研究棟	14	医薬資源教育研究センター	20	西病棟
2	体育館	9	医療技術短期大学増築	15	共同溝	21	医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修その他
3	**課外活動共用施設**	10	酵素科学研究センター	16	ゲノム機能研究センター	22	西病棟新営その他電気設備工事
4	医学部臨床講義棟	11	MRI・CT棟	17	中央診療棟		
5	動物実験施設	12	附属図書館蔵本分館増築	18	ゲノム機能研究センター増築		
6	青藍会館	13	東病棟	19	医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修		
7	**医療技術短期大学**						

第１図　調査地の位置（S=1: 3,000）

第２章　遺跡の立地と環境

庄遺跡は、吉野川下流南岸最大の支流である鮎喰川の形成する三角州性扇状地の東岸、眉山の北麓に位置する（第２図）。この眉山北西麓には縄文後期から近世にいたるまでの、多くの遺跡群が展開している。今日の地名によって、庄遺跡（蔵本遺跡、南蔵本遺跡を含む：１）、三谷遺跡（２）、南庄遺跡（３）、名東遺跡（４）、鮎喰遺跡（５）に区分されている。

この一帯では、旧石器時代から縄文後期中葉にいたるまでの遺跡は検出されていない。しかしながら、鮎喰川下流西岸の矢野遺跡においては、縄文中期末から後期前葉にかけての集落が検出されており、沖積層に埋没する遺跡については、今後も注意を要する。

この一帯で集落の形成が本格化するのは縄文後期後葉である。庄遺跡財務省蔵本住宅地点では、後期後葉の住居跡１棟が検出されている（岡山 1999）。晩期前半の土器は、庄遺跡旧あさひ学園地点の包含層で確認されている。晩期後半の凸帯文土器期は、名東遺跡で土器、石器が豊富に出土した（勝浦 1990）。三谷遺跡では凸帯文土器と遠賀川式土器が共伴して出土し、多量の石器、貝塚や動植物遺体が検出され、７体にもおよぶイヌの埋葬が確認された（勝浦ほか 1997）。

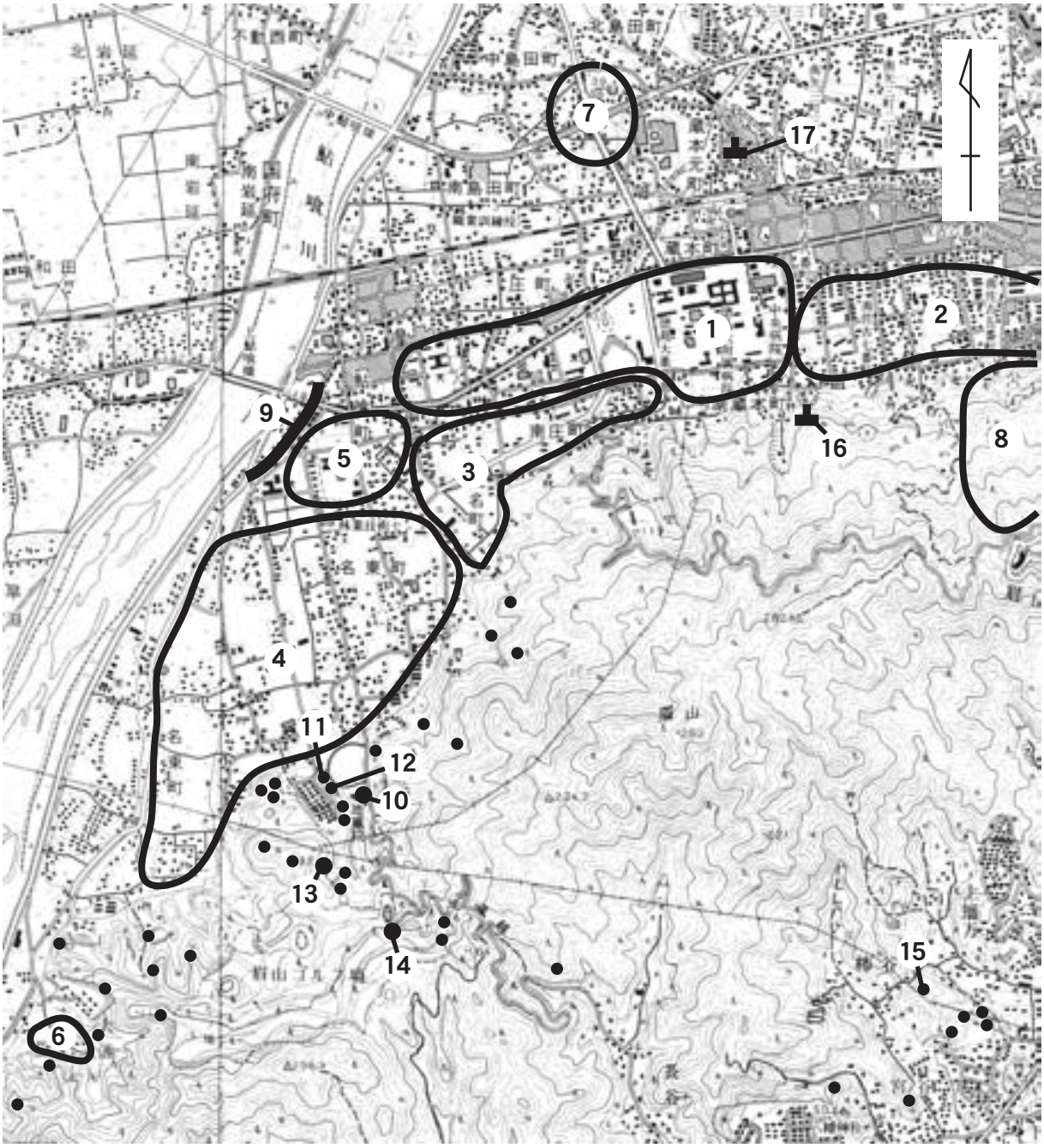
三谷遺跡と相前後するころ、庄遺跡において弥生前期の集落が形成され始める。前期初頭の遺跡は、比較的小規模なものが庄遺跡や鮎喰遺跡の微高地上で点々とみつかっている。三谷遺跡のように凸帯文土器を主体とする小集団と遠賀川式土器を主体とする小集団が混在し、縄文から弥生への移行期を形成していたものと考えられる。続く弥生前期中葉、庄遺跡は、徳島大学蔵本団地を中心に巨大化しはじめる。灌漑用水路を開削し、水田をいとなんでいる。複数棟の住居跡も検出されている。本格的な弥生集落がようやく形成されたことを示すものである。続く前期末から中期初頭にかけて、徳島大学構内周辺の遺構群は厚い洪水砂によって埋没してしまう。この埋没過程においても豊富な遺構、遺物が検出されているが、やがて、用水路網が荒廃し、集落が解体してしまう。これ以降、15 世紀ごろまで、新たな地層の堆積は認められない。地形の安定化が、水田経営の難航を招いたものと推察される。

弥生中期前葉から中葉の集落は、あたかも縄文期に帰ったかのようで、点在するにすぎない。

弥生中期末から後期初頭にかけて、遺構は再び増加し始める。南庄遺跡では 23 棟の竪穴住居跡が密集して検出され、多量の石器未製品が出土している。名東遺跡で扁平鈕式銅鐸が埋納されたのもおおむねこの時期と考えられる（勝浦 1990）。庄・南庄・名東の３遺跡合わせて、50 基前後の方形周溝墓が築かれるのもこの時期である。

後期前葉に、ふたたび遺構密度はうすくなるが、後期後葉から終末期に、また多数の遺構がみられるようになる。このころから鉄器が徐々に増加し、終末期には本格的な鍛冶遺構が検出されている。弥生終末期の集落は、弥生前期には水田や用水路が存在していたところに立地している。

古墳時代には名東遺跡の東南、眉山西北麓の丘陵尾根上に前期古墳が点々と築かれる。なかでも節句山古墳群（11･12）や八人塚古墳（14）が知られている。八人塚古墳は全長 60 m、後円部直径 30 mの規模をもち、川原石を積み上げた、前方後円形の積石塚である。庄遺跡の背後に位置する眉山北麓では、今のところ古墳はみつかっていない。しかし、遺跡の規模、吉野川河口から紀伊水道を望む地形環境からみて古墳が存在しないとは考えにくく、今後、改めて分布調査をおこなう必要があると思われる。これら前期古墳にともなう集落は今のところ明確ではない。しかしながら、溝や井戸などが点々とみつかっており、いずれ住居群の存在も確認できると考えている。



0　　2.5km

1　**庄遺跡（蔵本遺跡、南蔵本遺跡を含む）**
2　三谷遺跡
3　南庄遺跡
4　名東遺跡
5　鮎喰遺跡
6　大浦遺跡
7　中島田遺跡
8　徳島藩主蜂須賀家墓所（万年山地区）
9　袋井用水の水源地
10　穴不動古墳
11　節句山１号墳
12　節句山２号墳
13　うばのふところ古墳
14　八人塚古墳
15　福万谷１号墳
16　佐古城跡
17　伝蔵本城跡

第２図　周辺の遺跡

古墳中期段階の古墳、集落ともこの地域では未見であるが、横穴式石室をもつ後期古墳は点々とみつかっている。節句山古墳群などとともに名東遺跡の東南に穴不動古墳（10）が存在する。しかしながら、後期古墳にともなう集落跡も明確ではない。

奈良時代から平安時代の古代律令期の遺構は、庄遺跡や名東遺跡で大型の掘立柱建物跡がみつかっている。庄遺跡の加茂名中学校地点、財務省蔵本住宅地点や、体育館地点（第１図２）からは、掘立柱建物跡や流路が検出されており、墨書土器や土鈴、石製や銅製の帯金具、斎串や人形、鳥形木製品、多量のモモの種子などが検出されており、付近に官衙的機能を有する機関が存在していた可能性が高い。文献に残る名方郡衙、のちの名東郡衙は、特定はできないもののおおむねこの地域一帯に存在していたと考えられる。さらに、庄遺跡では、この時期の条里制地割りに関連すると考えられる溝が検出されている。これらの溝は、若干場所をずらしながらも、中世、近世から今日にいたるまで受け継がれている。このほかに、眉山西麓の大浦遺跡（６）では、仏具の鋳型などがみつかっている。

中世の遺跡としては、中島田遺跡（７）から鎌倉時代の遺跡がみつかっている。畿内産瓦器や輸入陶磁器も認められ、水運、交易の要所として位置づけることができるだろう。これらは、鮎喰川による沖積作用による、生活域の拡大をうかがわせる。中世城郭としては、眉山北斜面尾根上の佐古城跡（16）や、田宮川（鮎喰川旧河道）の自然堤防上に蔵本城跡（17）が存在したと伝えられる。

江戸時代以降の本地域は、当時の絵図から、城下町周辺の散村および水田が展開していた。この時期の水田開発は比較的徹底されたものである可能性が高く、古墳時代から中世にかけての多くの遺構が削平を受けている。袋井用水（９）を水源地とする名東用水の本格的な開削も、この時期におこなわれている。また、東方へ湾曲する鮎喰川の攻撃を受けやすい東岸に連続堤が築かれ、鮎喰川の天井川化も進行した。鮎喰川東岸・眉山北西麓の景観は、この時期から大きく改変されていった。なお、眉山の北斜面には、蜂須賀家万年山墓所（８）が設けられた。

明治時代には、現県立中央病院・徳島大学蔵本団地から蔵本公園、加茂名中学・西消防署・財務省蔵本団地にかけて陸軍第43連隊の兵営と練兵場がいとなまれた。西方の南庄町と名東町の境界にある現県立林業試験場には射撃場、眉山中腹の現西部公園には陸軍墓地を要する大規模な軍事施設であった。

昨今においては宅地造成が著しく進められており、眉山も採石場によって大きく削られ、谷は埋められつつある。無理な宅地開発が招いた地辷りもあった。徳島の象徴そのものでもある吉野川・眉山をふくめた景観をどのように受け継ぐかは、文化財の保存・活用と表裏一体であり、われわれの将来と関わる今後の大きな課題である。

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

課外活動共用施設地点は、ほかの庄遺跡の調査地点と同様、16 世紀ごろから近世の第１遺構面、弥生前期末・中期初頭から 15 世紀ごろの第２遺構面、縄文晩期末・弥生前期初頭から弥生前期中葉の第３遺構面という３つの遺構面を基本としている。

以下、調査区基本土層断面図（第３図）を、近年の調査でえられた知見を加えつつ参照する。

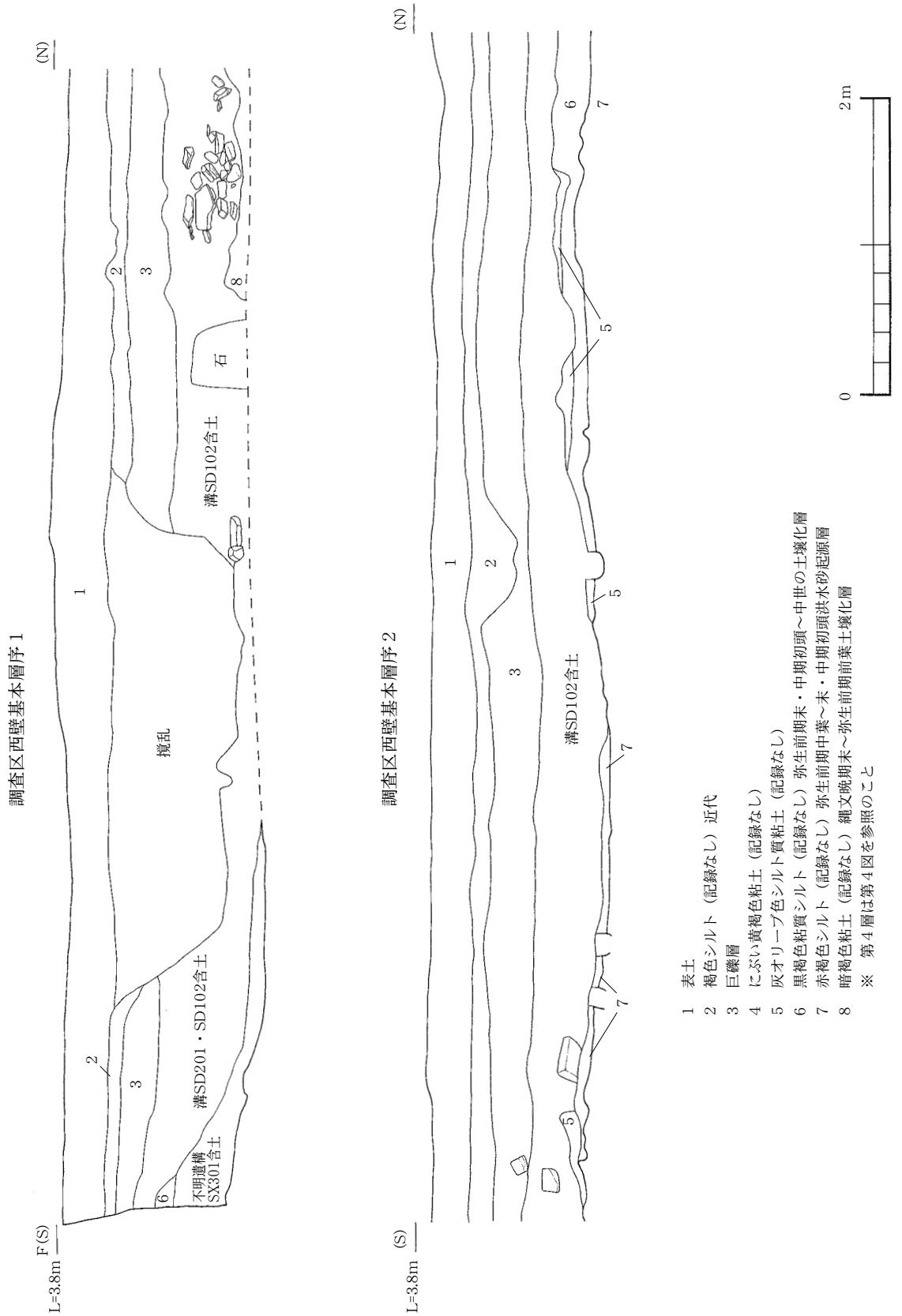
第１～３層は、近代以降の盛り土である。第１層からは、注射針や薬品瓶、近年のゴミ類などもみられ、第２次大戦後の徳島大学医学部成立時や、明治期における陸軍第43連隊兵営創設に関わるものと推察される。第２層形成時、第５層～第７層を客土として利用したらしく、弥生土器や土師器、須恵器などがみられる。

第２層は、幕末ごろから兵営が築かれるまでの間にいとなまれた水田耕作土である。土中からは大谷焼など、幕末から近代にかけての陶磁器が出土する。グライ化が著しく進んだ部分があり、排水不良気味の水田であったと考えられる。第３層の巨礫層は、第２層の水田に関連する石敷きの暗渠が壁面にかかったものと推察される。

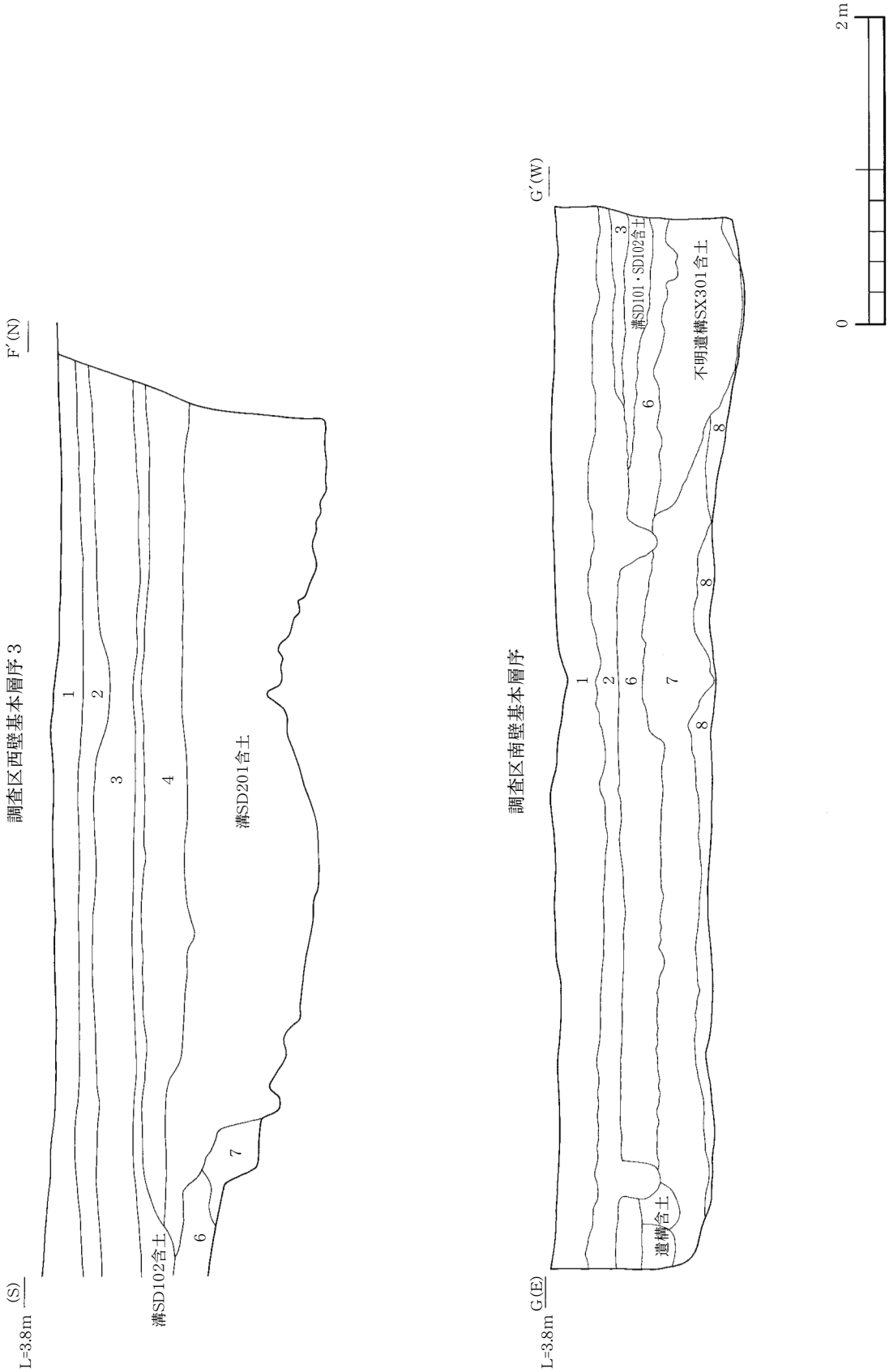
第４層は、16 世紀ごろから江戸後期にかけての水田層であると推察される。中世末の遺物が出土することはほとんどなく、第５・６層出土遺物の下限が 15 世紀ごろであるところからこの層の上限を推定している。そうしたなかでも、17 世紀ごろとおぼしき備前系陶器の破片が出土することは、まれに認められる。また、上面では犂耕の痕跡を確認できる。第２層同様グライ化したシルト質ないしはシルト質の粘土が堆積しており、排水不良気味の水田層であったと推察される。この下の第５・６層との関係は不整合であり、また第５・６層が長期間安定した土壌化層であるところからみて、16 世紀から江戸前期にかけてのころに、用水開発がおこなわれた可能性が高い。これが、「名東用水」の開発と一致するかは、今後の文献史学との共同研究によってあきらかにすべき課題である。今回の第１遺構面は、第４層を除去した第５・６層上面において検出した遺構である。また、これより上位の層に相当する遺構も含まれることから、時期は近世から近現代ということになる。

第５・６層の灰オリーブ色シルト質粘土層・黒褐色粘質シルト層は、弥生前期末・中期初頭から 15 世紀ごろにいたる遺物が出土する。この間全く新規の堆積が認められないため、土壌化が著しく進んで、明瞭な黒褐色帯をなしている。この第５・６層を取り除いた第７層上面で検出できる諸遺構が第２遺構面である。本来なら第５・６層上面から掘りこまれた遺構群であるが、土壌化が著しく、検出できないため、第７層上面まで掘り下げて検出するのが通例である。今回の調査でも、第７層上面において、多くの遺構を検出している。これらが第２遺構面の遺構群である。また、一部の遺構が、土壌化によって検出不能になって、遺物包含層出土土器となっていることは間違いない。

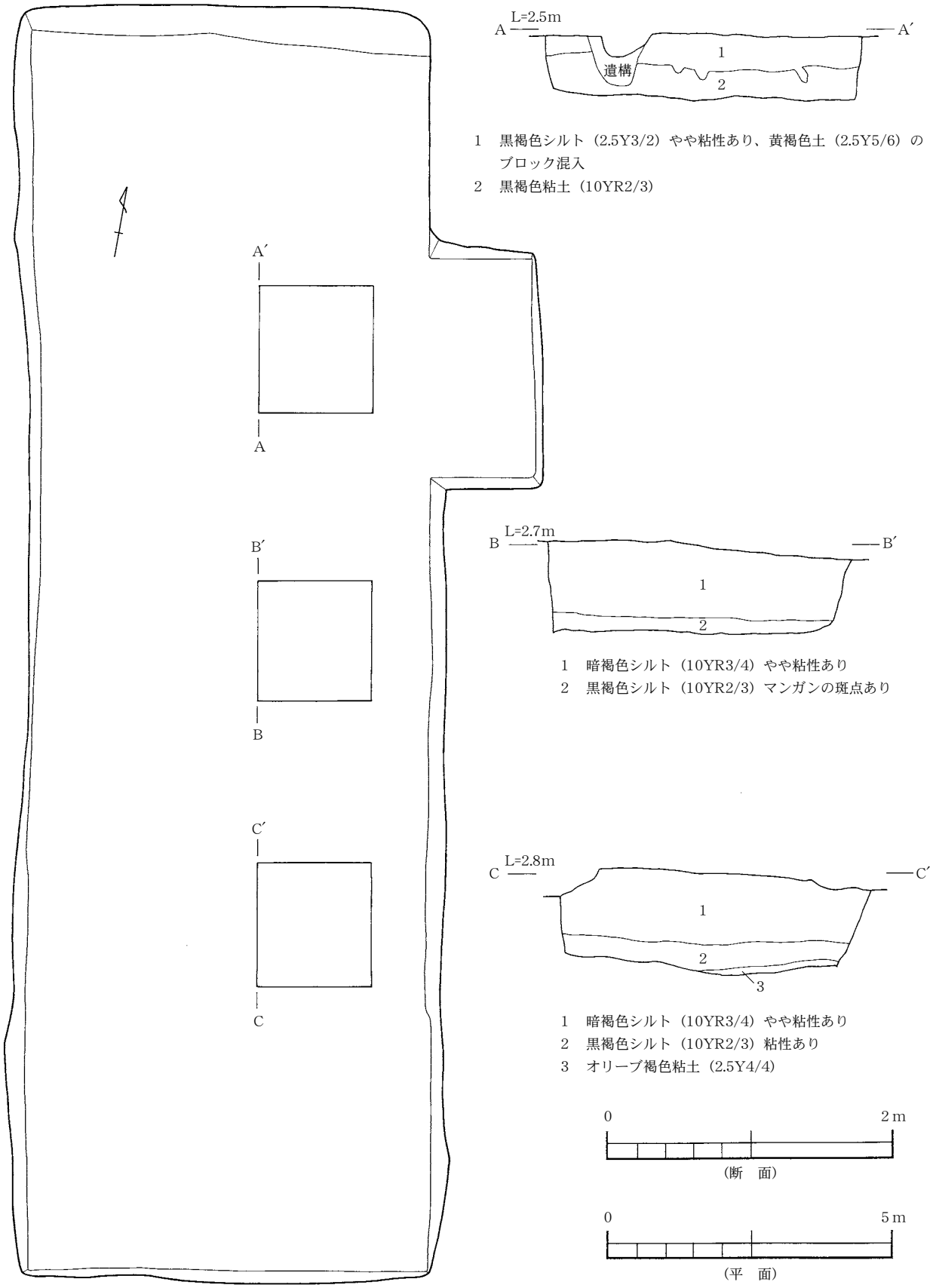
第７層の赤褐色シルト層（他の地点では黄褐色のことが多い。）は、弥生前期中葉から同前期末･中期初頭にかけての洪水砂を起源とする堆積層である。地点によっては、この層中から弥生前期中葉から同前期末・中期初頭の遺物が多量に出土することがある。また、単発的に遺構が検出されることがあり、これらの検出面が一定しないこと、下層ほど前期中葉の遺構が増加する傾向のあることなど、一度の洪



第３図　基本層序１　※位置は第20図を参照のこと



第４図　基本層序２　※注記は第３図、位置は第20図を参照のこと



第５図　確認トレンチ土層断面図

水によるものではないと考えられる。場所によっては、ラミナを観察できることもあるが、たいていはなにがしかの撹拌を受けていることが多い。

この第７層を取り去った第８層、暗褐色粘土層上面において検出されるのが、第３遺構面である。時期は弥生前期中葉を中心とするが、今回の調査では、２つの遺構を検出しているが、いずれも第７層堆積中に形成された遺構を、この遺構面でとらえたものであり、第８層上面から掘りこまれた、本来の第３遺構面の時期ではない。第８層からは、縄文晩期末から弥生前期前葉の遺物片が出土することがあり、この時期の土壌化層であるとみられる。この層を利用して、弥生前期において、灌漑水田稲作が開始された。地点によっては、この第７層と第８層の間層を確認できる場合がある。

第８層以下はグライ化した細砂層から粘土層が相当の厚さをもって堆積し、有機物層を介在する（第５図）。もっとも上位の有機物層（第５図第２層）からは、縄文晩期初頭の土器が出土することがある。その下位から、後期中葉の土器が出土したこともある。ボーリングのデータによると、沖積層基底礫層とみられる礫層まで、同様の粘土層が、20ｍ以上連続して堆積しているが、いまのところ遺物の出土は確認されていない。

第２節　遺構と遺物

１　第３遺構面

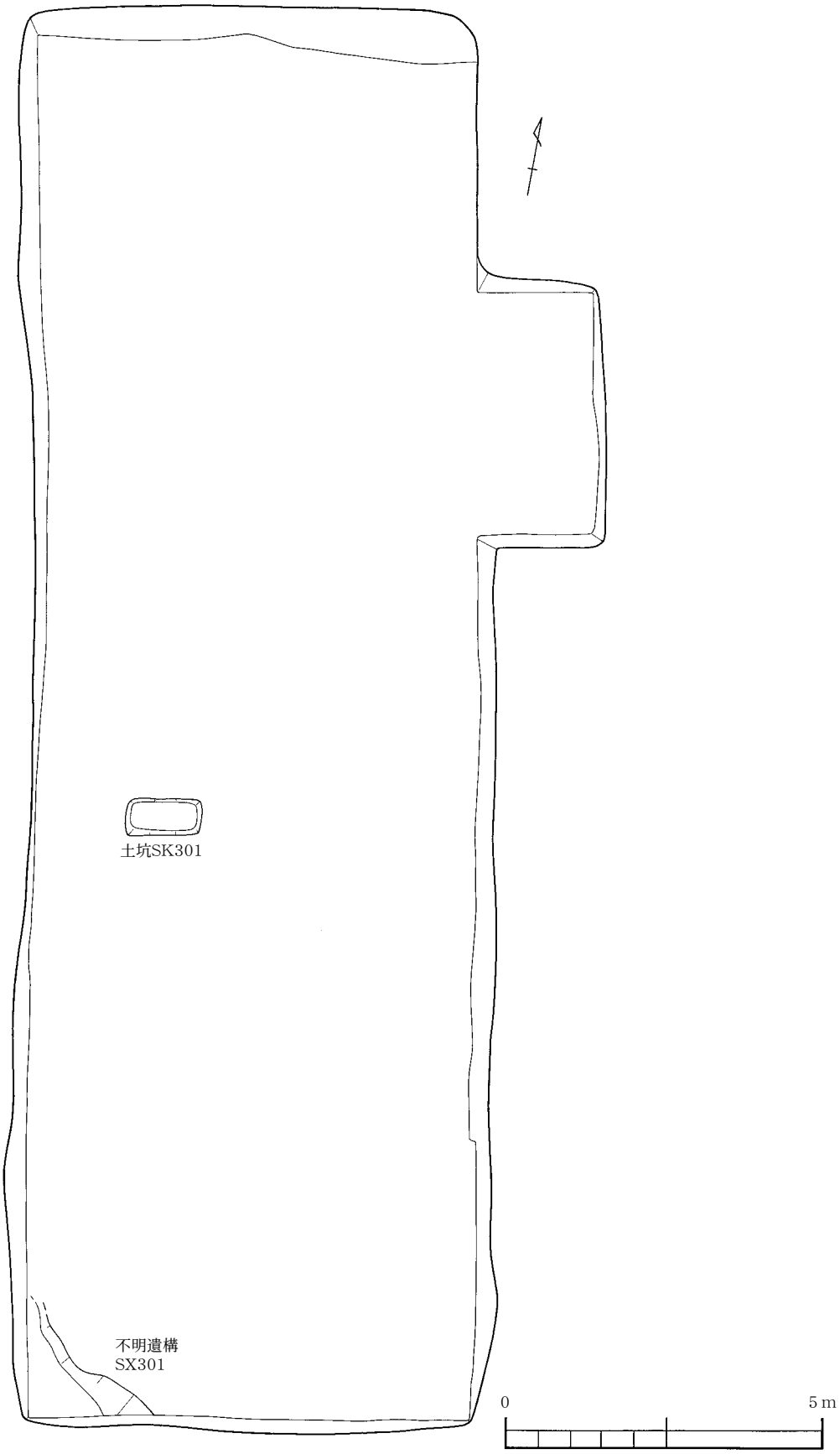
第３遺構面からは、不明遺構 SX301・土坑 SK301 を検出した（第６図）。不明遺構 SX301 からは、弥生中期初頭の土器と石器が出土している（第７図）。

不明遺構 SX301

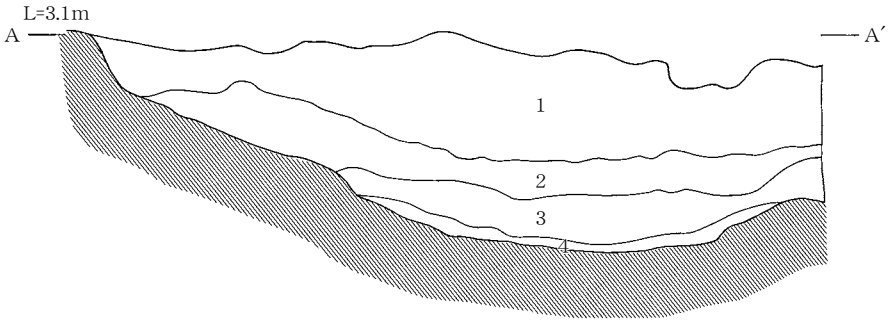
不明遺構 SX301 は、第７層堆積中に形成された遺構を、この遺構面で検出したものとみられる。第７層は弥生前期中葉から弥生前期末・中期初頭にかけて連続的に堆積した洪水砂起源層である。ラミナを観察できることもあるが、大半は何らかの撹拌を受けている。しかし、土壌化にいたる前に次の洪水が堆積し、また撹拌するという状況が幾度か繰り返された結果、この層を区分して遺構面を見極めるのは極めて難しい。したがって、遺構埋土と当時の旧地表をなしていた土との区分自体が難しいこととなる。不明遺構 SX301 も、本来は土坑である可能性が高いが、先の理由によって、遺構の規模･プランや埋土を正確に見極めることはできない。

不明遺構 SX301 からは、弥生中期初頭の土器・石器が出土した。

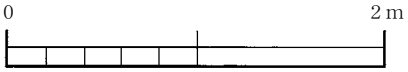
第８図１～６は甕である。１は、胴部上半で少し内湾し、口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部に刻目を施す以外は無文である。外面にはハケメを施し、内面は口縁部付近に横方向のハケメがみられ、胴部以下板ナデを施す。２は胴部上半で直立し、口縁部で強く屈曲し、外反して立ち上がる。内・外面ともにハケメを施し、外面底部付近には、ハケメ調整後に縦方向のヘラミガキを施す。やや上げ底で、低い台状の底部をもつ。口縁端部に刻目をもつ以外は無文である。３は、胴部上半で少し内湾し、口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部に刻目を施す以外は無文である。調整は、外面かすかにタタキ痕を観察でき、ハケメを施す。内面は、口縁部付近に横方向のハケメを施し、胴部ナデ調整である。４は、胴部上半で直立し、口縁部で屈曲し、外反して立ち上がる。口縁端部に刻目を施す以外は無文である。外面にはハケメを施し、内面は口縁部付近に横方向のハケメがみられる。５は胴部上半で直立し、口縁部で屈曲し、外反して立ち上がる無文の甕である。外面には縦方向のハケメを施し、内面には横方向の



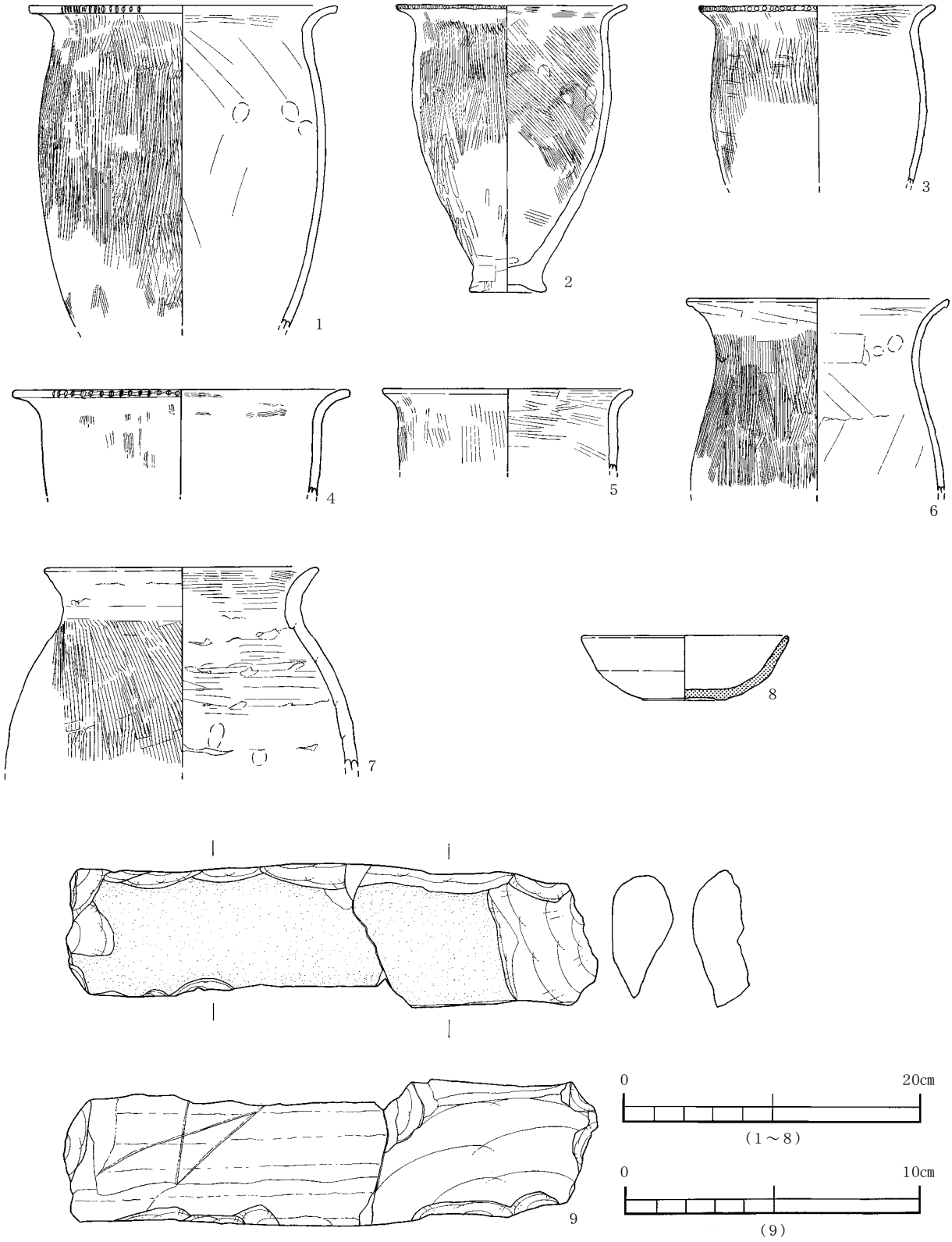
第６図　第３遺構面検出遺構



1　暗オリーブ褐色シルト（5Y4/3）粒子やや粗く、焼土粒、木炭粒などを多く含む
2　暗オリーブ褐色粘土（2.5Y3/3）粒子細かく粘性強し、焼土粒、木炭粒などを多く含む
3　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）粒子微細、粘性強、大粒の木炭粒を含む
4　オリーブ黒色土粘土（5Y3/1）３層よりもさらに粘性強、微小な木炭粒を多く含む



第７図　不明遺構 SX301



第８図　不明遺構 SX301 出土遺物

ハケメがみられる。６は、胴部上半で強く内湾ののち、口縁部は強く外反気味に立ち上がる。口径に対し、器高の高い形態である。文様はない。調整は外面が口縁部付近はナデ調整で、以下縦方向のハケメを施す。内面は口縁部付近に横方向のハケメ若干、以下板ナデである。

７・８は、いずれも第２遺構面の遺構の掘り残しから貫入したものと思われる。７は古墳時代中期の土師器甕である。球状の胴部をもち、口縁部は強く外反して立ち上がる。器壁は厚く、輪積み痕を残す。外面は縦方向のハケメで、口縁部ナデ調整である。内面は，口縁部付近に横方向のハケメを施し、以下ナデ調整である。８は、瓦器椀である。屈曲部をもち、高台をもたないタイプである。暗文は不明瞭である。在地型のものであろうか。溝 SD201 出土資料（第 11 図 18）に、類似のものがある。

９は石器である。打製石庖丁の未製品の可能性がある。石材は珪質片岩である。

土坑 SK301

土坑 SK301（第 13 図右上）は、長さ約 0.6 m、幅約 0.3 m、深さ約 10 ㎝をはかる。

出土遺物はみられない。

２　第２遺構面

第２遺構面からは、北端部をのぞいて、その大半から土坑･ピットを検出した（第９図）。弥生中期初頭から 13 世紀にいたるまでの、多様な時期の遺物が出土している。また、北端部からは、溝 SD201 と、流路 SR201 を検出した。第２次調査体育館地点において検出した、東西大溝 202 と水路 201（徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室 2005）の西側上流部に相当するものとみてよいだろう。

溝 SD201・流路 SR201

溝 SD201 は、幅約４m、深さ約 0.8 mをはかる。土器・陶磁器（第 11 図、第 12 図 27 ～ 30）、石器（第 12 図 34・35）、土製品（第 12 図 31 ～ 33）が出土した。

第 11 図 10 は古墳時代前期の土師器、12･14 ～ 16 は弥生後期の土器である。いずれも混入であろう。10 は二重口縁の甕である。12 は口縁部に浅い凹線を施す。胴部外面はハケメである。14･15 は無文の鉢である。16 は高杯の胴部である。内面のヘラミガキが顕著である。

11・13 は土師器の甕である。11 は口縁部で「く」の字状に屈曲して立ち上がり、胴部外面にハケメを施す。13 は、口縁部内面に受け部を有する。いずれも器壁が厚い。

17 は白磁碗である。中国製であろう。18 ～ 24 は瓦器椀である。18 は口縁部で屈曲して立ち上がり、高台がない。一方、19 ～ 23 は高台を有する。19・20・22・23 は外反ぎみに立ち上がる。19 ～ 24 は内外面の暗文が顕著である。内面は平行暗文である。いずれも台形の高台を有している。18 は在地型の可能性がある。19 ～ 24 はいずれも和泉型瓦器椀Ⅲ－１期ごろに相当し、12 世紀末から 13 世紀初頭に位置づけられよう（尾上 1983、橋本 1992）。

25 は、土師器高台付杯で、10 世紀代のものである。流路 SR201 のものが混入したものであろう。

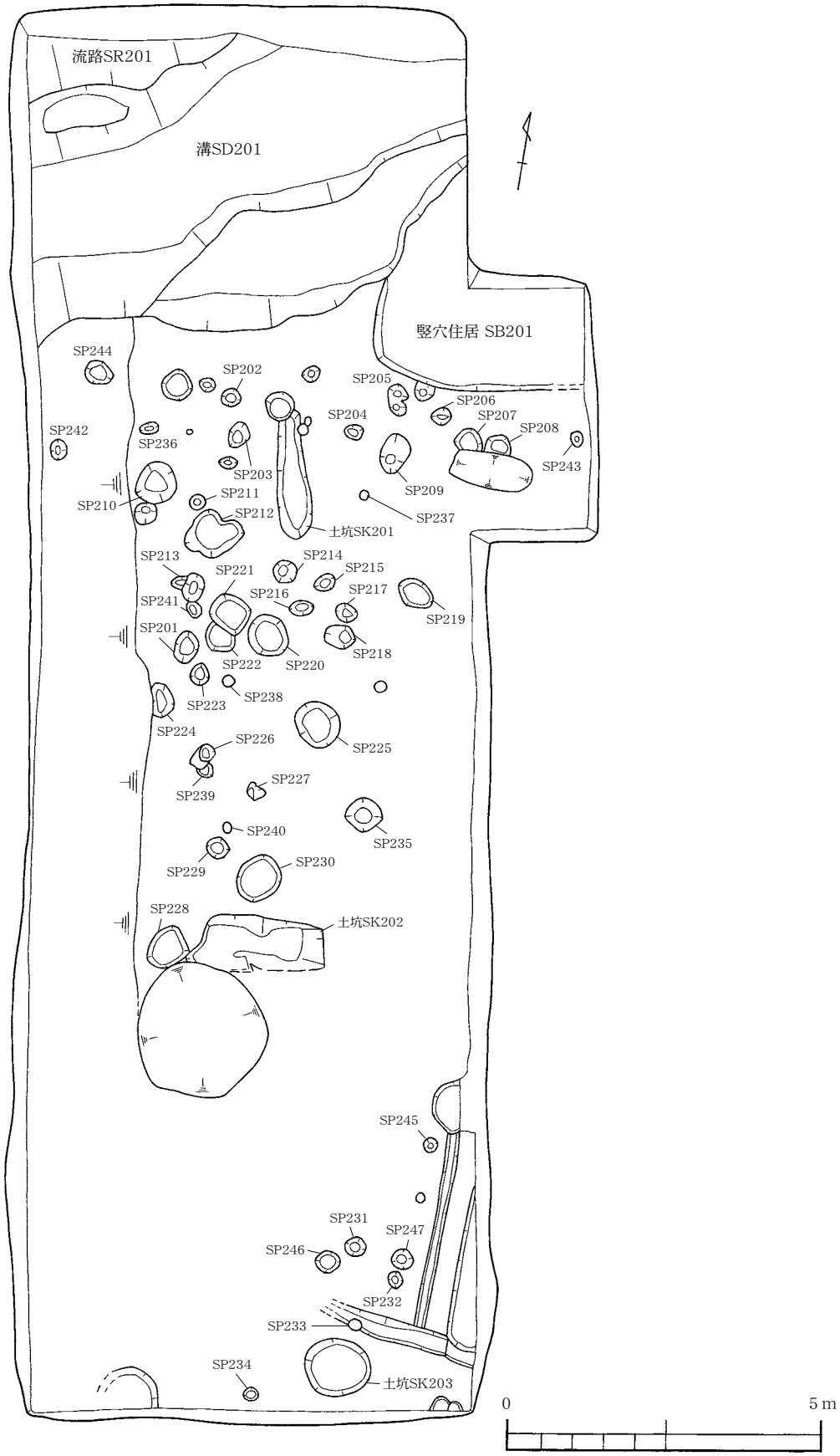
26 は、青磁皿の底部破片である。これも中国産と思われる。

27 ～ 30 は土師器甑の把手である。形態にバリエーションがみられる。

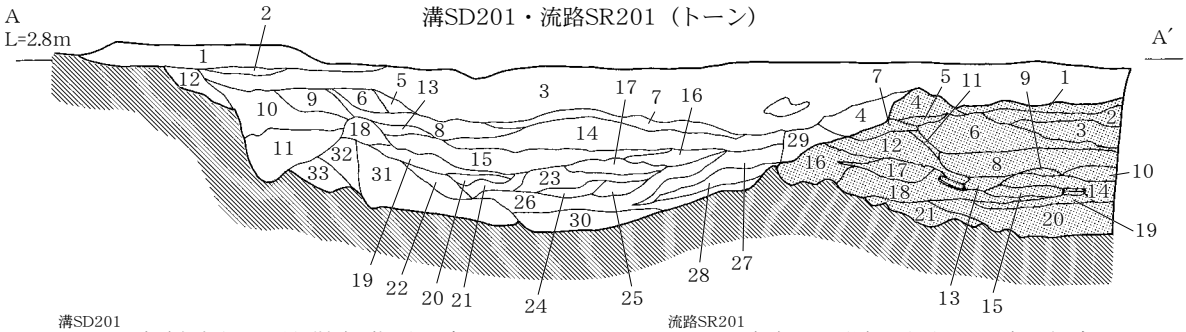
31 ～ 33 は管状土錘である。体育館地点からも多量の資料が出土している（徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室 2005）。

34・35 は石器である。34 は磨石で硬質砂岩製である。35 は砥石で、砂岩製である。

流路 SR201 は、調査区北西隅において検出した。今回の調査では、調査区端にその一部を検出したの

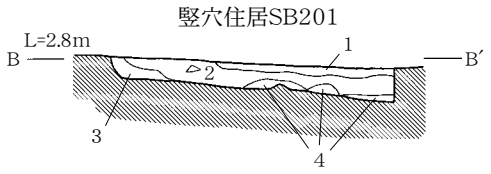


第９図　第２遺構面検出遺構

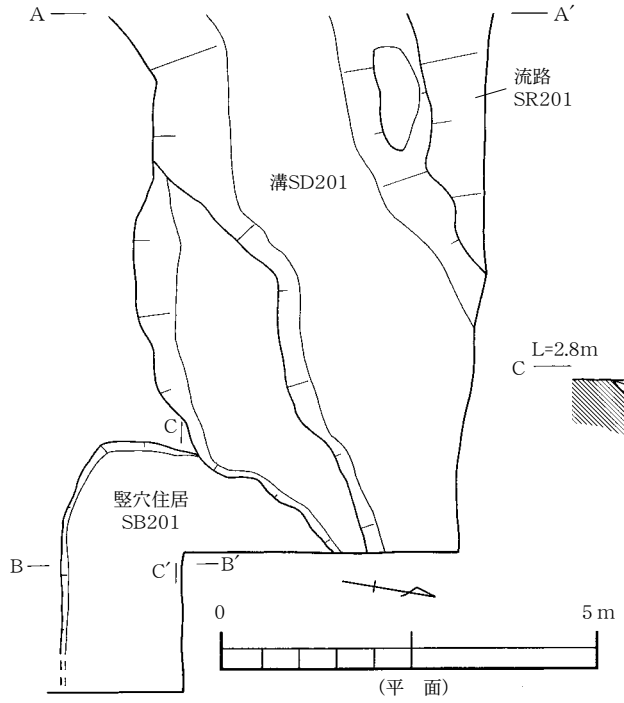


溝SD201
1　オリーブ灰色粗砂（2.5GY6/1）茶褐色土粒・鉄分を含む
2　灰オリーブ色粗砂（5Y5/3）
3　暗オリーブ色粘土（記録なし）
4　にぶい黄褐色細砂（10YR4/3）
5　灰色粗砂（7.5Y6/1ないし10Y6/1）
6　オリーブ黄色粗砂（5Y6/4）鉄分を多く含む
7　灰オリーブ色細砂（5Y5/2）鉄分・マンガンを多く含む
8　暗オリーブ色粗砂（5Y4/4）鉄分を多く含む
9　オリーブ黄色粗砂（5Y6/4）第6層とほぼ同じ土色、土質
10　オリーブ灰色粗砂（2.5GY6/1）
11　暗オリーブ灰色粗砂（2.5GY4/1）中に同色のシルト混入、鉄分を含む
12　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）
13　灰色粘土（7.5Y5/1）細砂粒を含む
14　灰色粗砂（7.5Y6/1）
15　灰色粗砂（10Y5/1）粘土を含む
16　灰オリーブ色シルト質粘土（5Y5/2）
17　暗オリーブ色極細砂（5Y4/3）均質
18　灰オリーブ色シルト質粘土（7.5Y5/2）鉄分を含む
19　灰オリーブ色粘土（7.5Y4/2）鉄分を含む
20　暗オリーブ色粗砂（5Y4/3）
21　暗緑灰色粘土（記録なし）
22　灰色粘土（7.5Y5/1）鉄分を含む
23　暗オリーブ色粗砂（5Y4/3）第20層より砂粒が大きい
24　暗オリーブ灰色粗砂（2.5GY4/1）粘土粒を含む
25　灰オリーブ色粗砂（5Y5/2）粘土粒を含む
26　灰色粘土（7.5Y5/1）大小の砂粒を含む
27　灰オリーブ色細砂（7.5Y5/2）粘土粒を含む
28　灰色細砂（10Y5/1）粘土粒を含む
29　オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）
30　砂礫層
31　オリーブ灰色シルト質極細砂（2.5GY5/1）
32　暗オリーブ灰色粘土（5GY4/1）粘性強い
33　暗オリーブ灰色粘土（5GY4/1）第32層に似るが、灰白色ブロックや鉄分を含む

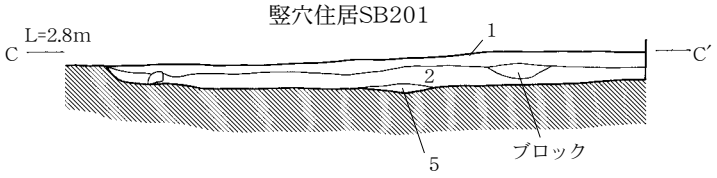
流路SR201
1　オリーブ灰色シルト（記録なし）鉄分・マンガンを多く含む
2　灰オリーブ色シルト（記録なし）鉄分・マンガンを少量含む
3　オリーブ灰色粘質シルト（2.5GY5/1）
4　暗褐色粗砂（10YR3/3）
5　暗褐色粗砂（10YR3/3）第4層に似るが、鉄分・マンガンを含む
6　灰色粘土（5Y4/1）鉄分・マンガンを多量に含む
7　灰オリーブ色シルト（7.5Y5/2）鉄分・マンガンを多く含む
8　オリーブ灰色粗砂（5GY5/1）磨滅した土器片を含む
9　緑灰色粘土（10GY5/1）砂粒を含む
10　灰オリーブ色粘土（5Y4/2）砂粒を多く含む
11　オリーブ灰色シルト質粘土（2.5GY5/1）鉄分・マンガンを含む
12　暗緑灰色粘土（10GY4/1）砂粒を含む
13　緑灰色粘土（10GY5/1）第9層に似るが、より砂粒を多く含む
14　緑灰色粗砂（10GY5/1）
15　暗オリーブ灰色シルト質粘土（2.5GY4/1）鉄分。マンガンを含む
16　オリーブ灰色粘土（5GY5/1）砂粒を多く含む
17　暗オリーブ灰色細砂（2.5GY4/1）均質
18　緑灰色粗砂（10GY5/1）第14層に似るが、砂粒がさらに粗い
19　暗緑灰色極細砂（10G4/1）均質
20　灰色シルト質粘土（10Y4/2）砂粒を含む
21　記録なし



竪穴住居SB201
1　灰色シルト（記録なし）
2　灰色シルト（記録なし）黄褐色シルトブロックを含む
3　灰オリーブ色シルト（記録なし）黄褐色シルトブロック、鉄分・マンガン含む
4　灰オリーブ色粘質シルト（記録なし）赤褐色シルトブロック含む
5　暗灰黄色粘土（記録なし）大粒の黄褐色シルトブロックを多く含む

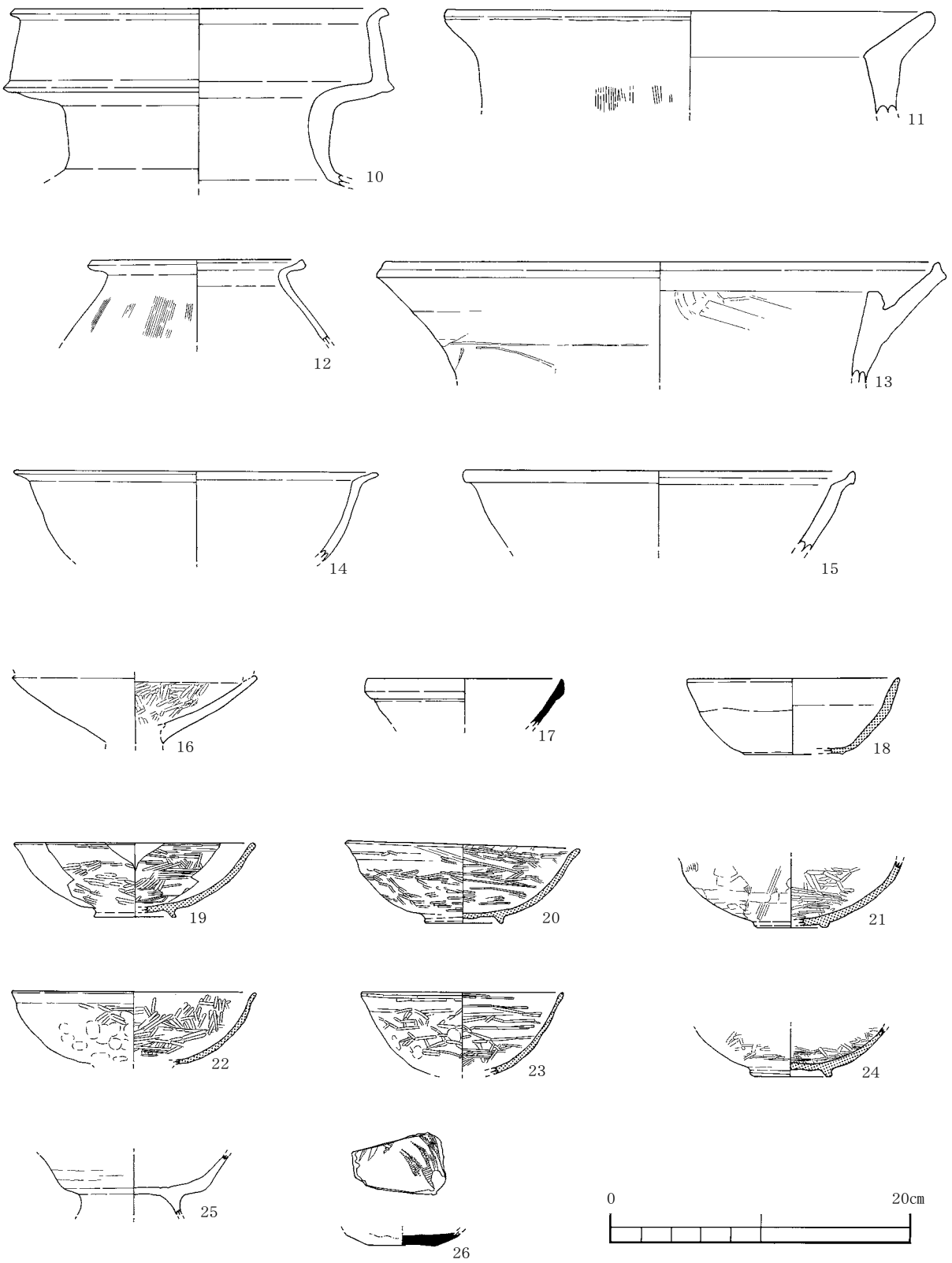


（平　面）

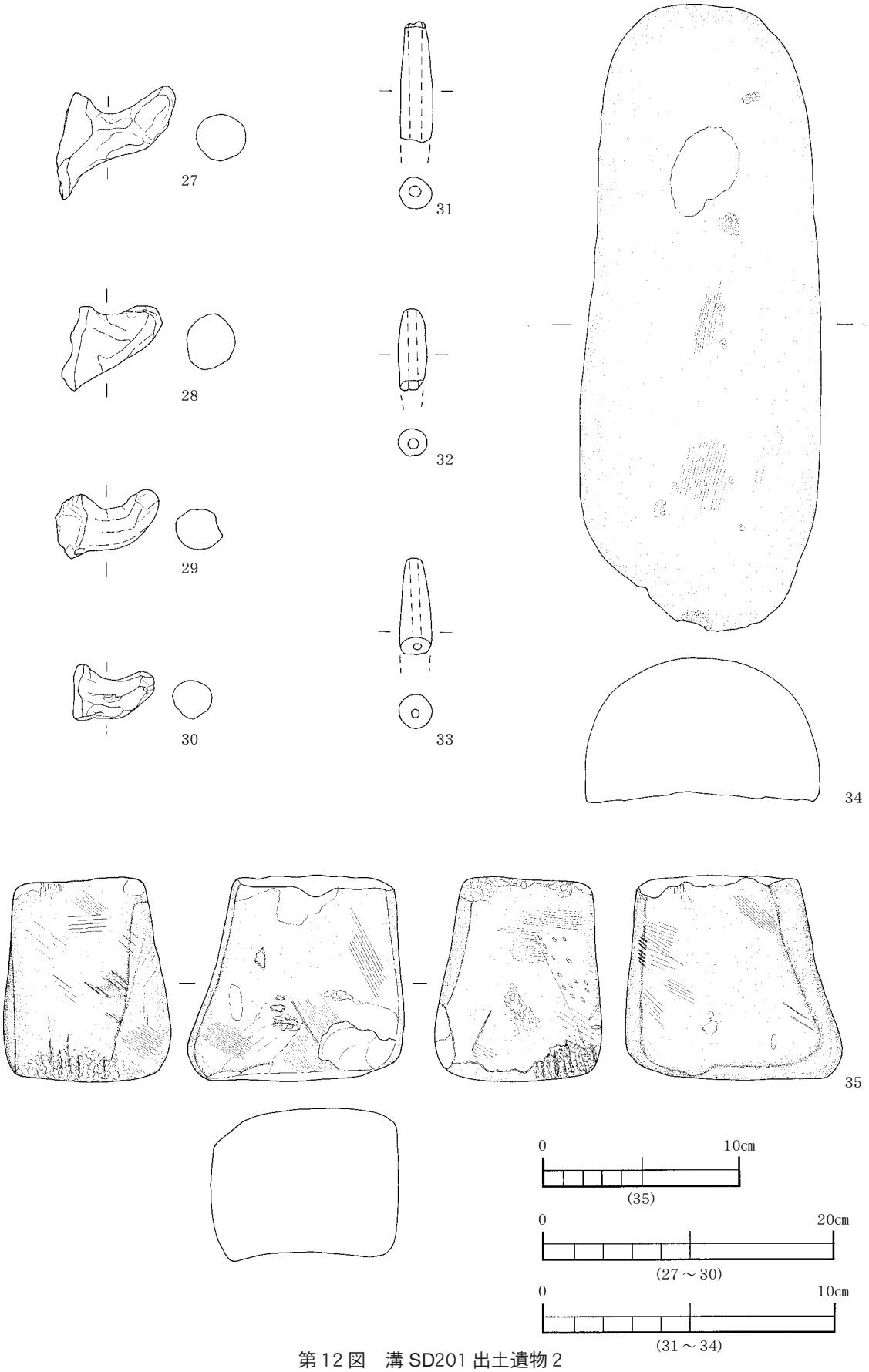


（断　面）

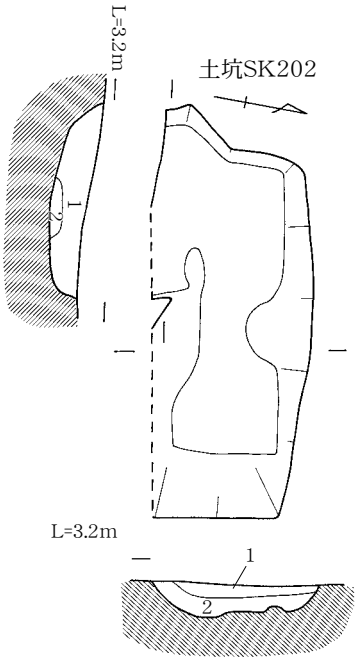
第10図　溝 SD201、流路 SR201、竪穴住居 SB201



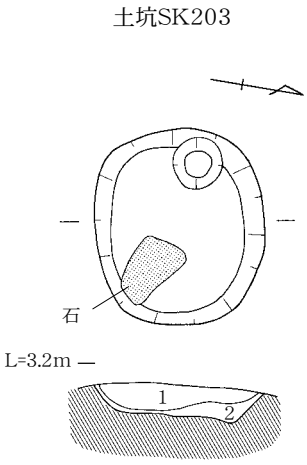
第11図　溝 SD201 出土遺物１



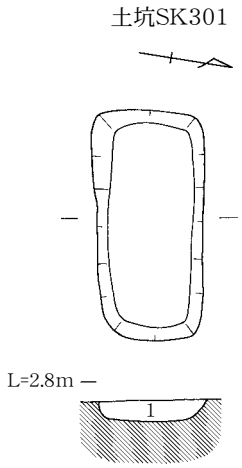
第12図　溝 SD201 出土遺物２



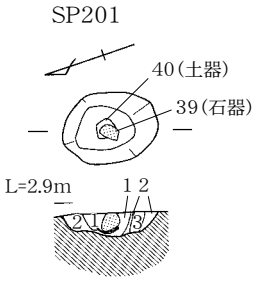
1　オリーブ灰色シルト（記録なし）鉄分を含む
2　褐色シルト（記録なし）粗い砂粒を含む



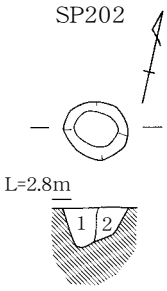
1　黒褐色粘質シルト（2.5Y3/2）
2　暗オリーブ褐色粘質シルト（2.5Y3/3）
黄褐色シルトブロックを含む



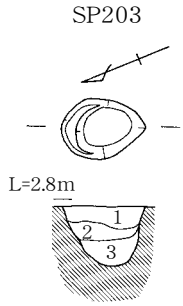
1　にぶい黄褐色砂質シルト（10YR5/3）



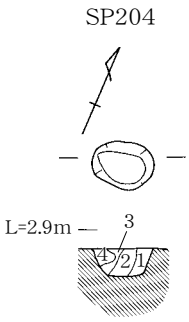
1　オリーブ灰色粘質シルト（記録なし）
2　暗オリーブ色シルト（記録なし）黄褐色
シルトブロックを含む
3　灰オリーブ色シルト質粘土（記録なし）



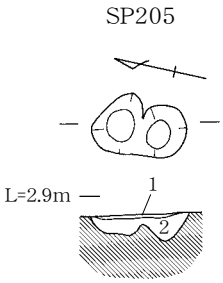
1　灰色シルト（記録なし）
2　暗オリーブ色粘質シルト（記録なし）



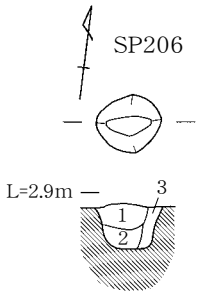
1　オリーブ灰色粘質シルト（記録なし）
赤褐色シルトブロックを含む
2　オリーブ褐色粘質シルト（記録なし）
赤褐色シルトブロックを含む
3　オリーブ褐色シルト（記録なし）
赤褐色シルト、同粘土ブロックを含む



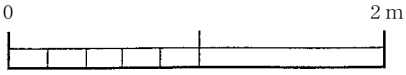
1　暗オリーブ色粘質シルト（記録なし）
灰色・黄褐色シルトブロックを含む
2　灰オリーブ色シルト（記録なし）
黄褐色シルトブロックを多量に含む
3　暗オリーブ色粘質シルト（記録なし）
第1層に似る
4　灰オリーブ色シルト質粘土



1　灰色砂質シルト（記録なし）
2　灰色粘質シルト（記録なし）

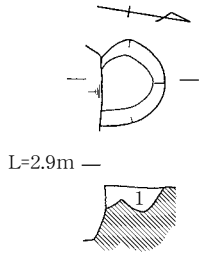


1　灰オリーブ色シルト（記録なし）
赤褐色シルトブロック（微小）を含む
2　暗オリーブ色シルト（記録なし）
3　暗オリーブ色粘質シルト



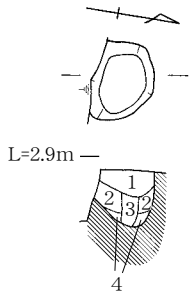
第13図　土坑 SK202・SK203・SK301、ピット SP201 ～ SP206

SP207



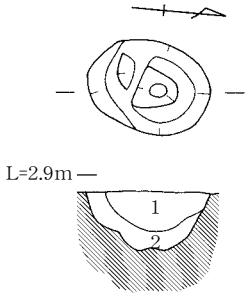
1　灰オリーブ色粘土（記録なし）

SP208



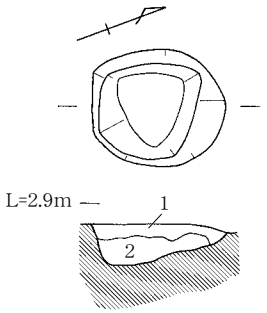
1　灰色シルト（記録なし）
2　オリーブ灰色シルト（記録なし）
　　黄褐色シルトブロックを含む
3　オリーブ灰色粘質シルト（記録なし）
4　黄灰色シルト（記録なし）

SP209



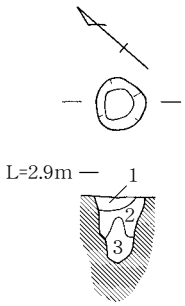
1　灰色粘質シルト（記録なし）
2　灰オリーブ色粘土（記録なし）

SP210



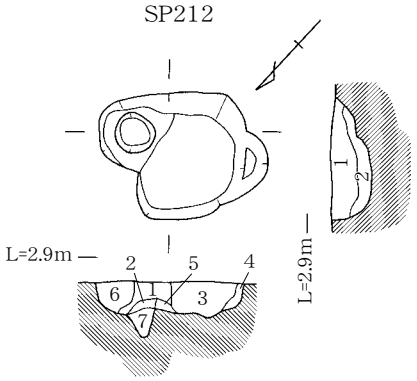
1　灰オリーブ色粘質シルト（記録なし）
2　暗オリーブ色粘土（記録なし）

SP211



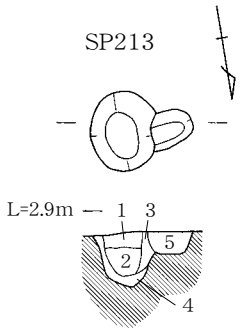
1　灰色シルト（記録なし）
2　灰オリーブ色粘質シルト（記録なし）
　　黄褐色シルトブロックを含む
3　灰色粘土（記録なし）

SP212



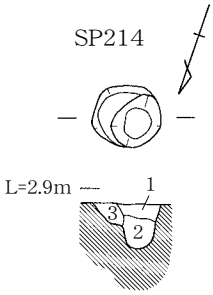
1　灰オリーブ色粘質シルト（記録なし）
2　灰オリーブ色シルト（記録なし）黄褐色シルトブロックを含む
3　灰オリーブ色粘質シルト（記録なし）黄褐色シルトブロックを少量含む
4　灰色粘質シルト（記録なし）暗赤褐色シルトブロックを含む
5　オリーブ褐色粘質シルト（記録なし）
6　暗オリーブ色シルト（記録なし）黄褐色シルトブロックを多量に含む
7　暗オリーブ色シルト（記録なし）第6層に類似

SP213



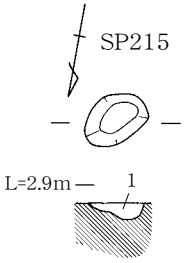
1　暗オリーブ褐色シルト（記録なし）
2　灰オリーブ色シルト（記録なし）
3　灰オリーブ色シルト（記録なし）
　　第２層より若干暗めの色調
4　オリーブ褐色粘質シルト（記録なし）
5　オリーブ褐色砂質シルト（記録なし）

SP214

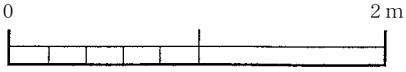


1　灰オリーブ色粘質シルト（記録なし）
2　オリーブ灰色砂質シルト（記録なし）
3　暗オリーブ色砂質シルト（記録なし）

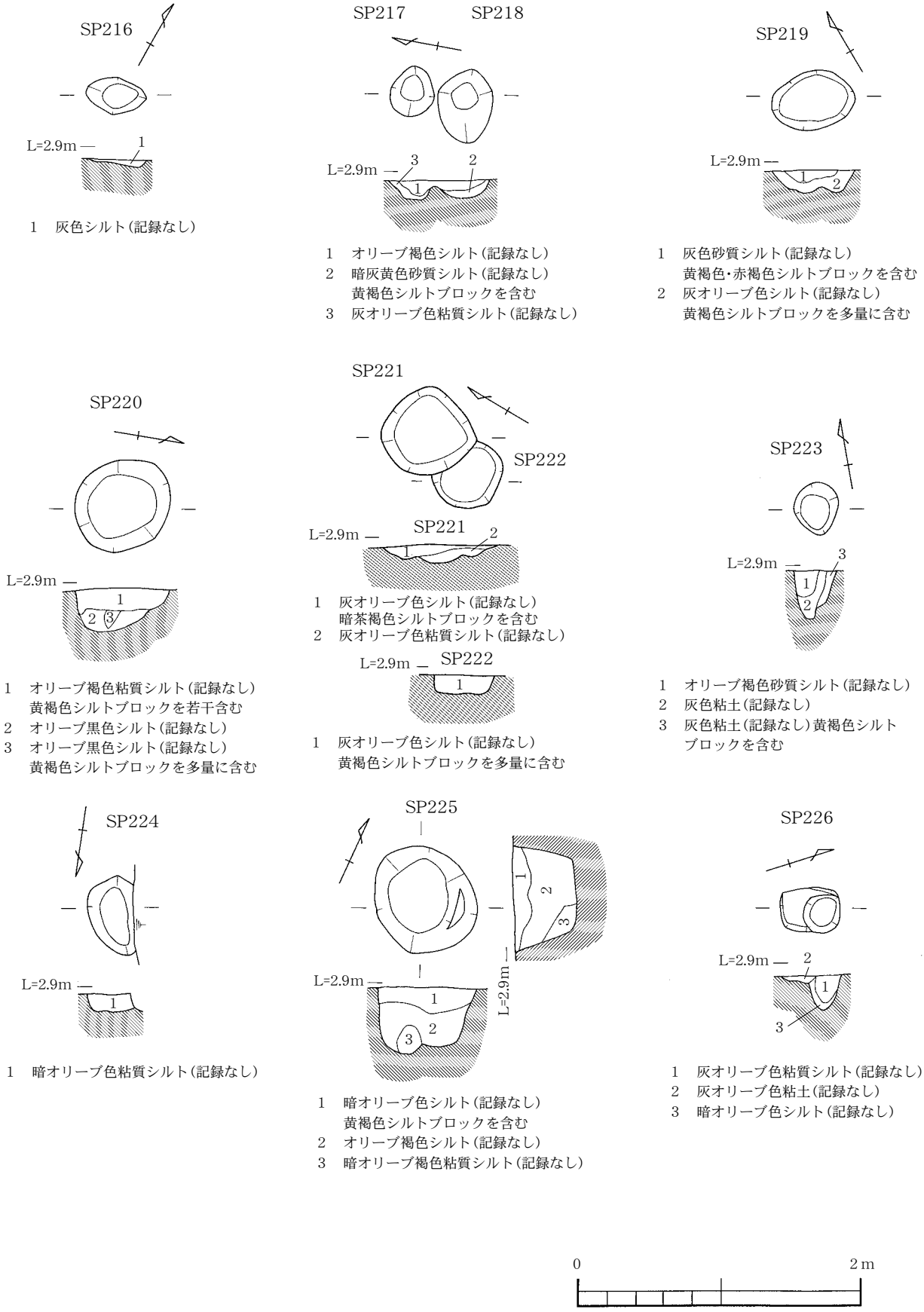
SP215



1　灰オリーブ色シルト（記録なし）

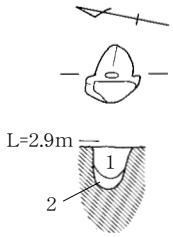


第 14 図　ピット SP207 ～ SP215



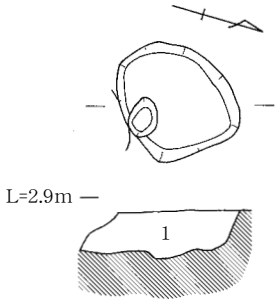
第15図　ピット SP216 ～ SP226

SP227



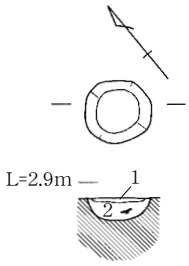
1　灰オリーブ色粘質シルト（記録なし）
　　黄褐色シルトブロックを多量に含む
2　灰色シルト（記録なし）

SP228



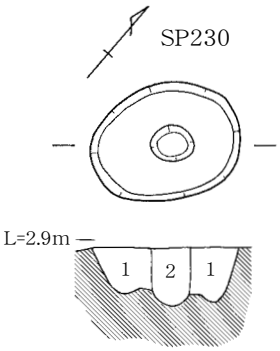
1　暗オリーブ色シルト（記録なし）
　　黄褐色シルトブロックを多量に含む

SP229



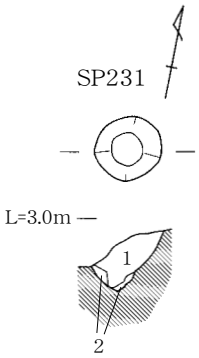
1　灰オリーブ色シルト（記録なし）
2　灰オリーブ色粘土（記録なし）
　　黄褐色・茶褐色シルトブロックを
　　多量に含む

SP230



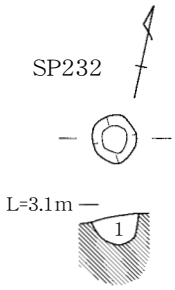
1　灰オリーブ色シルト（記録なし）
2　灰色粘質シルト（記録なし）

SP231



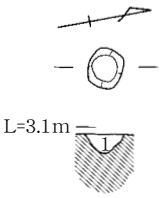
1　黒褐色粘質シルト（2.5Y3/2）
2　オリーブ褐色粘質シルト（2.5Y4/6）

SP232



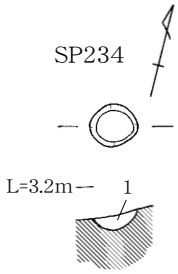
1　灰オリーブ色シルト（記録なし）
　　黄褐色・茶褐色シルトブロックを含む

SP233



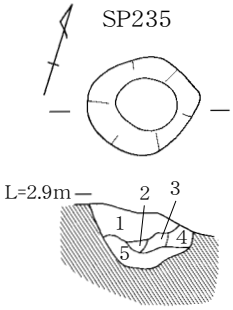
1　灰オリーブ色シルト（記録なし）
　　黄褐色シルトブロックを多量に含む

SP234

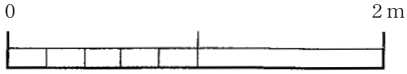


1　暗オリーブ色シルト（5Y4/3）
　　黄褐色シルトブロック・炭化物を含む

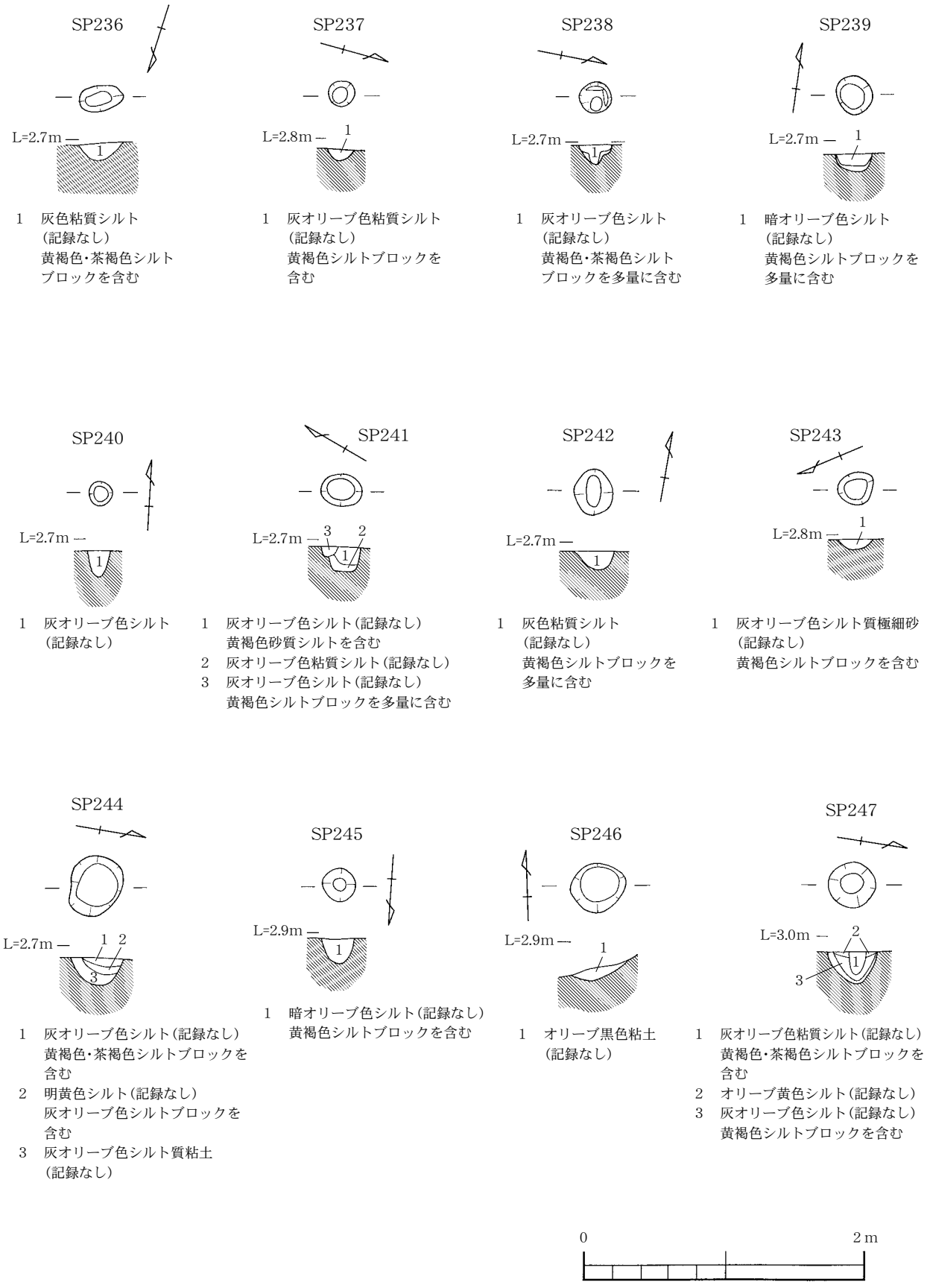
SP235



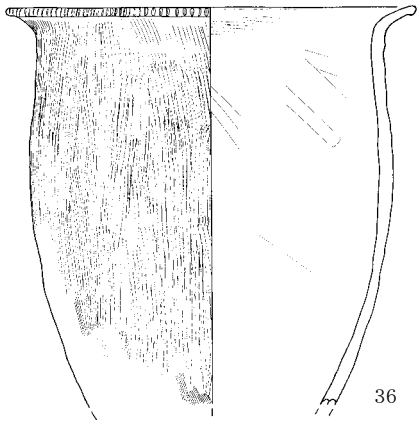
1　灰オリーブ色シルト（記録なし）
2　暗オリーブ色シルト（記録なし）
3　暗オリーブ色シルト（記録なし）
　　黄褐色シルトブロックを含む
4　暗オリーブ色シルト（記録なし）
　　第３層に似るが、ブロックの混入が
　　少ない
5　暗オリーブ色粘質シルト（記録なし）

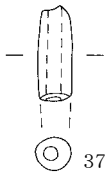


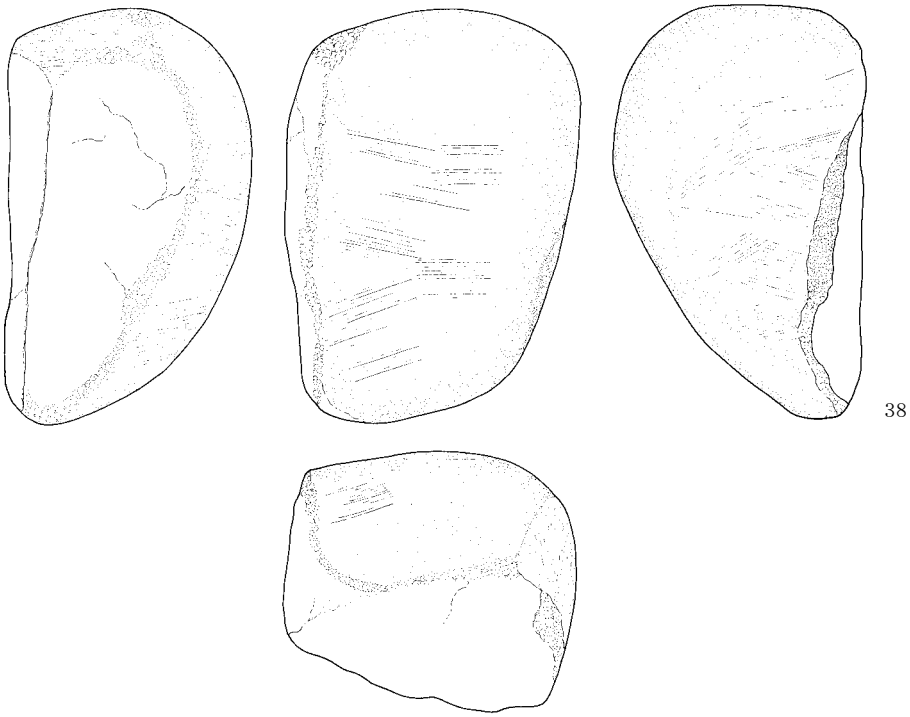
第16図　ピット SP227 ～ SP235

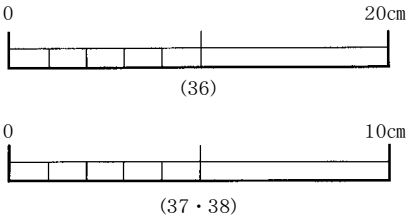


第17図　ピット SP236 ～ SP247

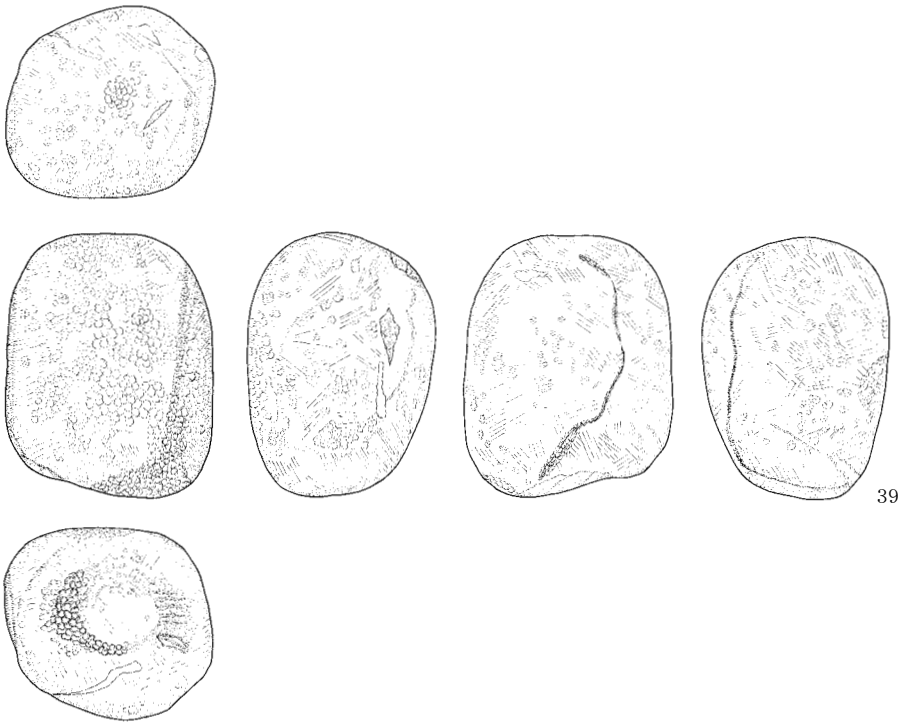


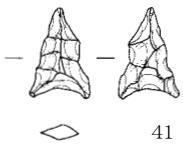


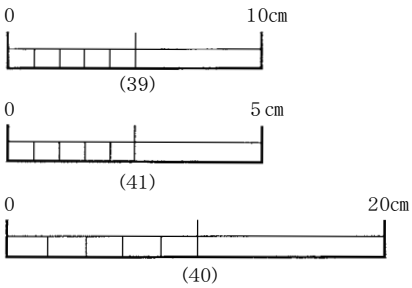




第18図　土坑 SK201（36）、竪穴住居 SB201（37・38）　出土遺物







第19図　ピット SP201（39・40）・SP202（41）　出土遺物

みであるが、本来は幅７ｍ以上、深さ約２ｍをはかる。

出土遺物はみられないが、体育館地点の流路 201 からみて、10 世紀代に位置づけられよう。

竪穴住居 SB201

竪穴住居 SB201 は、調査区北東端で、その一部を検出した（第 10 図）。深さ約 15 ㎝である。

出土遺物は石器と土製品のみで（第 18 図 37・38）、時期は不詳であるが、弥生終末期に類例の多い、ひん岩製の石杵（第 18 図 38）が出土しているため、弥生終末期に属するとみてよいだろう。37 は管状土錘である。

土坑 SK201

土坑 SK201 は、調査区中央やや北寄りで検出した（第９図）。舟形を呈する。

出土遺物は、弥生中期初頭の甕である（第 18 図 36）。口縁端部を刻む以外は無文である。口縁部が外反する、いわゆる如意形口縁を呈し、外面のハケメ調整が顕著である。

ピット SP201・SP202

ピット SP201 は、調査区中央やや西寄りに位置する（第９図）。径約 50 ㎝、深さ 10 ㎝を呈する（第 13 図）。

ほぼ中央部から、土師器椀と、その上から敲石が出土した。土師器椀（第 19 図 40）は、瓦器椀と同じ形態・調整をもつ、在地型のものと考えられる。暗文は不明である。和泉型瓦器椀Ⅳ－２期に相当しよう（尾上 1983・橋本 1992）。39 は緑色岩製の敲石である。

ピット SP202 は、土坑 SK201 の北西に位置する（第９図）。径約 35 ㎝、深さ約 20 ㎝をはかる（第 13 図）。

石鏃が１点（第 19 図 41）出土した。

第２遺構面では、上記以外にも土坑２基（第 13 図、土坑 SK202･土坑 SK203）、ピット 45 基（第 13 ～ 17 図、ピット SP203 ～ SP247）を検出している。

いずれも遺構の性格を示し、時期を明確とするような出土遺物はみられない。

３　第１遺構面

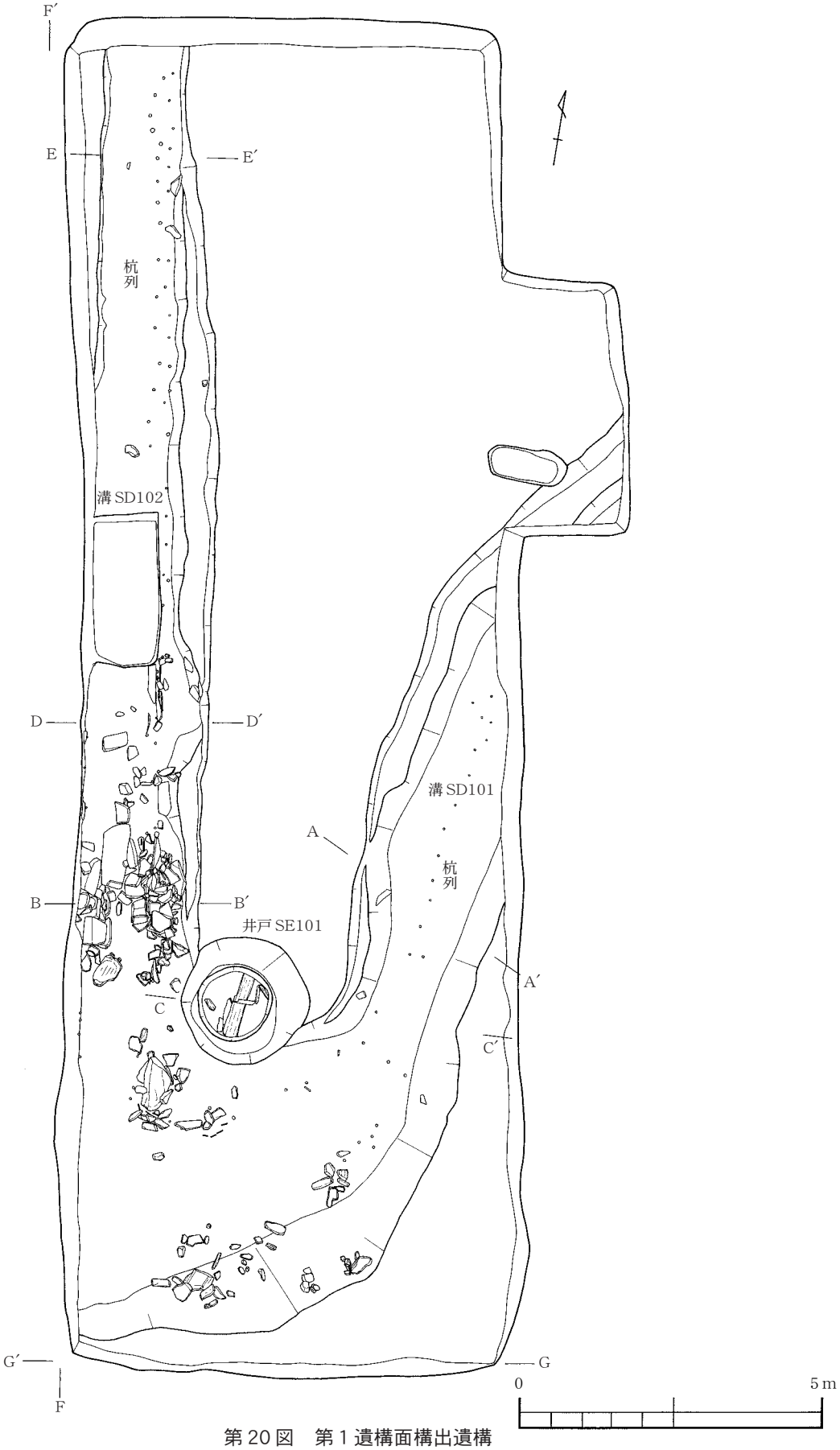
第１遺構面では、溝２条（溝 SD101･SD102）と井戸１基（井戸 SE101）を検出した（第 20 図）。溝２条は、近世から近代の灌漑用水路とみられる。調査区の南端で２条の溝に分岐し、溝 SD101 は北東へ、溝 SD102 は北へ流下する。双方の溝には集石遺構がみられ、溝の底部に杭列がみられ、護岸施設と考えられる。溝の分岐点に井戸 SE101 が存在する。

溝 SD101

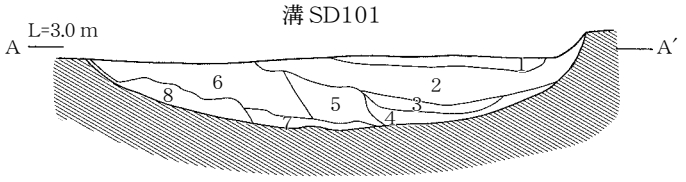
溝 SD101 は、幅約 2.5 ｍ、深さ約 40 ㎝をはかる（第 21 図）。溝の底部には杭列がみられる。西岸肩を補強する護岸施設とみられる。

出土遺物は、第 22・23 図に示した。なお、溝 SD102 との分岐点出土資料も、ここに含めている。本来の時期は、近世から近代であるが、古い時代の資料が多量に混入して出土している。

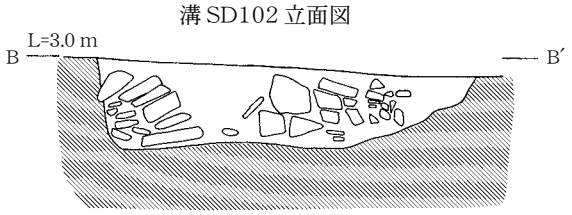
第 21 図 42 は須恵器広口壺の口縁部である。43 は弥生後期の壺である。44 は磁器皿である。近世のものであろう。45･46 は 10 世紀代と思われる土師器杯である。第２遺構面からの混入であろう。47 は須恵器壺の破片である。48 は須恵器杯である。MT15 様式（６世紀後葉）の所産と考えられる。49 は弥生中期前葉の壺頸部破片である。櫛描波状文と櫛描文を施す。50 は、弥生後期壺の底部である。底面

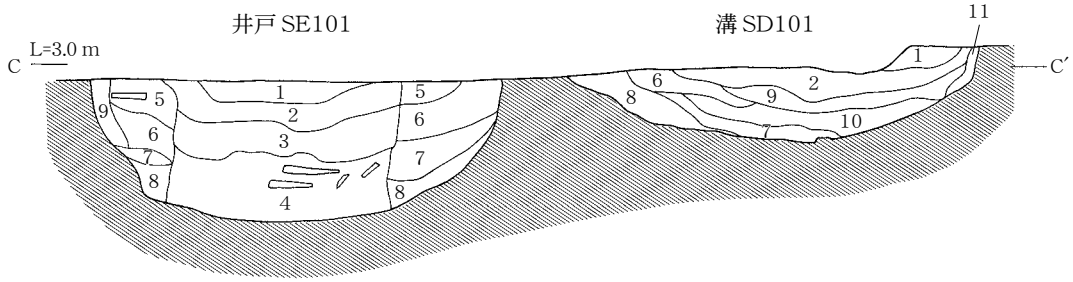


第 20 図　第１遺構面構出遺構



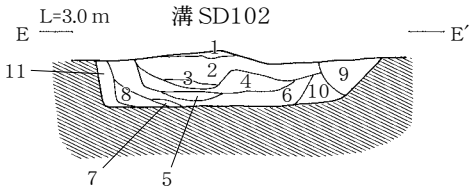
1　オリーブ褐色シルト質粘土（記録なし）
2　灰オリーブ色シルト（記録なし）
3　緑灰色土粘質シルト（記録なし）
4　オリーブ灰色細砂（記録なし）
5　緑灰色砂質シルト（記録なし）
6　オリーブ灰色シルト質極細砂（記録なし）
7　オリーブ灰色シルト（記録なし）
8　褐色細砂（記録なし）鉄分を含む

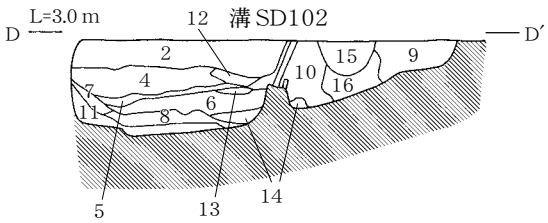




1　オリーブ灰色細砂（記録なし）茶褐色シルトブロック混入
2　暗オリーブ灰色砂質シルト（記録なし）茶褐色シルトブロック混入
3　暗オリーブ灰色シルト（記録なし）
4　灰色粘土（記録なし）粘性が極めて強い
5　灰オリーブ色シルト質粘土（記録なし）
6　灰色シルト質粘土（記録なし）
7　灰色シルト質粘土（記録なし）粘性の強い粘土ブロック混入
8　灰色粘土（記録なし）
9　オリーブ灰色細砂混じりシルト（記録なし）

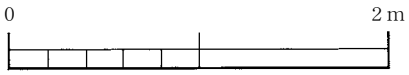
※１・２・６～８は、上記 AA′ ラインを参照
9　灰オリーブ色粘質シルト（記録なし）茶褐色シルトブロック混入
10　灰オリーブ色粘土（記録なし）
11　灰オリーブ色細砂（記録なし）



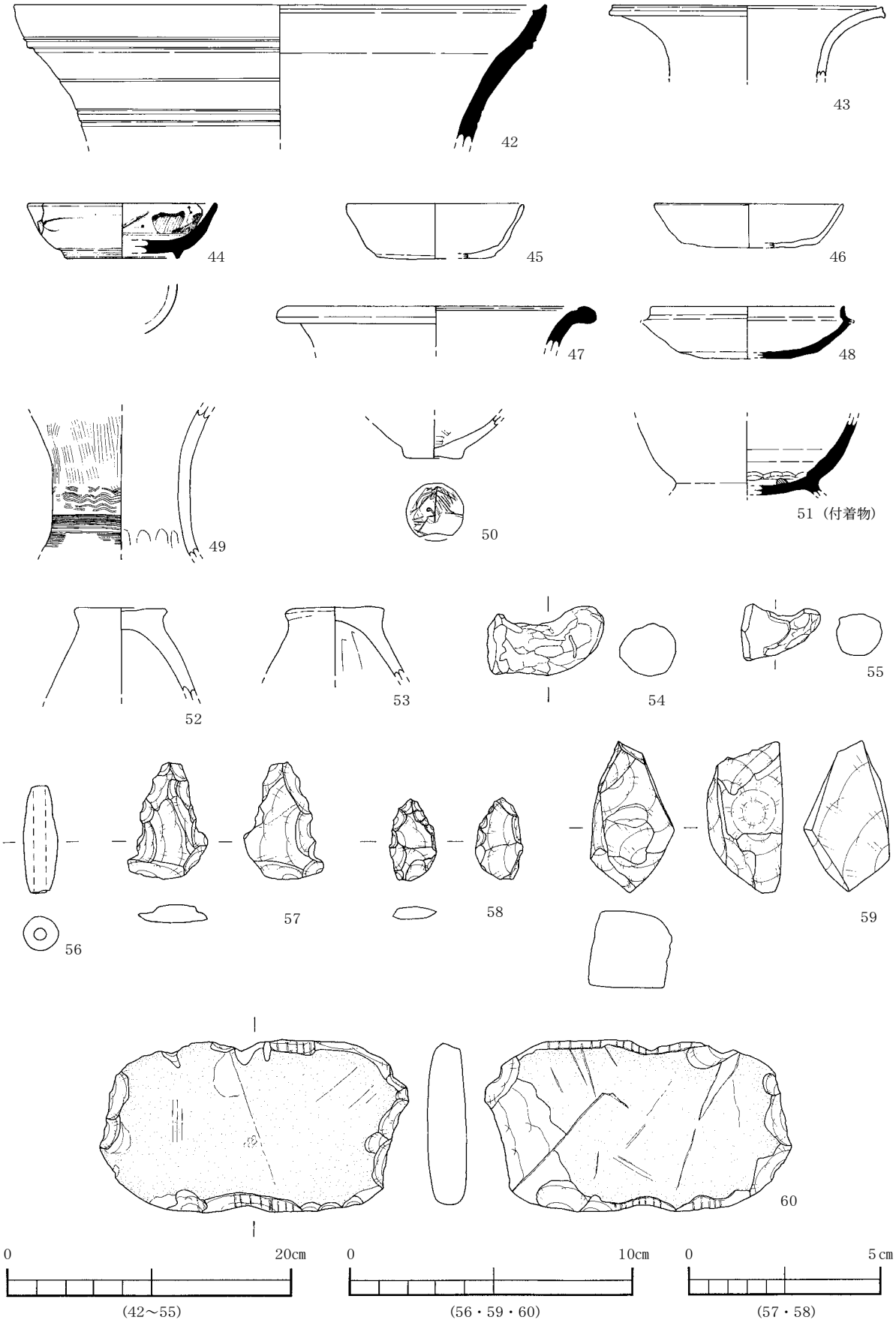


1　撹乱
2　緑灰色シルト（記録なし）茶褐色シルトブロック混入
3　灰オリーブ色細砂（記録なし）
4　オリーブ灰色粘土（記録なし）粘性強い
5　オリーブ褐色細砂（記録なし）
6　緑灰色細砂混じりシルト（記録なし）
7　褐色中砂（記録なし）
8　オリーブ灰色粘土（記録なし）
9　緑灰色細砂（記録なし）
10　緑灰色砂質シルト（記録なし）
11　灰オリーブ色粘土（記録なし）

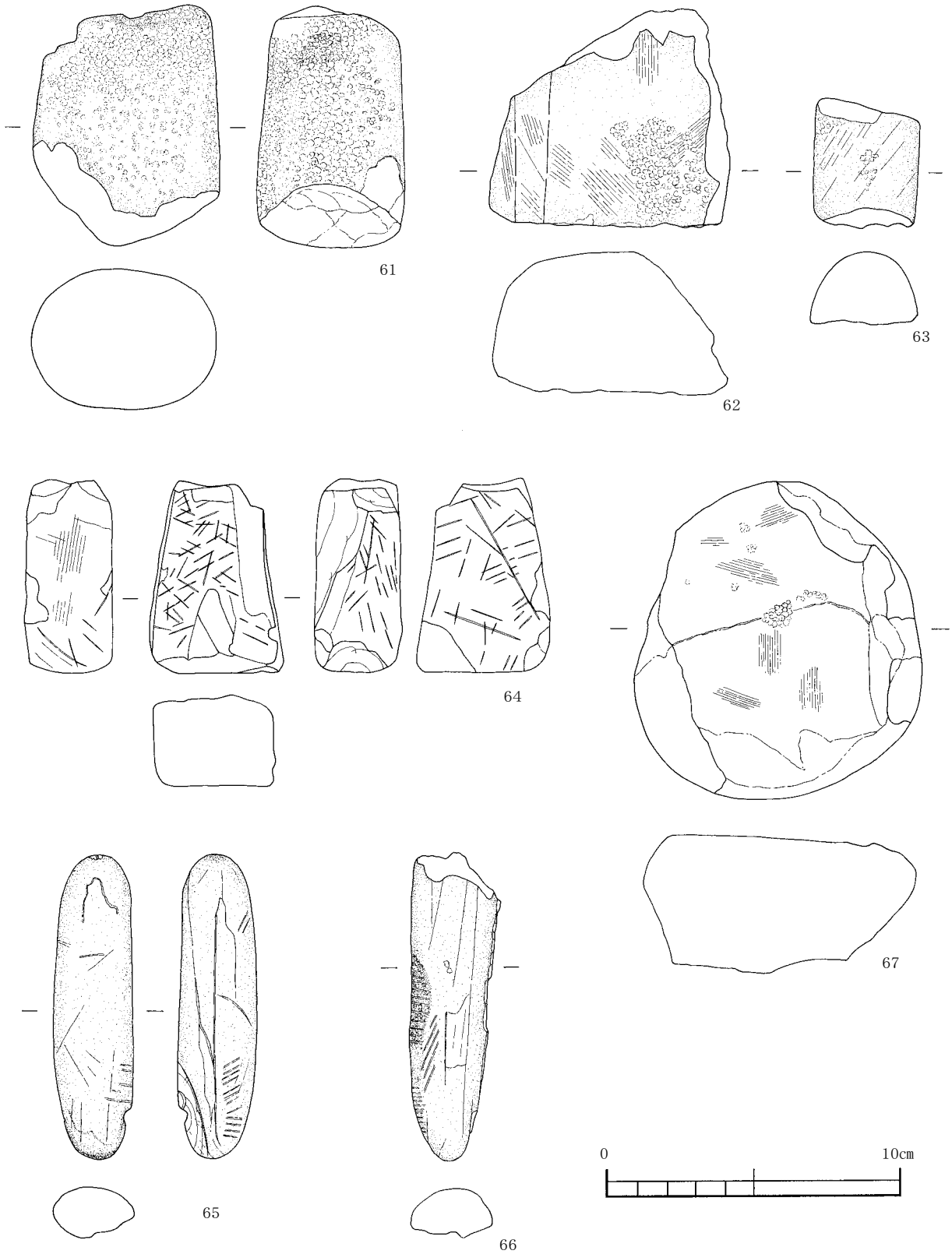
※２・４～11は左記 EE′ ライン土層を参照
12　緑灰色シルト質極細砂（記録なし）
13　オリーブ灰色中砂（記録なし）
14　灰色シルト質極細砂（記録なし）
15　灰オリーブ色中砂（記録なし）
16　灰色粘土（記録なし）



第 21 図　溝 SD101・SD102、井戸 SE101



第 22 図　溝 SD101、溝 SD101・SD102 分岐点出土遺物１



第 23 図　溝 SD101、溝 SD101・SD102 分岐点出土遺物 2

に葉脈痕がみられる。51は須恵器壺の底部破片である。内面に付着物がみられる。52・53は、弥生中期初頭ごろの甕用蓋である。54・55は土師器甑の把手片であろう。

土製品は、管状土錘１点（第22図56）が出土している。

石器は多量に出土している（第22図57～第23図67）。57･58は石鏃で、57は未製品である。いずれもサヌカイト製である。59はサヌカイトの石核である。60は打欠石錘であろう。素材は緑色岩で、183.86gを呈する。61は敲石である。伐採斧の基部を転用した可能性がある。素材は緑色岩である。62は砥石で、砂岩を素材としている。63は磨石である。砂岩を素材とする。64は砥石で、流紋岩を素材とする。65・66はいずれも小型の敲石である。粘板岩を素材としている。67は砥石で、緑色岩製である。

溝 SD102

溝SD102は、調査区南西隅で溝SD101と分岐し、北流する。規模は、溝SD101とおおむね同じである。溝の底、やや東寄りに杭列がみられる。西岸肩を補強する護岸施設とみられる。また、溝SD101との分岐点付近では、結晶片岩などの川原石からなる集石がみられた。

出土遺物は、第24図に示した。本来の時期は、近世から近代であるが、弥生から中世にかけての資料が多量に混入して出土している。68は、弥生中期初頭の甕である。胴部に櫛描文･櫛描波状文を施している。69は須恵器壺である。70はすり鉢の底部である。71は陶器皿で、近世のものであろう。72は須恵器杯である。TK47様式に相当すると思われる。73は磁器杯である。幕末から近代前半期のものであろう。74・75は陶器碗底部である。76は磁器蓋である。77～79は、土師器甑の把手片である。80は土師器の脚部であろう。

土製品は１点出土した。第24図81は土製の人形片である。頭部・脚部を欠損している。

石器は３点を図示した（第24図82～84）。82はサヌカイト製のスクレイパーである。83は敲石で、緑色岩製である。84は砥石で、流紋岩製である。

金属製品は１点出土した（第24図85）。85は簪である。近世のものであろう。

井戸 SE10.1

井戸SE101は、溝SD101と溝SD102の分岐点に位置する。径約2.2ｍ、深さ0.8ｍをはかる。内部からは木材片が出土した。

４　遺物包含層等出土遺物

第25図～第27図に、遺物包含層等出土遺物を図示した。表採品、第６層までの出土品と、遺構出土の混入品、試掘トレンチ（部室トレンチ）出土品が大半を占めているため、時期は多様なものがある。

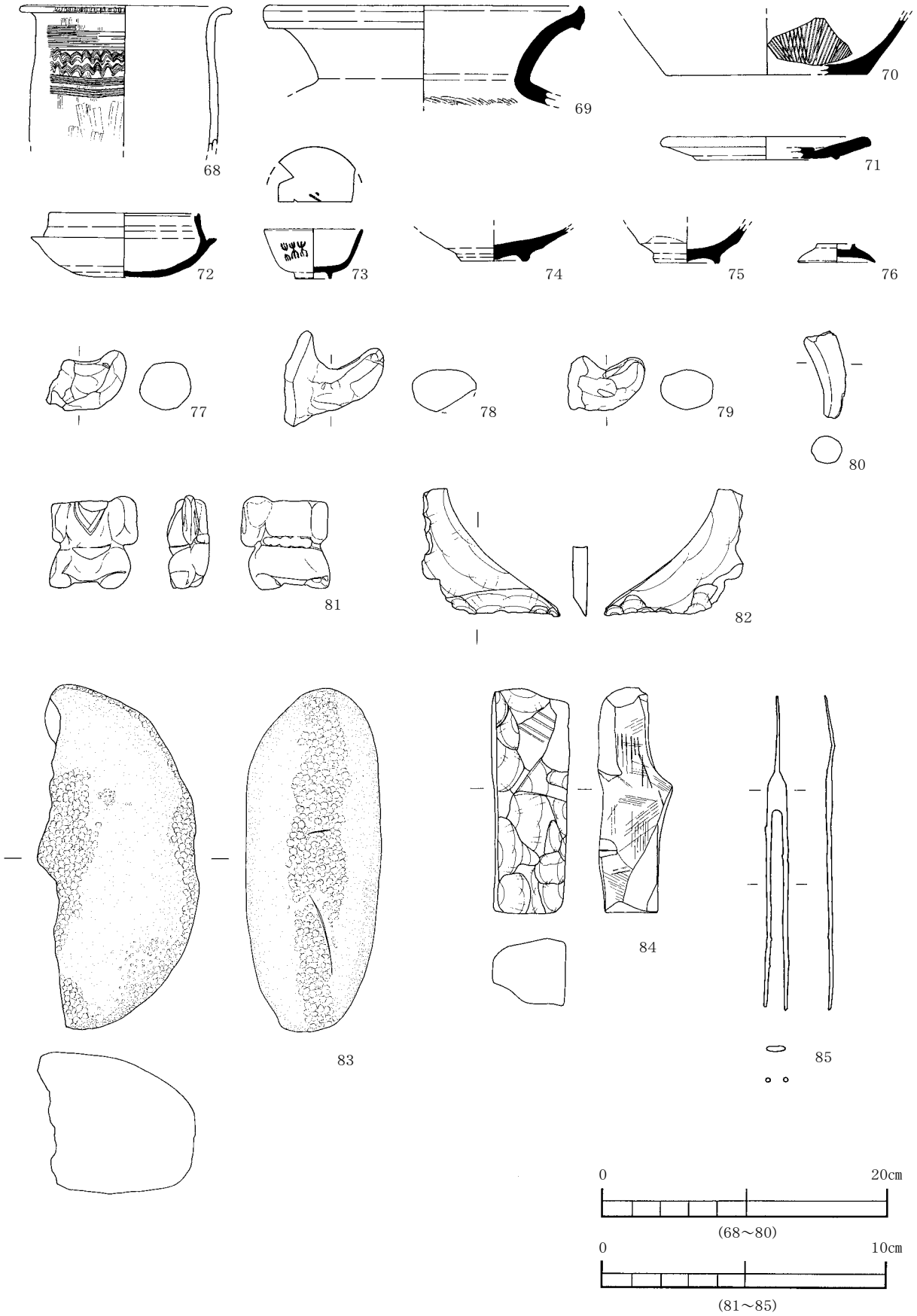
第26図111の打製石斧は、第７層上半部から出土したもので、弥生前期末から中期初頭に位置づけられる。

第25図86は、須恵器壺である。87は須恵器甕であるTK46様式（７世紀中葉）と考えられる。88は弥生後期後葉の甕である。89は須恵器杯蓋で、TK209様式（７世紀前葉）と思われる。90は須恵器鉢である。91は弥生土器壺の胴部片で、絵画ないし記号を記している。弥生後期後葉であろう。92は土師器皿である。外面に記号を施す。10世紀後葉のものと思われる。93は瓦器椀である。和泉型瓦器椀Ⅲ－１期に相当し、12世紀末から13世紀初頭に位置づけられよう（尾上1983、橋本1992）。不明瞭ではあるが、平行する暗文を確認できる。94は須恵器杯である。95は須恵器高杯である。96～98は、土師器甑の把手片である。

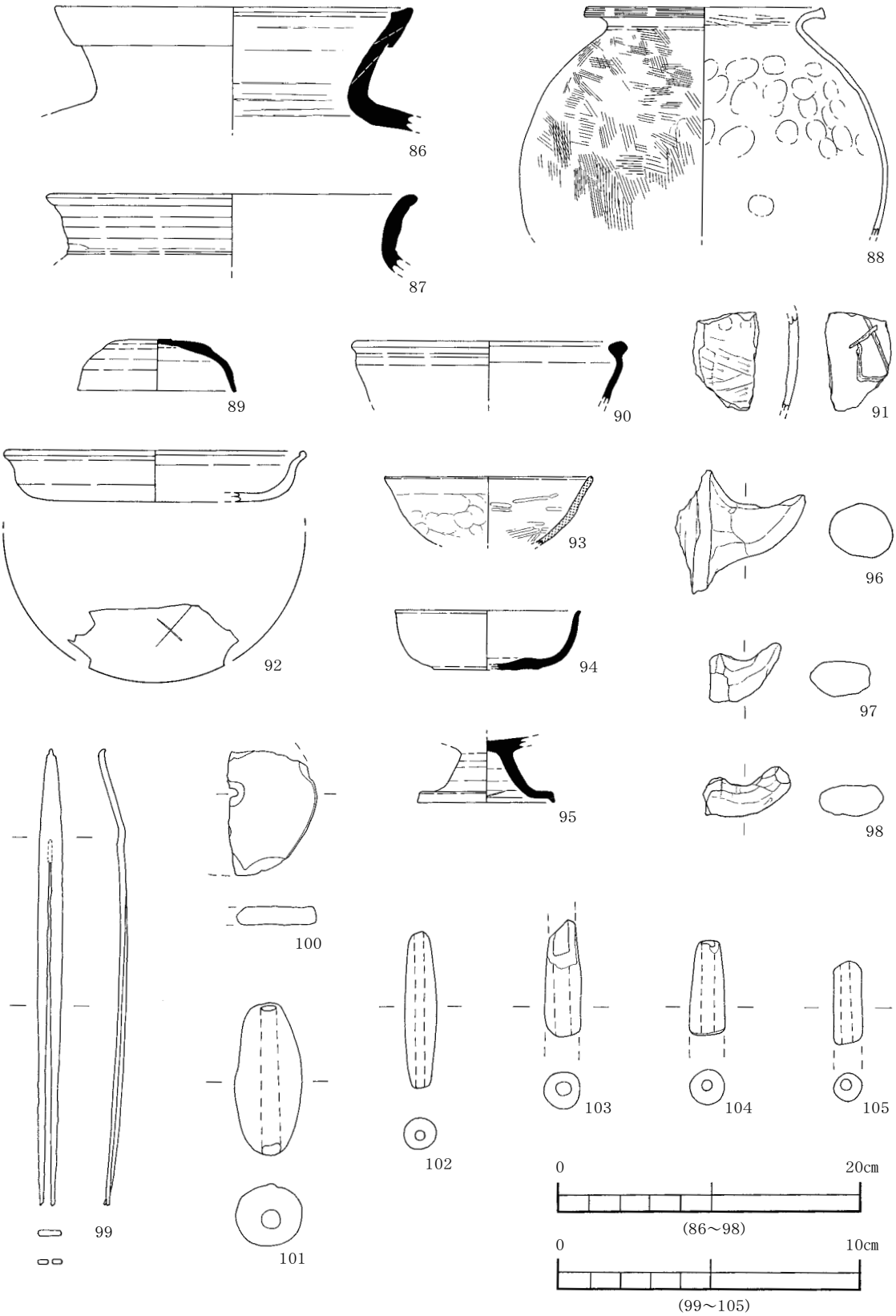
金属製品は１点出土した（第 25 図 99）。99 は簪で、近世のものであろう。

土製品は６点出土した（第 25 図 100 ～ 105）。100 は紡錘車の破片である。101 ～ 105 は管状土錘である。

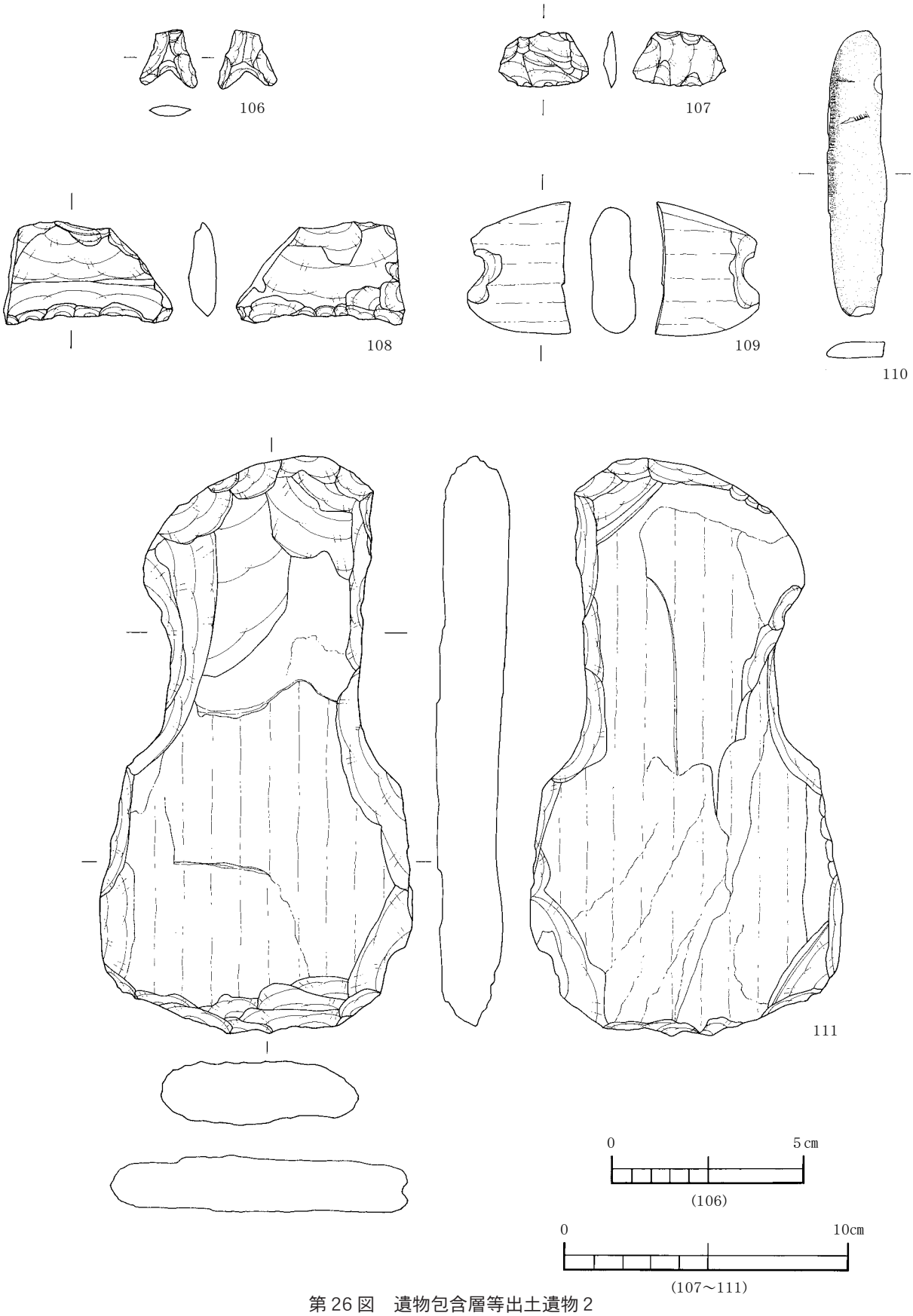
石器は 10 点図示した（第 26・27 図）。106 はサヌカイト製の石鏃である。107・108 は同じくサヌカイト製のスクレイパーである。109 は塩基性片岩製の打欠石錘の破片である。110 は小型の敲石である。石材は粘板岩である。111は打製石斧で、重量は715.72ｇをはかる。珪質片岩製である。第７層上半部から出土した。弥生前期末から中期初頭に位置づけられる。112 はひん岩製の石杵である。113 は敲石で、緑色岩製である。114・115 は砥石である。ともに砂岩製である。



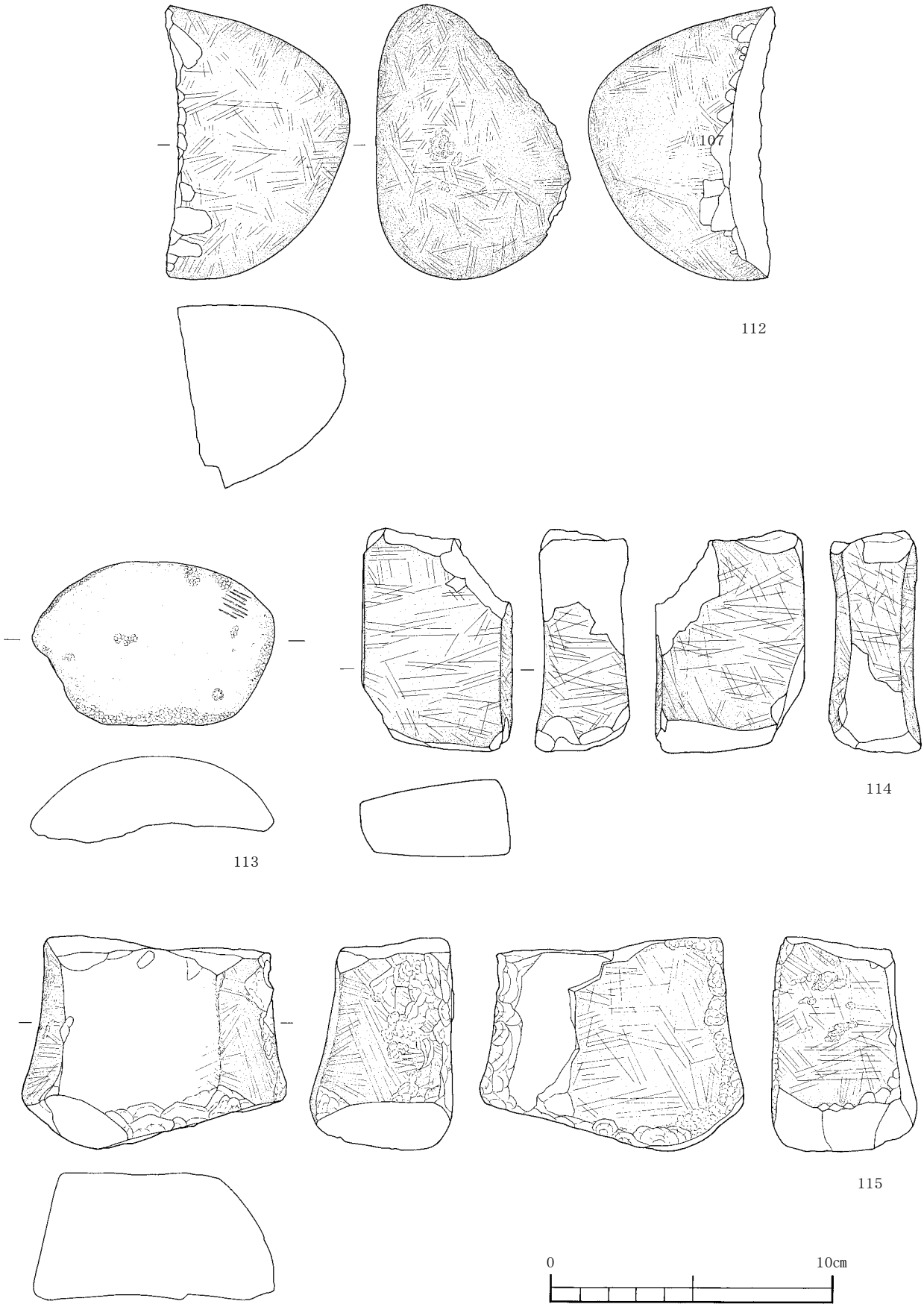
第 24 図　溝 SD102 出土遺物



第 25 図　遺物包含層等出土遺物１



第 26 図　遺物包含層等出土遺物２



第 27 図　遺物包含層等出土遺物３

第４章　小　　結

課外活動共用施設地点は、徳島大学蔵本地区では、立会をのぞくともっとも西の調査区に相当する。今回の調査では、この西端の調査区まで間断なく遺跡が続いていたことがあきらかとなったことである。今後とも、付近の調査では十分な注意が必要である。

第３遺構面で検出した不明遺構 SX301 や土坑 SK301、第２遺構面検出の土坑 SK201 は、本調査地の東側に隣接する体育館地点（徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室 2005）や南東側の体育館器具庫地点（徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室 2010）において検出した、弥生前期末から弥生中期初頭の貯蔵穴群の一角を占めるものと考えられよう。この調査区の南方では、同時期の大規模な開析流路が南西から北東方向に流れていることから、調査地周辺は、鮎喰川分流の中洲性微高地を利用した生活域が展開していたものと推察される。

第２遺構面では、弥生終末期と考えられる竪穴住居 SB201 を検出している。体育館地点でも、当該期の住居跡２棟を検出している。体育館地点では、斜縁鏡の破鏡も出土しており、周辺一帯が弥生終末期の有力な集落域であった可能性が高い。

同じく体育館地点において検出した、10 世紀後葉の水路 201 と 13 世紀初頭の東西大溝 202 の上流部分である、溝 SD201 と流路 SR201 をみいだすことができた。ただし、飛鳥時代に属する東西大溝 201 の上流部分は検出できていない。可能性としては、東西大溝 201 は、ほぼ正方位であるのに対し、東西大溝 202 と水路 201 はやや北に方位が振れている。このため、東西大溝 201 の上流部分は、溝 SD201 ないし流路 SR201 によって壊されている可能性が考えられよう。

溝 SD201 からは、瓦器椀７点（うち和泉型瓦器椀６点）と、白磁碗、青磁皿各１点（いずれも小片）が出土している。12 世紀末から 13 世紀前葉の所産とみられ、畿内地域との交流を示す貴重な資料となっている。集落域は不明であるが、上記の出土品が小片で残りがあまりよくないところからみて、溝 SD201 の上流側、蔵本団地外西方蔵本公園付近に、中島田遺跡（福家編 1989）形成前の拠点的な集落が存在する可能性が考えられる。

体育館地点では、近世から近代の東西大溝 101 を検出した。この上流部分は、溝 SD101 に相当するものと考えられる。

文　　献

岡山真知子 1999『庄遺跡Ⅲ』財団法人徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 24

尾上　実 1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念　古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

勝浦康守 1990『名東遺跡発掘調査概要』名東遺跡発掘調査委員会

勝浦康守ほか 1997『三谷遺跡』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室 2005『庄（庄・蔵本）遺跡－徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書－』

徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 2010『庄（庄・蔵本）遺跡－徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書、体育館建設に伴う発掘調査

報告書補遺－』
橋本久和 1992「瓦器椀研究をめぐって」『中世土器研究序論』真陽社
福家清司編 1989『県道徳島鴨島線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　徳島市中島田遺跡・南島田遺跡』徳島県教育委員会

第２部
医療技術短期大学建設に伴う発掘調査

第１章　調査・整理にいたる経緯

第１節　概　　要

昭和62年（1987年）、徳島大学では、蔵本団地に、医療技術短期大学の建設をおこなうこととなった（第１図７）。蔵本団地は、既知の埋蔵文化財包蔵地であったため、当時発掘調査担当部門をもたなかった徳島大学では、徳島県教育委員会文化課（現教育文化政策課）に事前発掘調査を依頼した。調査は昭和62年（1987年）４月１日から８月31日にかけておこなわれた。調査面積は約870㎡である。

なお、医療技術短期大学は2001年改組され、現在医学部保健学科となっている。

第２節　調査・整理体制

徳島県教育委員会による昭和62年度当時の調査体制は下記のとおりである。

昭和62年度

調査担当	徳島県教育委員会文化課	主　事	羽山　久男
	同　上	文化財調査員	久保脇美朗
	同　上	同　上	北原　雅代
	同　上	同　上	小山　雅雄
	同　上	同　上	竹治　寿人

徳島大学による平成21～22年度の整理体制は下記のとおりである。

整理業務担当	埋蔵文化財調査室	室長・調査員	中村　　豊（埋蔵文化財調査室准教授）
		整理員	山本　愛子（施設マネジメント部技術補佐員）
		同　上	加登　哲子（同上）
		同　上	岸本多美子（同上）
		同　上	板東　美幸（同上）
		同　上	溝渕寿美礼（同上、22年５月31日まで）
		同　上	前田　千夏（同上、22年６月１日から）

第２章　調査の成果

第１節　基本層序

以下、医療技術短期大学地点における基本層序を、土層断面図（第28図）と、近年の調査でえられた知見から記述したい。

表土は、近代以降（陸軍第43連隊創設時および徳島大学医学部構内整備時）の盛り土である。この時期に大規模な撹乱によって当時の地表面が荒らされている。第１層は、幕末ごろから兵営が築かれるまでの間にいとなまれた水田耕作土である。土中からは大谷焼など、幕末から近代にかけての陶磁器が出土する。グライ化が著しく進んだ部分があり、排水不良気味の水田であったと考えられる。

第２層は、16世紀ごろから江戸後期にかけての水田層であると推察される。中世末の遺物が出土することはほとんどなく、第３層出土遺物の下限が15世紀ごろであるところからこの層の上限を推定している。そうしたなかでも、17世紀ごろとおぼしき備前系陶器の破片が出土することが、まれに認められる。また、上面では犂耕の痕跡を確認できる。第１層同様グライ化したシルト質ないしはシルト質の粘土が堆積しており、排水不良気味の水田層であったと推察される。この下の第３層との関係は不整合であり、またこれらが長期間安定した土壌化層であるところからみて、16世紀から江戸前期にかけてのころに、用水開発や治水事業に関わる可能性がある。

第３層は、弥生前期末・中期初頭から15世紀ごろにいたる遺物が出土する。この間全く新規の堆積が認められないため、土壌化が著しく進んで、明瞭な黒褐色帯をなしている。この第３層を取り除いた第４～６層上面で検出できる諸遺構を、近年の調査では「第２遺構面」としている。本来なら第３層上面から掘り込まれた遺構群であるが、土壌化が著しく、検出できないため、第４～６層上面まで掘り下げて検出している。

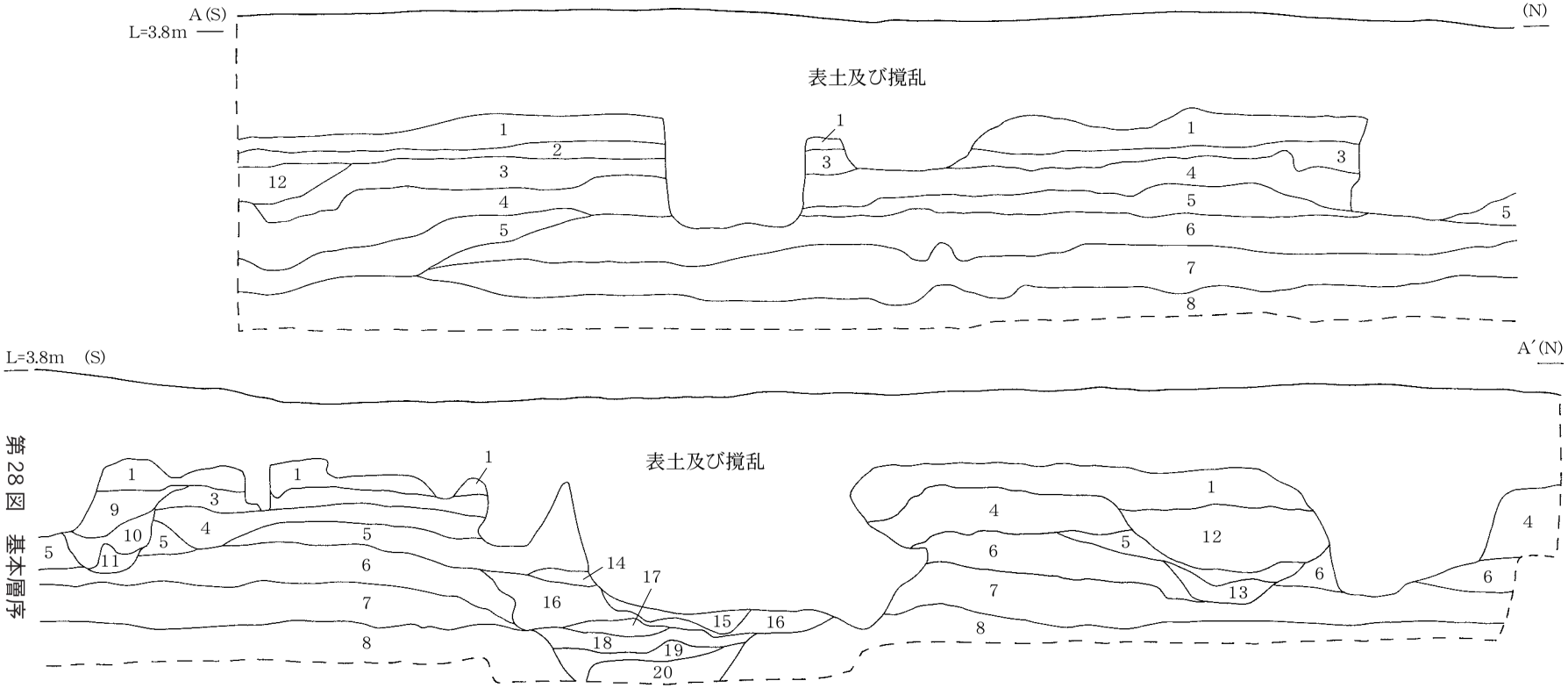
第４層の明黄褐色シルト層、第５層の黄褐色シルト層、第６層のにぶい黄褐色シルト層は、弥生前期中葉から同前期末・中期初頭にかけての洪水砂を起源とする堆積層である。地点によっては、この層中から弥生前期中葉から同前期末・中期初頭の遺物が多量に出土することがある。

この第４～６層を取り去った第７層において検出されるのが、近年の「第３遺構面」である。時期は弥生前期中葉である。第７層からは、縄文晩期末から弥生前期前葉の遺物が出土することがあり、この時期の土壌化層であるとみられる。

第８層の暗灰黄色シルト層は、縄文晩期末ごろの洪水砂層と考えられよう。以下はグライ化した細砂層から粘土層である。相当の厚さをもっており、有機物層を介在する。もっとも上位の有機物層からは、縄文晩期初頭の土器が出土することがある。その下位から、後期中葉の土器が出土したこともある。ボーリングのデータによると、沖積層基底礫層とみられる礫層まで、同様の粘土層が、20ｍ以上連続して堆積しているが、いまのところ遺物の出土は確認されていない。

なお、第28図の第９～20層は遺構含土である。

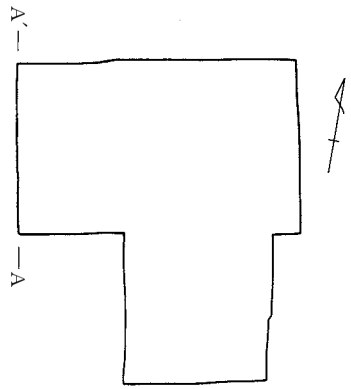
今回の第１遺構面は、第１・２層を除去した第３層上面において検出した遺構である。第１層の水田層に対応する暗渠などを検出している。時期は16世紀ごろから近代、主体は近世から近代ということになる。

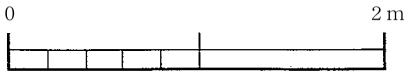


第28図　基本層序

1　灰オリーブ色粘土（7.5Y5/2）層の下部から10㎝位までに鉄分が集中する。
2　灰オリーブ色シルト（7.5Y5/2）小礫・土器を含む。中世後半～近世の水田層
3　黒褐色シルト（2.5Y3/2）マンガン、鉄分を含む。弥生前期末～中世の土壌化層
4　明黄褐色シルト（2.5Y6/6）マンガン粒を含み、鉄分を少量含む。黒褐色シルト（2.5Y3/2）ブロックを含む。弥生前期後葉～弥生前期末・中期初頭の洪水砂起源層
5　黄褐色シルト（2.5Y5/4）マンガン粒子を含む。鉄分を少量含む。土器を含む黒褐色シルト（2.5Y3/2）弥生前期中葉～後葉の洪水砂起源層
6　にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）マンガン・鉄分粒子を含む。弥生前期末の洪水砂起源層
7　褐色粘土（10YR4/4）マンガン・鉄分・炭化物を含む。縄文晩期末～弥生前期前葉の土壌化層
8　暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）マンガン・鉄分を含む。縄文晩期の洪水砂
※　以上が基本層序で、以下は遺構の含土

9　暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）上部に鉄分、全体的にマンガンを含む
10　黒褐色シルト（2.5Y3/1）マンガンを含む。黄褐色シルトブロックを含む
11　オリーブ黄色シルト（5Y6/3）鉄分・マンガンを少量含む
12　暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）第９層とほぼ同じ
13　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/6）鉄分・マンガンを含む
14　黄褐色シルト（2.5Y5/6）鉄分・マンガンを含む
15　黄褐色シルト（2.5Y5/4）第５層に似るが、明黄褐色・黒褐色・褐色シルトブロックを含む。土器・炭化物を含む
16　にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）マンガン・鉄分を含む。下部の粒子が粗い傾向にある
17　にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）マンガン・鉄分・炭化物・小礫を含む
18　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）マンガン・鉄分・小礫を含む
19　オリーブ黒色細砂（10Y3/2）鉄分を少量含む
20　暗オリーブ色粘土（7.5Y4/3）鉄分と少量のマンガンを含む





第２遺構面は、第３層を除去した第４～６層上面において検出している。時期は弥生前期末・中期初頭から中世である。第３遺構面は第７層上面である。本来なら、基本的に弥生前期中葉の遺構ということになるが、第４～６層中で検出できなかった、弥生前期末・中期初頭の遺構も、ここで検出している。

第２節　遺構と遺物

１　第３遺構面

第３遺構面からは、土坑５基と溝２条を検出している（第29図）。

溝 SD301・SD302

溝 SD301は、調査区中央東から北西端へむかって展開する（第30図）。幅約３m前後、深さ約0.4mをはかる。出土遺物から、時期は弥生前期末である。

出土遺物は少なく、土器２点を検出した（第33図１・２）。１は壺である。弥生前期の壺としては、口縁部の広がりが少なく、細頸壺的な外見である。頸部に８条の沈線を施し、胴部最大径のやや上部に７条の沈線を施す。胴部にはヘラミガキを施している。２も１と類似した口縁部である。口縁部の広がりが、１よりやや大きい。頸部に半裁竹管を用いた２条１組の沈線６条を施す。

溝 SD302は、調査区の北西端を、南西から北東方向へと流下する（第29図）。幅約1.8m、深さ約１mをはかる。出土遺物はみられないが、溝 SD301を破壊しているので、これより新しいことは間違いない。弥生前期末から中期初頭であろう。

土坑 SK301

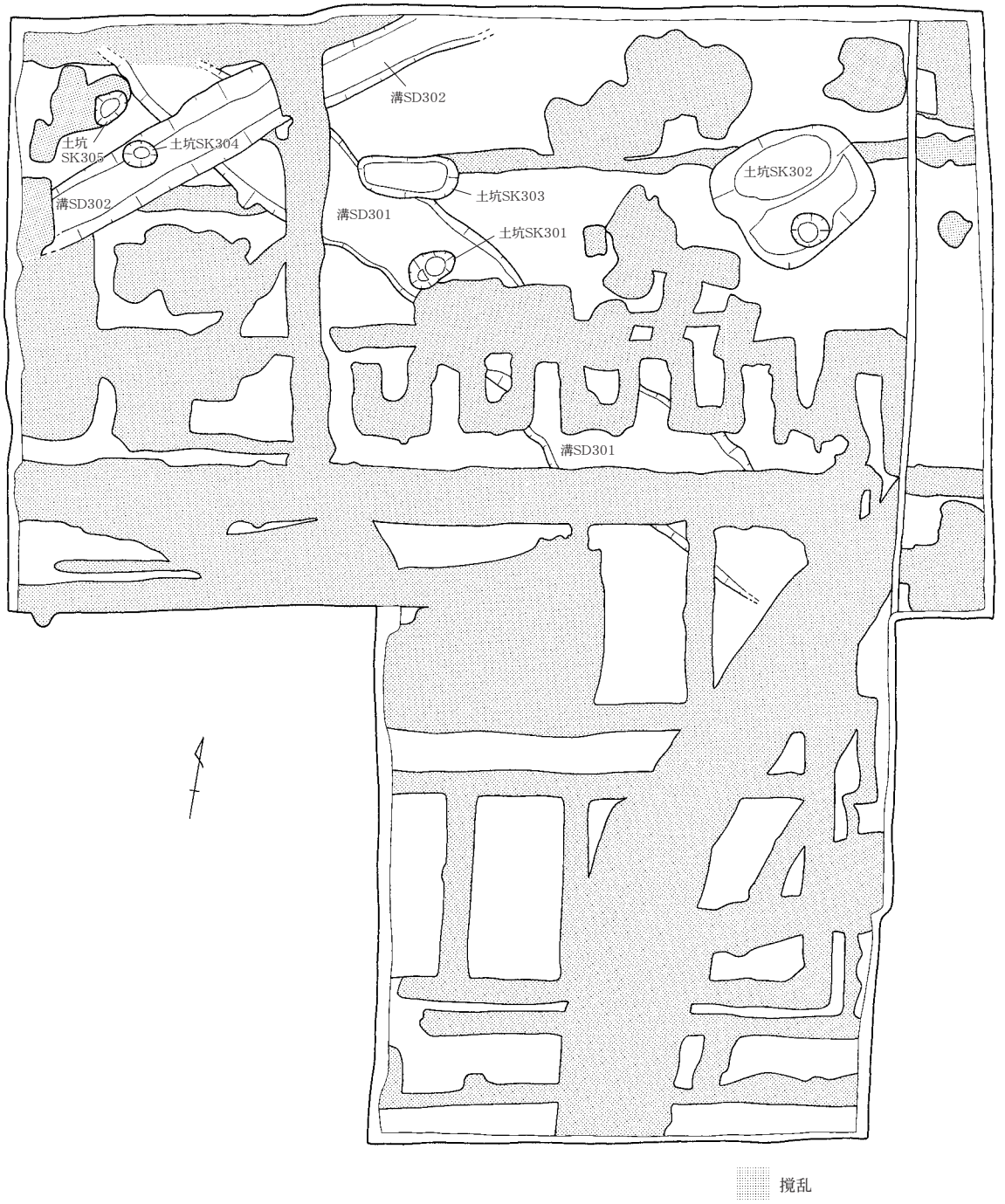
土坑 SK301は、調査区中央北よりに位置する（第29図）。径約1.3m、深さ約15㎝である（第31図）。出土遺物はみられないが、溝 SD301を破壊しているので、これより新しいことは間違いない。弥生前期末から中期初頭であろう。

土坑 SK302

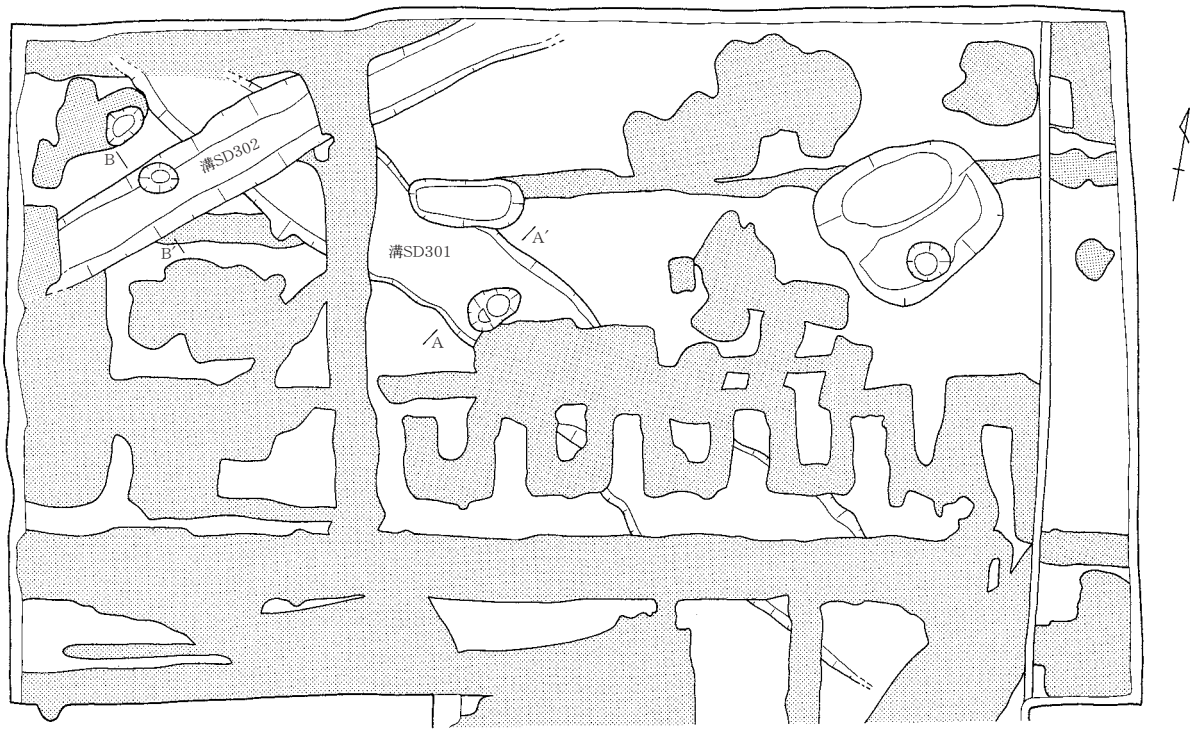
土坑 SK302は、調査区北東部に位置する（第29図）。径約4.2m、深さ約１mをはかる（第32図）。南端部分に、径約1.1m、深さ0.2mのピットを有する。出土遺物から、弥生前期末から中期初頭に位置づけられよう。

土坑 SK302からは、多量の遺物が出土した（第33図３～８、第34･35図）。とくに、残存率のよいやや小型の壺が多量に出土している。甕の出土は少なく、打製石剣（第35図21）が出土しているところからみて、埋葬遺構である可能性がある。いずれにせよ、特殊な役割をもつ土坑であると推察される。

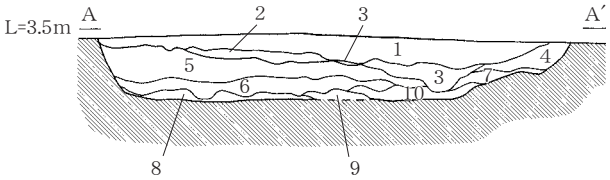
第33図３はやや小型の壺で、頸部と胴部にそれぞれ２条の浅い沈線を施している。外面にハケメを施し、ヘラミガキはみられない。内面は口縁部付近に横方向のハケメがみられる。４は小型無文の壺である。頸部に縦方向のハケメを施す。５は壺である。口縁部を欠いている。頸部に６条の沈線を施す。外面はハケメで、ヘラミガキはみられない。口縁部内面付近には横方向のハケメがみられる。６は壺である。これも口縁部を欠いており、頸部に５条、胴部に４条の沈線を施す。７と８は、ともに無文の壺である。いずれも外面にハケメの痕跡をとどめている。９は、南端のピット内から出土した大型の壺である。口縁部内面と頸部・胴部に文様を施している。口縁部内面には、一番外側に三角刺突文を連続的に施す。その内側に櫛描文を施し、また、その内側に三角刺突文を２条施す。頸部には櫛描文３条と、櫛描波状文２条を施している。胴部には櫛描文を２条１組で３組（計６条）施し、その間を、櫛描波状



第29図　第３遺構面検出遺構



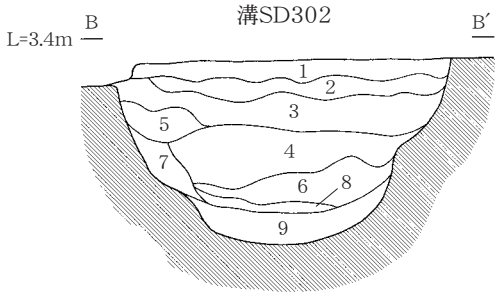
溝SD301



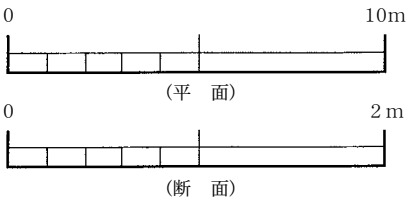
撹乱

1　黄褐色シルト質極細砂（2.5Y5/6）マンガン・鉄分・小礫を多く含む
2　黄褐色細砂（2.5Y5/6）３～５㎜の小礫を含む
3　にぶい黄褐色細砂（2.5Y6/4）３～５㎜の小礫を含む
4　黄褐色シルト（2.5Y5/6）マンガン・鉄分を含む
5　明黄褐色砂質シルト（2.5Y6/6）マンガン・鉄分を含む
6　暗灰黄色細砂（2.5Y5/2）マンガン・鉄分を含む
7　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/6）マンガン・鉄分を含む
8　明黄褐色砂質シルト（2.5Y6/6）マンガン・鉄分を含む
9　にぶい黄褐色砂質シルト（10YR5/4）マンガン・鉄分を含む
10　にぶい黄橙色シルト質粘土（10YR6/4）マンガン・鉄分を含む

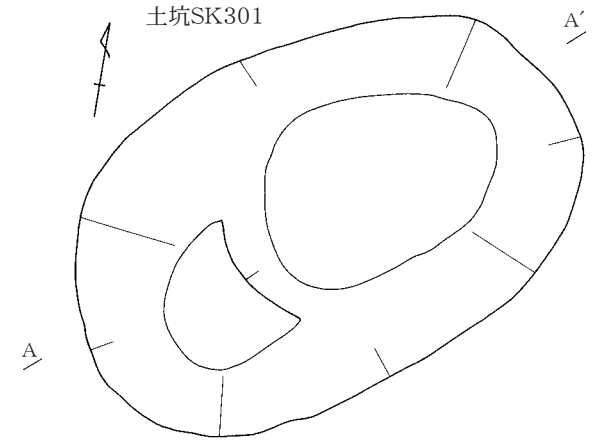
溝SD302



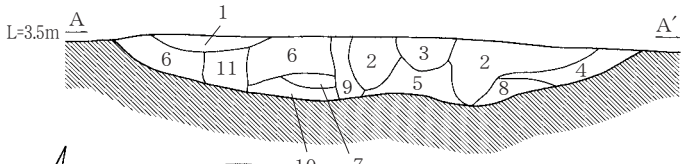
1　黄褐色シルト質極細砂（2.5Y5/4）マンガン・鉄分を少量含む
2　黄褐色シルト（2.5Y5/3）マンガン・鉄分を含む
3　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/4）マンガン・鉄分を含む
4　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/4）第３層に似るが、若干暗い色調
5　オリーブ褐色粘質シルト（2.5Y4/4）第３層に似るが、より粘性が強い
6　オリーブ褐色シルト質粘土（2.5Y4/3）下部に砂のたまりがある。炭化物を含む
7　オリーブ褐色シルト質粘土（2.5Y4/3）第６層に似るが、若干明るい色調
8　暗灰黄色シルト質粘土（2.5Y4/2）
9　暗オリーブ色粘土（5Y4/3）マンガン・鉄分を含む

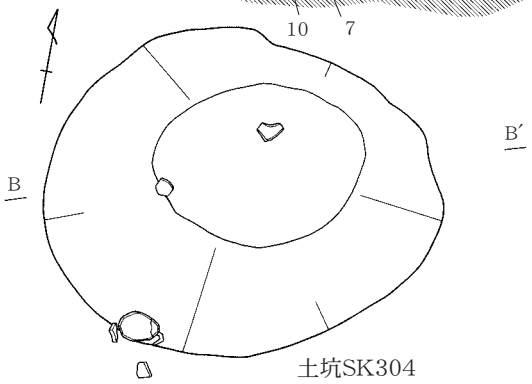


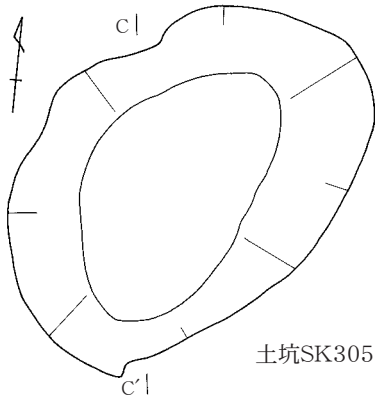
第30図　溝 SD301・SD302

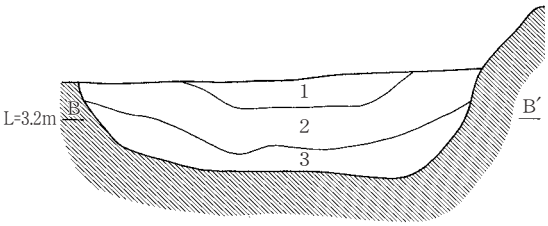


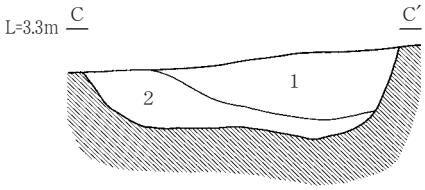
1　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）マンガンを含む
2　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）第１層に類似。マンガン・鉄分を含む
3　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/4）
4　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/4）第３層に似るが、マンガン・鉄分が多い
5　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）第１・２層に似るが、マンガン・鉄分が少ない
6　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/4）土器を含む
7　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）第１・２・５層に似る。マンガンの含有が多い
8　暗褐色粘土（10YR3/3）マンガンを含む
9　暗褐色粘土（10YR3/3）第８層に似るが、マンガンの含有が少ない
10　にぶい黄褐色粘土（10YR4/3）
11　暗褐色粘土（10YR3/3）マンガンを少量、鉄分を微量含む





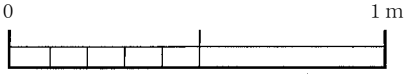




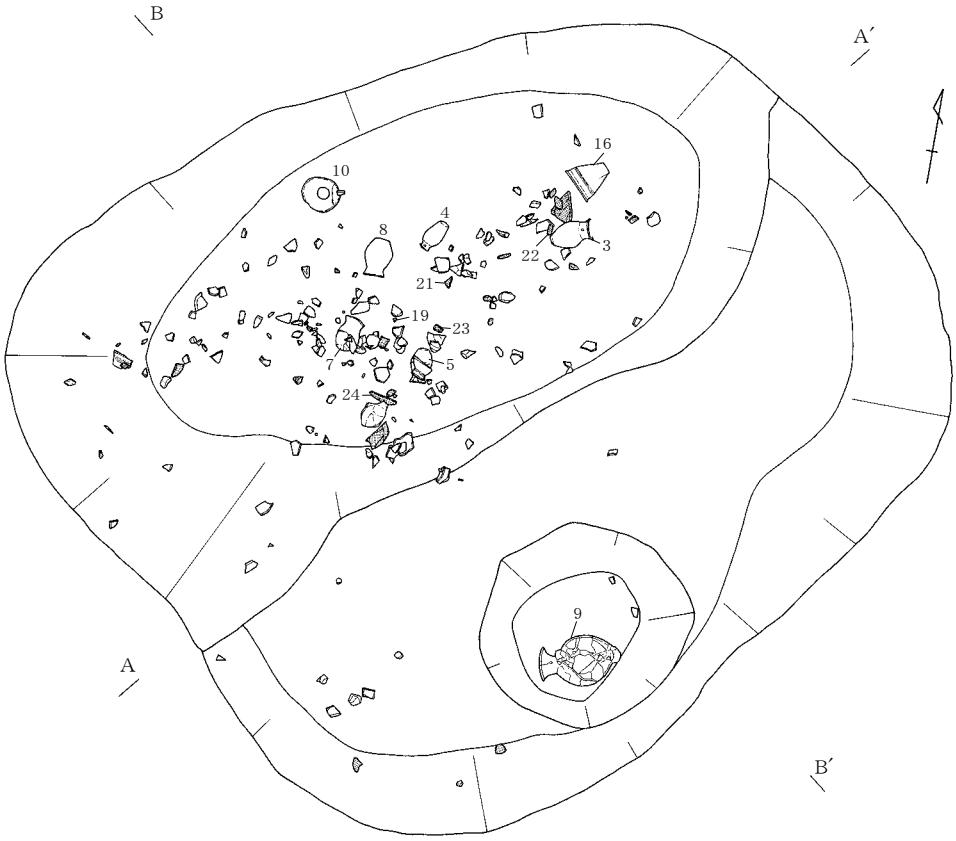


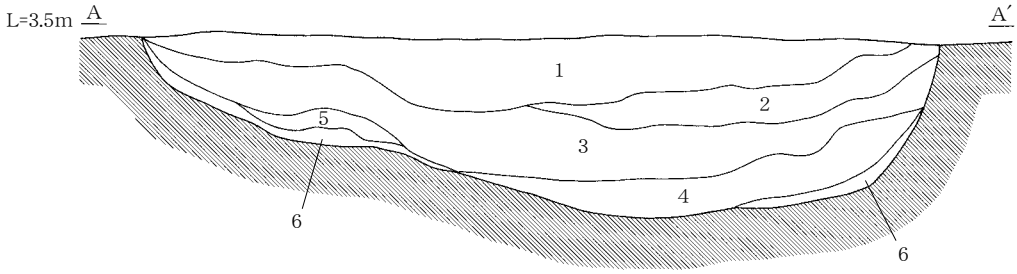
1　黄褐色シルト質極細砂（2.5Y5/4）マンガンを含む
2　黄褐色シルト質極細砂（2.5Y5/6）マンガン・土器を含む
3　黄褐色シルト（2.5Y5/6）マンガンを含む

1　黄褐色シルト質極細砂（2.5Y5/4）マンガンと、上面に土器を含む
2　黄褐色シルト(2.5Y5/6)マンガン・土器・炭化物を含む

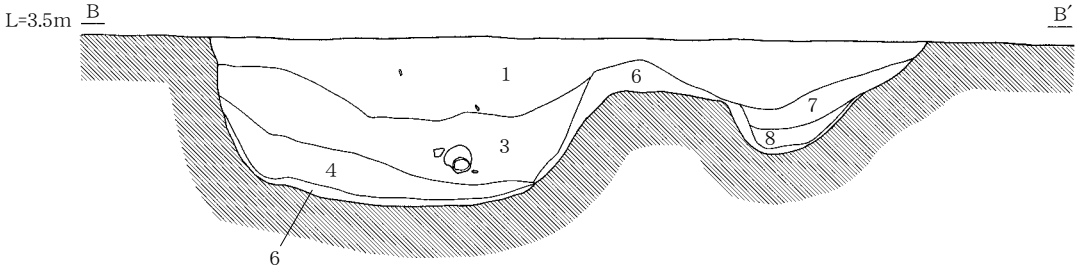


第 31 図　土坑 SK301・SK304・SK305



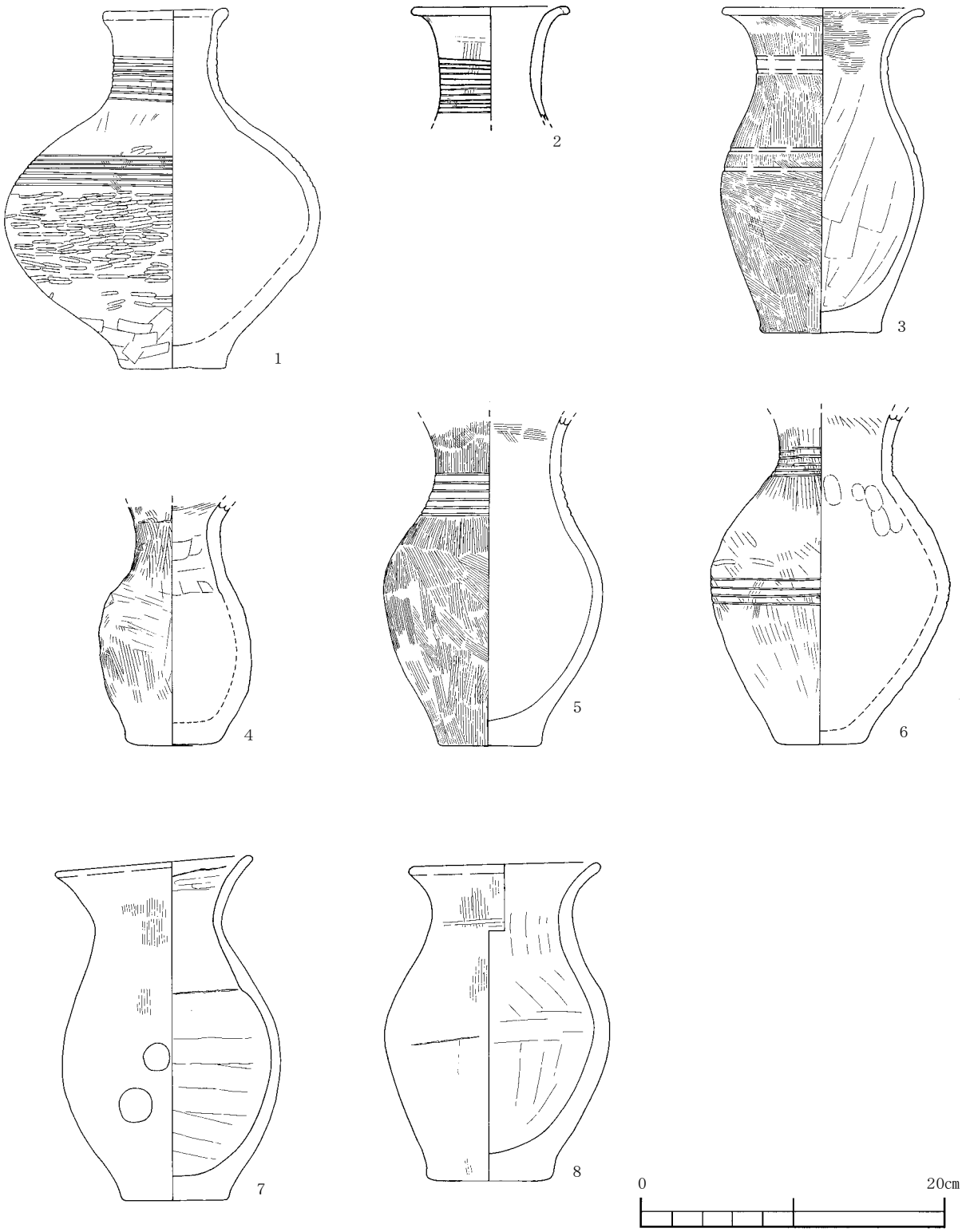


1　黄褐色シルト質極細砂（2.5Y5/4）マンガン・鉄分・土器を含む
2　黄褐色シルト（2.5Y5/4）第1層よりマンガンの含有が多い
3　黄褐色シルト質粘土（2.5Y5/3）炭化物・土器を含む
4　オリーブ褐色粘土（2.5Y4/4）マンガン・鉄分・土器を含む
5　黄褐色シルト質粘土（2.5Y5/3）マンガン・鉄分を含む
6　オリーブ褐色粘土（2.5Y4/3）マンガン・鉄分を含む

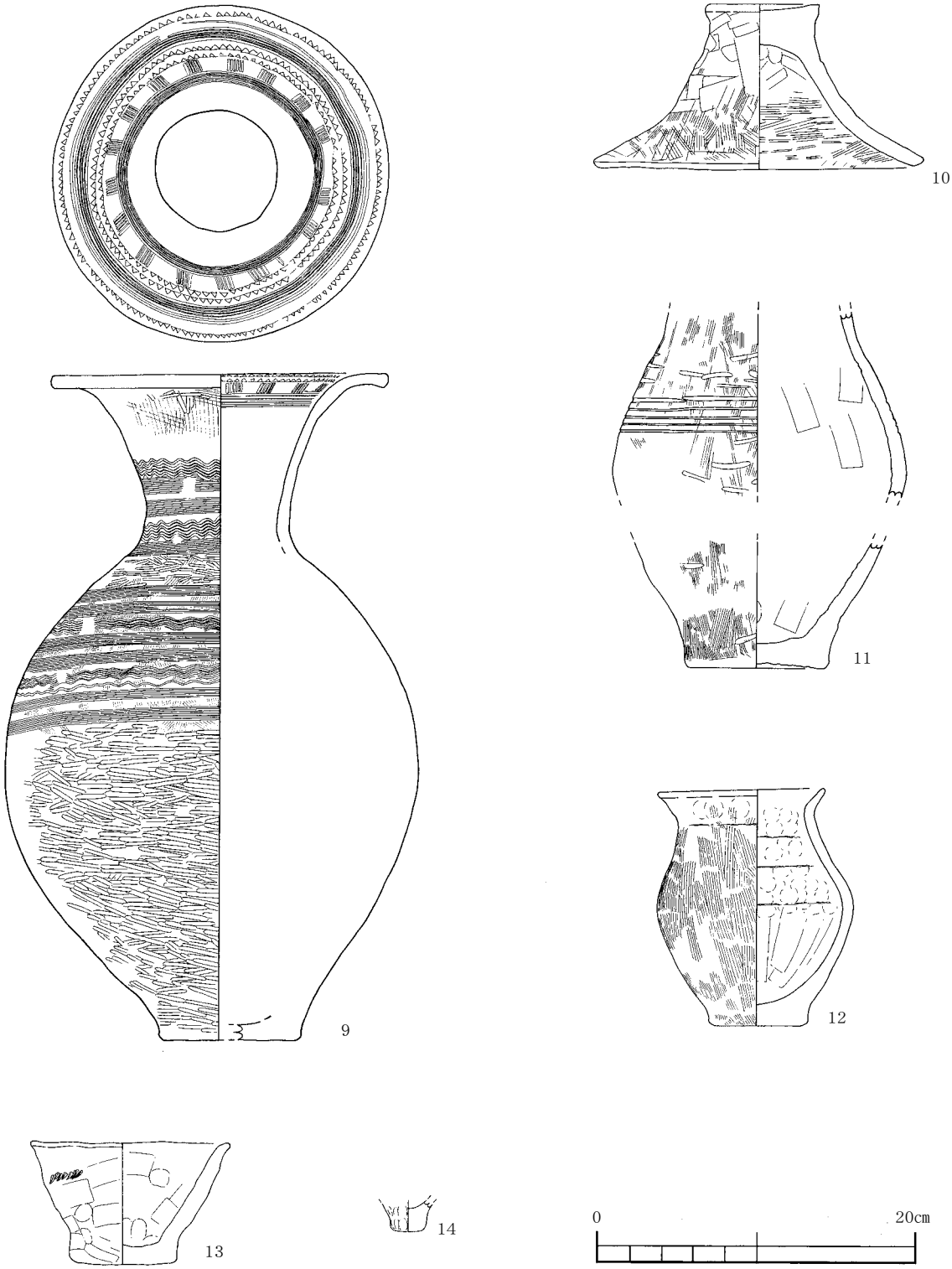


7　黄褐色シルト（2.5Y5/3）マンガン・鉄分を含む
8　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/4）マンガン・鉄分・炭化物を含む

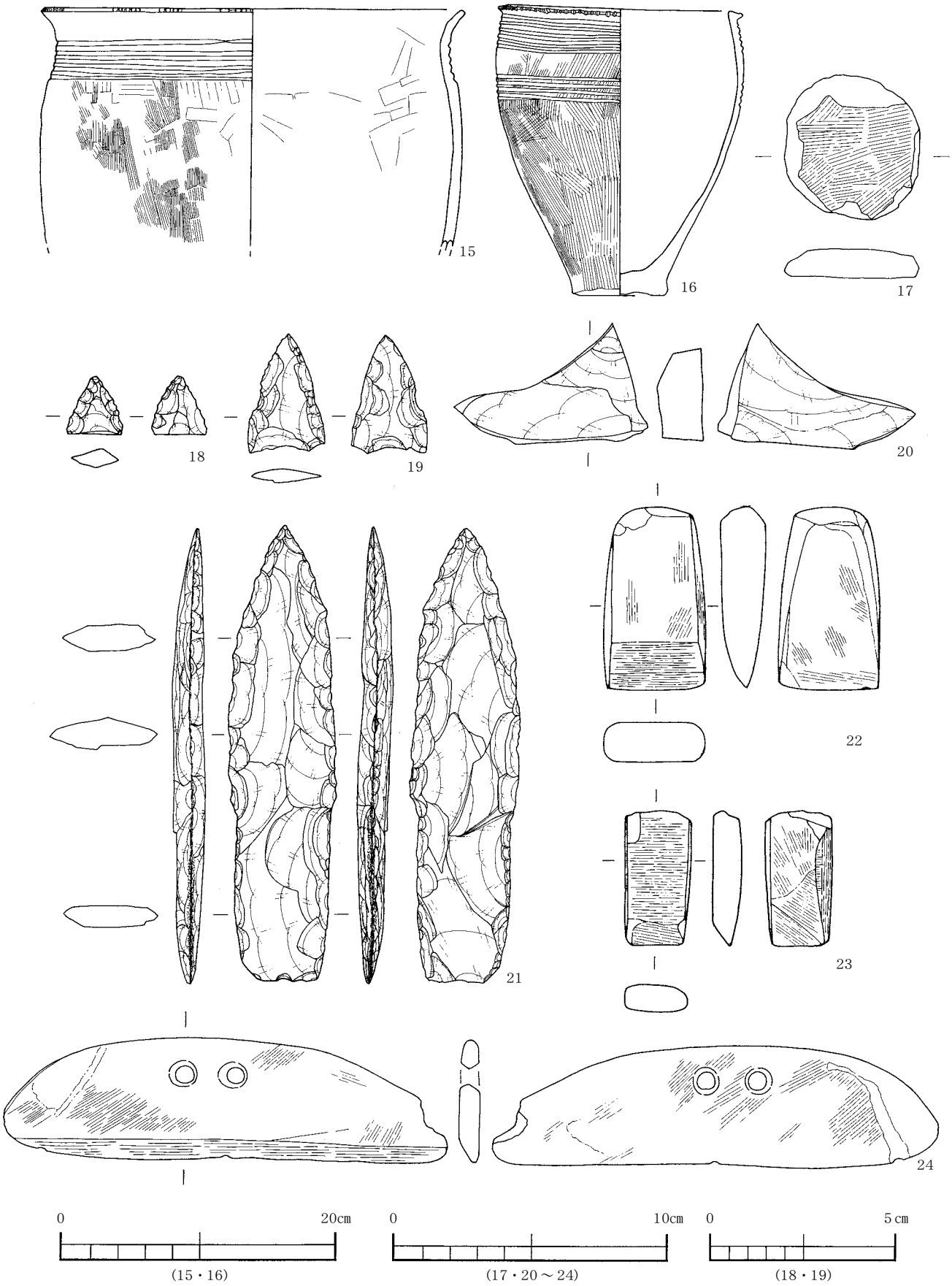
第 32 図　土坑 SK302



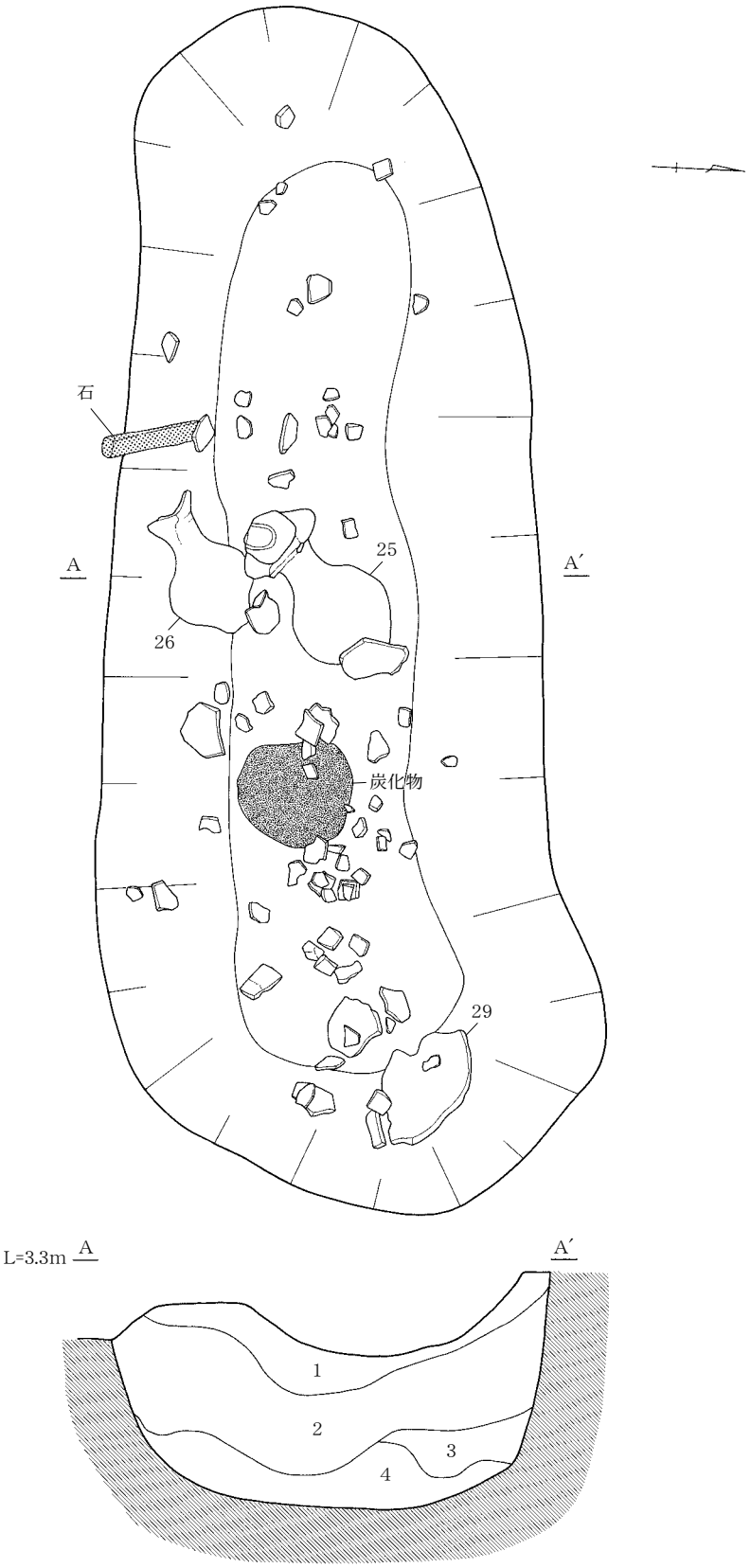
第 33 図　溝 SD301（１・２）出土遺物、土坑 SK302（３～８）出土遺物１



第 34 図　土坑 SK302 出土遺物 2



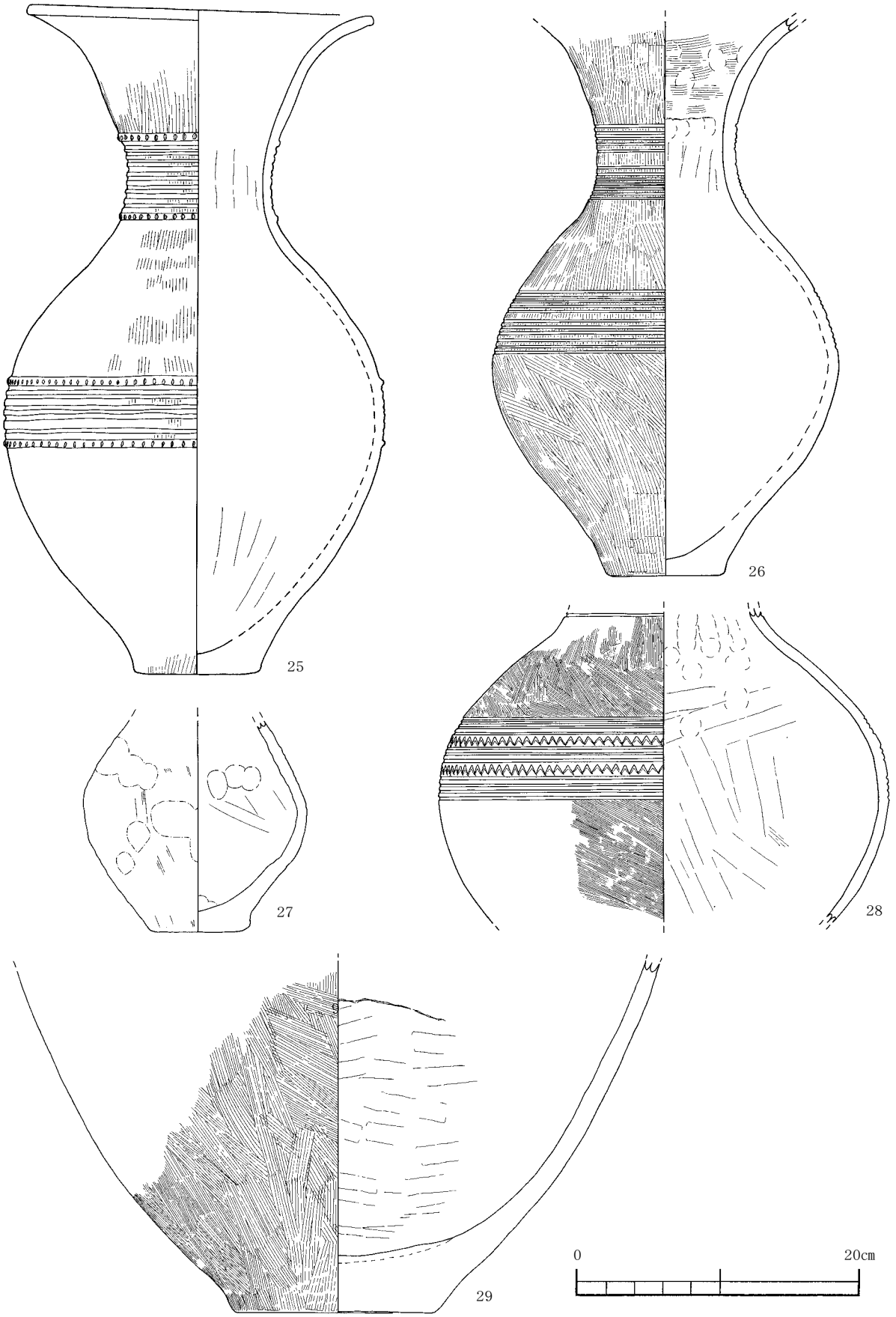
第 35 図　土坑 SK302 出土遺物 3



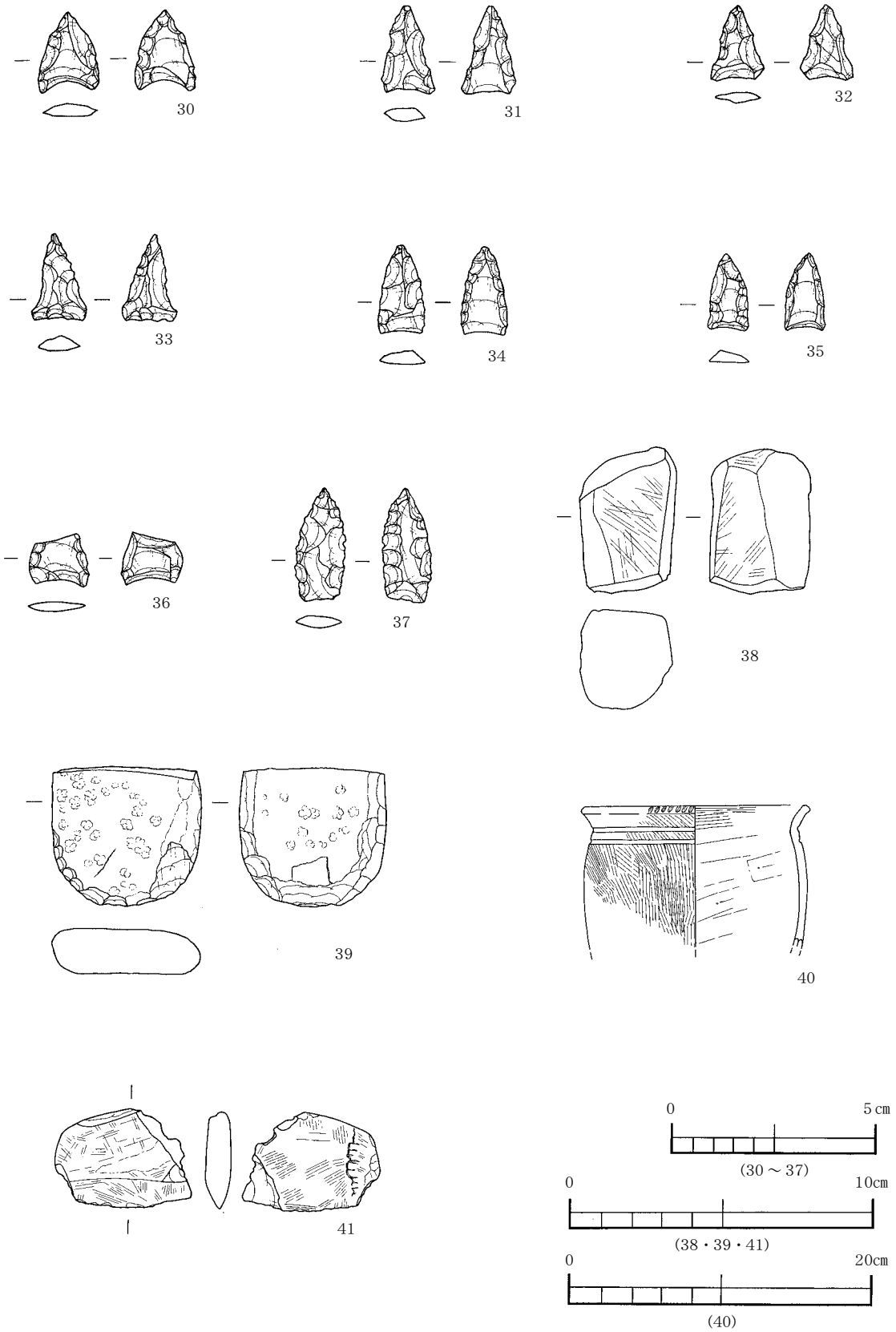
1　黄褐色砂質シルト（2.5Y5/3）マンガン・鉄分・炭化物・土器を含む
2　黄褐色シルト（2.5Y5/4）マンガン・鉄分・炭化物を含む
3　黄褐色粘質シルト（2.5Y5/3）マンガンを少量含む
4　黄褐色シルト質粘土（2.5Y5/3）

0　1 m

第 36 図　土坑 SK303



第 37 図　土坑 SK303 出土遺物 1



第38図　土坑SK303（30～39）出土遺物２、土坑SK304（40・41）出土遺物

文によって充填している。外面には、ハケメの後、丁寧にヘラミガキを施している。10は甕用蓋である。完形品である。11は壺である。口縁部と胴部下半を欠いている。胴部に５条の沈線を施している。12は無文の壺である。外面のハケメが顕著である。13は小型の鉢で、14はミニチュア土器の底部破片である。第35図15は甕である。如意形口縁をもち、胴部上半に５条の沈線を施し、口縁端部を刻む。胴部外面はハケメを施す。16も甕である。砲弾型の器形で、口縁端部に凸帯を施し、逆「L」字状口縁としている。胴部上位に沈線５条、中位に沈線４条を施している。外面のハケメが顕著である。

土製品は土製円盤が１点出土している（第35図17）。土器片を加工し、片面にハケメが残る。

第35図18～24は石器である。18・19は石鏃である。いずれもサヌカイト製である。20はサヌカイト製の石核である。21はサヌカイト製の打製石剣である。長さ16.5㎝、幅3.9㎝、厚さ1.1㎝をはかり、重量81.78ｇである。両面に丁寧な剥離を施している。基部と刃部を明確に作り分けており、基部両側縁には刃つぶしを施している。22・23は扁平片刃石斧である。22は長さ6.5㎝、幅3.6㎝、厚さ1.55㎝をはかり、重量は78.27ｇである。石材は緑色岩である。横断面は隅丸方形で、縦断面は、両主面ともに稜線部をもたずに、曲線的に刃部へといたる。23は長さ4.9㎝、幅2.3㎝、厚さ1.0㎝をはかる。重量は22.74ｇである。石材は塩基性片岩である。横断面は方形で、縦断面は稜線をもち、体部から刃部への移行が明瞭である。24は磨製石庖丁である。長さ16.0㎝、幅4.5㎝、厚さ0.7㎝をはかる。重量は78.78ｇである。刃部は直線で、半月形をなす。穿孔は２か所認められる。石材は塩基性片岩である。

土坑 SK303

土坑SK303は、調査区北方中央部に位置する（第29図）。東西方向を軸とする長楕円形を呈する。長径約3.4ｍ、短径約1.2ｍ、深さ約0.45ｍをはかる（第36図）。完形の大型壺をはじめ、多量の土器・石器が出土している（第37図・第38図30～39）。出土土器が壺に偏ることと、石鏃の出土が多いのが特徴である。土坑SK302と同様、墓に関連する遺構の可能性も捨てきれない。弥生前期末から中期初頭に相当する。

第37図25は壺である。頸部の上下端に２条の凸帯を施し、その間に８条の沈線を施す。胴部最大径付近にも上下に２条の凸帯を施し、その間に５条の沈線を施す。外面ハケメを施す。ヘラミガキの痕跡はみられない。26は壺である。口縁部を欠いている。頸部上半に５条の沈線を施し、間隔をおいて下半に８条の沈線を施す。胴部に５条の沈線を施し、若干間隔を置いて、６条の沈線を施す。外面はハケメが顕著で、ヘラミガキの痕跡はみられない。内面は、口縁部付近に横方向のハケメを施し、以下ユビオサエ、ナデがみられる。27は小型の壺で、無文である。28は壺の胴部大型破片である。頸部に沈線を施し、胴部には上からそれぞれ４条・３条・４条の沈線を施し、２つの沈線間に三角刺突文を施す。外面ハケメを施し、ヘラミガキ痕はみられない。内面ユビオサエ・板ナデ調整である。29は大型壺の底部である。大型の鉢の可能性もある。無文で、外面にハケメを施し、内面に板ナデ痕がみられる。ヘラミガキはみられない。

第38図30～37はサヌカイト製石鏃である。平基ないし凹基式で、いずれも小型である。38は砥石で、３面に線条痕がみられる。粘板岩製である。39は敲石であろう。点紋塩基性片岩製である。

土坑 SK304

土坑SK304は、調査区北西部に位置する（第29図）。溝SD302埋没後に掘削された遺構である。径約1.1ｍ、深さ約0.5ｍである（第31図）。出土遺物は少ない。弥生前期末から中期初頭に相当する。

第38図40は甕である。如意形口縁で、胴部上半に２条の沈線を施す。外面はハケメ調整。内面は、

口縁部付近に横方向のハケメを施し、以下板ナデを施す。41 は石庖丁の破片である。

土坑 SK305

土坑 SK305 は調査区北西端、土坑 SK304 のすぐ北西隣に位置する（第 29 図）。径約 0.85 m、深さ約 0.25 mをはかる（第 31 図）。出土遺物はみられない。

２　第２遺構面

第２遺構面では、弥生中期から中世にわたる遺構を多数検出した（第 39 図）。本来は、土壌化の著しい第３層上面から掘られたものと考えられる。地表面として機能していた期間が長かったため、多様な時期の遺構が同一面で検出されるものと考えられる。

溝 SD201 ～ SD204・210

溝は SD201 ～ SD210 の 10 条を検出した。このうち、溝 SD201 ～ SD204・SD210 は調査区北半に、東西方向に展開する。いずれも同じような規模で、平行して展開する。

溝 SD201 は、調査区北隅付近に展開する（第 39 図）。調査区西端部分では、とぎれている。

溝 SD202 は、幅約 0.8 m、深さ約 0.2 mである（第 40 図）。調査区やや西よりで、２つに分岐するが、分岐した溝は、すぐとぎれる（第 40 図上段）。出土遺物は少なく、須恵器杯蓋が１点出土している（第 60 図 125）。TK46 様式に属し、７世紀中葉の所産であろう。

溝 SD203 は、調査区中央付近を東西方向に展開する。幅約 0.4 m、深さ約 0.1 mである（第 40 図）。

溝 SD204 は、調査区中央付近を東西方向に展開する。同種の溝では最南端のものである。幅約 0.8 m、深さ約 0.2 mをはかる（第 41 図）。調査区西よりでは２条が平行して展開するが、調査区中央付近で合流し、１条となる（第 41 図）。

溝 SD210 は、調査区北部、溝 SD201 の南側に展開する。

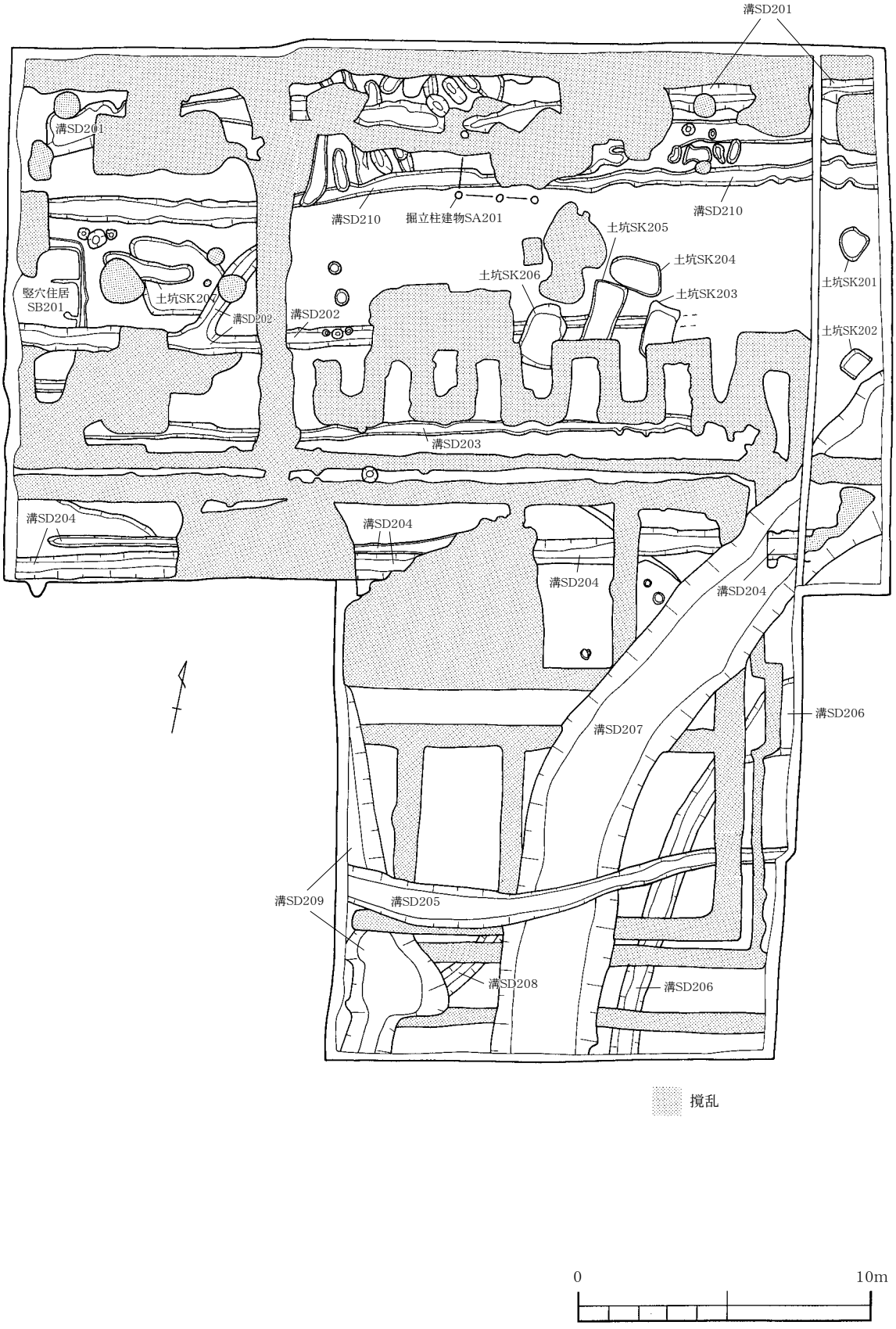
以上、出土遺物はほとんどみられないが、いずれも同種の遺構であることから、溝 SD202 と同時期の７世紀中葉ごろとみてよいのではあるまいか。

溝 SD205

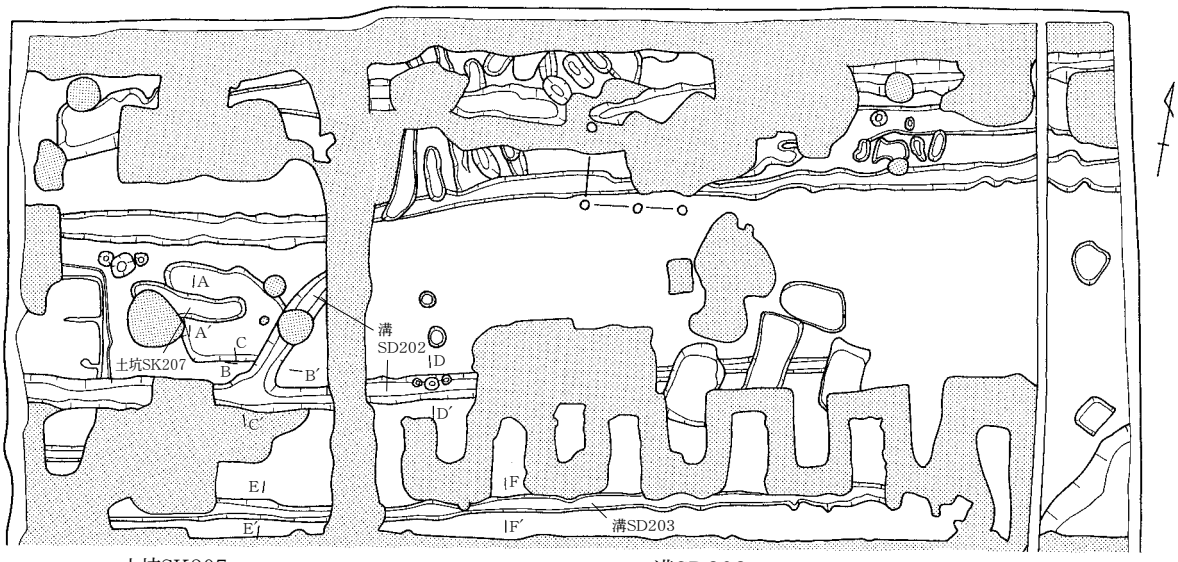
溝 SD205 は、調査区南を、東西に蛇行して展開する（第 39 図）。上面幅約 1.2 m、底面幅約 0.3 m、深さ約 0.7 mをはかる（第 41 図）。溝の埋土からは、おびただしい量の遺物が出土した（第 42 図）。焼土が展開する部分があり（第 42 図下段）、付近からは勾玉形石製品が出土している（第 47 図 80）。時期は、出土土器・須恵器からみて、５世紀後葉と考えられる。

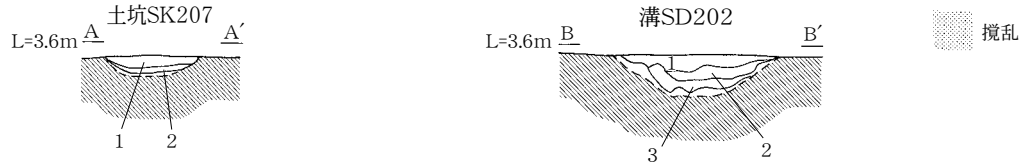
遺物が多量に出土した（第 43 ～ 47 図）。

第 43 図 42 ～第 46 図 61・63 は土師器甕である。42・43・45 は、やや肩の張った球形の胴部からやや突っ立った「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。外面はナデ調整で、内面上半はナデ、下半はヘラミガキである。44 は卵形の胴部をもち、「く」の字状に屈曲し、やや直立気味に立ち上がる口縁部をもつ。外面はハケメ調整で、内面はユビオサエが顕著である。46 は、球形の胴部をもち、「く」の字状に屈曲する、やや短い口縁部をもつ。外面はタタキののちハケメ、内面はユビオサエと板ナデ調整である。47 は「く」の字状に屈曲する長い口縁部をもつ。口縁端部に凹線を施す。外面はハケメ調整である。48 は球状の胴部をもち、「く」の字状に屈曲し、やや内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部の内面をつまんで、肥厚部分を作出している。外面はハケメ、内面はヘラケズリで、ヘラ状工具による縦方向の条線がみられる 49･50 は、いずれも「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。や



第39図　第２遺構面検出遺構





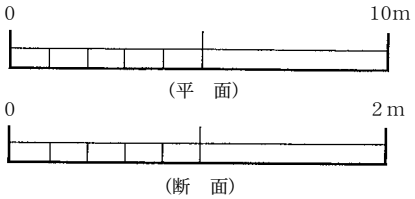
1　にぶい黄褐色細砂（10YR4/3）
2　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/6）

1　暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）マンガン・鉄分・土器を含む
2　暗灰黄色粘質シルト（2.5Y4/2）マンガン・土器を含む
3　暗灰黄色シルト質粘土（2.5Y4/2）マンガンを含む

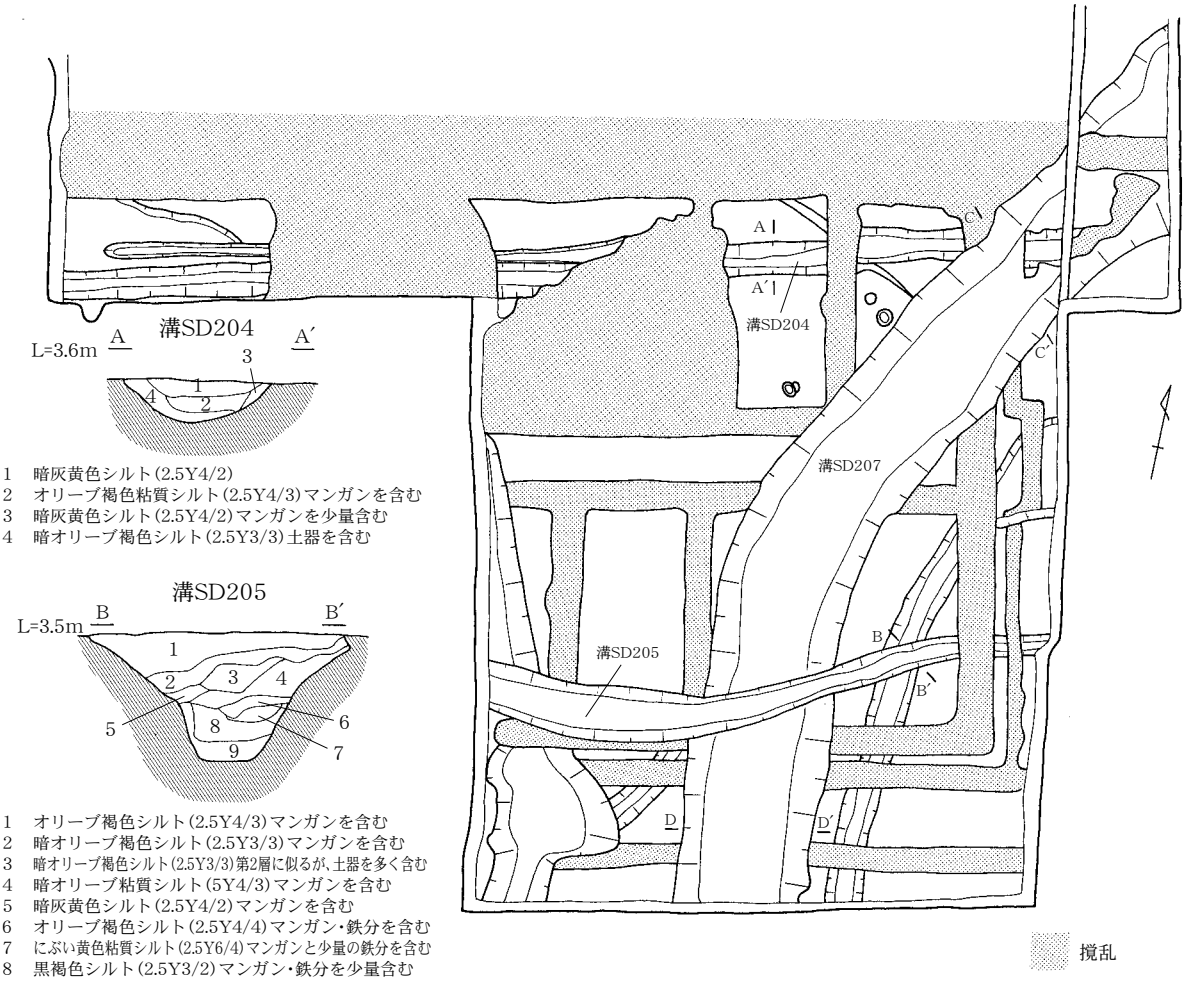
4　黒褐色シルト質粘土（2.5Y3/2）
　マンガン・土器を含む

5　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）マンガンを含む

1　暗オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y3/3）マンガン・鉄分を含む
2　黄褐色シルト（2.5Y5/3）

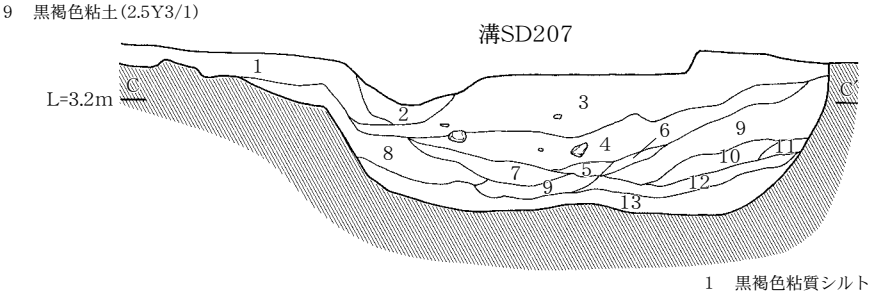


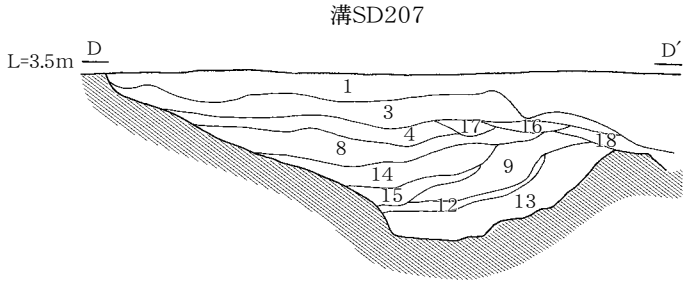
第40図　土坑 SK207、溝 SD202・SD203



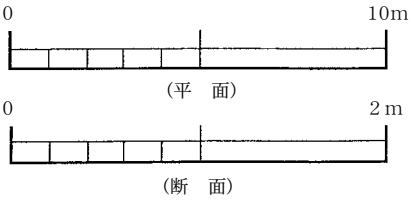
1　暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)
2　オリーブ褐色粘質シルト(2.5Y4/3)マンガンを含む
3　暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)マンガンを少量含む
4　暗オリーブ褐色シルト(2.5Y3/3)土器を含む

1　オリーブ褐色シルト(2.5Y4/3)マンガンを含む
2　暗オリーブ褐色シルト(2.5Y3/3)マンガンを含む
3　暗オリーブ褐色シルト(2.5Y3/3)第2層に似るが、土器を多く含む
4　暗オリーブ粘質シルト(5Y4/3)マンガンを含む
5　暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)マンガンを含む
6　オリーブ褐色シルト(2.5Y4/4)マンガン・鉄分を含む
7　にぶい黄色粘質シルト(2.5Y6/4)マンガンと少量の鉄分を含む
8　黒褐色シルト(2.5Y3/2)マンガン・鉄分を少量含む
9　黒褐色粘土(2.5Y3/1)



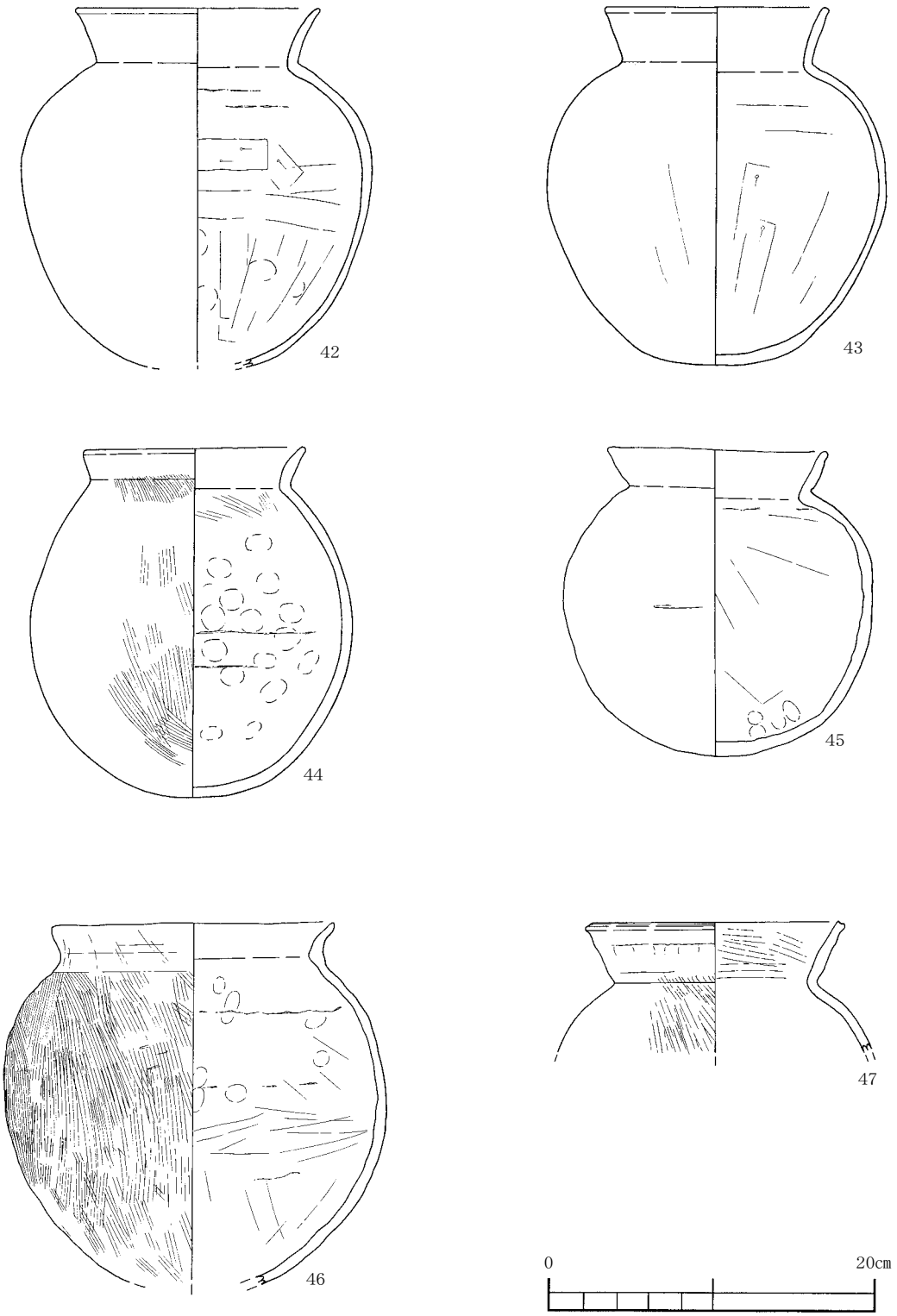


1　黒褐色粘質シルト（10YR2/2）マンガン・土器を含む
2　黒褐色シルト質粘土（2.5Y3/2）マンガン・小礫を含む
3　黒褐色粘土(2.5Y3/1)マンガン・土器・結晶片岩(5～6cm大)を含む
4　黄褐色シルト（10YR5/6）小礫～こぶし大・人頭大の石を含む
5　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR4/3）
6　黄褐色シルト質粘土（10YR5/8）土器の小片を含む
7　オリーブ褐色粘土（2.5Y4/3）
8　褐色シルト質粘土（7.5YR4/4）
9　黄褐色粘土（2.5Y5/4）
10　褐色粘土（7.5YR4/6）鉄分を含む
11　黄褐色粘土（2.5Y5/3）鉄分を含む
12　にぶい黄色粘土（2.5Y6/4）土器の小片を含む
13　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）粘性強い、下半に鉄分の集積がある
14　黄褐色粘土（2.5Y5/6）鉄分・土器を含む
15　オリーブ褐色粘土（2.5Y4/4）
16　黒褐色粘土（2.5Y3/1）第３層に似るが、小礫がみられない
17　暗褐色粘土（10YR3/3）
18　灰黄褐色粘土（10YR4/2）

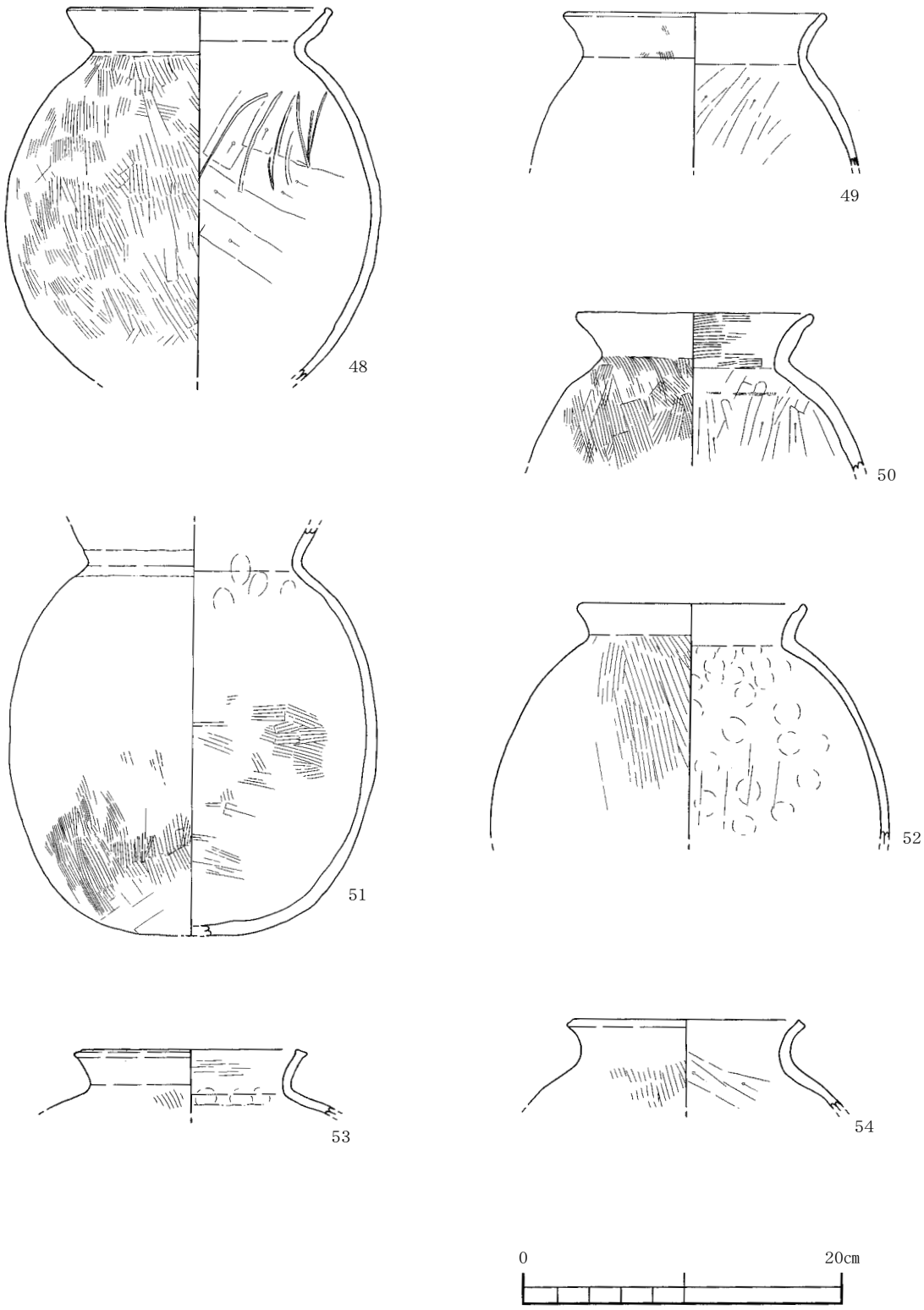


第41図　溝 SD204・SD205・SD207

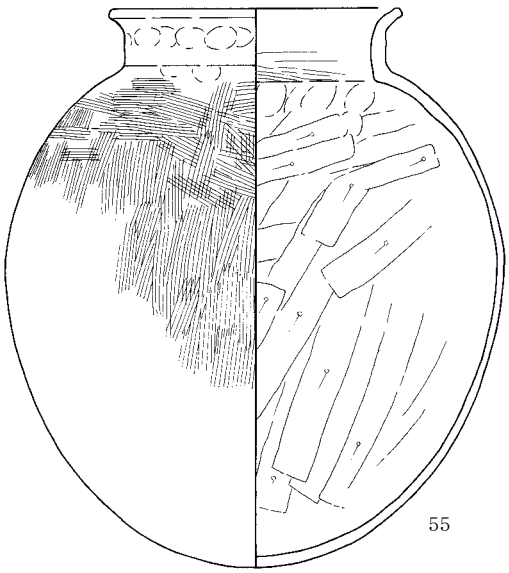
第 42 図　溝 SD205 遺物出土状況

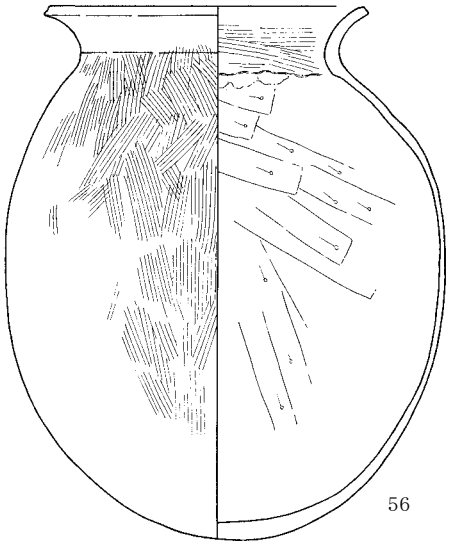


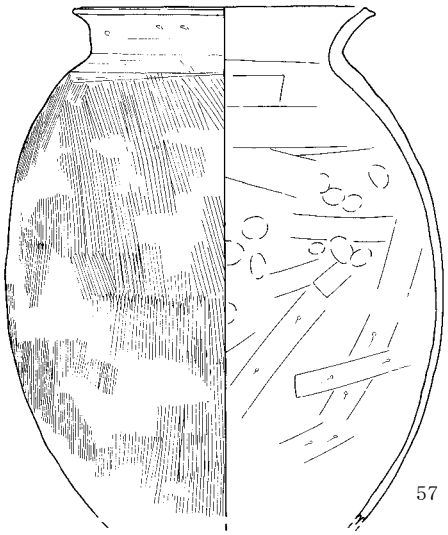
第43図　溝 SD205 出土遺物１

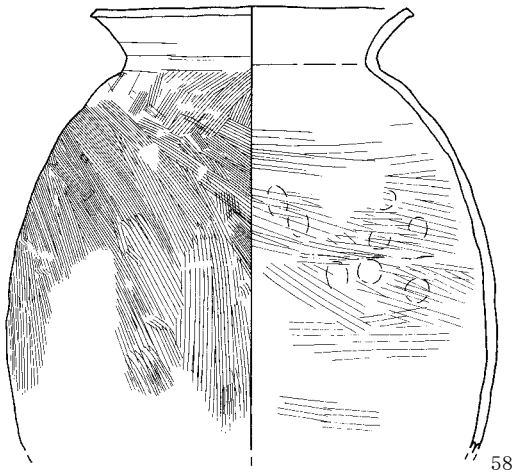


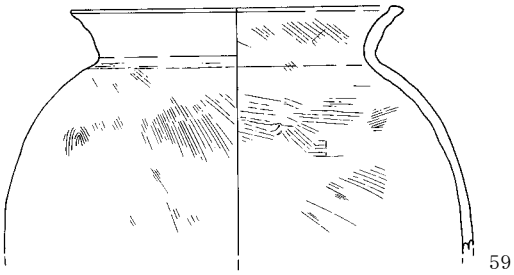
第 44 図　溝 SD205 出土遺物２

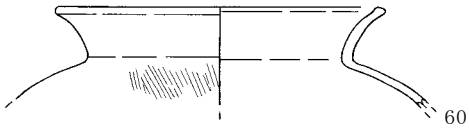


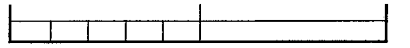




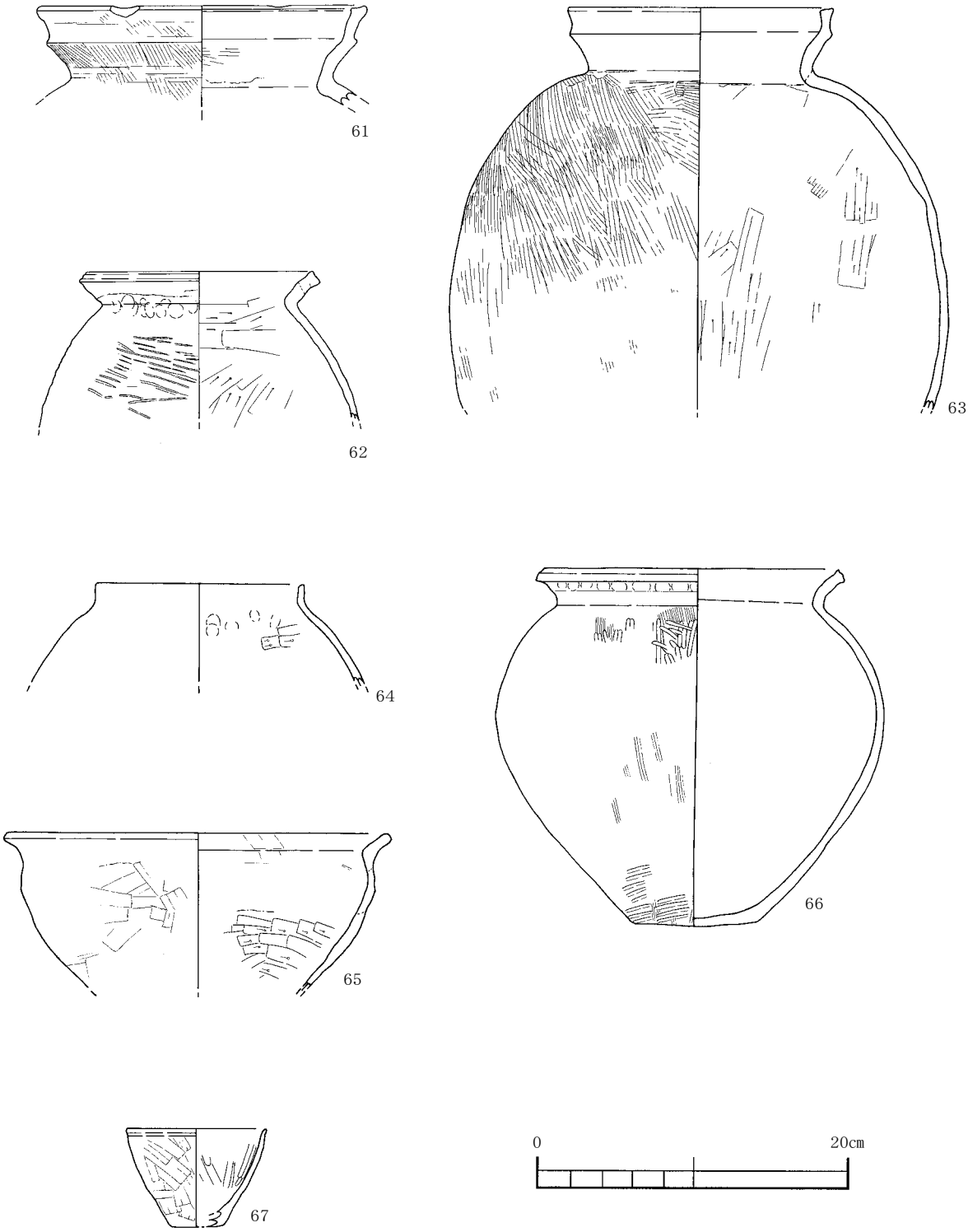




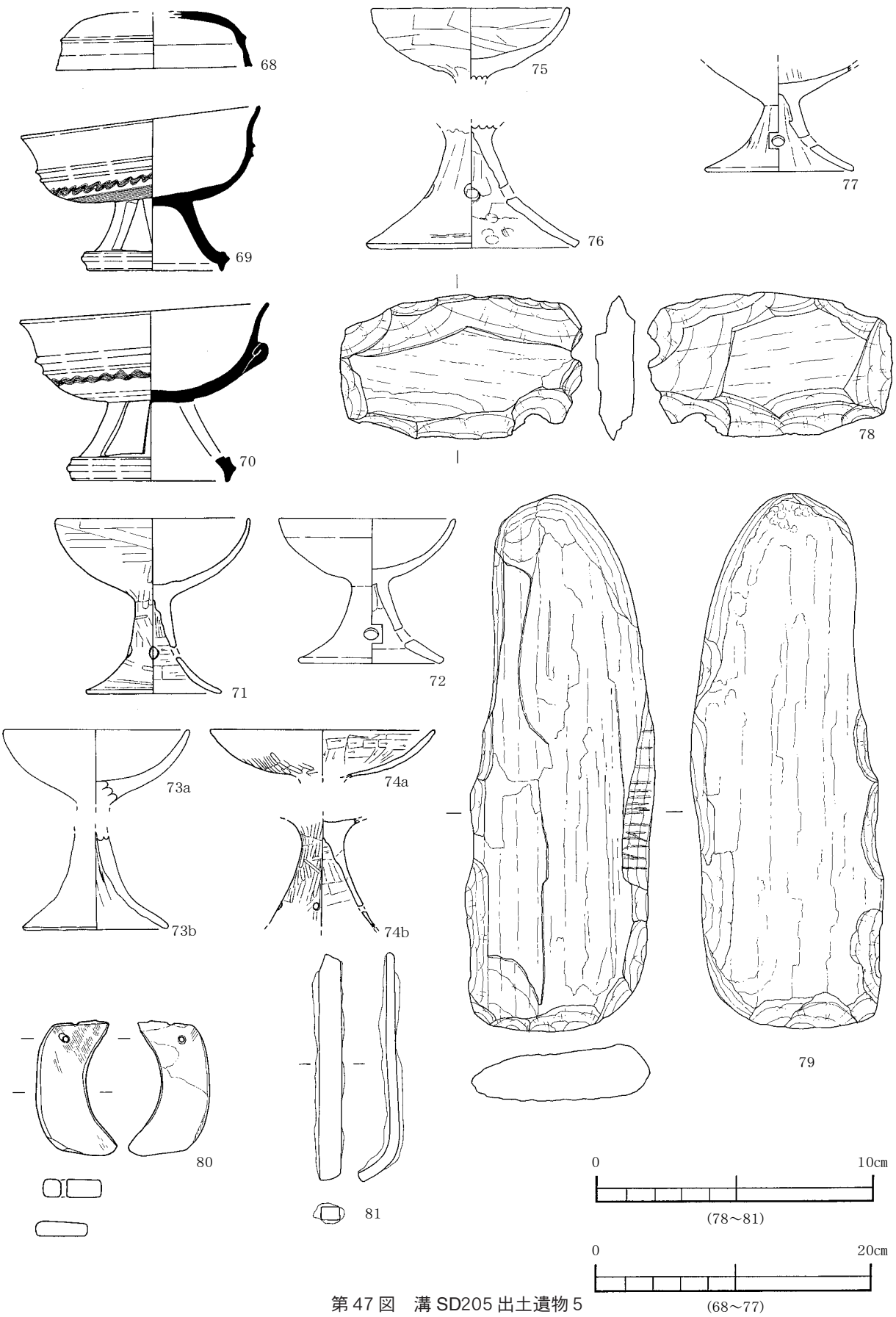




第45図　溝 SD205 出土遺物３



第46図　溝 SD205 出土遺物４



第47図　溝 SD205 出土遺物５

や小型の個体である。外面ハケメ、内面はヘラケズリである。51はやや縦長の胴部をもち、「く」の字状に屈曲して立ち上がる。口縁端部を欠いている。内・外面ともにハケメ調整である。52～54は、いずれも「く」の字状に屈曲して立ち上がる、やや短い口縁部をもつ個体である。53は口縁端部に凹線をもつ。55は球状の胴部に、「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部は一旦直立したのち、外反して立ち上がる。外面ハケメ、内面はヘラケズリである。56～58は、やや縦長の胴部をもち、外湾ぎみに屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。いずれも口縁部付近の器壁は厚く、57は口縁端部に凹線を有する。56・57は外面ハケメ、内面ヘラケズリで、58は、内・外面ともにハケメを施す。59・60は、「く」の字状の口縁部をもち、外湾ぎみに屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。61は屈曲して立ち上がる２段口縁を呈する。口縁端部を１か所意図的にうち欠いている。63は大型で球状の胴部をもち、２段に屈曲する口縁部をもつ個体である。外面ハケメ、内面ヘラケズリ調整である。第46図62・66は弥生後期の甕である。第46図64・65・67は、弥生後期の鉢である。64は内湾して立ち上がる鉢である。65は「く」の字状に屈曲して立ち上がる。67は小型の鉢で、口縁部付近に１条の凹線をもつ。

第47図68～70は須恵器である。68は杯蓋である。調整は回転ヘラナデ、端部はやや長い。69は高杯である。基本は回転ヘラナデ、杯部下半にカキメがみられる。脚部に方形の透かし孔を３か所もつ。70も高杯である。基本は回転ヘラナデであるが、杯部下半に回転ヘラケズリをもつ。いずれもTK23ないし47様式である。

第47図71～77は、土師器高杯である。いずれも小型の個体である。71は皿状の杯部をもつ。外面ナデ・ヘラケズリ、脚部に一部ヘラミガキを施す。脚部に円形の透かし孔を３か所もつ。72は、内・外面ともナデ調整である。脚部に円形の透かし孔が４か所施される。73も71・72と同形態である。74は、杯部がやや浅い形態である。外面ヘラミガキ、内面にヘラケズリが顕著に認められる。円形の透かし孔が４か所みられる。75は皿状の杯部である。76・77は脚部であり、それぞれ円形の透かし孔が３か所認められる。

第47図78～80は石器・石製品である。78は打製石庖丁で、えぐりをもつ。珪質片岩製である。79は打製石斧である。右側縁に線状の敲打痕がみられる。石材は珪質片岩である。80は勾玉形石製品である。上端部に１か所穿孔が認められる。滑石製である。長さ4.8㎝、幅2.3㎝、厚さ0.7㎝をはかる。重量は11.37ｇである。

第47図81は棒状の鉄製品である。長さ8.1㎝、幅0.7㎝、厚さ0.5㎝をはかり、重量は9.6ｇをはかる。

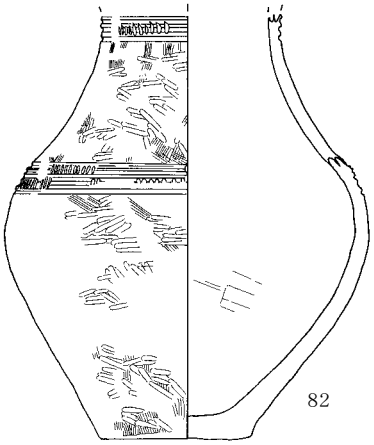
溝 SD206・SD208

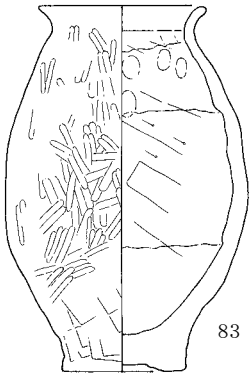
溝SD206・SD208は、調査区南半にみられる。いずれも南西から北東方向へ展開する（第39・41図）。

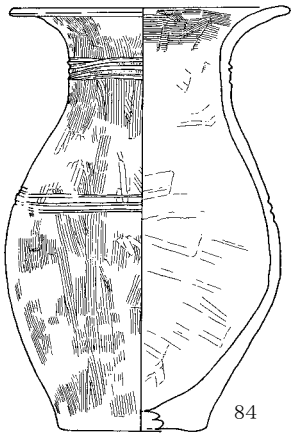
溝 SD207

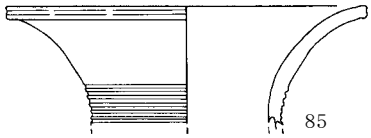
溝SD207は、調査区中央南端から北東方向へ向かい、調査区中央東端へと弧状に展開する（第39図）。幅約３ｍ、深さ約0.9ｍをはかる（第41図）。本調査では最大の溝である。埋土は粘土からシルト質の土壌からなっており、グライ化している。排水不良気味の堆積環境にあったものと推察される。出土遺物は弥生前期中葉から中期後葉であるが、主体は中期初頭から中葉である。庄遺跡では、弥生中期初頭から中葉の遺構は少なく貴重な類例である。2006年度調査、西病棟地点において、溝SD207の下流部を検出している。

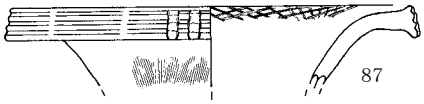
出土遺物は、溝の規模からみると少なめである（第48～52図）。

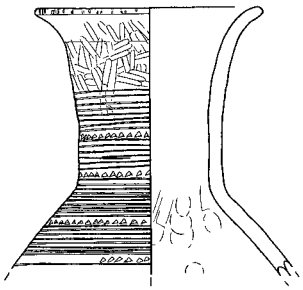




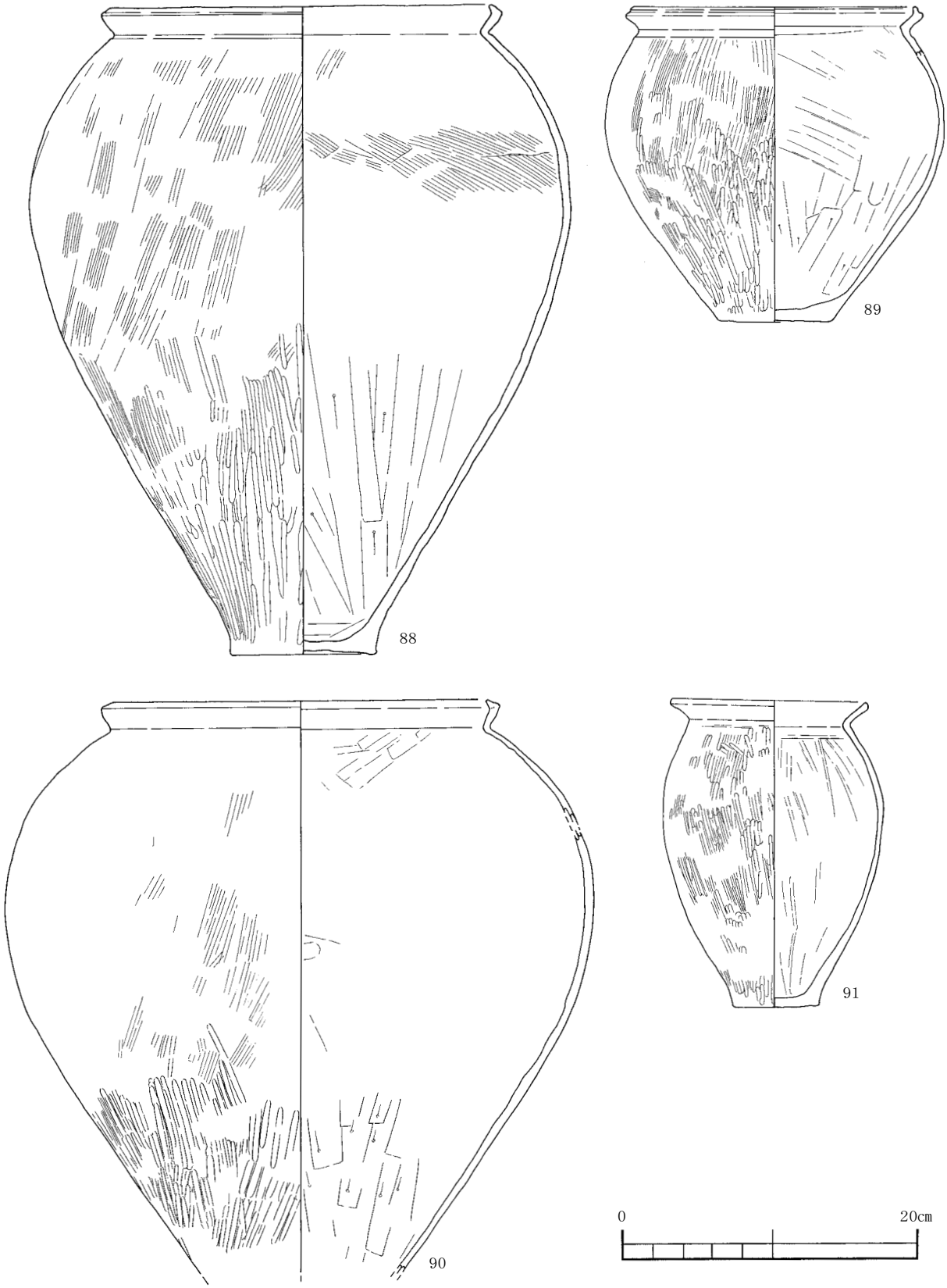




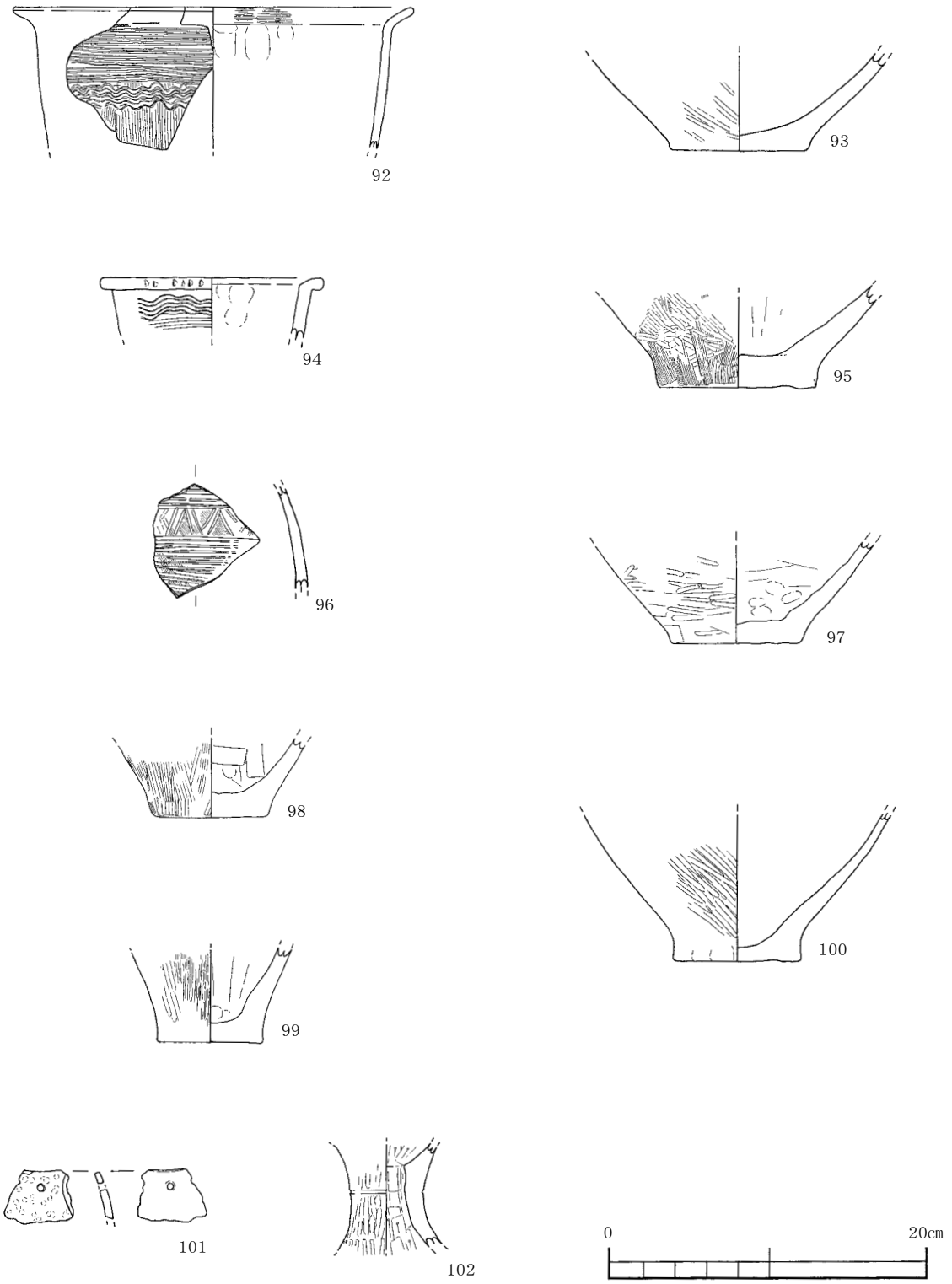




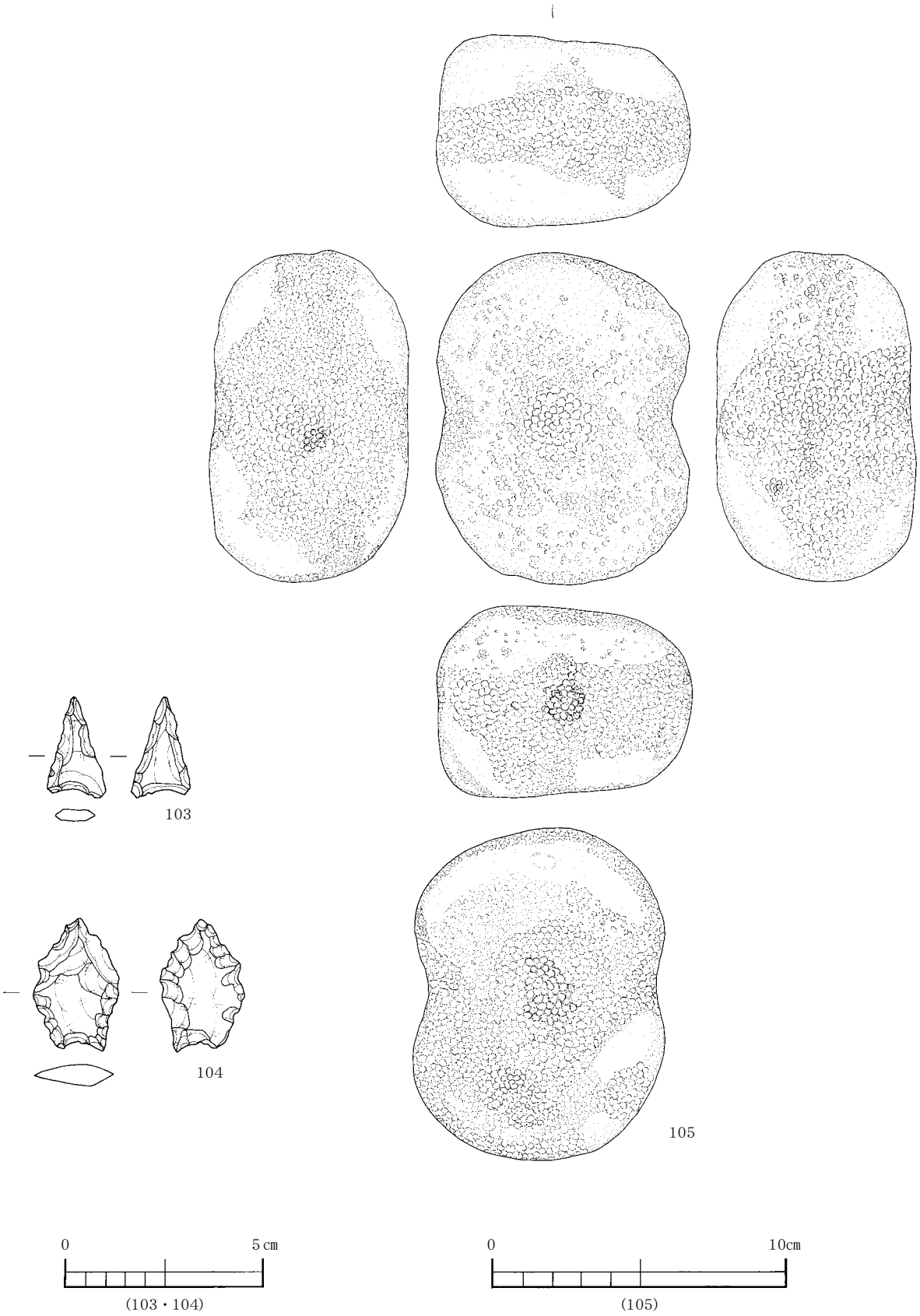
第48図　溝 SD207 出土遺物１



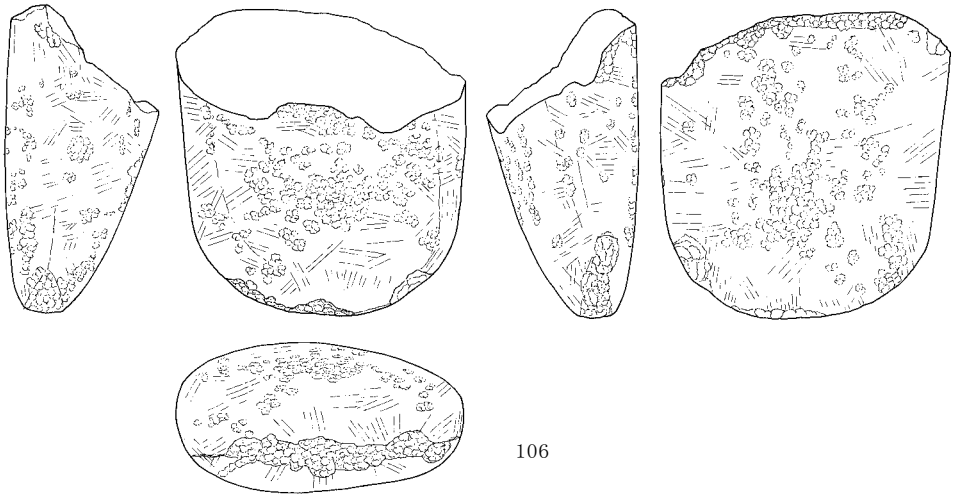
第 49 図　溝 SD207 出土遺物 2

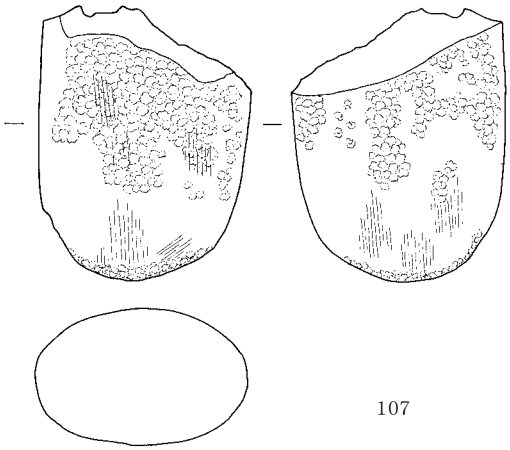


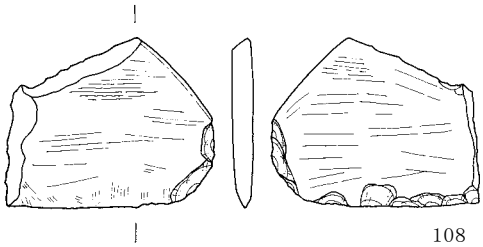
第 50 図　溝 SD207 出土遺物 3

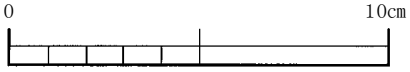


第51図　溝 SD207 出土遺物４









第 52 図　溝 SD207 出土遺物５

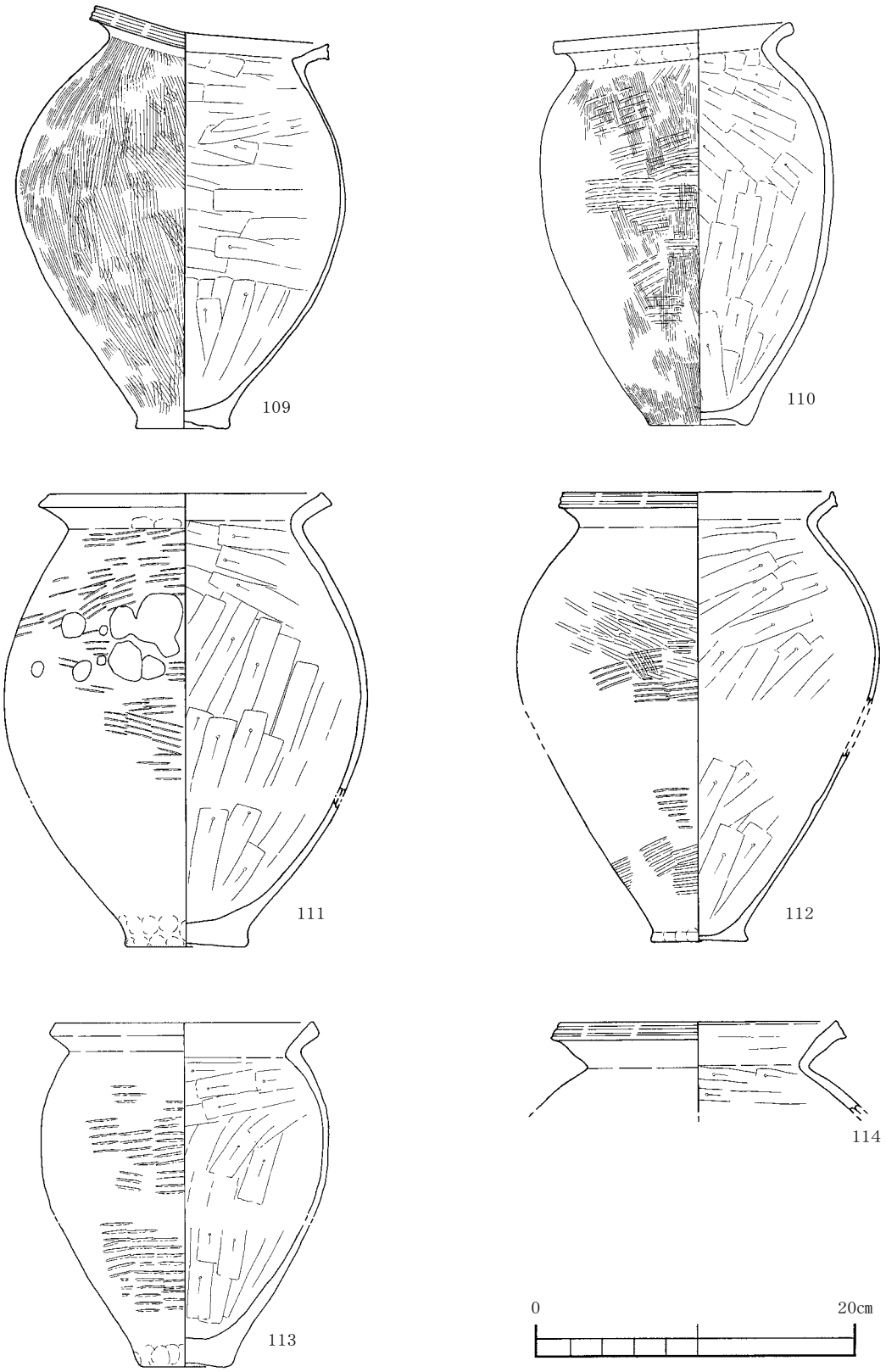
第48図82は弥生前期中葉の壺である。頸部に４条程度の沈線を施し、その上に刻目を施す。胴部に５条の沈線を施し、その上に刻目を施す。調整は外面ハケメのちヘラミガキである。胴部の張りがやや強く、古い形態をとどめている。83は無文の壺である。胴部の張りはあまり大きくない。また頸部から屈曲して立ち上がる、短い口縁部をもっている。外面はヘラミガキで、内面ヘラナデであるが、砂粒が若干動いて、ヘラケズリに近い。赤褐色を呈する特徴的な色調である。本資料と比較してはるかに大型ではあるが、第６次調査青藍会館地点出土の土器棺に、器形と胎土、色調が酷似している（北條編1998）。弥生前期中葉であろう。84は壺で、頸部に螺旋状の沈線３条、胴部に３条の沈線を施す。外面はハケメが顕著で、内面は口縁部付近のみヨコハケ、以下板ナデである。弥生前期後葉に位置づけられよう。85は壺の口縁部である。口縁端部に１条、頸部に６条の沈線を施す。弥生中期初頭と考えられる。86は細頸壺である。口縁端部に刻目をもつ。頸部から胴部に、それぞれ８条、６条、10条、８条、１条以上の半裁竹管をもちいた沈線を施し、沈線間に三角刺突文を施す。外面はヘラミガキ痕が顕著に残る。弥生中期初頭であろう。87は壺の口縁部である。口縁端部に凹線を３条施し、その上に２個１組の粘土粒を貼り付ける。口縁部内面に格子目条の沈線を施す。弥生中期中葉であろう。第49図88は大型の甕である。胴部上半で大きく張って、「く」の字状に屈曲して立ち上がる。口縁端部も内面に屈曲させる。胴部外面にハケメを施し、胴部下半から底部のみ、縦方向のヘラミガキを施す。内面は下半がヘラケズリ、上半がハケメである。弥生中期中葉であろう。89はやや器高の低い甕である。「く」の字状に屈曲して立ち上がり、口縁端部に凹線を１条施す。胴部外面上半はハケメ調整で、胴部下半から底部に縦方向のヘラミガキを施す。内面は下半がヘラケズリ、上半はヘラナデである。90は大型の甕である。胴部上半の張りが強く、「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部も内側に屈曲させる。調整は胴部上半にハケメを施し、下半部に縦方向のヘラミガキを施す。内面は下半にヘラケズリがみられる。弥生中期中葉であろう。91は甕である。胴部は弱く張り、「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。外面はハケメのちヘラミガキ、内面は板ナデである。弥生中期中葉であろう。92は甕である。「く」の字状に外反して立ち上がる口縁部をもつ。胴部上半に櫛描文を描き、その下に櫛描波状文を施す。外面に縦方向のハケメを施し、内面口縁部付近のみ横方向のハケメを施す。弥生中期初頭である。94は小型の甕である。逆「L」字状の口縁部をもつ。口縁端部に刻目を施す。胴部上半に櫛描波状文・櫛描文を施す。弥生中期初頭である。96は甕の胴部片である。多条沈線と山形文をもつ。弥生中期初頭であろう。93・95・97・100は壺の底部で、98・99は甕の底部である。101は鉢の口縁部で、穿孔をもっている。102は高杯脚部である。脚部の上面を充填して杯部を作るタイプである。弥生中期中葉であろう。

第51・52図は石器である。103・104はサヌカイト製の石鏃である。いずれも凹基式である。105は敲石である。重量は978.24ｇで、砂岩製である。106は伐採斧である。基部を欠いている。刃部に敲打痕がみられるため、敲石に転用したものであろう。重量338.69ｇで、緑色岩製である。107も伐採斧である。106同様敲石に転用したものと考えられる。重量219.32ｇで、点紋塩基性片岩製である。108は磨製石庖丁の破片である。塩基性片岩製である。

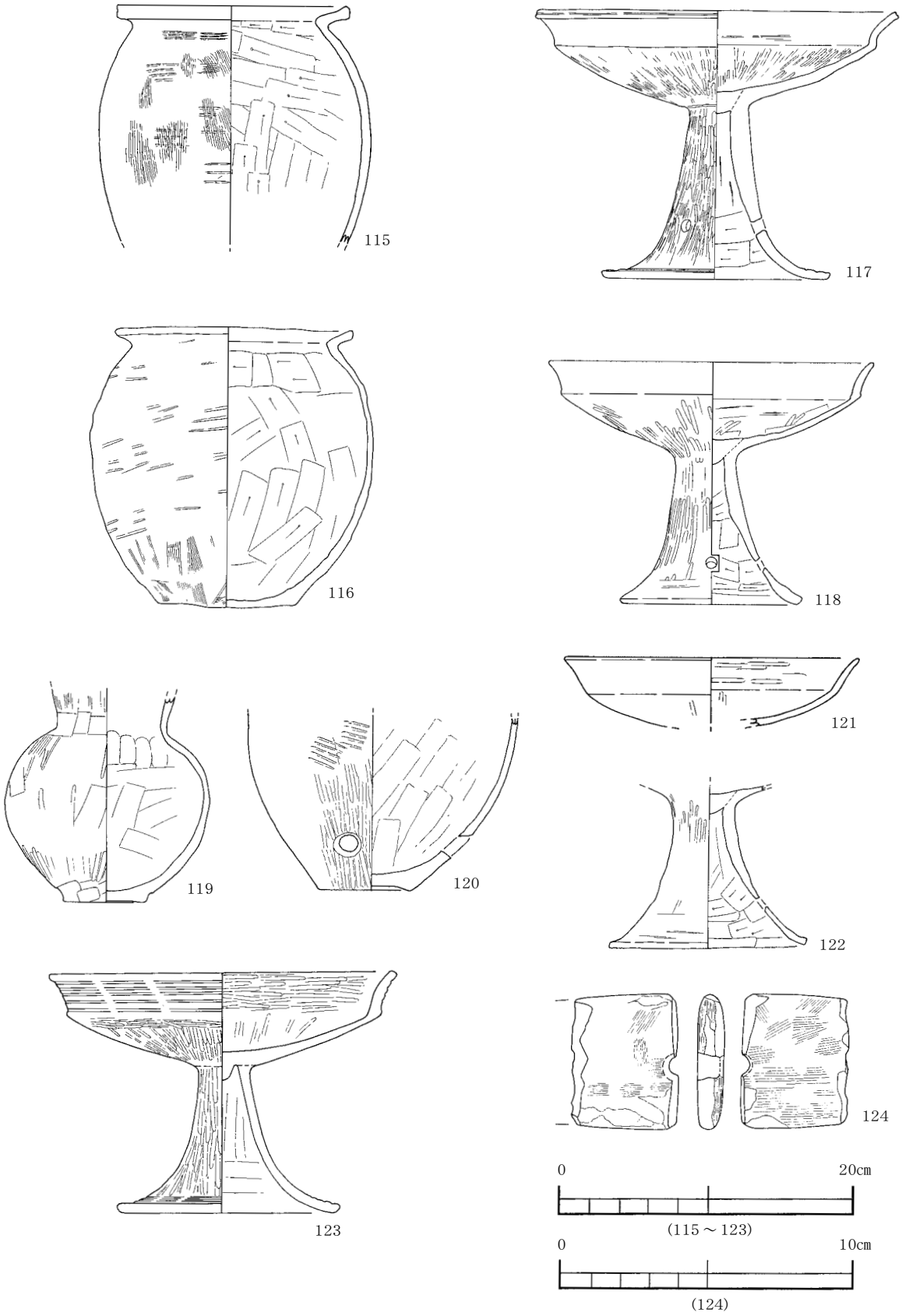
溝 SD209

溝SD209は、調査区南半の西端で、南北方向に展開する。一部土坑状になる部分がみられる（第39図）。時期は弥生後期前葉から中葉であろう。

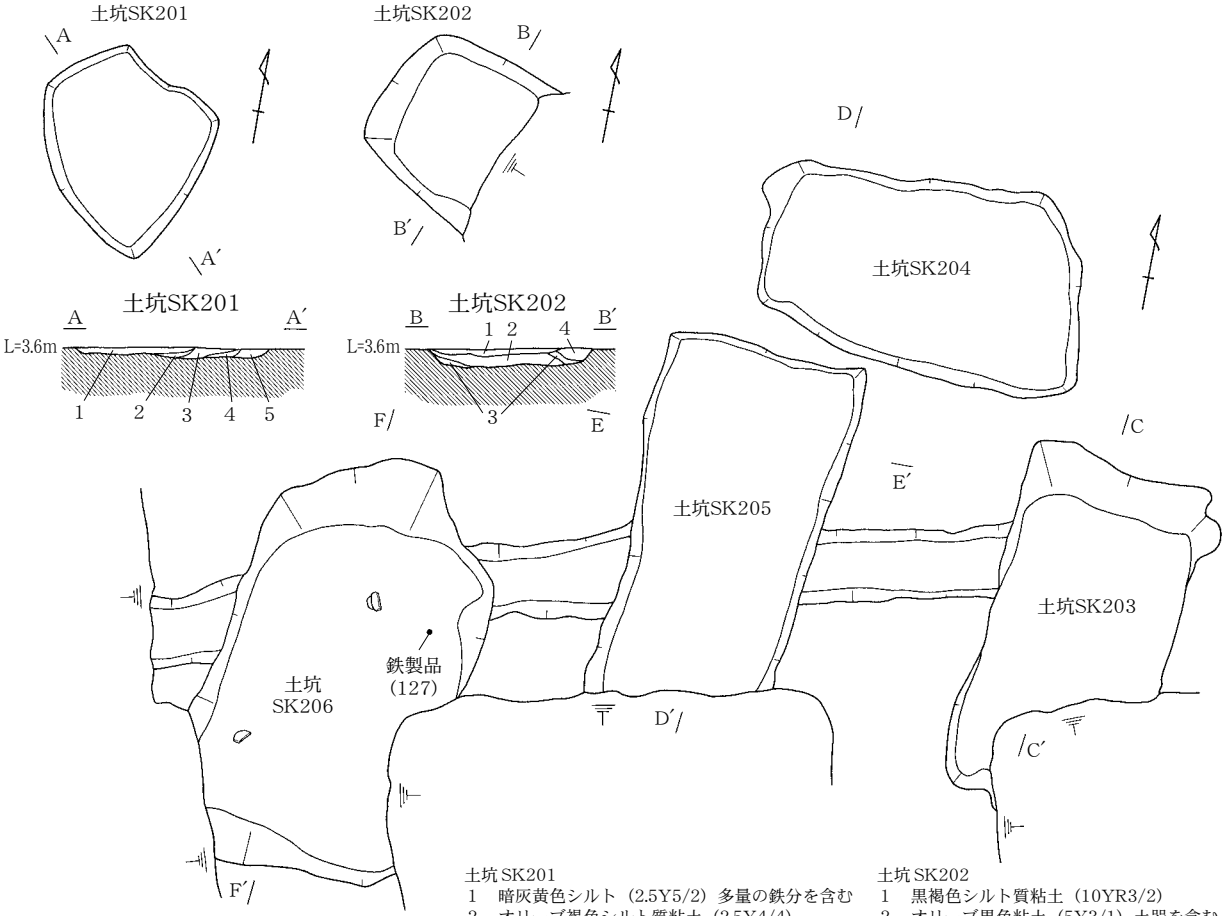
第53・54図が出土遺物である。



第 53 図　溝 SD209 出土遺物 1

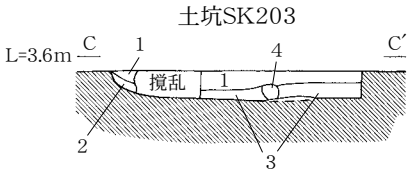


第54図　溝 SD209 出土遺物２

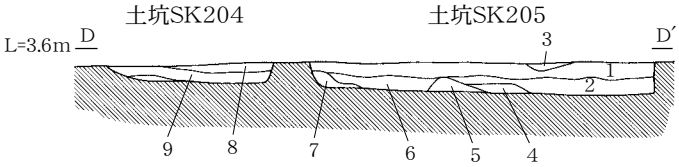


土坑 SK201
1　暗灰黄色シルト（2.5Y5/2）多量の鉄分を含む
2　オリーブ褐色シルト質粘土（2.5Y4/4）
3　暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）
4　黄褐色粘土（2.5Y5/3）土器を含む
5　にぶい黄褐色シルト質粘土（10YR4/3）

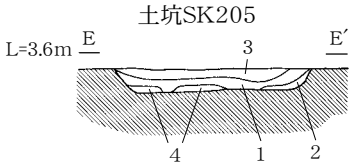
土坑 SK202
1　黒褐色シルト質粘土（10YR3/2）
2　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）土器を含む
3　オリーブ褐色粘質シルト（2.5Y4/6）
4　灰オリーブ色粘土（5Y4/2）

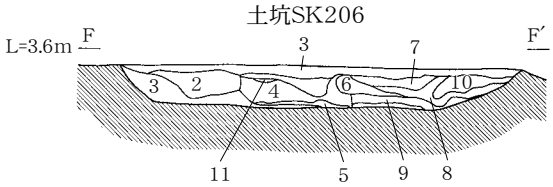


土坑 SK203
1　暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）
2　オリーブ褐色粘質シルト（2.5Y4/3）
3　暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）第１層に似るが、土器片を含む
4　黒褐色シルト（2.5Y3/2）

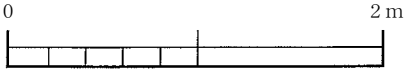


土坑 SK204　土坑 SK205
1　暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）
2　黒褐色粘質シルト（2.5Y3/2）
3　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）
4　暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）第１層に似るが、鉄分・マンガンを含む
5　オリーブ褐色粘土（2.5Y4/3）
6　暗灰黄色粘質シルト（2.5Y4/2）
7　暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）
8　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
9　黒褐色シルト（2.5Y3/2）土器片を少量含む

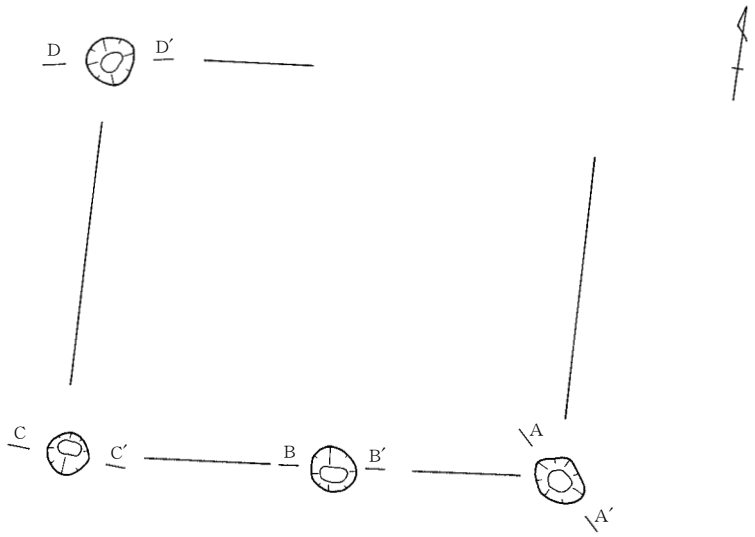


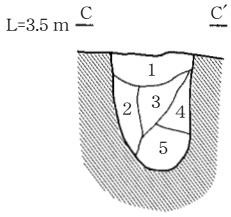


土坑 SK206
1　暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）
2　暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）第１層に似るが、やや暗い色調
3　暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）
4　オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y4/3）マンガンを含む
5　暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）
6　オリーブ褐色シルト質極細砂（2.5Y4/3）マンガンを含む
7　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）
8　暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）第５層に似るが、マンガンを含む
9　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）第７層に似るが、やや暗い色調
10　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/4）
11　暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）第２層に類似、マンガン・鉄分を含む

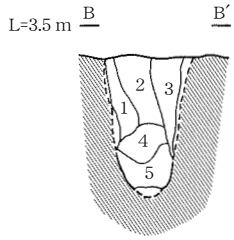


第 55 図　土坑 SK201 ～ SK206

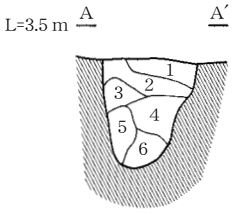




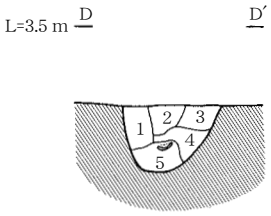
1　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）
2　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）
　黄褐色シルトブロック混入
3　オリーブ褐色シルト質粘土（2.5Y4/3）
4　オリーブ褐色粘質シルト（2.5Y4/3）
5　オリーブ褐色粘土（2.5Y4/3）



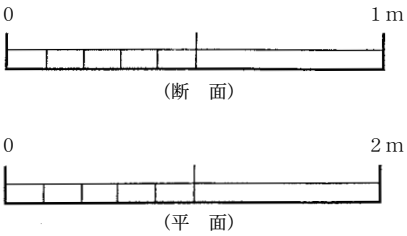
1　暗オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y3/3）
2　暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）
3　暗オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y3/3）
　第１層に似るが、灰色粘土・黄褐色シルトブロック混入
4　暗オリーブ褐色シルト質粘土（2.5Y3/3）
5　暗オリーブ褐色粘土（2.5Y3/3）



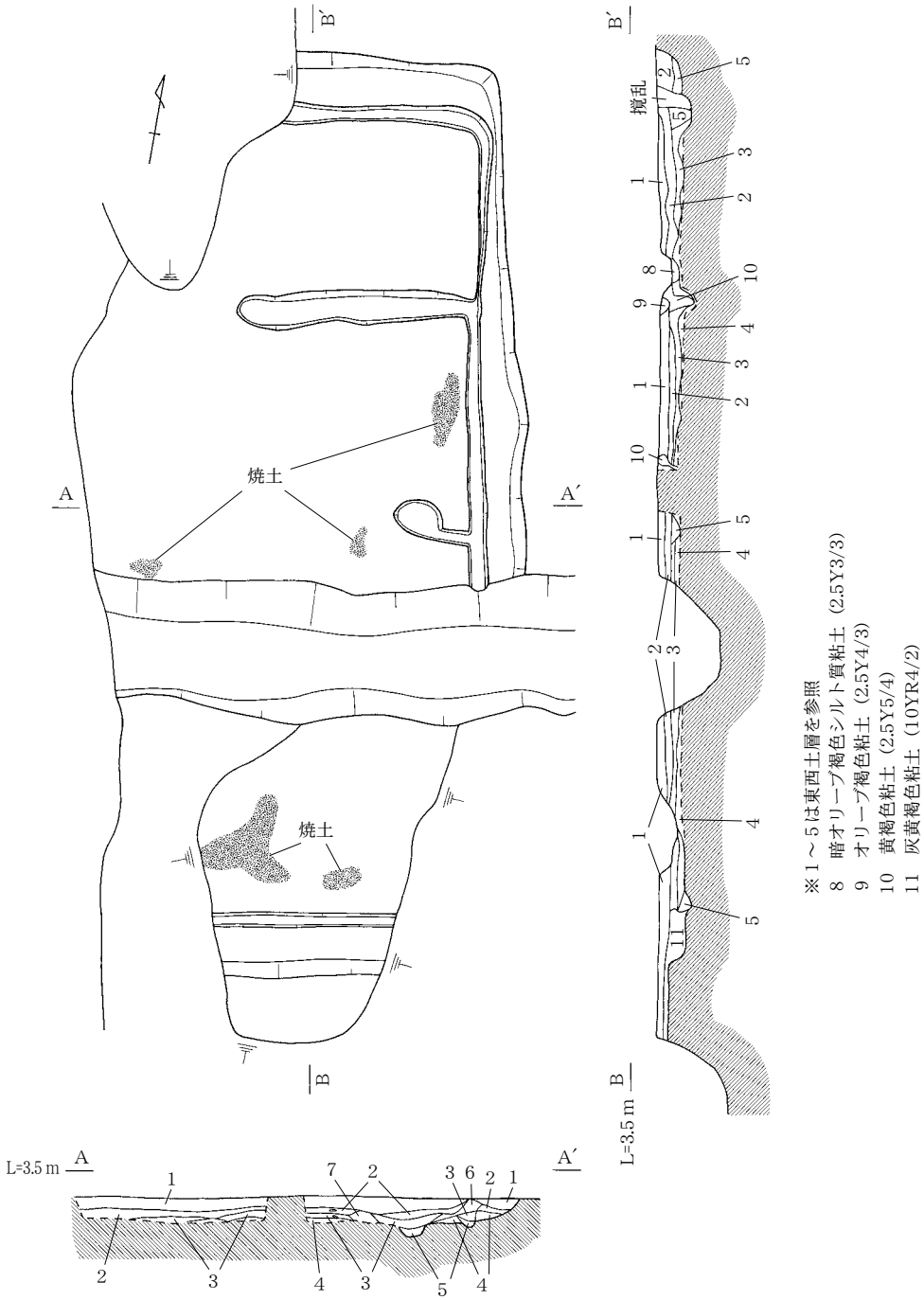
1　暗オリーブ褐色シルト質極細砂（2.5Y3/3）
2　オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y4/3）
3　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）
4　暗オリーブ褐色粘質シルト（2.5Y3/3）
5　オリーブ褐色シルト質粘土（2.5Y4/3）
6　暗オリーブ褐色粘土（2.5Y3/3）



1　オリーブ褐色シルト質極細砂（2.5Y4/3）
2　暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）
3　オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y4/3）
4　暗オリーブ褐色粘質シルト（2.5Y3/3）
5　暗オリーブ褐色粘土（2.5Y3/3）



第 56 図　掘立柱建物 SA201



1　灰黄褐色シルト（10YR4/2）
2　暗オリーブ褐色粘質シルト（2.5Y3/3）マンガン・土器を含む
3　オリーブ褐色シルト質粘土（2.5Y4/4）土器を含む
4　黄褐色シルト（2.5Y5/4）マンガン・鉄分を含む
5　オリーブ褐色粘土（2.5Y4/6）黄褐色シルトブロックを含む
6　暗オリーブ褐色粘土（2.5Y3/3）
7　にぶい黄褐色粘質シルト（10YR4/3）

0　2 m

第 57 図　竪穴住居 SB201

109 ～ 116 は甕である。109 は「く」の字状に屈曲して立ち上がるものである。口縁端部に２条の凹線を施す。外面ハケメ、内面下半は縦方向、上半横方向のヘラケズリを施す。110 は「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。やや厚い器壁を呈する。外面タタキのちハケメ、内面ヘラケズリである。111 は「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。外面タタキ、内面ヘラケズリである。112 は「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部に２条の凹線を施す。外面タタキのちヘラミガキ、内面ヘラケズリである。113 も「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。外面タタキ、内面ヘラミガキである。114 も「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部に２条の凹線を施す。内面ヘラケズリである。第 54 図 115 は「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。胴部タタキのちハケメ、内面ヘラケズリである。116 は「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。底径が大きい。外面タタキのちハケメ、内面ヘラケズリである。全体的に粗雑な作りである。

117・118・121 ～ 123 は高杯である。117 は屈曲して外反する杯部をもつ。杯・脚部とも外面ヘラミガキ、杯部の内面ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリである。３か所の円形透かし孔をもつ。118 は、「く」の字状に屈曲して立ち上がる杯部をもつ。杯部・脚部とも外面ヘラミガキ、内面は杯部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリである。４か所の円形透かし孔をもつ。121 は高杯の杯部、122 は脚部である。123 は「く」の字状に屈曲して立ち上がる杯部をもつ。杯部に凹線５条、脚部に凹線４条を施す。杯部・脚部ともに外面ヘラミガキ、内面は杯部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリである。119・120 は壺である。119 は外面ヘラミガキ、ハケメで、内面板ナデである。120 は底部付近に焼成後の穿孔がみられる。外面タタキのちヘラミガキ、内面ヘラケズリである。

石器は１点出土している。124 は磨製石庖丁である。穿孔を１か所残す。破断面にも研磨を施している。磨製石庖丁破損後、扁平片刃石斧に転用途上のものと思われる。本地域ではめずらしい白色の流紋岩製である。重量 27.6 ｇをはかる。本来は第５層（弥生前期包含層）相当の遺物と考えられ、混入したものであろう。

土坑 SK201 ～ SK206

土坑 SK201・SK202 は、調査区東端やや北よりに位置する（第 39 図）。いずれも径約１m、深さ５～ 10 ㎝ほどの浅い不整形の土坑である（第 55 図）。機能は不明、出土遺物もみられない。

土坑 SK203 ～ SK206 は調査区中央やや北東よりに群集する（第 39 図）。いずれも隅丸方形を呈する（第 55 図）。土坑墓群ないし木棺墓群の可能性もあるが、決め手はない。

土坑 SK203 は、長さ約２m、深さ約 15 ㎝をはかる。南北が主軸である。出土遺物はない。土坑 SK204 は、長さ約 1.7 m、幅約１m、深さ約 10 ㎝をはかる。この一群で唯一東西を主軸とする。出土遺物はない。土坑 SK205 は、長さ２m程度、幅約１m、深さ約 15 ㎝をはかる。南北方向を主軸とする。出土遺物はみられない。土坑 SK206 は、長さ約 2.2 m、幅約 1.3 m、深さ約 20 ㎝をはかる。南北方向を主軸とする。鉄製品（第 60 図 127）が出土している。

土坑 SK207

調査区西、溝 SD210 と溝 SD202 の間に位置する（第 39・40 図）。出土遺物はない。

掘立柱建物 SA201

調査区北端付近中央に位置する（第 39 図）。規模は、東西２間約 2.7 m×南北１間約２mである（第 56 図）。北側の柱穴２本が、撹乱によって破壊されている。柱穴は径約25㎝、深さ約35㎝をはかる。出土遺物はみられない。

竪穴住居 SB201

調査区西端北で平面プランの一部を検出した（第39図）。深さ約20㎝をはかる（第57図）。周溝が残存している。床面には焼土がみられた。製塩土器が１点出土している（第60図126）。出土遺物が少ないため、所属時期は不明であるが、形態と周辺で検出した類例からみて、弥生終末期と考えられる。

３　第１遺構面

第１遺構面では、溝２条と土坑１基、耕作痕とおぼしき遺構や、近代の柱穴列など若干を検出している（第58図）。時期は近世後期から近代である。土坑・溝・耕作痕は、第１・２層が水田層と考えられるため、水田に付随する灌漑施設と考えられる。柱穴列は、農作業小屋ないし陸軍第43連隊兵営建設後の遺構と考えられる。

溝 SD101

溝 SD101は調査区南端付近を東西方向に展開している（第58図）。

出土遺物は、第60図132～136である。132・133はサヌカイト製の石鏃である。134は陶器底部である。135は土師器甕の口縁部である。136は磨製石庖丁で、粘板岩製である。

溝 SD102

溝 SD102は調査区北端に位置し、東西方向に展開する（第58図）。調査区やや西で、南方に分岐している。その分岐点付近と、分岐点西側に、集石が展開している（第59図）。集石は、人頭大の川原石から形成されている。溝の規模は、幅約1.4ｍ、深さ約0.35ｍをはかる。

出土遺物は、第60図128～131である。128は青磁碗の口縁部片である。129は棒状土錘の破片である。残長約3.8㎝、幅約1.8㎝、厚さ約1.7㎝をはかり、重量は15.93ｇである。穿孔部とともに、上面に紐掛け用と目される沈線を施している。130は青磁碗の底部である。131は柄鏡で、「高砂」、「天下一藤原義信」の銘文と、松竹梅の文様を施している。

木製品が多数出土した。漆椀（図版38下段）、下駄（図版39上段）などが出土したものの、現存しない。

土坑 SK101

土坑 SK101は、調査区北西部に位置する（第58図）。長方形から楕円形を呈する。長さ約4.6ｍ、幅約2.2ｍをはかる。深さは、最深部で0.8ｍである（第61図）。東部分に曲物の痕跡がみられ、井戸であった可能性が高い。

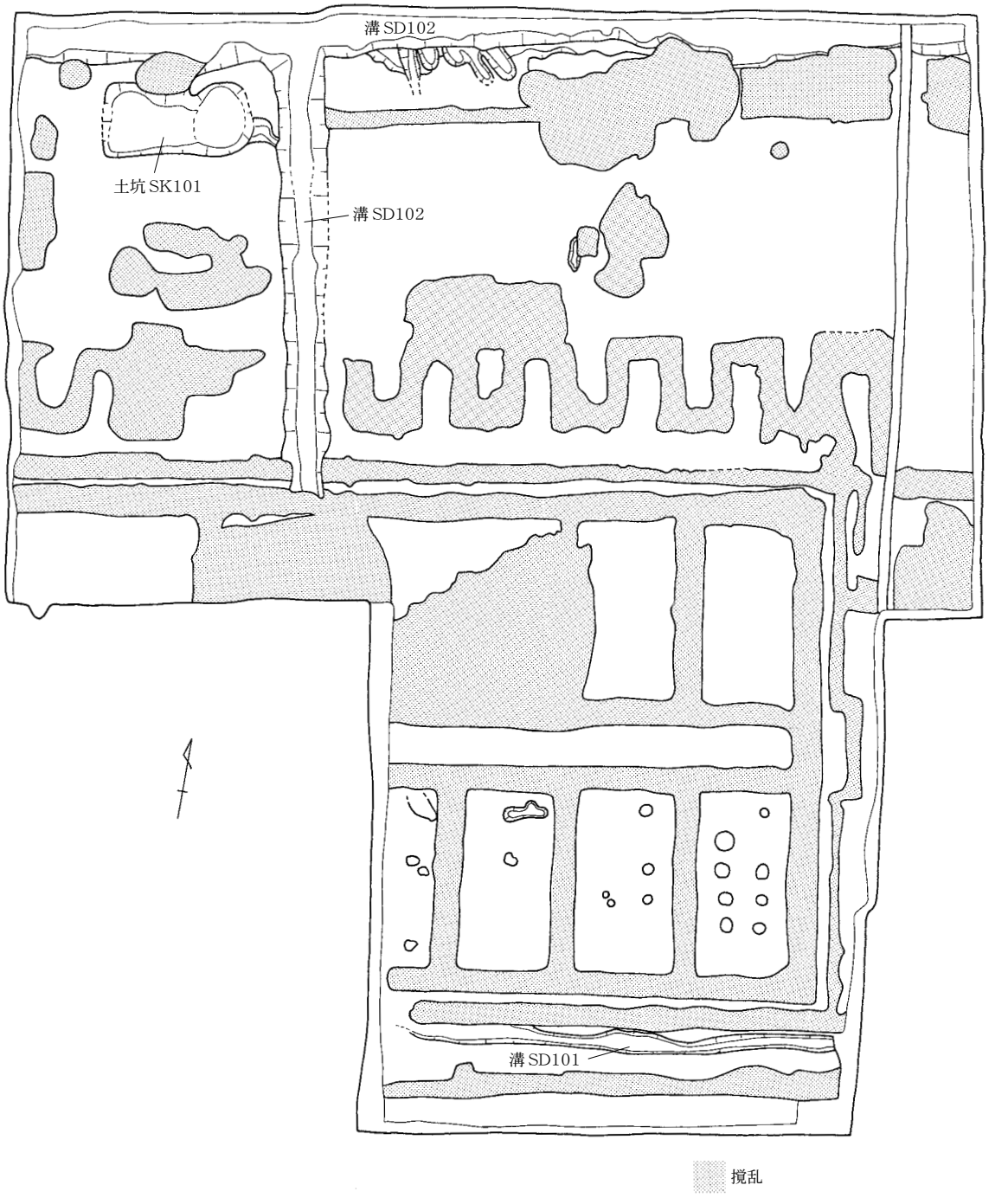
その他の出土遺物は、第63図137～140に図示した。しかし、土坑 SK101にともなう遺物は140のみで、137～139は、本来第３遺構面の溝 SD301（弥生前期末・中期初頭）に属するものであろう。土坑 SK101床面に接するように出土したため、取り上げたものと推察される。

137は弥生前期末の壺である。頸部・胴部にそれぞれ４条の貼り付け凸帯を有する。外面はハケメのちヘラミガキ、内面は口縁部付近のみ横方向のハケメのちヘラミガキを施す。138は弥生中期初頭の細頸壺である。口縁部を欠いている。半裁竹管による沈線・山形文を施す。調整は外面ハケメのちヘラミガキである。139は甕用の蓋である。外面にヘラミガキがみられる。140は小型の磁器皿である。

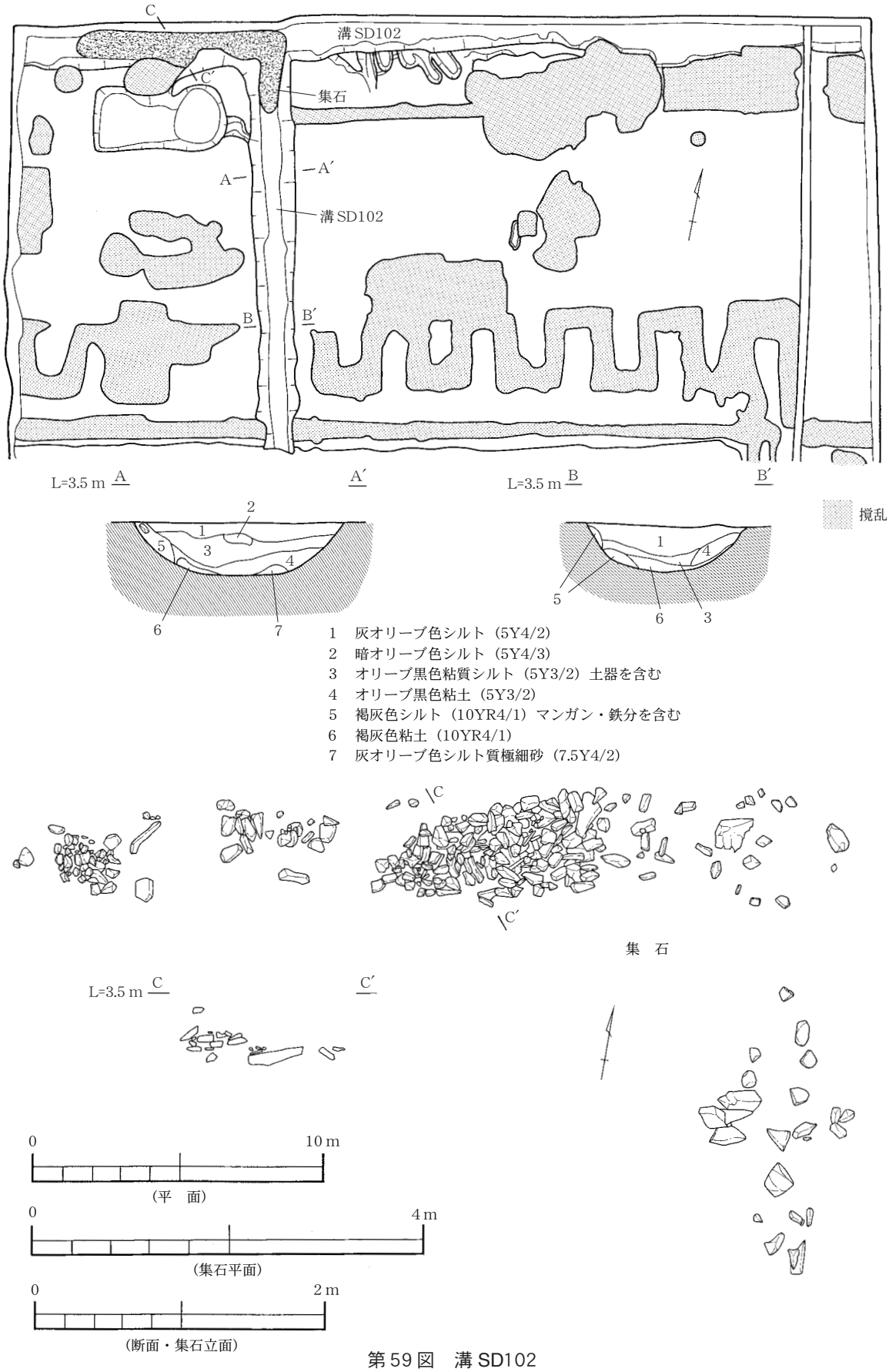
４　遺物包含層等出土遺物

第５層（弥生前期包含層）出土遺物

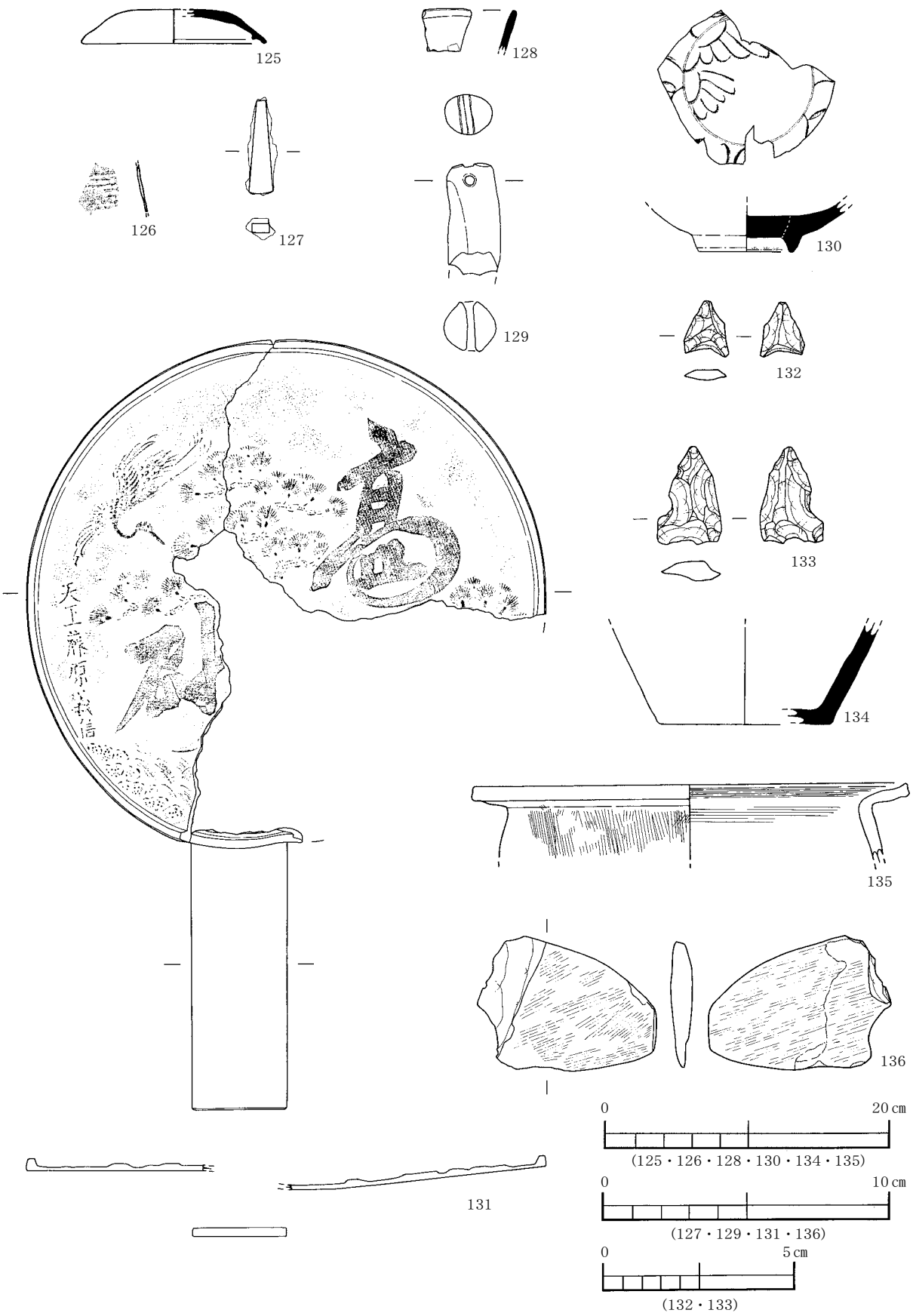
弥生前期中葉から後葉にかけて堆積した洪水砂を起源とする第５層からは、弥生前期の遺物が多量に



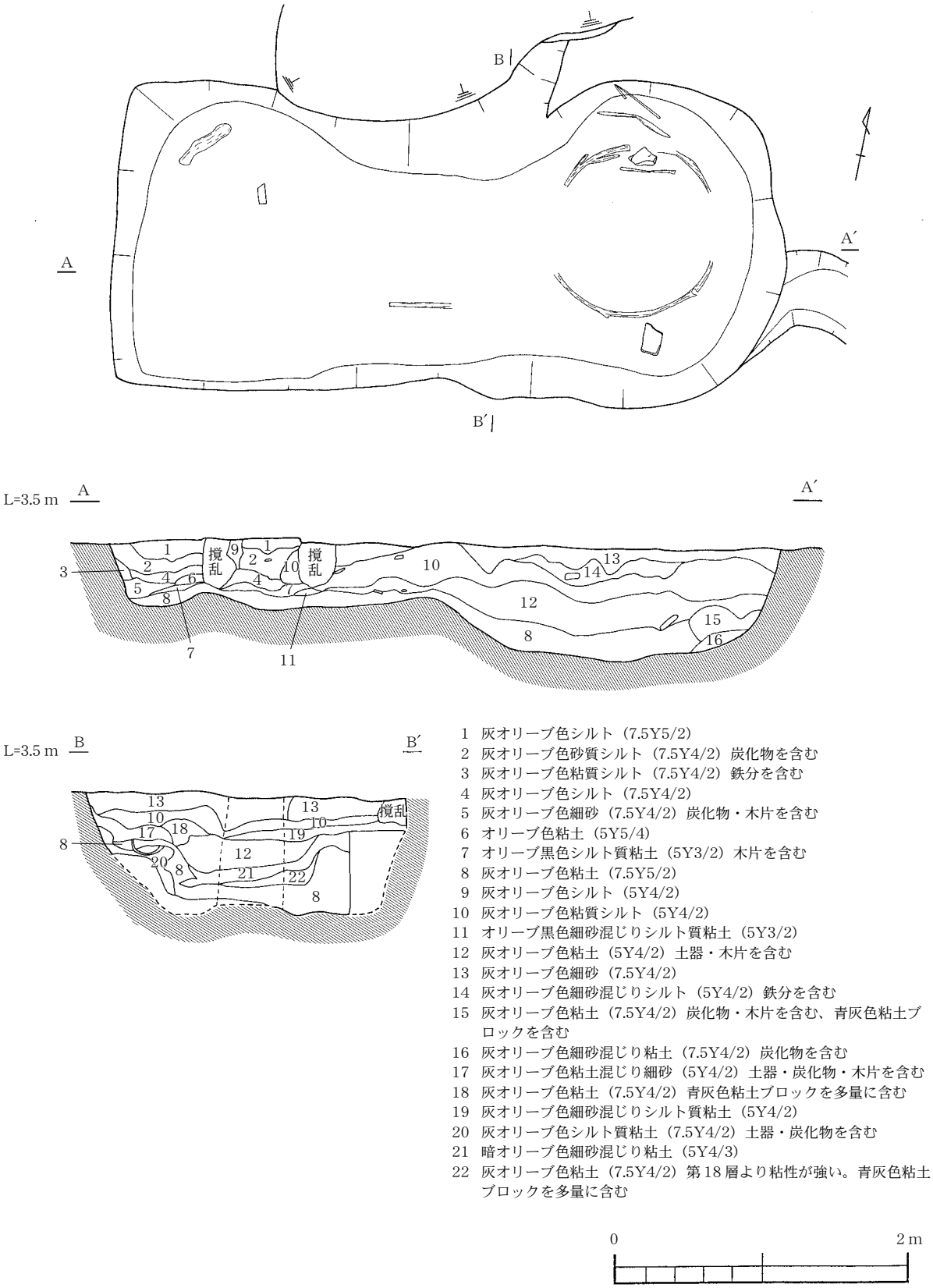
第 58 図　第１遺構面検出遺構


C
溝 SD102
C′
集石
A
A′
溝 SD102
B
B′
L=3.5 m A
A′
L=3.5 m B
B′
撹乱
1
2
3
4
5
6
7
1　灰オリーブ色シルト（5Y4/2）
2　暗オリーブ色シルト（5Y4/3）
3　オリーブ黒色粘質シルト（5Y3/2）土器を含む
4　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）
5　褐灰色シルト（10YR4/1）マンガン・鉄分を含む
6　褐灰色粘土（10YR4/1）
7　灰オリーブ色シルト質極細砂（7.5Y4/2）
C
C′
集　石
L=3.5 m C
C′
0
10 m
（平　面）
0
4 m
（集石平面）
0
2 m
（断面・集石立面）

第 59 図　溝 SD102



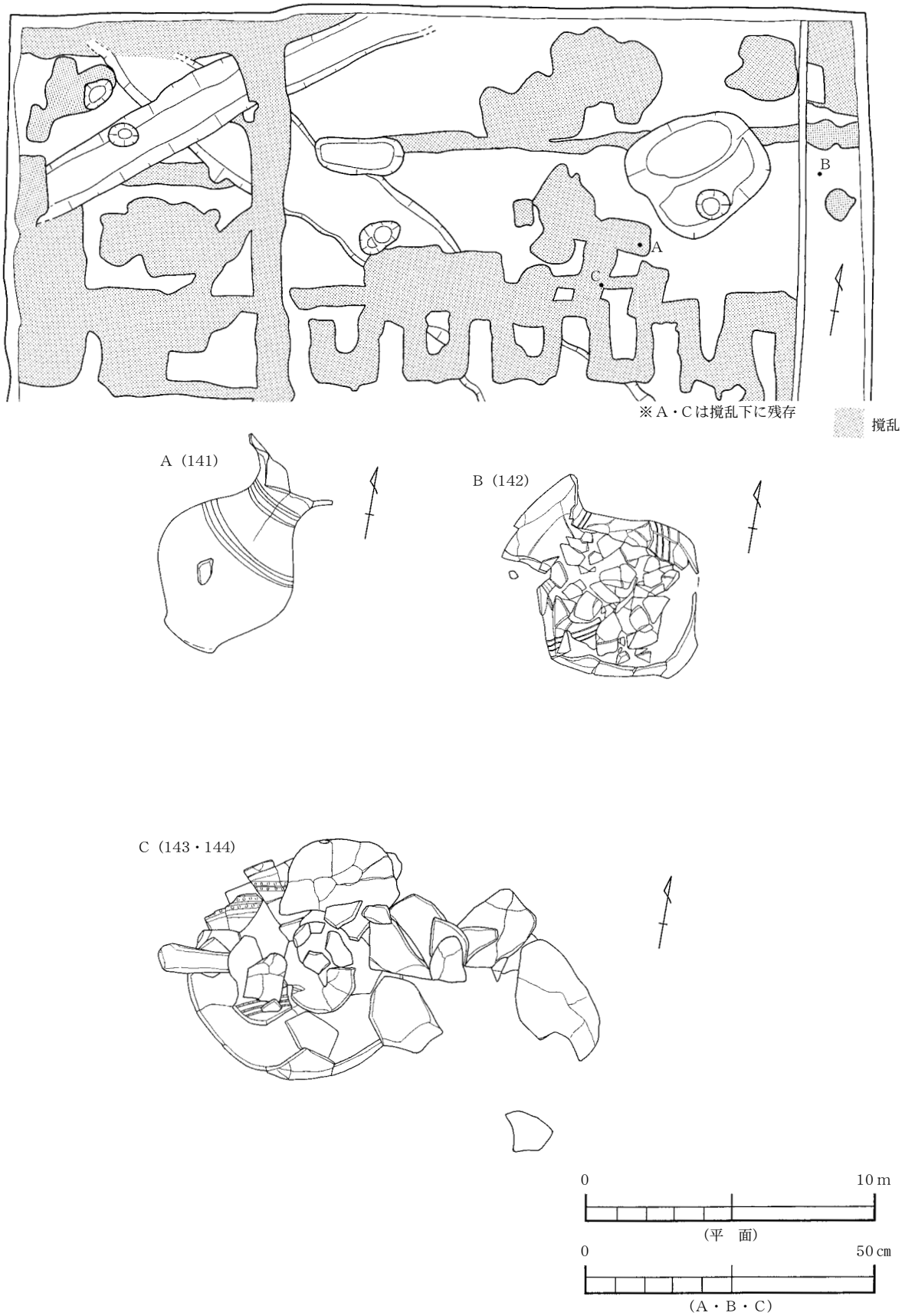
第60図　溝SD202（125）、竪穴住居SB201（126）、土坑SK206（127）、溝SD102（128～131）・SD101（132～136）出土遺物



1　灰オリーブ色シルト（7.5Y5/2）
2　灰オリーブ色砂質シルト（7.5Y4/2）炭化物を含む
3　灰オリーブ色粘質シルト（7.5Y4/2）鉄分を含む
4　灰オリーブ色シルト（7.5Y4/2）
5　灰オリーブ色細砂（7.5Y4/2）炭化物・木片を含む
6　オリーブ色粘土（5Y5/4）
7　オリーブ黒色シルト質粘土（5Y3/2）木片を含む
8　灰オリーブ色粘土（7.5Y5/2）
9　灰オリーブ色シルト（5Y4/2）
10　灰オリーブ色粘質シルト（5Y4/2）
11　オリーブ黒色細砂混じりシルト質粘土（5Y3/2）
12　灰オリーブ色粘土（5Y4/2）土器・木片を含む
13　灰オリーブ色細砂（7.5Y4/2）
14　灰オリーブ色細砂混じりシルト（5Y4/2）鉄分を含む
15　灰オリーブ色粘土（7.5Y4/2）炭化物・木片を含む、青灰色粘土ブロックを含む
16　灰オリーブ色細砂混じり粘土（7.5Y4/2）炭化物を含む
17　灰オリーブ色粘土混じり細砂（5Y4/2）土器・炭化物・木片を含む
18　灰オリーブ色粘土（7.5Y4/2）青灰色粘土ブロックを多量に含む
19　灰オリーブ色細砂混じりシルト質粘土（5Y4/2）
20　灰オリーブ色シルト質粘土（7.5Y4/2）土器・炭化物を含む
21　暗オリーブ色細砂混じり粘土（5Y4/3）
22　灰オリーブ色粘土（7.5Y4/2）第18層より粘性が強い。青灰色粘土ブロックを多量に含む

0　2 m

第61図　土坑 SK101



第62図　第５層（弥生前期包含層）遺物出土状況

出土した（第63図141～第66図152）。本来は、洪水砂が堆積した後、短期間遺構面が形成された時に掘削された遺構にともなうものと考えられる。地表面として機能した期間が短かったため、土壌化が進行する前に埋没し、遺構埋土を見分けることができなかったものと考えられる。

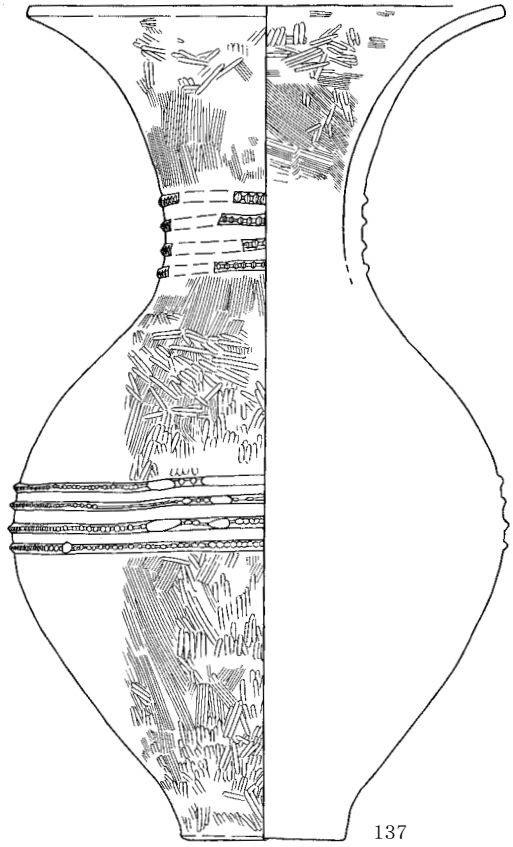
第62図A～Cは、調査区東から出土した完形の土器である（第62図）。Aに焼成後の穿孔がみられることと、Cは土器が組み合って合せ口状を呈していることから、土器棺の可能性もある。

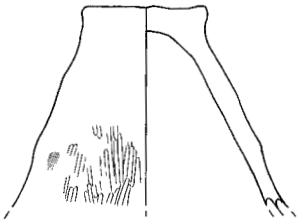
Aは、弥生前期中葉の壺である（第63図141）頸部に削り出し凸帯がみられ、その上に３条の沈線を施す。胴部に焼成後の穿孔がみられる。外面はハケメのちヘラミガキを施し、内面は口縁部付近のみハケメがみられる。Bは、弥生前期中葉の壺である（第63図142）。口頸部界に３条の沈線を施し、胴部に３条の沈線を施す。外面にハケメのちヘラミガキを施し、内面の口縁部付近に、ハケメのちヘラミガキを施す。Cは２個体からなっている（第64図143・144）。143は壺で、頸部に３条の凸帯を貼り付け、その上下に断続的な竹管文を施す。胴部には２条１組の沈線を３組施し、それぞれの下に、断続的な竹管文を施す。外面にハケメを施す。144は鉢の底部で、外面にハケメ調整がみられる。いずれも弥生前期末であろう。

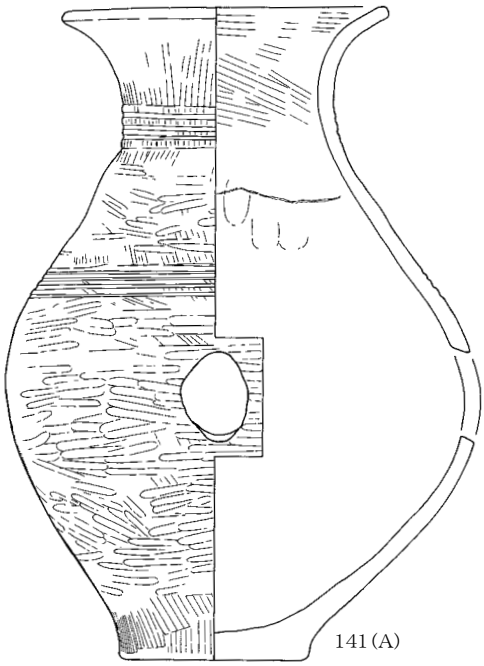
第65図145は、小型の壺である。頸部に３条の沈線を施す。146は無文の鉢である。小型で、内外面ともにヘラミガキがみられる。147も鉢の口縁部片である。穿孔が２か所認められる。148は土製紡錘車である。径4.7㎝、厚さ2.1㎝をはかり、重量は41.23ｇである。149はサヌカイト製のスクレイパーである。150はサヌカイト製の打製石庖丁である。長さ10.1㎝、幅4.3㎝、厚さ1.2㎝をはかる。重量は69.74ｇである。151は磨製石庖丁である。穿孔はなく、両側縁に抉りが認められる。長さ15.9㎝、幅６㎝、厚さ0.7㎝をはかる。重量は144.53ｇをはかる。藍閃石－塩基性片岩製である。第66図152は敲石であるが、柱状片刃石斧の素材である可能性もある。長さ25㎝、幅5.1㎝、厚さ4.1㎝をはかり、重量は819.5ｇである。川原石を素材とし、石材は藍閃石－塩基性片岩製である。

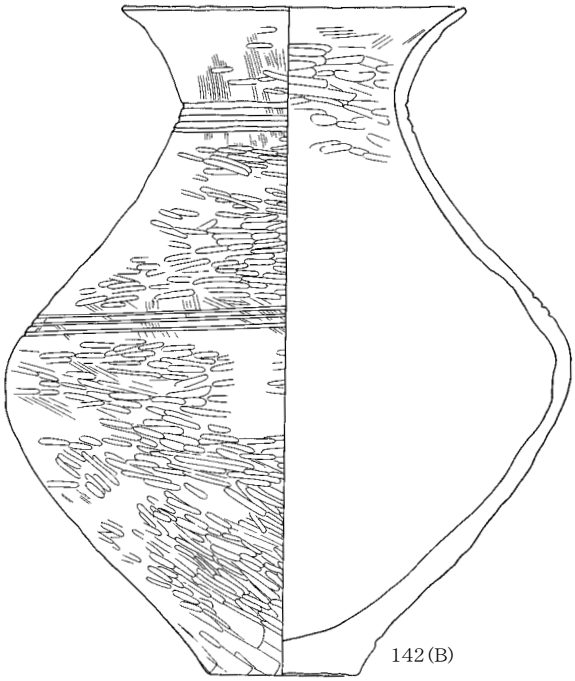
その他の遺物

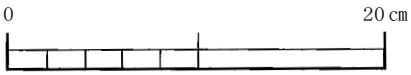
第66図153は土師器高杯の脚部である。古墳時代中期のものであろう。154はサヌカイト製石鏃の未製品であろう。155はサヌカイト製のスクレイパーである。156は近世から近代の土製品であろう。157は碧玉製の管玉である。重量は0.46ｇである。第６次調査青藍会館地点出土の弥生前期の墓域にともなう管玉（北條編1998）と、色調が酷似している。本来弥生前期のものである可能性が高い。158・159は碁石である。160は洪武通宝、161は寛永通宝である。







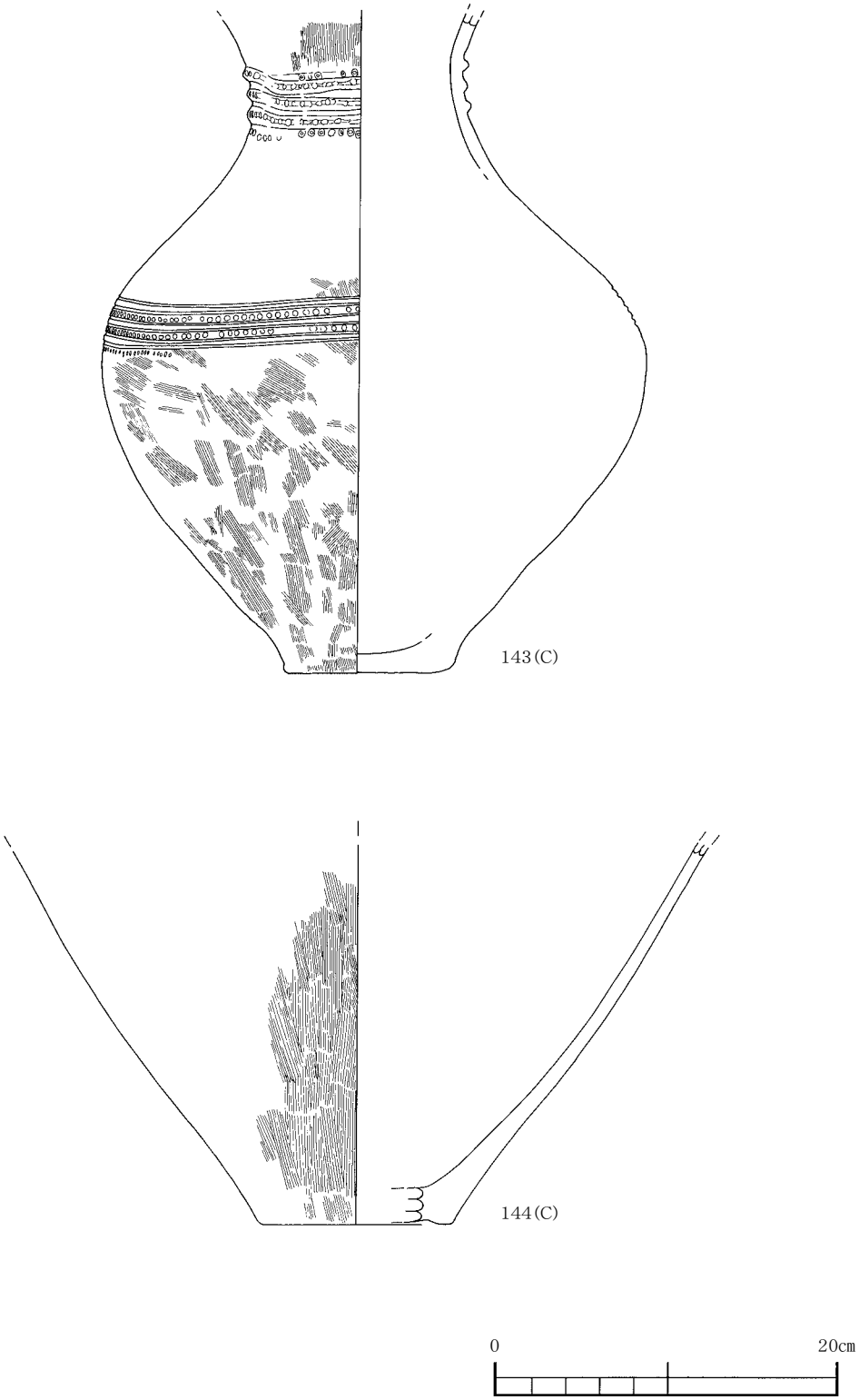




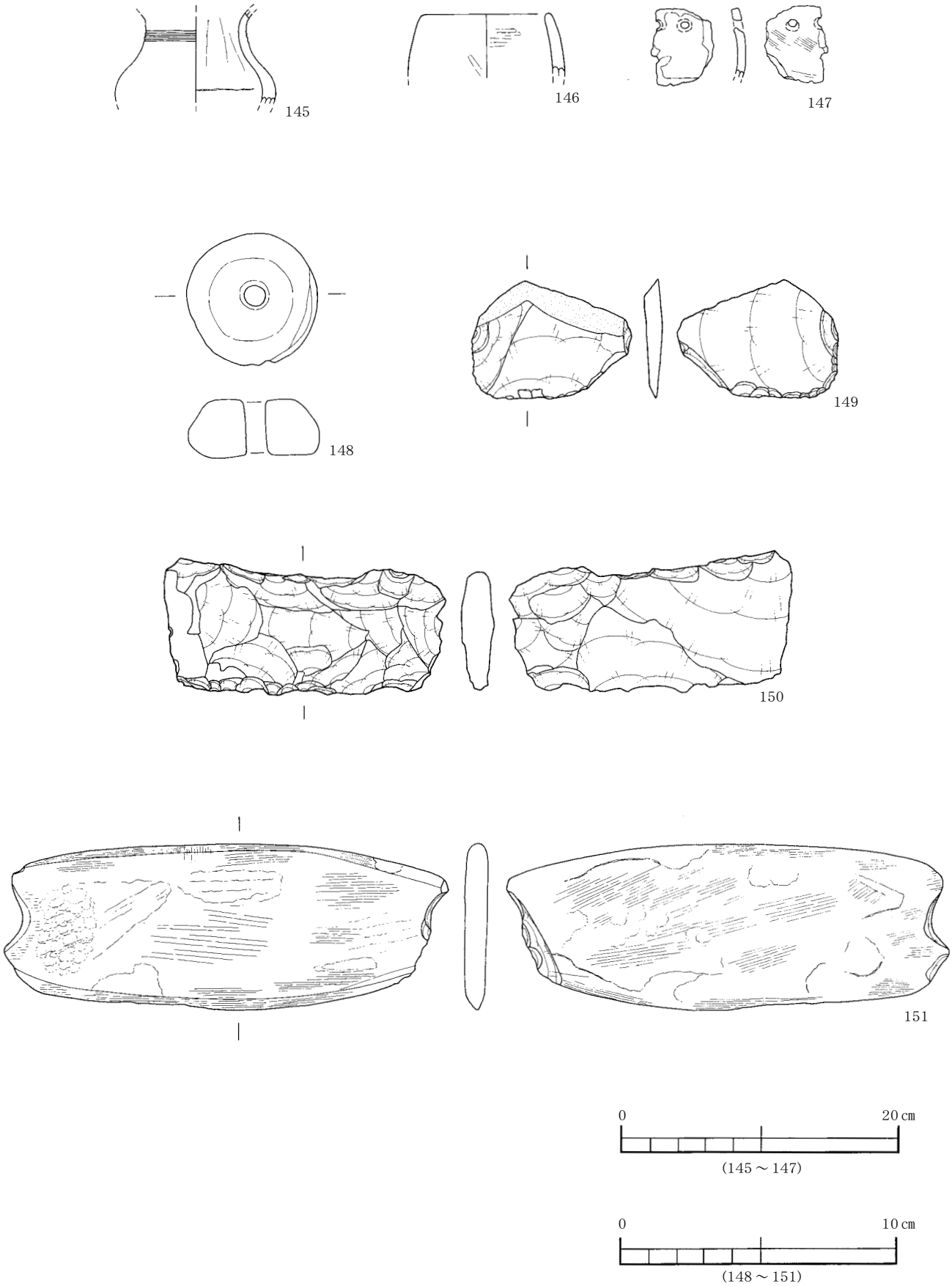
(137～139・141・142)

(140)

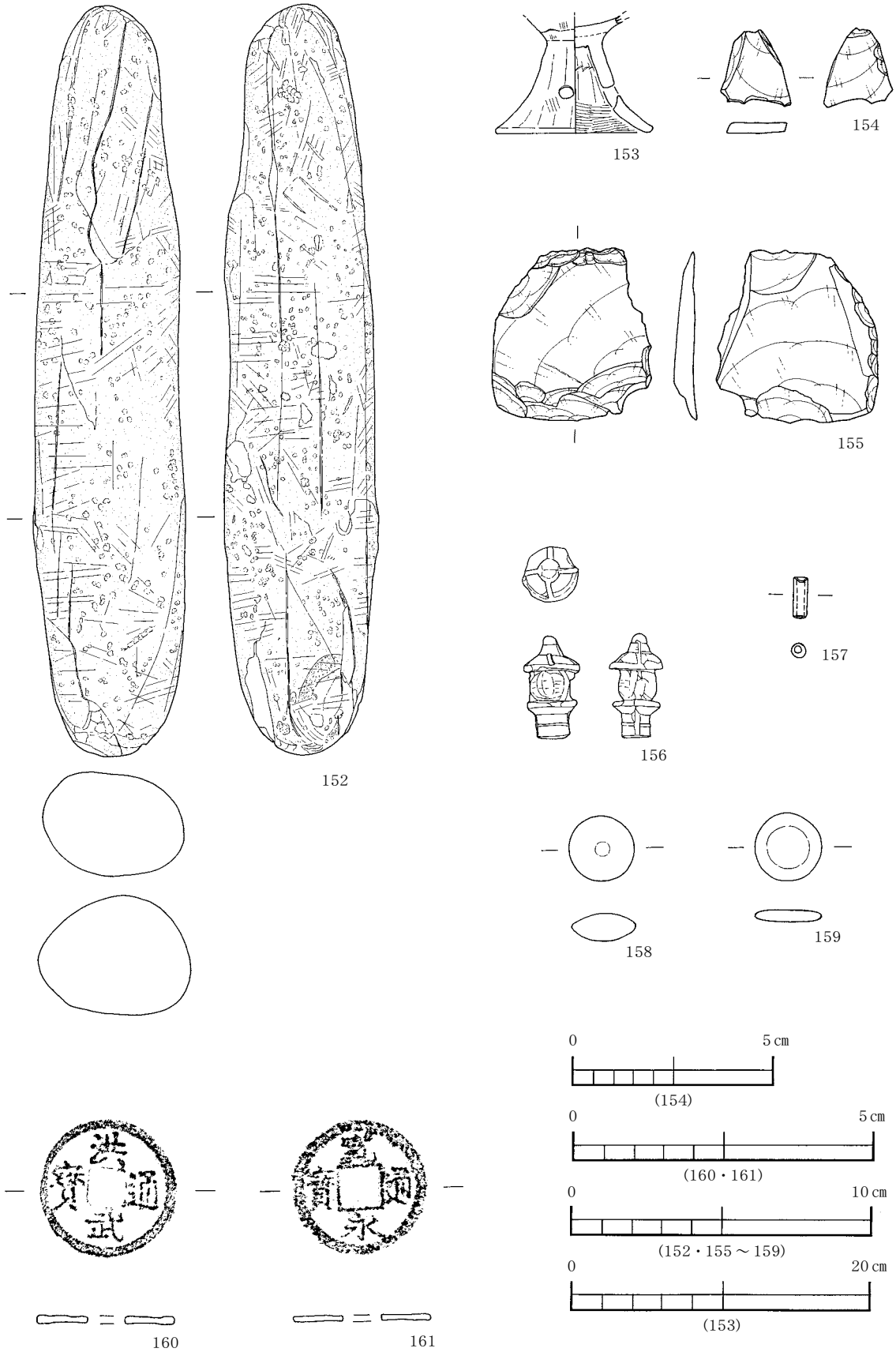
第63図　土坑 SK101（137～140）、第５層（弥生前期包含層：141・142）出土遺物１



第 64 図　第５層（弥生前期包含層）出土遺物２



第 65 図　第５層（弥生前期包含層）出土遺物３



第66図　第５層（弥生前期包含層：152）出土遺物４、その他（153～161）出土遺物

第３章　小　　結

医療技術短期大学地点では、遺構が良好な状況で残存し、多量の遺物が出土している。

第３遺構面では、弥生前期中葉から弥生前期末の良好な一括資料が出土している。なかでも、土坑SK302・SK303からは良好な土器が多量に出土した。また、壺の出土が目立つこと、土坑SK302からは打製石剣が出土していることなどから土坑墓の可能性もある。第５層からは、胴部を穿孔した完形の壺や、合せ口状の壺・鉢が組み合って出土しており、当時の墓域が展開した可能性もある。遺物包含層より出土した碧玉製の管玉（第66図157）も、第６次調査青藍会館地点（北條編1998）出土の管玉に酷似しており、弥生前期のものである可能性が高い。弥生前期中葉までの墓域は、蔵本団地南西端の第６次調査青藍会館地点（北條編1998）で検出されているが、弥生前期末の墓域は未発見である。当時の集落景観を復原する上でも、注意すべき類例である。

第２遺構面でも多くの遺構を検出している。溝SD207は、弥生中期初頭から中葉を中心とする遺構である。庄遺跡周辺では、この時期の遺構の検出例は極めて少ない。弥生前期末・中期初頭の集落解体後、弥生中期後葉の集落再編まで、どのような展開をみせたのかは懸案となっており、貴重な資料となった。

溝SD209においても、弥生後期中葉の良好な資料をえることができた。なかでも、第５層（弥生前期包含層）からの混入とは思われるが、流紋岩製の磨製石庖丁は、本地域としては貴重な資料である。

溝SD205からは、多量の土器とともに、焼土や勾玉形石製品が出土した。５世紀後葉の祭祀遺構と考えられよう。

文　献

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

北條芳隆編1998『庄・蔵本遺跡～徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査～』徳島大学埋蔵文化財調査報告書１　徳島大学埋蔵文化財調査室

第３部
弓道場建設に伴う立会調査

第１章　概　　要

弓道場建設に伴う立会調査は、実施時期についての資料の所在がわからないため正確ではないが、諸々の資料から1983年３月におこなったものと推察される。弓道場の位置は、課外活動共用施設地点のすぐ西側、蔵本団地西端中央部付近に相当する（第１図３の西隣）。

立会は、掘削をともなった弓道場の的場についておこなった（第67図上）。

第２章　調査の成果

第１節　基本層序

基本層序の様相は、ほかの調査地点と同じである（第67図下）。第１（表土）・２（大・巨礫層）層は近代以降の造成土である。第３層（オリーブ褐色シルト層）は近代に陸軍第43連隊が建設される前の水田層であろう。グライ化が進行しており、排水不良気味の水田であったと考えられる。第４層（緑灰色粘土層）は、近世の水田層である。第３層と同様グライ化している。第５層（褐灰色シルト層）は、中世から近世の包含層である。第６層（黒褐色粘質シルト層）は、弥生前期末・中期初頭から中世の遺物を含む、長期間地表面として機能したと考えられる土壌化層である。第７層（暗青灰色シルト質極細砂層）は遺構埋土である。第８層（黄褐色シルト層）は、弥生前期中葉から後葉の洪水砂起源層である。第９層（暗褐灰色粘土層）は、弥生前期中葉ごろであろうか。第10層（暗褐色粘土層）は、縄文晩期末から弥生前期前葉の土壌化層である。

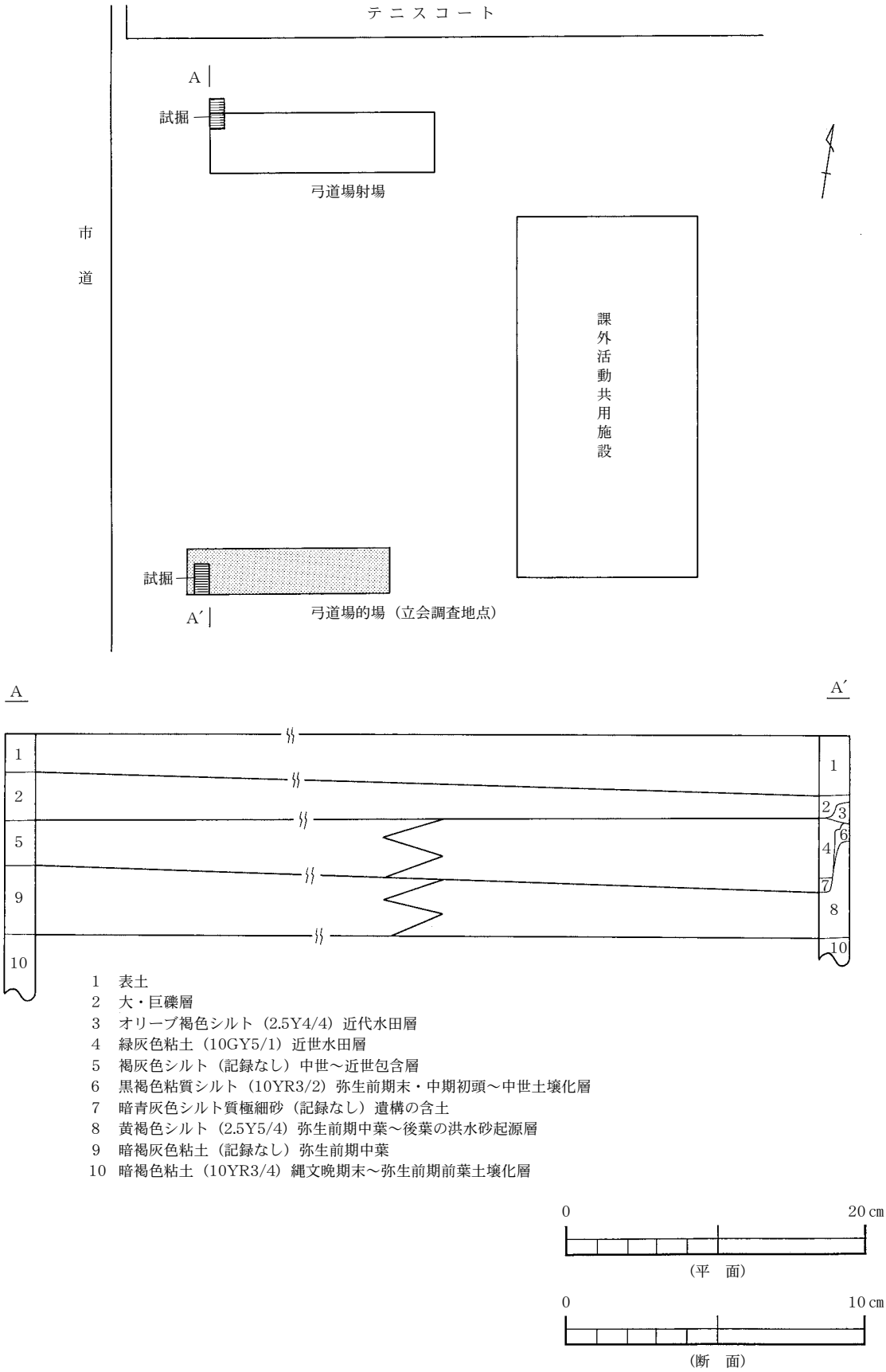
第２節　出土遺物

遺物は少量出土している（第68図）。いずれも小片で、時期は多様である。

１は弥生前期前葉から中葉の壺口縁部である。内面に細い工具による沈線３条を施す。２は弥生前期末の甕である。逆「L」字状口縁を呈するが、口縁端部を欠いている。胴部上半に９条の沈線を施す。３は弥生中期初頭の甕である。無文で、外面はハケメ調整である。４は弥生前期の壺の底部である。５は弥生後期後葉の壺の口縁部である。口縁端部に円形浮文を施す。６は弥生土器の壺の口縁端部片である。時期の詳細は不明。７も弥生土器の壺ないし鉢の口縁部片である。時期の詳細は不明。８は近世の陶器の底部片である。９は弥生土器の甕の口縁部片である。時期の詳細は不明。10は弥生後期の甕の底部である。11は、弥生後期の蓋であろう。底部を横断する穿孔が認められる。12は須恵器杯身である。TK10様式であろう。

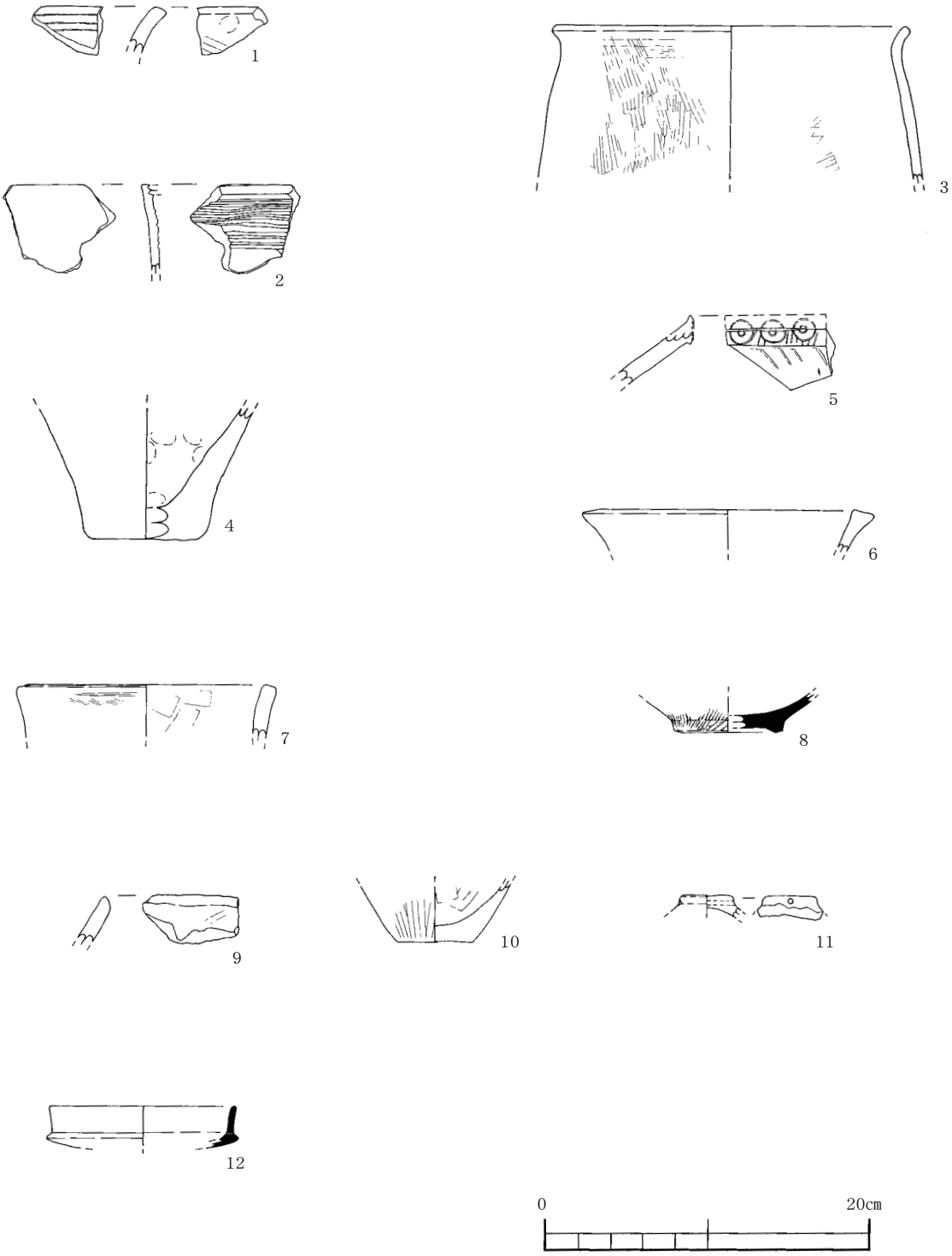
第３章　小　　結

弓道場立会調査の出土資料は少量である。しかし、蔵本団地西端においても、他の地点と同様の層位学的所見が確認できる。遺物包含層も良好に残存しており、開発時に注意を要することは間違いない。



1　表土
2　大・巨礫層
3　オリーブ褐色シルト（2.5Y4/4）近代水田層
4　緑灰色粘土（10GY5/1）近世水田層
5　褐灰色シルト（記録なし）中世～近世包含層
6　黒褐色粘質シルト（10YR3/2）弥生前期末・中期初頭～中世土壌化層
7　暗青灰色シルト質極細砂（記録なし）遺構の含土
8　黄褐色シルト（2.5Y5/4）弥生前期中葉～後葉の洪水砂起源層
9　暗褐灰色粘土（記録なし）弥生前期中葉
10　暗褐色粘土（10YR3/4）縄文晩期末～弥生前期前葉土壌化層

第67図　弓道場立会調査



第 68 図　弓道場立会調査出土遺物

ま と め

今回報告した調査は、1980年代の第３次課外活同共用施設地点および第７次調査医療技術短期大学地点である。いずれも庄遺跡の調査歴において、貴重な資料を提供している。

課外活動共用施設は、蔵本団地でも西端の地点であったが、遺構・遺物ともに豊富な資料が出土した。

第３遺構面で検出した不明遺構SX301や土坑SK301、第２遺構面検出の土坑SK201は、本調査地の東側に隣接する体育館地点（第１図２、徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室2005）や南東側の体育館器具庫地点（第１図１、徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室2010）において検出した、弥生前期末から弥生中期初頭の貯蔵穴とみられる土坑群の一部であると考えられよう。この調査区の南方では、同時期の大規模な開析流路が南西から北東方向に流れている。したがって、単純に眉山の尾根筋から微高地がのびていたのではなく、調査地付近は、鮎喰川分流の自然堤防ないし中洲性微高地が展開し、生活域として活用されたものと推察される。弥生前期中葉から末・中期初頭にかけて、度重なる洪水砂の堆積によって、黄褐色細砂層からなる微高地は増大の一途をたどる。そこに前期初頭からの水利網を活用し、最大限に集住化した集落像をイメージすることができる。一方微高地の拡大によって、水田適地は失われていったのである。その後、鮎喰川の分流が埋積し、既存の水利網が機能しなくなるとともに、集落は解体し、散住化するようになる。

第２遺構面では、弥生終末期と考えられる竪穴住居SB201を検出している。東に隣接する体育館地点でも、当該期の住居跡２棟を検出している。体育館地点では、斜縁鏡の破鏡も出土しており、周辺一帯が弥生終末期の有力な集落域であった可能性が高い。また、課外活動共用施設の南東方面のゲノム機能研究センター地点（第１図16）、同増築地点（第１図18）では、同時代の鍛冶遺構を検出しており、関連をもつ可能性がある。ゲノム機能研究センター増築地点から動物実験施設地点（第１図５、徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室2008）、医学系総合実験研究棟地点（第１図21）にかけて、同時期の開析流路が蛇行して展開しており（国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室2010）、この流路をはさんで東西に集落が展開していたことがわかる。

また、体育館地点において検出した、10世紀後葉の水路201と13世紀初頭の東西大溝202の上流部分である、溝SD201と流路SR201をみいだすことができた。ただし、飛鳥時代に属する東西大溝201の上流部分は検出できていない。東西大溝201の上流部分は、溝SD201ないし流路SR201によって壊されている可能性が考えられよう。

溝SD201からは、瓦器椀７点（うち和泉型瓦器椀６点）と、白磁碗、青磁皿各１点（いずれも小片）が出土している。12世紀末から13世紀前葉の所産とみられる。当該期の畿内地域との直接的な交流を示す資料は、現時点でも県内ではほとんどみつかっていない。これらに対応する集落域は、いまのところ不明であるが、上記の出土品は小片で残りがあまりよくないところからみて、溝SD201の上流側、蔵本団地外西側のそう遠くない地点に、中島田遺跡（福家編1989）形成前の拠点的な集落が存在する可能性が考えられるのである。

体育館地点では、近世から近代の東西大溝101を検出した。この上流部分は、溝SD101に相当するものと考えられる。

医療技術短期大学地点でも、多様な遺構・遺物の出土がみられた。

第３遺構面では、弥生前期中葉から弥生前期末の良好な一括資料が出土している。なかでも、土坑SK302・SK303からは土器が多量に出土した。また、壺の出土が目立つこと、SK302からは打製石剣が

出土していることなどから土坑墓の可能性も考えられよう。第５層からは、胴部を穿孔した完形の壺や、合せ口状の壺・鉢が組み合って出土しており、当時の墓域が展開した可能性もある。遺物包含層出土の碧玉製管玉（第66図157）は、青藍会館出土（北條編1998）のものと色調が酷似しており、弥生前期に属する可能性が高く、墓域との関連性を指摘できる。弥生前期中葉までの墓域は、蔵本団地南西端の青藍会館地点（第１図６、北條編1998）で検出されているが、弥生前期末の墓域は未発見である。当時の集落景観を復原する上で、今後も注意すべき類例であろう。

弥生前期末・中期初頭の遺構は、体育館器具庫地点（第１図１）、体育館地点（第１図２）、課外活動共用施設地点を中心とする一帯と、開析流路をはさんだ南東側の医療技術短期大学地点（第１図７）、酵素科学研究センター地点（第１図10、北條編1998）、共同溝地点（第１図15）、西病棟地点（第１図20）から東病棟地点（第１図13）にまたがる広範な範囲に展開していたことがわかっており、相当な規模の集落を形成していたものと推察される。

第２遺構面でも多くの遺構を検出している。溝SD207は、弥生中期初頭から中葉を中心とする。庄遺跡周辺では、この時期の遺構の検出例は極めて少ない。弥生前期末・中期初頭の集落解体後、弥生中期後葉の集落再編まで、どのような展開をみせたのかは懸案となっており、貴重な資料となった。この下流部分を、西病棟地点（第１図20）において検出している。

溝SD209においても、弥生後期中葉の良好な資料をえることができた。また、第５層（弥生前期包含層）からの混入とみられるが、当地方としては珍しい、流紋岩性の磨製石庖丁（扁平片刃石斧に再加工途上）が出土している。

５世紀中葉の溝SD205からは、多量の土師器･須恵器が密集して出土した。焼土や勾玉形石製品も出土しており、祭祀関連の遺構と考えられる。この溝の上流部分は、ゲノム機能研究センター地点（第１図16)、下流部分は西病棟地点（第１図20）において検出している。

いずれの調査も、弥生前期中葉以降の微高地を中心とする生活遺構の実態を知る上で貴重な成果となった。

既報告の資料からえられた課題とともに、今後の考察編刊行に期待したい。

文　献

徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室2005『庄（庄・蔵本）遺跡－徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書－』

徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室2008『庄（庄・蔵本）遺跡－徳島大学蔵本団地動物実験施設建設に伴う発掘調査報告書－』

徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室2010『庄（庄・蔵本）遺跡－徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書、体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺－』

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室2010『年報』２

福家清司編1989『県道徳島鴨島線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　徳島市中島田遺跡・南島田遺跡』徳島県教育委員会

北條芳隆編1998『庄・蔵本遺跡－徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査－』徳島大学埋蔵文化財調査報告書１　徳島大学埋蔵文化財調査室

遺物観察表

第１表　課外活動共用施設地点　土器・陶磁器遺物観察表

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	調査時の遺構・層位	報告書の遺構番号	器種	型式または時期	口径cm	底径cm	器高cm	色調		調整・文様		備考
									(復元)	(復元)	(復元)	表	裏	外面	内面	
8	1	10	55	Ｐ－55	ＳＸ01	不明遺構ＳＸ301	弥生土器　甕	弥生中期初頭	(21.0)	－	－	7.5ＹＲ6/4	7.5ＹＲ6/4	口縁端部刻目、胴部ハケメ	口縁部ハケメのちナデ、胴部板ナデ･ユビオサエ	
8	2	10	51	Ｐ－51	ＳＸ01	不明遺構ＳＸ301	弥生土器　甕	弥生中期初頭	(15.5)	5.3	19.4	7.5ＹＲ6/4	7.5ＹＲ7/6	口縁端部刻目、口縁部ハケメのちヨコナデ、胴部上半ハケメ、下半ハケメのちヘラミガキ・ナデ、底部ハケメのちナデ	口縁部ハケメのちナデ、胴部上半ハケメ･ユビオサエ、下半ハケメのちナデ	
8	3	10	50	Ｐ－50	ＳＸ01	不明遺構ＳＸ301	弥生土器　甕	弥生中期初頭	(15.8)	－	－	7.5ＹＲ6/6	7.5ＹＲ6/6	口縁端部刻目、胴部タタキのちハケメ	口縁部ハケメのちナデ、胴部ナデ	
8	4	10	53	Ｐ－53	ＳＸ01	不明遺構ＳＸ301	弥生土器　甕	弥生中期初頭	(22.8)	－	－	7.5ＹＲ6/4	7.5ＹＲ6/4	口縁端部刻目、胴部ハケメのちナデ	口縁部ハケメのちナデ、胴部ナデ	
8	5	10	52	Ｐ－52	ＳＸ01	不明遺構ＳＸ301	弥生土器　甕	弥生中期初頭	(17.0)	－	－	10ＹＲ6/3	10ＹＲ6/3	口縁部ハケメのちナデ、胴部ハケメ	ハケメのちナデ	
8	6	10	57	Ｐ－57	ＳＸ01	不明遺構ＳＸ301	弥生土器　甕	弥生中期初頭	(17.8)	－	－	7.5ＹＲ6/4	7.5ＹＲ6/4	口縁部板ナデ、胴部ハケメ	口縁部～胴部板ナデ・わずかにユビオサエ	内面に接合痕
8	7	10	56	Ｐ－56	ＳＸ01	不明遺構ＳＸ301	土師器　甕	５Ｃ中葉	(18.5)	－	－	7.5ＹＲ7/4	7.5ＹＲ7/4	口縁部ナデ、胴部ハケメ	口縁部ハケメのちナデ、胴部板ナデ･ユビオサエ	内外面に接合痕
8	8	11	54	Ｐ－54	ＳＸ01	不明遺構ＳＸ301	瓦器　椀	13Ｃ前葉	(14.0)	(5.8)	4.4	Ｎ6/	Ｎ7/	ナデ	ナデ	
11	10	11	28	Ｐ－28	ＳＤ03	溝ＳＤ201	土師器　甕	古墳時代前期	(24.8)	－	－	5ＹＲ6/6	5ＹＲ6/6	ヨコナデ	ヨコナデ･ナデ	
11	11	11	46	Ｐ－46	ＳＤ03	溝ＳＤ201	土師器　甕		(32.4)	－	－	10ＹＲ6/2	10ＹＲ6/3	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	ヨコナデ	内外面風化
11	12	11	29	Ｐ－29	ＳＤ03	溝ＳＤ201	弥生土器　甕	弥生後期後葉	(14.0)	－	－	5ＹＲ5/4	5ＹＲ5/4	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ･胴部ナデ	内外面風化
11	13	11	47	Ｐ－47	ＳＤ03	溝ＳＤ201	土師器　甕		(37.0)	－	－	Ｎ4/	Ｎ4/	口縁端部ヨコナデ、口縁部ヘラケズリ痕跡･ナデ	口縁部上位ナデ、下位板ナデ	
11	14	－	30	－	ＳＤ03　北岸	溝ＳＤ201	弥生土器　鉢	弥生後期後葉	(24.1)	－	－	7.5ＹＲ6/6	5Ｙ4/1	詳細不明	口縁部ヨコナデ･胴部ナデ	内外面風化
11	15	－	37	Ｐ－37	ＳＤ03　下部	溝ＳＤ201	弥生土器　鉢	弥生後期後葉	(25.9)	－	－	2.5Ｙ7/2	2.5Ｙ7/2	ヨコナデ	ヨコナデ	
11	16	－	31	－	ＳＤ03	溝ＳＤ201	高杯(杯部)	弥生後期後葉	－	－	－	10ＹＲ6/3	7.5ＹＲ6/4	詳細不明	ヘラミガキ	外面風化
11	17	11	110	Ｐ－110	ＳＤ03　試掘溝	溝ＳＤ201	白磁　碗		(13.1)	－	－			施釉	施釉	
11	18	11	38	Ｐ－38	ＳＤ03	溝ＳＤ201	瓦器　椀	12Ｃ末～13Ｃ初頭	(14.0)	(6.5)	5.2	5Ｙ6/1	5Ｙ6/1	ヨコナデ･ナデ	ヨコナデ･ナデ	
11	19	11	40	Ｐ－40	ＳＤ03	溝ＳＤ201	瓦器　椀	12Ｃ末～13Ｃ初頭	(16.0)	(5.4)	5.0	Ｎ3/	Ｎ3/	口縁部ヨコナデ、胴部ナデのちヘラミガキ、底部ナデ	口縁部ナデ、胴部ナデのちヘラミガキ	
11	20	11	39	Ｐ－39	ＳＤ03	溝ＳＤ201	瓦器　椀	12Ｃ末～13Ｃ初頭	(15.5)	(5.2)	5.0～5.5	Ｎ3/	5Ｙ5/1	口縁部ヨコナデ、胴部ナデのちヘラミガキ、底部ナデ	口縁部ナデ、胴部ヘラミガキ･ナデ	
11	21	11	45	Ｐ－45	ＳＤ03	溝ＳＤ201	瓦器　椀	12Ｃ末～13Ｃ初頭	－	－	－	Ｎ4/	Ｎ4/	胴部ヘラケズリ痕・ハケ・ナデ、底部ヨコナデ	ナデのちヘラミガキ	
11	22	11	42	Ｐ－42	ＳＤ03	溝ＳＤ201	瓦器　椀	12Ｃ末～13Ｃ初頭	(16.2)	－	－	5Ｙ5/1	5Ｙ5/1	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ･ユビオサエのち一部ヘラミガキ	ナデのちヘラミガキ	
11	23	11	41	Ｐ－41	ＳＤ03	溝ＳＤ201	瓦器　椀	12Ｃ末～13Ｃ初頭	(13.4)	－	－	Ｎ5/	Ｎ5/	口縁部ヨコナデ、胴部ナデのちヘラミガキ、底部ナデ	ナデのちヘラミガキ	
11	24	11	44	Ｐ－44	ＳＤ03	溝ＳＤ201	瓦器　椀	12Ｃ末～13Ｃ初頭	－	5.0	－	Ｎ5/	Ｎ5/	胴部粗いヘラミガキ、底部ヨコナデ	ナデのちヘラミガキ	
11	25	11	32	Ｐ－32	ＳＤ03	溝ＳＤ201	土師器　高台付椀	10Ｃ	－	－	－	10ＹＲ7/3	10ＹＲ7/3	ヨコナデ	ナデ	内外面風化
11	26	11	111	Ｐ－111	ＳＤ03直上のにぶい黄褐色粘土層	溝ＳＤ201	青磁皿		－	(4.6)	－			施釉、底部無釉	施釉･ハケメ痕跡？	
12	27	－	35	－	ＳＤ03	溝ＳＤ201	土師器　甑把手		－	－	－	10ＹＲ8/2	10ＹＲ8/2	ナデ	ヘラケズリ	
12	28	12	33	Ｐ－33	ＳＤ03	溝ＳＤ201	土師器　甑把手		－	－	－	7.5Ｙ6/6		ナデ		
12	29	12	34	Ｐ－34	ＳＤ03	溝ＳＤ201	土師器　甑把手		－	－	－	10ＹＲ7/3		ナデ		
12	30	－	36	－	ＳＤ03	溝ＳＤ201	土師器　甑把手		－	－	－	5ＹＲ6/6	5Ｙ3/1	ナデ	ハケメ	
18	36	12	49	Ｐ－49	土坑８	土坑ＳＫ201	弥生土器　甕	弥生中期初頭	(21.6)	－	－	5ＹＲ6/4	10ＹＲ6/3	口縁端部刻目、胴部ハケメ	口縁部ハケメのちナデ、胴部板ナデ	
19	40	12	65	Ｐ－65	ＳＰ	ピットＳＰ201	土師器　椀	13Ｃ前葉	10.7	3.7	3.1	10ＹＲ8/3	10ＹＲ8/3	ヨコナデ･ナデ	ナデ	瓦器の焼き損じ

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	調査時の遺構・層位	報告書の遺構番号	器種	型式または時期	口径cm	底径cm	器高cm	色調		調整・文様		備考
									(復元)	(復元)	(復元)	表	裏	外面	内面	
22	42	－	5	－	ＳＤ01	溝ＳＤ101	須恵器　広口壺		(37.6)	－	－	5ＰＢ6/1	5ＰＢ6/1	回転ナデ	ヨコナデ	
22	43	－	1	－	ＳＤ01	溝ＳＤ101	弥生土器　壺	弥生後期後葉	(18.9)	－	－	5ＹＲ6/6	2.5ＹＲ5/6	ナデ	ナデ	
22	44	12	7	Ｐ－7	ＳＤ01	溝ＳＤ101	磁器　皿	近世	(13.1)	(7.7)	3.9	10Ｙ8/1	10Ｙ8/1	ヨコナデ	ヨコナデ	
22	45	－	3	－	ＳＤ01	溝ＳＤ101	土師器　皿	10Ｃ	(12.4)	(8.4)	(3.9)	10ＹＲ6/2	10ＹＲ6/2	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁端部にスス付着
22	46	－	2	－	ＳＤ01	溝ＳＤ101	土師器　皿	10Ｃ	(13.1)	(9.4)	(3.1)	7.5ＹＲ7/4	7.5ＹＲ7/4	ヨコナデ	ヨコナデ	外面風化
22	47	－	13	－	ＳＤ01･02	溝ＳＤ101･102	須恵器　壺		(21.0)	－	－	5ＰＢ6/1	Ｎ6/	ヨコナデ	ナデ	
22	48	－	12	－	ＳＤ01･02	溝ＳＤ101･102	須恵器　杯	6Ｃ後葉	(13.5)	(6.2)	(3.7)	2.5Ｙ8/2	10ＹＲ8/2	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・底部ヘラケズリ痕跡	ＴＫ43須恵器杯と同形態
22	49	－	8	－	ＳＤ01･02	溝ＳＤ101･102	弥生土器　壺	弥生中期前葉	－	－	－	10ＹＲ6/3	10ＹＲ6/2	ハケメ･波状文･櫛描文	ナデ･ヘラケズリ痕跡	外面一部剥離
22	50	12	11	Ｐ－11 ａ・ｂ	ＳＤ01･02	溝ＳＤ101･102	弥生土器　壺	弥生後期後葉	－	4.0	－	2.5Ｙ7/2	2.5Ｙ7/2	ナデ･底部に圧痕	ナデ･ヘラケズリ痕跡	外面風化･底部に圧痕
22	51	－	6	－	ＳＤ01	溝ＳＤ101	須恵器　壺	－	－	－		Ｎ7/	5ＰＢ6/1	ヨコナデ	ヨコナデ･ヘラケズリ痕跡	外面風化・内面に炭化物付着？
22	52	－	8	－	ＳＤ01･02	溝ＳＤ101･102	弥生土器　蓋	弥生中期初頭	－	(摘み部)6.5	－	7.5ＹＲ6/4	7.5ＹＲ7/4	詳細不明	詳細不明	内外面風化
22	53	－	10	－	ＳＤ01･02	溝ＳＤ101･102	弥生土器　甕用蓋	弥生中期初頭	－	(摘み部)7.0	－	10ＹＲ6/3	7.5ＹＲ6/3	詳細不明	ヘラケズリ痕跡	内外面風化
22	54	－	4	－	ＳＤ01	溝ＳＤ101	土師器　甑把手		長さ (8.3)	幅 (4.3)	厚さ (4.3)	10ＹＲ7/3	10ＹＲ7/3	ナデ	ナデ	
22	55	－	14	－	ＳＤ01･02	溝ＳＤ101･102	土師器　甑把手		－	－	－	7.5ＹＲ7/3	5ＹＲ7/4	ナデ	ナデ	
24	68	13	15	Ｐ－15	ＳＤ02	溝ＳＤ102	弥生土器　甕	弥生中期初頭	(15.0)	－	－	10ＹＲ6/2	10ＹＲ6/2	口縁端部刻目、板ナデ・ハケメ、胴部上位櫛描紋･波状文	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	
24	69	－	22	－	ＳＤ02	溝ＳＤ102	須恵器　壺		(21.9)	－	－	Ｎ6/	Ｎ6/	回転ナデ	回転ナデ、肩部タタキ	
24	70	13	24	Ｐ－24	ＳＤ02	溝ＳＤ102	すり鉢	近世	－	(14.0)	－	7.5ＹＲ5/1	7.5ＹＲ5/1	ヨコナデ	スリ目	
24	71	14	25	Ｐ－25	ＳＤ02	溝ＳＤ102	陶器　皿	近世	(13.8)	(9.9)	1.6	10ＹＲ4/1	10ＹＲ4/1	口縁端部まで施釉・口縁～底部無釉	口縁部～見込み施釉、見込み部分無釉見込み部分に刺突跡	
24	72	13	23	－	ＳＤ02	溝ＳＤ102	須恵器　杯		(10.4)	(4.8)	4.6	Ｎ6/	Ｎ6/	回転ナデ	回転ナデ	
24	73	13	19	Ｐ－19	ＳＤ02	溝ＳＤ102	磁器　杯	近世(幕末)	(6.9)	2.6	3.5	5ＧＹ8/1	5ＧＹ8/1	施釉	施釉	
24	74	13	21	Ｐ－21	ＳＤ02	溝ＳＤ102	陶器　碗	近世	－	4.7	－	2.5Ｙ7/1	5Ｙ7/1	回転ナデ、無釉	施釉	
24	75	13	20	Ｐ－20	ＳＤ02	溝ＳＤ102	陶器　碗	近世	－	4.5	－	5Ｙ7/1	5Ｙ6/2	回転ナデ、上部施釉、底部無釉	施釉	
24	76	14	26	Ｐ 26	ＳＤ02	溝ＳＤ102	磁器　蓋	近世	(5.4)	(摘み部)2.6	1.3	5ＧＹ8/1	5ＧＹ8/1	施釉	施釉	
24	77	－	27	－	ＳＤ02	溝ＳＤ102	土師器　甑把手	－	－	－		5ＹＲ6/6	－	ナデ	ナデ	
24	78	－	16	－	ＳＤ02	溝ＳＤ102	土師器　甑把手	－	－	－		7.5ＹＲ6/4	7.5ＹＲ6/4	ナデ	ナデ	
24	79	－	17	－	ＳＤ02	溝ＳＤ102	土師器　甑把手	－	－	－		10ＹＲ6/3	2.5Ｙ7/3	ナデ	ナデ	
24	80	－	18	－	ＳＤ02	溝ＳＤ102	土師器　脚部	－	－	－		2.5Ｙ8/1	－	ナデ		
25	86	－	48	－	ＳＤ07　下部砂層	遺物包含層等	須恵器　壺		(23.6)	－	－	10Ｙ5/1	Ｎ6/0	口縁部回転ナデ、肩部格子タタキメ	口縁部回転ナデ、肩部当て道具による同心円文	断面に接合痕
25	87	－	58	－	にぶい黄褐色土	遺物包含層等	須恵器　甕	ＴＫ46？7Ｃ中葉	(23.8)	－	－	Ｎ6/1	5Ｙ6/1	回転ナデ	回転ナデ	
25	88	14	63	Ｐ－63	Ａ－1　黒褐色粘土質シルト層	遺物包含層等	弥生土器　甕	弥生後期後葉	(15.6)	－	－	7.5ＹＲ6/4	10ＹＲ6/2	口縁端部凹線２条・ナデ、胴部ハケメ		
25	89	14	64	Ｐ－64	黒褐色粘土質シルト層	遺物包含層等	須恵器　杯蓋	ＴＫ209　7Ｃ前葉	10.4	5.8	3.4	2.5Ｙ7/2	2.5Ｙ7/2	回転ナデ	回転ナデ	
25	90	－	59	－	にぶい黄褐色粘土層	遺物包含層等	須恵器　鉢		(18.2)	－	－	7.5Ｙ7/2	10Ｙ7/1	回転ナデ	回転ナデ	
25	91	14	60	Ｐ－60	にぶい黄褐色粘土層	遺物包含層等	弥生土器　壺	弥生後期後葉	－	－	－	2.5Ｙ7/2	2.5Ｙ8/2	ナデ	ナデ･ヘラケズリ･ユビオサエ	外面に絵画
25	92	14	1	部室Ｐ－1 ａ・ｂ	部室トレンチ	遺物包含層等	土師器　皿	10Ｃ後葉～11Ｃ前葉	(19.6)	(14.1)	(3.4)	5ＹＲ7/6	5ＹＲ6/6	ヨコナデ･ナデ	ヨコナデ･ナデ	外面底にヘラ記号
25	93	14	43	Ｐ－43	ラベルなし	遺物包含層等	瓦器　椀	13Ｃ前葉	(13.6)	－	－	Ｎ4/	2.5Ｙ7/1	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、底部ナデ	ヨコナデのち一部ヘラミガキ	
25	94	－	66	－	表土	遺物包含層等	須恵器　杯		(12.2)	－	3.9	2.5Ｙ7/2	2.5Ｙ7/2	回転ナデ	回転ナデ	
25	95	－	67	－	表土	遺物包含層等	須恵器　高杯		－	(9.0)	－	2.5Ｙ8/2	2.5Ｙ7/2	回転ナデ	回転ナデ	－
25	96	14	2	部室Ｐ－2	部室トレンチ	遺物包含層等	土師器　甑把手		－	－		5ＹＲ7/3	7.5ＹＲ7/3			－
25	97	－	62	－	にぶい黄褐色粘土層	遺物包含層等	土師器　甑把手		－			7.5Ｙ7/4	7.5Ｙ7/4	ナデ	ナデ	－
25	98	－	61	－	にぶい黄褐色粘土層	遺物包含層等	土師器　甑把手					10ＹＲ7/2	10ＹＲ7/2	ナデ	ナデ	

第２表　課外活動共用施設地点　土製品・金属製品遺物観察表

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	遺構・層位	報告書の遺構番号	種類	長さ（残長）cm	幅（残幅）cm	厚さ（残厚）cm	重量　g	備考
12	31	12	69	Ｐ－69	ＳＤ03	溝ＳＤ201	管状土錘	(4.2)	1.15	1.1	5.92	
12	32	12	71	Ｐ－71	ＳＤ03	溝ＳＤ201	管状土錘	(2.8)	1.0	1.0	2.46	
12	33	12	70	Ｐ－70	ＳＤ03	溝ＳＤ201	管状土錘	(3.3)	1.15	1.2	3.96	
17	37	12	72	Ｐ－72	ＳＢ01	竪穴住居ＳＢ201	管状土錘	(2.5)	0.9	0.85	1.89	
22	56	－	68	Ｐ－68	ＳＤ01	溝ＳＤ101	管状土錘	3.8	1.2	1.2	4.37	
24	81	14	78	Ｐ－78	ＳＤ02	溝ＳＤ102	土製人形	(3.2)	(3.0)	1.5	11.28	
24	85	14	112	－	ＳＤ02	溝ＳＤ102	簪	11.1	0.9	0.2	2.8	
25	99	14	79	Ｐ－79	褐色土層	遺物包含層等	簪	10.0	0.8	0.15	5.31	
25	100	14	77	Ｐ－77	にぶい黄褐色粘土層	遺物包含層等	土製紡錘車	(4.1)	(2.9)	0.6	9.45	
25	101	14	73	Ｐ－73	褐色土層	遺物包含層等	管状土錘	5.0	2.2	2.0	20.77	
25	102	14	75	Ｐ－75	にぶい黄褐色粘土層下砂層	遺物包含層等	管状土錘	5.2	1.1	1.1	5.5	
25	103	14	3	部室Ｐ－3	部室トレンチ	遺物包含層等	管状土錘	(3.8)	1.2	1.15	3.93	
25	104	14	76	Ｐ－76	にぶい黄褐色粘土層下砂層	遺物包含層等	管状土錘	(3.1)	1.1	1.2	4.07	
25	105	14	74	Ｐ－74	褐色土層	遺物包含層等	管状土錘	(2.7)	0.9	0.9	2.62	

第３表　課外活動共用施設地点　石器・石製品遺物観察表

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	遺構・層位	報告書の遺構番号	種類	長さ（残長）cm	幅（残幅）cm	厚さ（残厚）cm	重量　g	石材	備考
8	9	10	105	Ｓ－105	ＳＸ01	不明遺構ＳＸ301	打製石庖丁未製品	18.0	4.6	1.8	223.06	珪質片岩	
12	34	12	101	Ｓ－101	ＳＤ03	溝ＳＤ201	磨石	21.5	8.0	(4.5)	1162.68	硬質砂岩	
12	35	12	104	Ｓ－104	ＳＤ03	溝ＳＤ201	砥石	10.6	9.7	7.4	1515.34	砂岩	
18	38	12	80	Ｓ－80	ＳＢ01	竪穴住居ＳＢ201	石杵	10.9	7.8	6.9	853.40	ひん岩	
19	39	12	109	Ｓ－109	不明（写真から特定可）	ピットＳＰ201	敲石	10.4	8.1	7.2	1007.31	緑色岩	
19	41	12	81	Ｓ－81	ＳＰ－2	ピットＳＰ202	石鏃	1.8	1.2	0.3	0.41	サヌカイト	
22	57	13	92	Ｓ－92	ＳＤ01	溝ＳＤ101	石鏃未製品	3.1	1.8	0.55	3.25	サヌカイト	
22	58	13	87	Ｓ－87	ＳＤ01･02	溝ＳＤ101･102	石鏃	2.1	1.2	0.25	0.86	サヌカイト	
22	59	13	88	Ｓ－88	ＳＤ01･02	溝ＳＤ101･102	石核	5.3	2.85	2.7	50.98	サヌカイト	
22	60	13	90	Ｓ－90	ＳＤ01･02　合流部底	溝ＳＤ101･102	打欠石錘	10.3	5.7	2.85	183.86	緑色岩	
23	61	13	99	Ｓ－99	ＳＤ01	溝ＳＤ101	敲石	(8.1)	6.3	4.7	456.41	緑色岩	
23	62	13	91	Ｓ－91	ＳＤ01･02　合流部底	溝ＳＤ101･102	砥石	7.4	7.9	5.8	342.30	砂岩	
23	63	13	89	Ｓ－89	ＳＤ01･02	溝ＳＤ101･102	磨石	(4.4)	3.6	2.5	60.18	砂岩	
23	64	13	98	Ｓ－98	ＳＤ01	溝ＳＤ101	砥石	6.5	4.1	3.1	122.25	流紋岩	
23	65	13	94	Ｓ－94	ＳＤ01	溝ＳＤ101	敲石	10.3	2.7	1.7	68.71	粘板岩	
23	66	13	95	Ｓ－95	ＳＤ01	溝ＳＤ101	敲石	(10.4)	2.6	1.6	70.12	粘板岩	
23	67	13	100	Ｓ－100	ＳＤ01	溝ＳＤ101	砥石	10.8	9.1	4.6	668.87	緑色岩	
24	82	14	86	Ｓ－86	ＳＤ02	溝ＳＤ102	スクレイパー	4.4	3.5	0.5	7.56	サヌカイト	
24	83	14	97	Ｓ－97	ＳＤ02	溝ＳＤ102	敲石	12.1	(5.5)	5.0	450.86	緑色岩	
24	84	14	96	Ｓ－96	ＳＤ02	溝ＳＤ102	砥石	(7.9)	2.5	(2.3)	73.75	流紋岩	
26	106	14	82	Ｓ－82	不明	遺物包含層等	石鏃	(1.5)	1.5	0.25	0.46	サヌカイト	
26	107	14	83	Ｓ－83	にぶい黄褐色粘土層	遺物包含層等	スクレイパー	2.0	3.1	0.35	2.55	サヌカイト	
26	108	14	85	Ｓ－85	表採	遺物包含層等	スクレイパー	5.9	3.6	0.9	25.91	サヌカイト	
26	109	14	84	Ｓ－84	にぶい黄褐色粘土層	遺物包含層等	打欠石錘	(3.5)	4.4	1.5	39.82	塩基性片岩	
26	110	14	93	Ｓ－93	褐色土層	遺物包含層等	敲石	10.0	2.0	0.55	17.98	粘板岩	
26	111	15	102	Ｓ－102	ＳＤ01･02 合流部　黄褐色シルト層	遺物包含層等(弥生前期)	打製石斧	19.2	10.9	2.25	715.72	珪質片岩	
27	112	15	107	Ｓ－107	部室トレンチ	遺物包含層等	石杵	9.7	6.2	6.9	470.75	ひん岩	
27	113	15	103	Ｓ－103	撹乱	遺物包含層等	敲石	(5.7)	(8.6)	(2.4)	174.60	緑色岩	
27	114	15	108	Ｓ－108	褐色土層	遺物包含層等	砥石	7.5	5.4	3.0	177.07	砂岩	
27	115	15	106	Ｓ－106	褐色土層	遺物包含層等	砥石	7.6	9.3	4.8	470.13	砂岩	

第４表　医療技術短期大学地点　土器・陶磁器遺物観察表

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	調査時の遺構・層位	報告書の遺構番号	器種	型式または時期	口径cm	底径cm	器高cm	色調		調整・文様		備考
									(復元)	(復元)	(復元)	表	裏	外面	内面	
33	1	40	105	Ｐ－105	Ａ－3　ＳＤ 301	溝ＳＤ 301	弥生土器　壺	弥生前期末	8.3	7.0	23.7	7.5ＹＲ 7/4	5ＹＲ 6/4	口縁部～胴部上半ハケメのちナデ、胴部下半ハケメのちヘラミガキ・ナデ、頸部沈線８条、胴部中位沈線７条、底部板ナデ	口縁部～頸部板ナデ、胴部不明	外面風化
33	2	40	78	Ｐ－78	ＳＤ 301	溝ＳＤ 301	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	(10.8)	－	－	5ＹＲ 6/6	5ＹＲ 6/6	口縁部ナデ、頸部ハケメのちナデ・半裁竹管を用いた２条１組の沈線６条	ナデ	断面に接合痕
33	3	40	86	Ｐ－86	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	(13.0)	(8.0)	(21.5)	5ＹＲ 5/4	7.5ＹＲ 6/4	口縁部ハケメのちナデ、頸部浅い沈線２条、胴部浅い沈線２条・ハケメ	口縁部ハケメ、胴部ナデ	
33	4	40	90	Ｐ－90	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	－	5.0 ～ 6.0	－	5ＹＲ 6/6	5ＹＲ 6/6	ハケメ・ナデ	頸部上位ハケメ、頸部板ナデ、胴部ヘラケズリ	外面に接合痕
33	5	40	85	Ｐ－85	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	－	6.8	－	2.5ＹＲ 5/4	2.5ＹＲ 5/4	頸部～胴部上位に沈線６条・ハケメ	頸部ナデ、胴部詳細不明	内面風化
33	6	40	92	Ｐ－92	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	－	5.8	－	7.5ＹＲ 6/4	7.5ＹＲ 6/4	頸部ハケメ・胴部の境に沈線５条、胴部上半ハケメのちナデ一部ヘラミガキ、中位に沈線４条・ハケメ、下半ハケメのちナデ消し	頸部上位ハケメ、下位ナデ、胴部上半ナデ・ユビオサエ、下半ヘラケズリ・ナデ	
33	7	40	83	Ｐ－83	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　壺	弥生中期(Ⅱ期)	12.7	6.8	21.8～22.9	7.5ＹＲ 7/3	7.5ＹＲ 7/3	口縁部ナデ、頸部～胴部ハケメ痕跡	口縁部ヘラミガキ痕跡、胴部ナデ？	内外面風化・焼成時剥離有り・内面に接合痕・傾き激しい
33	8	40	84	Ｐ－84	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　壺	弥生中期(Ⅱ期)	12.0	8.0	20.9	5ＹＲ 6/6	5ＹＲ 6/6	ハケメ痕跡	口縁部ナデ、胴部ナデ	外面風化
34	9	41	81	Ｐ－81 ａ・ｂ	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　壺	弥生中期(Ⅱ期)	21.0	8.5	42.0	5ＹＲ 6/4	5ＹＲ 6/4	口縁端部ヨコナデ、口頸部粗いハケメ一部ヘラミガキ・櫛描波状文・櫛描文、胴部上半２条１組の櫛描文３組その間櫛描波状文、下半ヘラミガキ	口縁部三角刺突文・櫛描文・格子文・ナデ	
34	10	41	96	Ｐ－96	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　甕蓋	弥生前期末・中期初頭	20.7	7.1	10.5	7.5ＹＲ 5/3	7.5ＹＲ 5/3	上半板ナデ・ハケメのち板ナデ、下半ハケメのちナデ消し	上半板ナデ・ユビオサエ、下半ハケメのちナデ	
34	11	40	93	Ｐ－93 ａ・ｂ	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	－	8.7	－	7.5ＹＲ 6/3	2.5ＹＲ 6/3	胴部上位に沈線５条・ハケメのちナデ・一部ヘラミガキ	板ナデ・わずかにユビオサエ	内面風化
34	12	40	82	Ｐ－82	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	10.3	6.2	14.9	7.5ＹＲ 5/3	7.5ＹＲ 5/3	口縁部ユビオサエのちナデ、胴部ハケメ	口縁部ナデ、胴部上半ユビオサエ、下半ヘラケズリ	
34	13	40	94	Ｐ－94	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　鉢	弥生前期末・中期初頭	12.5	6.4	7.7	10ＹＲ 7/4	10ＹＲ 7/4	粗い板ナデ・ユビオサエ・工具痕跡	板ナデ・ユビオサエ	手づくね
34	14	－	97	Ｐ－97	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	ミニチュア土器	弥生前期末・中期初頭	－	2.0	－	10ＹＲ 5/3	7.5ＹＲ 5/4	ユビオサエ	ナデ	
35	15	41	79	Ｐ－79	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　甕	弥生前期末	(30.4)	－	－	2.5Ｙ 6/2	2.5Ｙ 5/3	口縁端部刻目、口縁部ナデ、胴部上位に沈線５条・ハケメ・板ナデ・ナデ	板ナデ・ナデ	
35	16	41	80	Ｐ－80	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	弥生土器　甕	弥生中期(Ⅱ期)	14.7～17.6	6.0～6.7	20.6～21.1	5ＹＲ 5/4	2.5ＹＲ 5/4	口縁端部刻目・ナデ、胴部上位に沈線５条、中位に沈線４条・ハケメ・ナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	内面風化・口縁形状が楕円形
37	25	42	99	Ｐ－99	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	24.3	9.0	47	5ＹＲ 6/4	5ＹＲ 6/4	口縁部ナデ、頸部ハケメ・ナデ・貼り付け突帯２条の間に沈線８条、胴部ハケメのちナデ・中位に貼り付け突帯２条の間に沈線５条	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
37	26	42	100	Ｐ－100	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	－	8.2	－	7.5ＹＲ 7/4	5ＹＲ 6/6	ハケメのちナデ、頸部に沈線５条と８条、胴部中位に沈線５条と６条	頸部ハケメのちナデ・ユビオサエ痕跡、胴部不明	内外面に接合痕
37	27	43	91	Ｐ－91	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	－	6.8 ～ 7.3	－	5ＹＲ 6/4	5ＹＲ 6/4	ハケメのちナデ	ナデ・ユビオサエ	焼成時剥離
37	28	42	101	Ｐ 101	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	－	－	－	10ＹＲ 6/3	10ＹＲ 7/4	ハケメ・ナデ、頸部沈線１条以上、胴部に４条・３条・４条の沈線とその間に三角刺突文	ユビナデ・板ナデ・ハケメ痕跡	
37	29	42	102	Ｐ－102	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	弥生土器　壺		－	14.2	－	5ＹＲ 5/6	5ＹＲ 5/6	ハケメ	ヘラケズリ・一部ナデ	内面に接合痕

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	調査時の遺構・層位	報告書の遺構番号	器種	型式または時期	口径cm	底径cm	器高cm	色調		調整・文様		備考
									(復元)	(復元)	(復元)	表	裏	外面	内面	
38	40	43	103	P－103	SK 304	土坑SK 304	弥生土器　甕	弥生前期末・中期初頭	(14.6)	－	－	7.5 YR 6/3	2.5 YR 6/2	口縁端部刻目、口縁部ナデ、胴部ハケメ・上位沈線２条	口縁部ハケメ、胴部ヘラケズリのち粗いナデ	
43	42	43	17	P－17	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(14.8)	－	－	10 YR 6/2	10 YR 6/1	ナデ	口縁部ナデ、胴部上半ヘラケズリ、下半ヘラケズリ・ユビオサエ	内面に接合痕
43	43	43	26	P－26	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	13.6	－	22.0	10 YR 6/2	10 YR 6/1	口縁部～胴部ヘラケズリのちきれいなナデ	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
43	44	43	16	P－16	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	13.3	－	21.25	7.5 YR 6/4	7.5 YR 6/4	口縁部ナデ、胴部～底部ハケメ	口縁部ナデ、胴部ユビオサエのちナデ・ハケメ	内面に接合痕
43	45	44	12	P－12	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(13.3)	－	18.8	7.5 YR 5/2	7.5 YR 5/2	口縁部ナデ、胴部～底部タタキのちナデ消し	口縁部～胴部ナデ、底部ユビオサエ・ナデ	
43	46	44	23	P－23	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(17.3)	－	－	2.5 Y 8/4	2.5 Y 8/4	口縁部ヨコナデ、胴部タタキのちハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ・板ナデ	内面に接合痕
43	47	－	14	－	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(15.0)	－	－	10 YR 6/1	10 YR 6/1	口縁部ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ	口縁部ハケメのちナデ、胴部ナデ	
44	48	44	19	P－19	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	16.7	－	－	10 YR 7/2	2.5 Y 7/2	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちナデ	口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラケズリ・ヘラの角による引っかき痕、下半ヘラケズリ・ナデ	断面に接合痕
44	49	－	52	－	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(16.2)	－	－	7.5 YR 6/6	5 YR 6/6	口縁部ヨコナデ・ハケメ	胴部ヘラケズリ	内外面風化
44	50	44	13	P－13	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	14.6	－	－	7.5 YR 6/4	7.5 YR 6/4	口縁部ナデ、胴部ハケメ	口縁部ハケメのちナデ、胴部ヘラケズリ	内面に接合痕
44	51	44	22	P－22	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	－	－	－	5 YR 7/4	7.5 YR 7/4	口縁部ナデ・ヨコナデ、胴部上半ハケメのちナデ、下半ハケメのちナデ、底部ナデ	口縁部ナデ、胴部の境ユビオサエ、胴部上半ナデ　・ヨコナデ、下半～底部ハケメのちナデ	内外面風化・剥離
44	52	－	15	－	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(14.0)	－	－	10 YR 7/2	10 YR 7/2	口縁部ナデ、胴部ハケメ	口縁部ナデ、胴部ユビオサエのちナデ・ヘラケズリ	
44	53	－	9	－	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(13.4)	－	－	10 YR 7/2	10 YR 7/2	口縁部ナデ、胴部ハケメ	ナデ・ユビオサエ	内面に接合痕
44	54	－	10	－	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(14.0)	－	－	10 YR 7/4	10 YR 7/4	口縁部ナデ、胴部ハケメ	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
45	55	44	27	P－27	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(15.2)	－	29.5	7.5 YR 6/4	7.5 YR 6/4	口縁部ユビオサエのちナデ、胴部ハケメ	口縁部ハケメのちナデ、胴部ヘラケズリ	
45	56	44	18	P－18	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	16.7	－	28.3	7.5 YR 6/3	7.5 YR 6/3	口縁部ナデ、胴部～底部ハケメ	口縁部ハケメのちナデ、胴部～底部ヘラケズリ	
45	57	44	11	P－11	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	14.9～15.4	－	－	10 YR 6/4	10 YR 6/3	口縁部ヨコナデ、胴部タタキのちハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ・ヘラケズリ	
45	58	44	25	P－25	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(16.5)	－	－	7.5 YR 6/4	10 YR 6/4	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部粗いハケメ・ユビオサエ	内面に接合痕・外面スス付着
45	59	44	20	P－20	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(16.3)	－	－	7.5 YR 7/3	7.5 YR 7/3	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁端部ナデ、口縁部～胴部ハケメのちナデ	内面に接合痕
45	60	－	8	－	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(17.0)	－	－	7.5 YR 6/4	10 YR 6/4	口縁部ナデ、胴部ハケメ	ナデ	
46	61	45	24	P－24	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(21.2)	－	－	10 YR 7/3	7.5 YR 7/3	口縁端部に打ち欠き痕、口縁部ハケメのちヨコナデ、胴部ハケメのちナデ	ハケメ・ナデ	内面剥離・内面に接合痕・搬入品
46	62	44	21	P－21	SD 205	溝SD 205	弥生土器　甕	弥生後期中葉	14.5	－	－	7.5 YR 5/3	7.5 YR 6/2	口縁端部凹線１条・ナデ・口縁部ヨコナデ、胴部の境にユビオサエ、胴部タタキ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ・ナデ	内外面に接合痕
46	63	44	28	P－28	SD 205	溝SD 205	土師器　甕	5 C後葉	(17.0)	－	－	7.5 YR 7/6	7.5 YR 7/6	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ及びナデ、胴部上半板ナデ・下半ヘラケズリ及びナデ	外面一部風化・搬入品
46	64	45	29	P－29	SD 205	溝SD 205	弥生土器　鉢	弥生後期	(13.4)	－	－	5 YR 6/6	7.5 YR 6/4	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ・ヘラケズリ・ナデ	
46	65	45	30	P－30	SD 205	溝SD 205	弥生土器　鉢	弥生後期	(24.4)	－	－	5 YR 6/6	10 YR 7/3	口縁部ヨコナデ、胴部板ナデ・ナデ	口縁部ヨコナデ・板ナデ、胴部ヘラケズリ	
46	66	45	25－2	P－25－2	SD 205	溝SD 205	弥生土器　甕	弥生後期	18.8	80.	23.0	5 YR 6/4	7.5 YR 6/2	口縁部凹線２条、ヨコナデ・ユビオサエ、胴部ハケメのちヘラミガキ、底部タタキのちハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	内外面風化・剥離
46	67	45	31	P－31	SD 205	溝SD 205	弥生土器　鉢	弥生後期	(9.0)	(3.6)	(6.4)	7.5 YR 5/2	10 YR 4/1	口縁部凹線１条、胴部板ナデ	ナデのちヘラミガキ	

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	調査時の遺構・層位	報告書の遺構番号	器種	型式または時期	口径cm	底径cm	器高cm	色調		調整・文様		備考
									(復元)	(復元)	(復元)	表	裏	外面	内面	
47	68	45	41－2	P－41－2	SD 205	溝SD 205	須恵器　杯蓋	TK 23～47 (5C後葉)	(14.2)	－	－	N 6/	5YR 6/1	回転ナデ	回転ナデ	
47	69	45	40	P－41	SD 205	溝SD 205	須恵器　無蓋高杯	TK 23～47 (5C後葉)	17.1	10.9	9.7～11.9	N 6/	N 6/	杯部回転ナデ・波状文・カキメ、脚部回転ナデ	杯部～脚部回転ナデ	方形透かし孔3か所・傾き激しい
47	70	45	41	P－40	SD 205	溝SD 205	須恵器　無蓋高杯	TK 23～47 (5C後葉)	17.7	11.0	11.5～12.8	N 6/	N 6/	杯部回転ナデ・波状文・下半に回転ヘラケズリ、脚部回転ナデ	杯部～脚部回転ナデ	杯部外面に把手・方形透かし孔3か所・傾き激しい
47	71	45	32	P－32	SD 205	溝SD 205	土師器　高杯	5C後葉	(13.8)	12.6	9.6	10YR 7/4	10YR 7/6	杯部ヨコナデ・ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ・ヘラミガキ	杯部ナデ、脚部ヘラケズリ・上部に絞り痕	内外面に接合痕・透かし孔3か所
47	72	45	35	P－35	SD 205	溝SD 205	土師器　高杯	5C後葉	12.7	10.2	10.4	5YR 6/6	10YR 6/3	杯部～脚部ナデ	杯部～脚部ナデ	透かし孔4か所
47	73 a	－	34	－	SD 205	溝SD 205	土師器　高杯（杯部）	5C後葉	(13.0)	－	－	2.5YR 6/6	2.5YR 6/6	詳細不明	詳細不明	内外面剥離・39と同一個体？
47	73 b	－	39	－	SD 205	溝SD 205	土師器　高杯（脚部）	5C後葉	－	(10.2)	－	5YR 6/8	5YR 6/8	ナデ	板ナデ・上部絞り痕	内面剥離・外面風化・34と同一個体？
47	74 a	－	33－a	－	SD 205	溝SD 205	土師器　高杯（杯部）	5C後葉	16.2	－	－	5YR 6/6	5YR 6/6	ナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラケズリのちナデ	33－bと同一個体？
47	74 b	－	33－b	P－33	SD 205	溝SD 205	土師器　高杯（脚部）	5C後葉	－	－	－	5YR 6/6	5YR 6/4	ヘラミガキ	杯部ナデ、脚部ヘラケズリ	内外面接合痕・透かし孔4か所33－aと同一個体？
47	75	－	38	－	SD 205	溝SD 205	土師器　高杯（杯部）	5C後葉	14.2	－	－	5YR 7/6	5YR 7/6	板ナデ	板ナデ	
47	76	45	37	P－37	SD 205	溝SD 205	土師器　高杯（脚部）	5C後葉	－	(14.8)	－	2.5YR 6/4	2.5YR 6/4	脚部上半ヘラケズリのちナデ、下半ナデ	上半ヘラケズリのちナデ、下半板ナデ・ユビオサエ	透かし孔3か所
47	77	45	36	P－36	SD 205	溝SD 205	土師器　高杯	5C後葉	－	－	(10.6)	5YR 6/6	5YR 6/6	杯部～脚部ナデ	杯部ナデ、脚部ヘラケズリ・ナデ	透かし孔3か所
48	82	46	56	P－56 a・b	SD 207	溝SD 207	弥生土器　壺	弥生前期中葉	－	－	8.2	10YR 6/3	10YR 6/3	頸部4条以上の沈線のち刻目・、胴部ハケメのちヘラミガキ・ナデ？・5条の沈線のち刻目	板ナデ・ナデ？	内外面風化
48	83	46	48	P－48	SD 207	溝SD 207	弥生土器　甕	弥生前期中葉	8.8	6.4	19.3	10YR 7/3	5YR 6/4	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、底部ナデ	口縁部～胴部ナデ、胴部上半ユビオサエ	内面に接合痕
48	84	46	55	P－55	SD 207	溝SD 207	弥生土器　壺	弥生前期後葉	14.7	7.8	22.4	7.5YR 6/3	7.5YR 6/2	口縁部ヨコナデ、頸部螺旋状の沈線3条、胴部ハケメのち一部ヘラミガキ・螺旋状の沈線3条	口縁端部ヨコナデ、口縁部ヨコハケメ、胴部板ナデ	
48	85	46	46	P－46	SD 207	溝SD 207	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	19.0	－	－	10YR 6/3	10YR 6/3	頸部沈線6条・ナデ	粗いナデ	
50	86	46	59	P－59	SD 027	溝SD 207	弥生土器　細頸壺	弥生中期初頭	11.6	－	－	7.5YR 6/2	7.5YR 6/2	口縁端部刻目、口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ頸部～胴部に8・6・10・8・1以上の半裁竹管による沈線、その間に三角刺突文	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、胴部ユビオサエ	
48	87	46	42	P－42	SD 207	溝SD 207	弥生土器　壺	弥生中期中葉	(20.5)	－	－	10YR 6/2	7.5YR 6/4	口縁部凹線3条・ハケメ痕跡有り	ナデ・斜格子文	
49	88	46	47	P－47	SD 207	溝SD 207	弥生土器　甕	弥生中期中葉	25.8～29.0	9.8	43.9	7.5YR 7/4	10YR 4/1	口縁部ヨコナデ、胴部上半ヨコナデ、下半ヘラミガキ	口縁部ナデ、胴部上半ナデ・ハケメのちナデ、中位ナデ、下半ヘラケズリ	内面に接合痕
49	89	46	49	P－49 a・b	SD 207	溝SD 207	弥生土器　甕	弥生中期後葉	(19.3)	7.5	(21.3)	7.5YR 6/3	10YR 6/3	口縁端部凹線1条・ヨコナデ、胴部上半粗いハケ、下半ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部上半ナナメの板ナデ、下半ヘラケズリ	
49	90	46	63 a・b	P－63 a・b	SD 207	溝SD 207	弥生土器　甕	弥生中期中葉～後葉	(25.2)	－	－	7.5YR 7/3	7.5YR 7/3	ハケメのちナデ・ヘラミガキ	ナデ・ユビオサエ・ヘラケズリ	63－a・b接合
49	91	46	50	P－50	SD 207	溝SD 207	弥生土器　甕	弥生中期中葉（Ⅲ期）	13.0	5.8	20.6～20.9	10YR 6/2	10YR 6/2	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ・一部ハケメ痕跡	口縁部ヨコナデ、胴部板ナデ？	
50	92	47	51	P－51	SD 207	溝SD 207	弥生土器　甕	弥生中期前葉	(24.9)	－	－	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6	口縁部ヨコナデ、胴部櫛描文・波状文・ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエのちナデ	
50	93	－	58	－	SD 207	溝SD 207	弥生土器　壺	弥生前期末・中期初頭	－	8.8	－	7.5YR 6/4	10YR 6/3	ヘラミガキ痕跡	ヘラケズリ？	外面剥離
50	94	47	43	P－43	SD 207	溝SD 207	弥生土器　甕	弥生中期初頭	13.6	－	－	10YR 6/3	10YR 7/2	口縁端部刻目、胴部上半・櫛描文・櫛描波状文	ユビオサエのちナデ	
50	95	－	60	－	SD 027	溝SD 207	弥生土器　壺	弥生前期末	－	9.8	－	7.5YR 6/4	7.5YR 6/4	ハケメのちヘラミガキ・ナデ	板ナデ・ナデ	
50	96	47	44	P－44	SD 207	溝SD 207	弥生土器　甕	弥生前中期初頭	－	－	－	N 4/1	7.5YR 6/4	ハケメ・山形文・多条沈線	ヘラケズリのち軽いナデ	
50	97	－	61	－	SD 207	溝SD 207	弥生土器　壺	弥生前期末	－	8.0	－	7.5YR 7/3	2.5Y 5/1	ヘラケズリのちナデ	ナデ・ユビオサエ	

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	調査時の遺構・層位	報告書の遺構番号	器種	型式または時期	口径cm	底径cm	器高cm	色調		調整・文様		備考
									(復元)	(復元)	(復元)	表	裏	外面	内面	
50	98	－	57	－	ＳＤ 207	溝ＳＤ 207	弥生土器　甕	弥生前期末	－	7.1	－	7.5ＹＲ 7/4	7.5ＹＲ 7/4	ハケメ	ナデ･ユビオサエ	
50	99	－	54	－	ＳＤ 207	溝ＳＤ 207	弥生土器　甕	弥生前期末	－	(6.4)	－	5ＹＲ 6/4	7.5ＹＲ 6/3	ハケメ･ヘラミガキ痕跡	ヘラケズリ	
50	100	－	53	－	ＳＤ 207	溝ＳＤ 207	弥生土器　壺	弥生前期	－	8.0	－	7.5ＹＲ 4/2	5ＹＲ 5/6	ヘラミガキ・ユビオサエのちナデ	ヘラケズリ	
50	101	47	45	Ｐ－45	ＳＤ 207	溝ＳＤ 207	弥生土器　鉢	弥生	－	－	－	2.5Ｙ 6/3	10ＹＲ 6/2	ナデ	ナデ	穿孔１か所
50	102	－	62	－	ＳＤ 207	溝ＳＤ 207	弥生土器　高杯	弥生中期中葉	－	－	－	2.5Ｙ 6/1	2.5Ｙ 5/1	ヘラミガキ痕跡･沈線１条･下部にタテの沈線	ヘラケズリ	
53	109	47	71	Ｐ－71	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　甕	弥生後期中葉	14.7	(5.7)	24.0～(26.3)	7.5ＹＲ 6/4	10ＹＲ 6/3	口縁端部凹線２条･ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	傾き激しい
53	110	47	65	Ｐ－65	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　甕	弥生後期中葉	(14.5)	6.0	23.9～25.1	5ＹＲ 5/4	5ＹＲ 5/3	口縁部ナデ・胴部タタキのちハケメ	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
53	111	47	70	Ｐ－70 ａ・ｂ	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　甕	弥生後期中葉	16.8	7.6	(28.2)	5ＹＲ 5/4	5ＹＲ 5/4	口縁部ナデ、胴部タタキのちナデ	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
53	112	48	67	Ｐ－67 ａ・ｂ	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　甕	弥生後期中葉	(16.8)	6.0	－	7.5ＹＲ 6/4	7.5ＹＲ 6/4	口縁端部凹線２条、口縁部ナデ、胴部上半タタキのちヘラミガキ、下半タタキのちナデ	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ･ナデ	
53	113	48	72	Ｐ－72 ａ・ｂ	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　甕	弥生後期中葉	16.0	5.6	21.4	7.5ＹＲ 6/4	7.5ＹＲ 6/3	口縁部ナデ、胴部タタキのちナデ	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
53	114	－	69	－	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　甕	弥生後期中葉	17.3	－	－	5ＹＲ 5/4	5ＹＲ 5/4	口縁部凹線２条･ナデ	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
54	115	48	66	Ｐ－66	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　甕	弥生後期中葉	15.4	－	－	5ＹＲ 5/6	7.5ＹＲ 5/4	口縁部ナデ、胴部タタキのちハケメ	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
54	116	48	73	Ｐ－73	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　甕	弥生後期中葉	16.0	9.2	19.0	5ＹＲ 6/4	5ＹＲ 6/4	口縁部ナデ、胴部タタキのちナデ、下部タタキのちハケメ	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	
54	117	48	108	Ｐ－108	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　高杯	弥生後期中葉	24.3	15.1	18.2	5ＹＲ 6/4	7.5ＹＲ 6/4	杯部口縁端部に浅い凹線１条･ナデ･ヘラミガキ、脚部ハケメのちヘラミガキ、脚部凹線３条	杯部上半ハケメのち板ナデわずかにヘラミガキ、下半ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ、脚端部ナデ	透かし孔３か所・外面剥離･断面に接合痕
54	118	48	75	Ｐ－75	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　高杯	弥生後期中葉	(22.0)	11.8	16.4	5ＹＲ 6/4	5ＹＲ 6/4	杯部ナデ･ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ･ナデ	杯部ナデ･ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ･ナデ	透かし孔４か所・断面に接合痕
54	119	48	74	Ｐ－74	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　壺	弥生後期中葉	－	5.5	－	10ＹＲ 8/4	7.5ＹＲ 7/4	頸部ハケメのちナデ、胴部境板ナデ、胴部ナデ・ヘラミガキ、下部ヘラケズリ	頸部ナデ、胴部上半ユビオサエ、下半ナデ	
54	120	48	68	Ｐ－68	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　壺	弥生後期中葉	－	6.0	－	5ＹＲ 5/4	5ＹＲ 5/4	タタキのちヘラミガキ	ヘラケズリ	穿孔１か所
54	121	－	77	－	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　高杯(杯部)	弥生後期中葉	20.0	－	－	7.5ＹＲ 5/4	7.5ＹＲ 5/4	ヘラミガキ？	ヘラミガキ	外面剥離
54	122	48	76	Ｐ－76	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　高杯(脚部)	弥生後期中葉	－	13.3	－	5ＹＲ 6/3	5ＹＲ 6/3	ヘラミガキ･ナデ	ヘラケズリ･ナデ	内外面風化・断面に接合痕
54	123	48	109	Ｐ－109	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	弥生土器　高杯	弥生後期中葉	23.0	14.5	16.2	5ＹＲ 6/4	5ＹＲ 6/4	杯部上位凹線５条･ナデ、下半ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ、脚部凹線４条･ナデ	杯部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ、脚端部ナデ	
60	125	48	7	Ｐ－7	Ｂ－2　ＳＤ 202	溝ＳＤ 202	須恵器　杯蓋	ＴＫ 46(７Ｃ中葉)	(13.0)	(6.0)	2.4	Ｎ 7/	Ｎ 7/	回転ナデ	回転ナデ	
60	126	48	114	Ｐ－114	ＳＢ 201	竪穴住居ＳＢ201	製塩土器		－	－	－	7.5ＹＲ 7/6	7.5ＹＲ 6/4	ナデ？･擬凹線？	ナデ	内面風化
60	128	48	112	Ｐ－112	ＳＤ 102(旧ＳＤ 103)	溝ＳＤ 102	青磁碗		－	－	－	5Ｙ 5/2	5Y7/1(胎土)			ＳＤ103→ＳＤ102に変更
60	130	48	111	Ｐ－111	ＳＤ 102(旧ＳＤ 103)･(ＳＫ 108)	溝ＳＤ 102	青磁碗		－	6.0	－	5ＧＹ 7/1	7.5ＧＹ 7/1			断面に接合痕・ＳＤ 103→ＳＤ 102 に変更
60	134	－	2	－	Ａ－3　ＳＤ 104　支流	溝ＳＤ 101	陶器		(12.2)	－	－	10ＹＲ 5/2	10ＹＲ 5/1			
60	135	48	1	Ｐ－1	Ａ－3　ＳＤ 104　支流	溝ＳＤ 101	土師器　甕		(30.2)	－	－	5ＹＲ 4/8	7.5Ｙ 6/4	口縁ヨコナデ、胴部ハケメ･ナデ	口縁ヨコナデ･ハケメ、胴部ナデ	外面風化
63	137	49	6	Ｐ－6	ＳＫ 101	土坑ＳＫ 101	弥生土器　壺	弥生前期末	(15.0)	8.7	44.3	7.5ＹＲ 6/3	7.5ＹＲ 6/4	口縁部ヨコナデ･ヘラミガキ･ハケメ、頸部貼り付け凸帯４条、胴部上位ハケメのちヘラミガキ、中位貼り付け凸帯４条、下位～底部ハケメのちヘラミガキ	口縁部ヨコナデ･ヘラミガキ･ハケメ、頸部ナデ	
63	138	49	4	Ｐ－4	ＳＫ 101	土坑ＳＫ 101	弥生土器　細頸壺	弥生中期初頭	－	(6.2～6.7)	－	5ＹＲ 6/4	5ＹＲ 6/4	半截竹管による沈線･波状文、ハケメ･ヘラミガキ	ナデ	内面風化

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	調査時の遺構・層位	報告書の遺構番号	器種	型式または時期	口径cm	底径cm	器高cm	色調		調整・文様		備考
									(復元)	(復元)	(復元)	表	裏	外面	内面	
63	139	49	3	P－3	SK 101	土坑SK 101	弥生土器　甕蓋	弥生前期末	－	(摘み部)6.7	－	7.5 YR 5/4	7.5 YR 6/3	ナデ・ヘラミガキ・ハケメ	ナデ	外面剥離
63	140	49	5	P－5	A－2　SK 101	土坑SK 101	磁器　ミニチュア	近世末～近代	2.4	1.0	1.0	2.5 Y 8/2	緑釉			型押し成形
63	141	49	64	p－64	A－6・黄褐色シルト	第5層(弥生前期包含層)	弥生土器　壺	弥生前期中葉	16.8	9.8	34.4	10 YR 7/4	10 YR 7/4	口縁部～頸部ハケメのちナデ・削り出し凸帯上に3条の沈線、胴部ハケメのちヘラミガキ・有段部下に4条の沈線	口縁部ハケメのちナデ、胴部上半ナデ・ユビオサエ、下半ナデ・一部ヘラミガキ	水の抜け穴あるも、復元時にふさいでしまっている
63	142	49	106	P－106	B－6　包含層	第5層(弥生前期包含層)	弥生土器　壺	弥生前期中葉	(17.8)	7.9	35.3	7.5 YR 7/4	7.5 YR 7/4	口縁部～頸部ハケメのちナデ消し・一部ヘラミガキ、頸部沈線3条、胴部ハケメのちヘラミガキ・一部ナデ、胴部中位に沈線3条、底部板ナデ	口縁部ハケメのちナデ、頸部ハケメのちヘラミガキ、胴部ヘラミガキ	
64	143	49	104	P－104	A－5　黄褐色シルト	第5層(弥生前期包含層)	弥生土器　壺	弥生前期末	－	9.8	－	5 YR 6/4	5 YR 6/4	ハケメ・ナデ、頸部3条の貼り付け凸帯文に刻目とその上下に一部竹管文、胴部中位に6条の沈線と竹管文	ナデ	内外面風化
64	144	－	87	－	A－5　黄褐色シルト	第5層(弥生前期包含層)	弥生土器　鉢	弥生前期	－	11.0	－	10 YR 4/2	10 YR 5/2	ハケメ	詳細不明	内面剥離
65	145	49	88	P－88	C－2　黄褐色シルト	第5層(弥生前期包含層)	弥生土器　壺	弥生前期中葉	－	－	－	7.5 YR 6/4	5 YR 6/4	頸部に沈線3条、ナデ・ハケメ痕跡	ヘラケズリ	内面に接合痕
65	146	50	89	P－89	C－2　黄褐色シルト	第5層(弥生前期包含層)	弥生土器　鉢	弥生前期中葉	8.6	－	－	7.5 YR 5/3	7.5 YR 5/3	ナデ・ヘラミガキ	ナデ・ヘラミガキ痕跡	
65	147	50	98	P－98	A－3　黄褐色シルト	第5層(弥生前期包含層)	弥生土器　鉢	弥生前期中葉	－	－	－	10 YR 6/2	10 YR 5/2	ナデ・ハケメ痕跡	ナデ	透かし孔2か所有り
66	153	50	110	P－110	黄褐色シルト(Pit 6)	遺物包含層	土師器　高杯（脚部）	－	－	10.3	－	10 YR 7/3	10 YR 6/3	ハケメ痕跡有り・ナデ	ナデ、端部ハケメ	透かし孔1か所・外面及び断面に接合痕・脚内上部に爪痕

第5表　医療技術短期大学地点　土製品・金属製品遺物観察表

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	遺構・層位	報告書の遺構番号	種類	長さ（残長）cm	幅（残幅）cm	厚さ（残厚）cm	重量　g	備考
35	17	41	95	P－95	SK 302	土坑SK 302	土製円盤	5.2	4.9	1.1	30.37	
47	81	45	S－38	S－38	C－3・4 SD 205	溝SD 205	棒状鉄製品	8.1	0.7	0.5	9.60	X線写真有り
60	127	48	S－37	S－37	B－4 SK 206	土坑SK 206	棒状鉄製品	3.4	0.8	0.3	2.79	X線写真有り
60	129	48	113	P－113	A－3 SD 102(旧SD 103)	溝SD 102	棒状土錘	(3.8)	1.8	1.7	15.93	
60	131	49	117	P－117	SD 102(旧SD 103)	溝SD 102	柄鏡	27.0	18.2	0.4	353.28	
65	148	50	115	P－115	O－5包含層	第5層(弥生前期包含層)	土製紡錘車	4.7	4.7	2.1	41.23	
66	156	50	116	P－116	B－1水田土壌面	遺物包含層	土製五輪塔	3.4	1.9	1.8	5.50	
66	160	50	121	P－121	B－1水田土壌面	遺物包含層等	洪武通宝	2.3	2.3	0.15	2.83	
66	161	50	122	P－122	SD 207	遺物包含層等	寛永通宝	2.3	2.3	0.10	2.41	

第６表　医療技術短期大学地点　石器・石製品遺物観察表

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	遺構・層位	報告書の遺構番号	種類	長さ（残長）cm	幅（残幅）cm	厚さ（残厚）cm	重量　g	石材	備考
35	18	41	5	Ｓ－5	Ｂ－5 ＳＫ 203	土坑ＳＫ 302	石鏃	1.6	1.5	0.5	0.79	サヌカイト	
35	19	41	6	Ｓ－6	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	石鏃	3.2	1.9	0.3	1.62	サヌカイト	
35	20	41	Ｓ 36	Ｓ－36	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	石核	4.3	7.1	1.7	50.22	サヌカイト	
35	21	41	Ｓ 29	Ｓ－29	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	打製石剣	16.5	3.9	1.1	81.78	サヌカイト	
35	22	41	Ｓ 28	Ｓ－28	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	扁平片刃石斧	6.5	3.6	1.55	78.27	緑色岩	
35	23	42	Ｓ 26	Ｓ－26	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	扁平片刃石斧	4.9	2.3	1.0	22.74	塩基性片岩	
35	24	42	Ｓ 18	Ｓ－18	ＳＫ 302	土坑ＳＫ 302	磨製石庖丁	16.0	4.5	0.7	78.78	塩基性片岩	
38	30	42	8	Ｓ－8	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	石鏃	2.0	1.5	0.3	0.75	サヌカイト	
38	31	42	7	Ｓ－7	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	石鏃	2.2	1.3	0.3	0.73	サヌカイト	
38	32	42	9	Ｓ－9	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	石鏃	1.8	1.3	0.25	0.61	サヌカイト	
38	33	43	Ｓ 11	Ｓ－11	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	石鏃	2.1	1.4	0.3	0.63	サヌカイト	
38	34	43	Ｓ 12	Ｓ－12	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	石鏃	2.2	1.1	0.3	0.73	サヌカイト	
38	35	43	Ｓ 13	Ｓ－13	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	石鏃	1.4	0.9	0.25	0.50	サヌカイト	
38	36	43	Ｓ 14	Ｓ－14	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	石鏃	(1.3)	1.5	0.2	0.47	サヌカイト	
38	37	43	Ｓ 10	Ｓ－10	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	石鏃	2.8	1.2	0.3	1.05	サヌカイト	
38	38	43	Ｓ 32	Ｓ－32	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	砥石	5.3	3.1	3.2	84.90	粘板岩	
38	39	43	Ｓ 22	Ｓ－22	ＳＫ 303	土坑ＳＫ 303	敲石	(4.6)	4.9	1.5	62.32	点紋塩基性片岩	
38	41	43	Ｓ 21	Ｓ－21	ＳＫ 304	土坑ＳＫ 304	磨製石庖丁	(4.2)	3.2	0.8	18.31	赤色頁岩（シャールスタイン）	
47	78	45	Ｓ 17	Ｓ－17	ＳＤ 205	溝ＳＤ 205	打製石庖丁	5.2	8.7	1.4	79.89	硅質片岩	
47	79	45	Ｓ 33	Ｓ－33	ＳＤ 205	溝ＳＤ 205	打製石斧	19.3	6.6	1.9	375.09	硅質片岩	
47	80	45	－	－	ＳＤ 205 勾玉Ｎｏ.1	溝ＳＤ 205	勾玉形石製品	4.8	2.3	0.7	11.37	滑石	
51	103	47	4	Ｓ－4	Ｄ－5 ＳＤ 207	溝ＳＤ 207	石鏃	2.5	1.4	0.3	0.82	サヌカイト	
51	104	47	3	Ｓ－3	Ｂ－1･2 ＳＫ 207	溝ＳＤ 207	石鏃	3.4	2.1	0.5	3.32	サヌカイト	
51	105	47	Ｓ 35	Ｓ－35	ＳＤ 207	溝ＳＤ 207	敲石	11.3	8.5	6.5	978.24	砂岩	
52	106	47	Ｓ 31	Ｓ－31	ＳＤ 207	溝ＳＤ 207	伐採斧	8.1	7.7	3.9	338.69	緑色岩	
52	107	47	Ｓ 30	Ｓ－30	ＳＤ 207	溝ＳＤ 207	伐採斧	(7.2)	(5.6)	(4.0)	219.32	点紋塩基性片岩	
52	108	47	Ｓ 20	Ｓ－20	ＳＤ 207	溝ＳＤ 207	磨製石庖丁	(5.4)	4.5	5.5	27.11	塩基性片岩	
54	124	47	Ｓ 16	Ｓ－16	ＳＫ 209	溝ＳＤ 209	磨製石庖丁	(3.6)	4.6	0.9	27.60	流紋岩	扁平片刃石斧へ再加工途上
60	132	48	2	Ｓ－2	Ａ－5 ＳＤ 104	溝ＳＤ 101	石鏃	1.4	1.1	0.25	0.35	サヌカイト	
60	133	48	1	Ｓ－1	Ａ－6 ＳＤ 104	溝ＳＤ 101	石鏃	2.5	1.6	0.6	1.92	サヌカイト	
60	136	49	Ｓ 27	Ｓ－27	Ａ－3 ＳＤ 104	溝ＳＤ 101	磨製石庖丁	6.3	4.6	0.8	27.05	粘板岩	
65	149	50	Ｓ 25	Ｓ－25	Ｆ－4 黄褐色土	第５層（弥生前期包含層）	スクレイパー	5.7	4.2	0.6	17.87	サヌカイト	
65	150	50	Ｓ 23	Ｓ－23	Ｅ－4 黄褐色土	第５層（弥生前期包含層）	打製石庖丁	10.1	4.3	1.2	69.74	サヌカイト	
65	151	49	Ｓ 19	Ｓ－19	Ｆ－4 包含層	第５層（弥生前期包含層）	磨製石庖丁	15.9	6.0	0.7	144.53	藍閃石－塩基性片岩	
66	152	50	Ｓ 34	Ｓ－34	Ｂ－6 黄褐色シルト	第５層（弥生前期包含層）	敲石	25.0	5.1	4.1	819.50	藍閃石－塩基性片岩	
66	154	50	Ｓ 15	Ｓ－15	Ａ－2 水田土壌面	遺物包含層等	石鏃未製品	(1.8)	1.8	0.25	1.04	サヌカイト	
66	155	50	Ｓ 24	Ｓ－24	Ｃ－3 水田土壌面	遺物包含層等	スクレイパー	5.8	5.3	0.6	27.37	サヌカイト	
66	157	50	120	Ｐ－120	ＳＤ 102（旧 103）とＳＤ 201 の間の流路	遺物包含層等	管玉	1.35	0.45	0.45	0.46	碧玉	
66	158	50	118	Ｐ－118	Ｃ－2 水田土壌面	遺物包含層等	碁石	2.15	2.15	0.9	5.34	－	
66	159	50	119	Ｐ－119	攪乱及び水田土壌	遺物包含層等	碁石	2.2	2.2	0.4	3.04	－	

第７表　弓道場立会調査地点　土器・陶磁器遺物観察表

図	番号	図版	整理番号	撮影番号	遺構・層位	器種	型式または時期	口径cm	底径cm	器高cm	色調		調整・文様		備考
								(復元)	(復元)	(復元)	表	裏	外面	内面	
68	1	52	1	Ｐ－1	的場　工事終了後表採	弥生土器　壺	弥生前期	－	－	－	7.5ＹＲ 6/3	7.5ＹＲ 6/3	ナデ･沈線３条	ナデ･ヘラミガキ	
68	2	52	7	Ｐ－7	南側　奈良平安包含層	弥生土器　甕	弥生前期末	－	－	－	7.5ＹＲ 7/3	10ＹＲ 6/3	ナデ･沈線９条	ナデ	
68	3	52	10	Ｐ－10	南側トレンチ埋め戻し土中	弥生土器　甕	弥生中期初頭	(22.2)	－	－	5ＹＲ 5/4	5ＹＲ 5/4	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちナデ	ナデ	
68	4	52	12	Ｐ－12	南側トレンチ埋め戻し土中	弥生土器　壺	弥生前期	－	(6.6)	－	7.5ＹＲ 7/3	10ＹＲ 7/3	ナデ	ナデ･ユビオサエ	
68	5	52	6	Ｐ－6	南側　奈良平安包含層	弥生土器　壺	弥生後期	－	－	－	7.5ＹＲ 6/4	7.5ＹＲ 6/4	ナデ･ヘラケズリ痕跡有り･円形浮文	ナデ	
68	6	52	2	Ｐ－2	的場　工事終了後表採	弥生土器　壺	弥生	(15.5)	－	－	7.5ＹＲ 6/3	10ＹＲ 6/3	ナデ	ナデ	
68	7	52	5	Ｐ－5	北側トレンチ埋め戻し土中	壺または鉢	弥生	(14.8)	－	－	5ＹＲ 6/4	5ＹＲ 6/4	ナデ･ハケメ	ナデ･ヘラケズリ	
68	8	52	4	Ｐ－4	北側トレンチ埋め戻し土中	陶器	近世	－	(6.8)	－	5Ｙ 7/1	5Ｙ 7/1	ロクロナデ･ハケメ	ロクロナデ	
68	9	52	11	Ｐ－11	南側トレンチ埋め戻し土中	弥生土器　甕	弥生	－	－	－	10ＹＲ 7/3	7.5ＹＲ 7/4	ナデ	ナデ	
68	10	52	3	Ｐ－3	的場　工事終了後表採	弥生土器　甕	弥生後期	－	(4.6)	－	10ＹＲ 5/2	2.5Ｙ 4/1	ハケメ	ヘラケズリ	
68	11	52	8	Ｐ－8	南側　奈良平安包含層	弥生土器　蓋	弥生後期	－	(摘み部) 3.3	－	7.5ＹＲ 6/4	7.5ＹＲ 6/4	ナデ	ナデ	底部側面に穿孔
68	12	52	9	Ｐ－9	南側　奈良平安包含層	須恵器　杯	ＴＫ10様式	(11.6)	－	－	Ｎ 6/0	5Ｙ 6/1	回転ナデ	回転ナデ	

図　　版

課外活動共用施設建設に伴う発掘調査

作業風景（南より）

完掘状況（北より）

図版 2

第 2 遺構面全景（北より）

第 2 遺構面全景（南より）

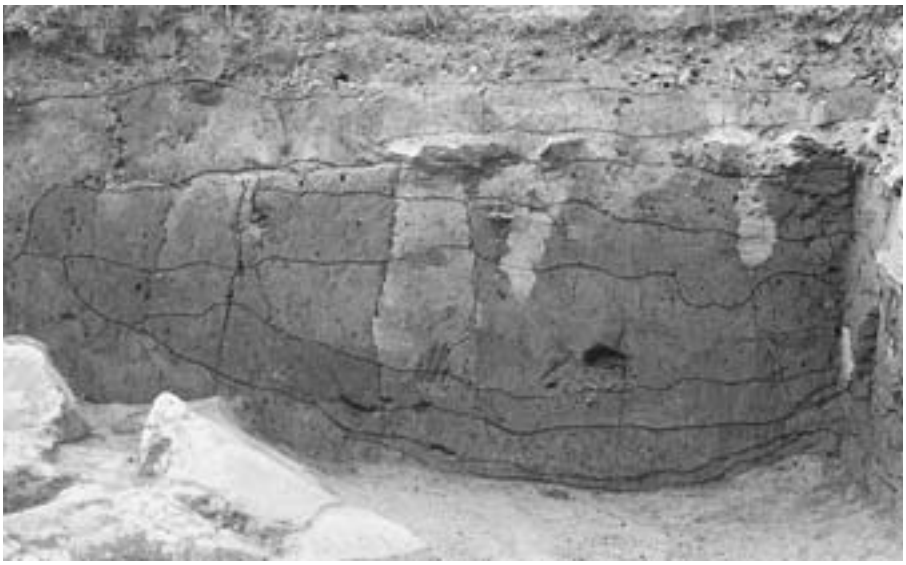
第 1 遺構面全景（北より）

課外活動共用施設の現状（北西より）

図版 4

不明遺構 SX301
遺物出土状況 1

不明遺構 SX301
遺物出土状況 2



不明遺構 SX301
土層

弥生前期包含層
出土打製石斧

竪穴住居 SB201

溝 SD201

図版 6

溝 SD201 遺物出土状況

流路 SR201

流路 SR201 土層

土坑 SK201

土坑 SK203

ピット SP201
遺物出土状況 1

図版 8

ピット SP201
遺物出土状況 2

溝 SD101・溝 SD102・
井戸 SE101

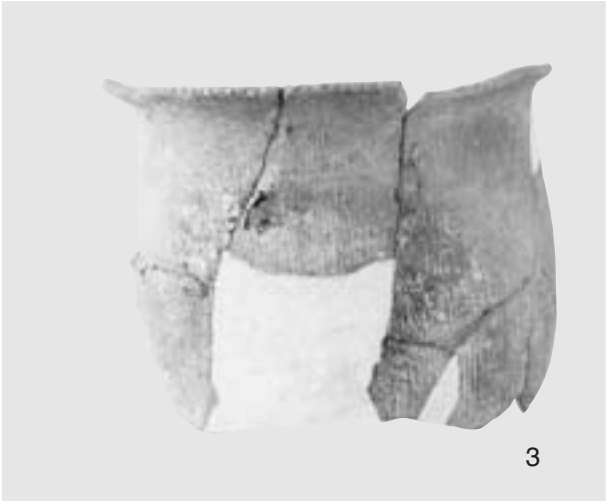
溝 SD101

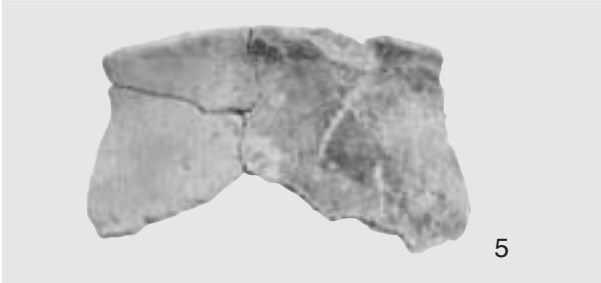
溝 SD101 集石

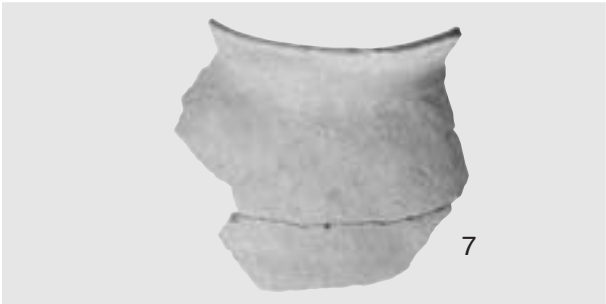
溝 SD102

井戸 SE101

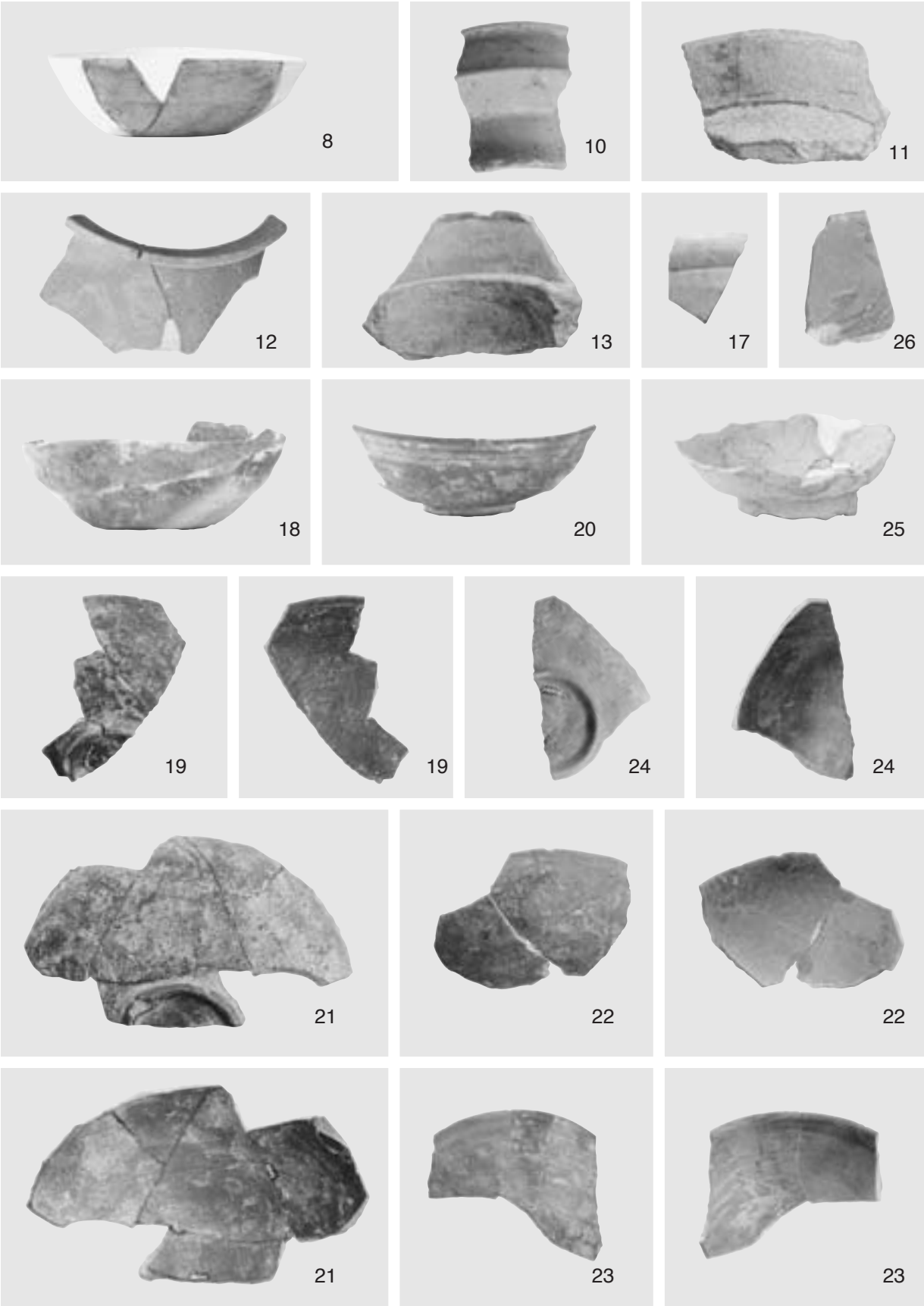
図版 10







課外活動共用施設地点出土遺物 1



課外活動共用施設地点出土遺物 2

図版 12

28

29

31

32

33

37

41

41

34

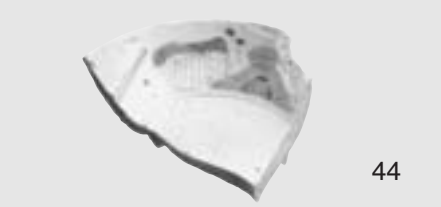
35

35

36

40

44


44

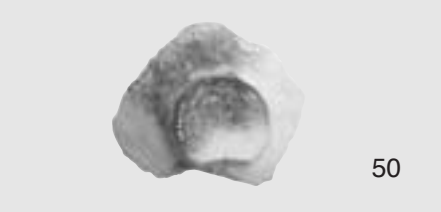
38

38

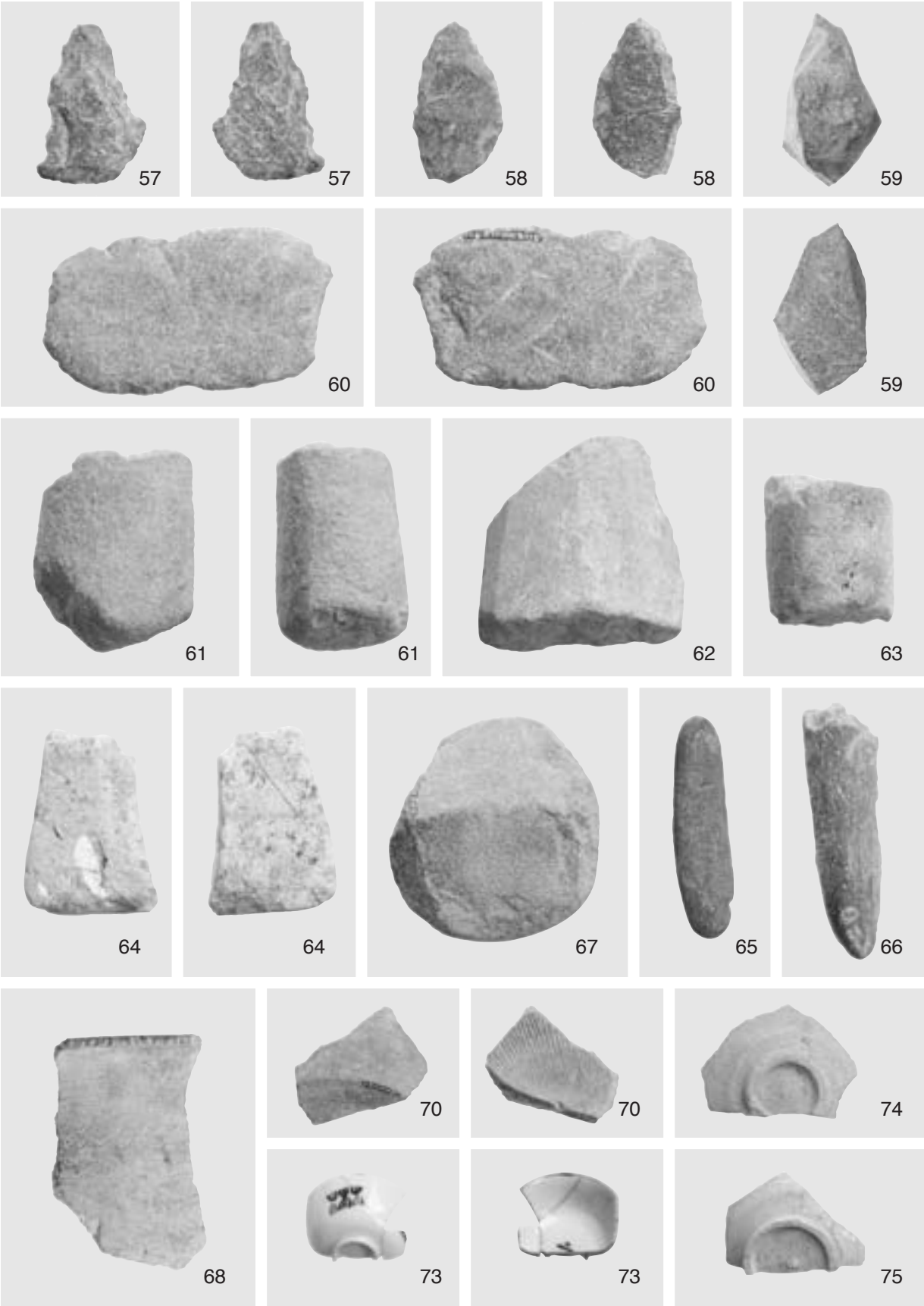
50

39

39

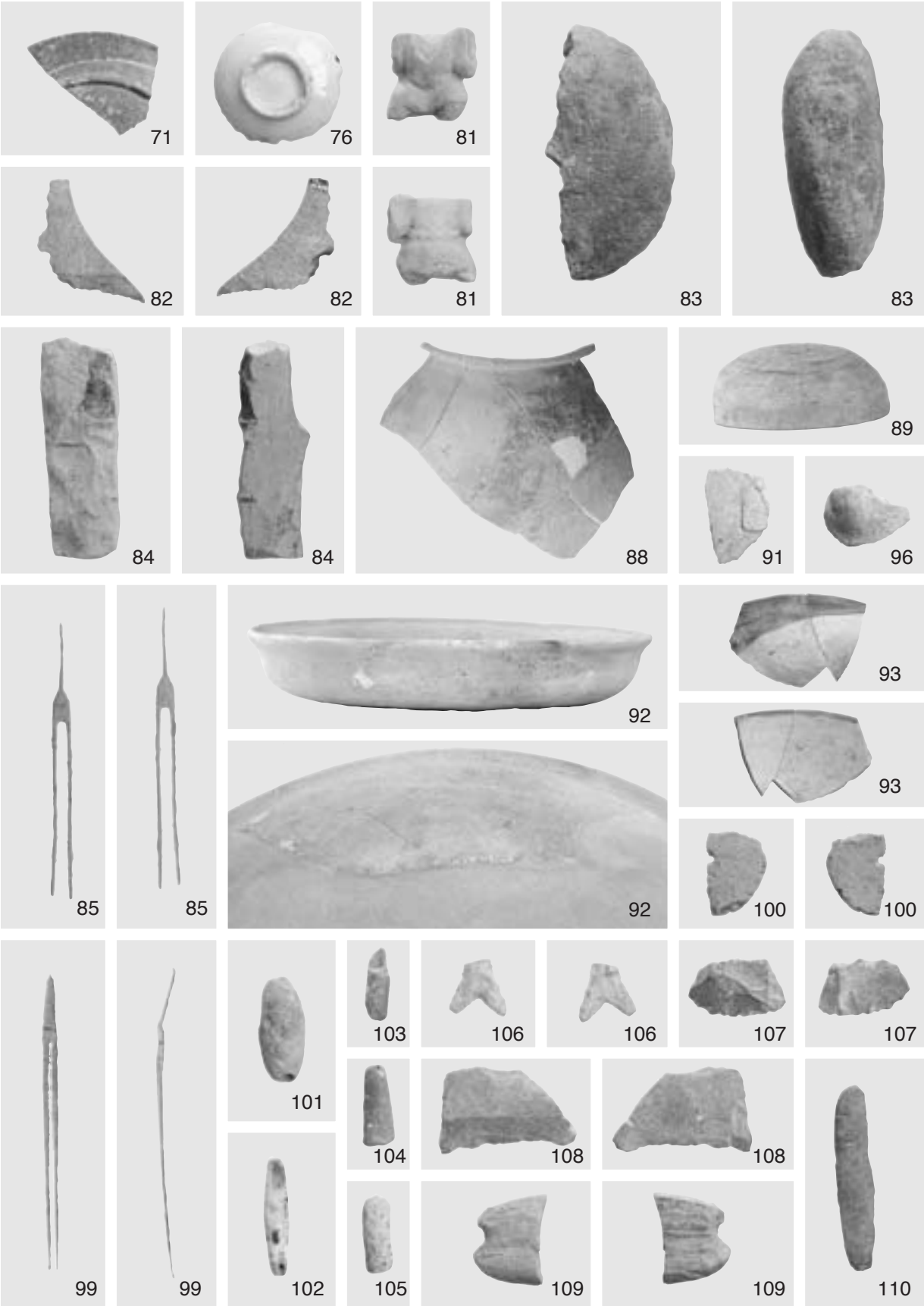

50

課外活動共用施設地点出土遺物 3



課外活動共用施設地点出土遺物 4

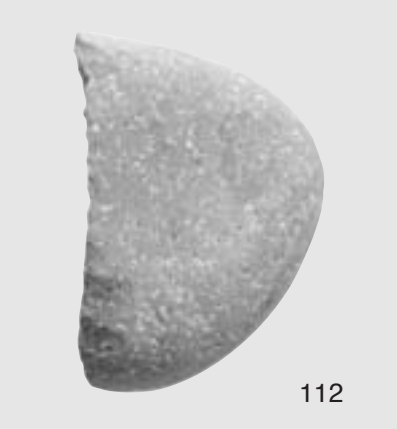
図版 14



課外活動共用施設地点出土遺物 5

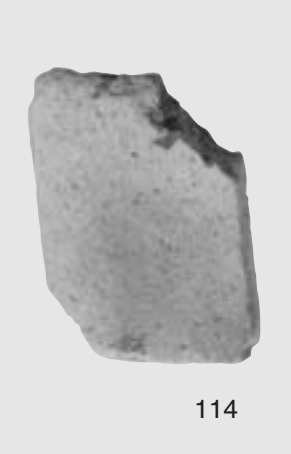
111

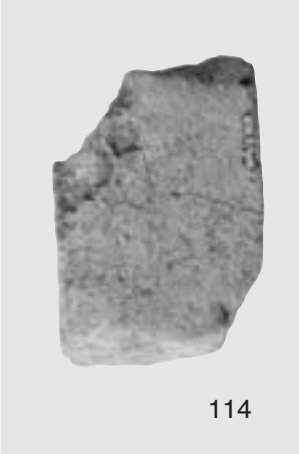
111


112

112

113


114


114

115

115

課外活動共用施設地点出土遺物 6

医療技術短期大学建設に伴う発掘調査

第 3 遺構面全景（南より）

第 2 遺構面検出状況（北西より）

図版 17

第 2 遺構面全景（南より）

第 2 遺構面北半（北西より）

第 1 遺構面全景（北西より）

第 1 遺構面東半（北より）

図版 19

現地説明会

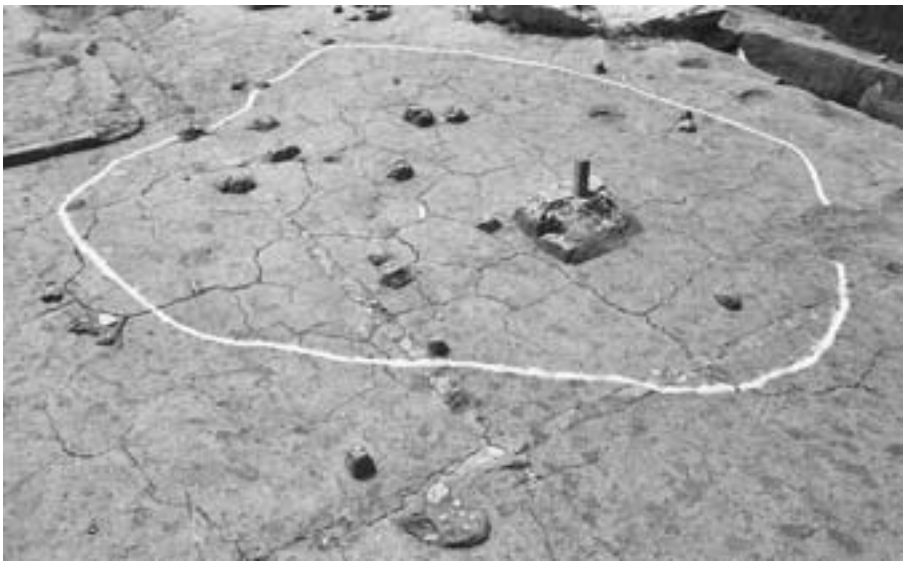
医療技術短期大学（現医学部保健学科）の現状（東より）

溝 SD301

溝 SD301 遺物出土状況

図版 21

溝 SD302



土坑 SK302 検出状況

土坑 SK302
遺物出土状況 1

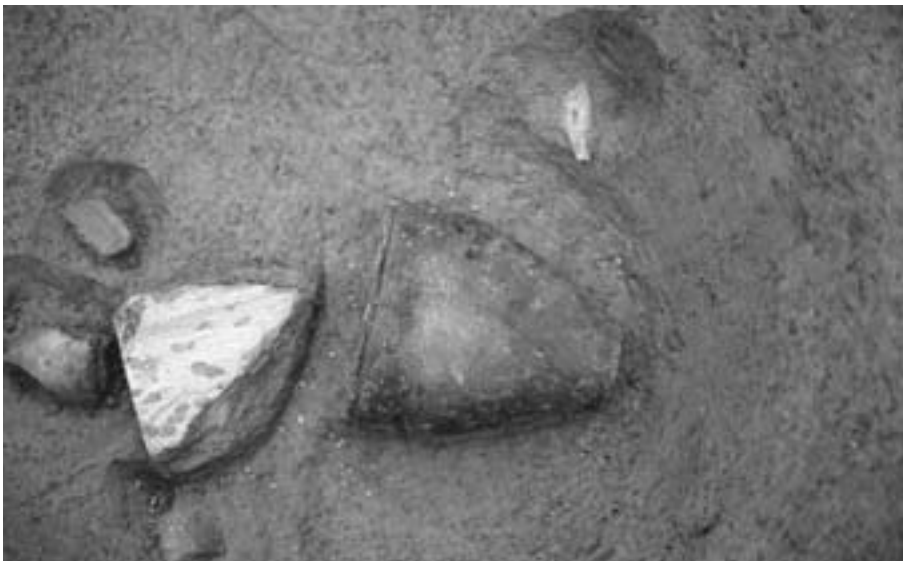
土坑 SK302
遺物出土状況 2

土坑 SK302
遺物出土状況 3

図版 23

土坑 SK302
遺物出土状況 4

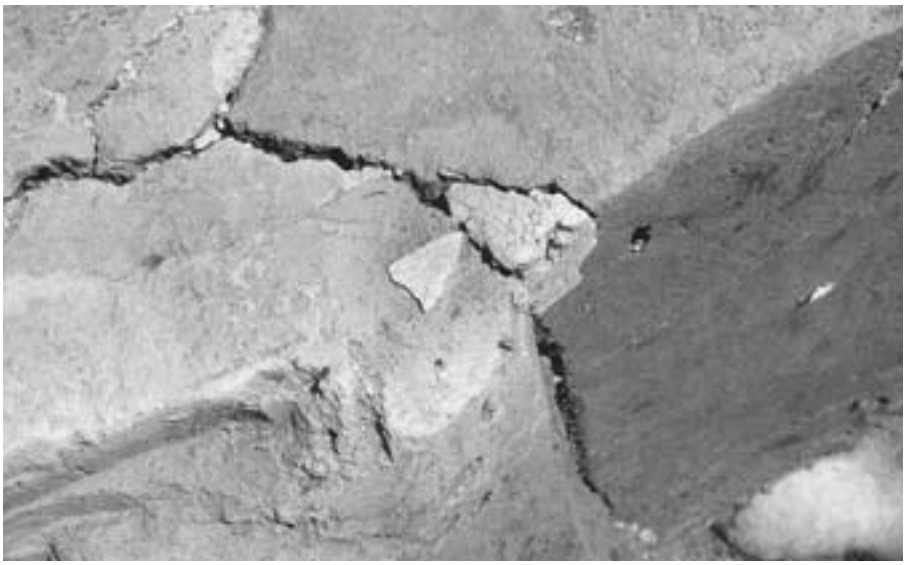
土坑 SK302
遺物出土状況 5



土坑 SK302
遺物出土状況 6

土坑 SK302
遺物出土状況 7

土坑 SK302
遺物出土状況 8



土坑 SK302
遺物出土状況 9

図版 25

土坑 SK302
遺物出土状況 10

土坑 SK303
遺物出土状況 1

土坑 SK303
遺物出土状況 2

土坑 SK303
遺物出土状況 3

第 5 層（弥生前期包含層）
出土土器 A

第 5 層（弥生前期包含層）
出土土器 B

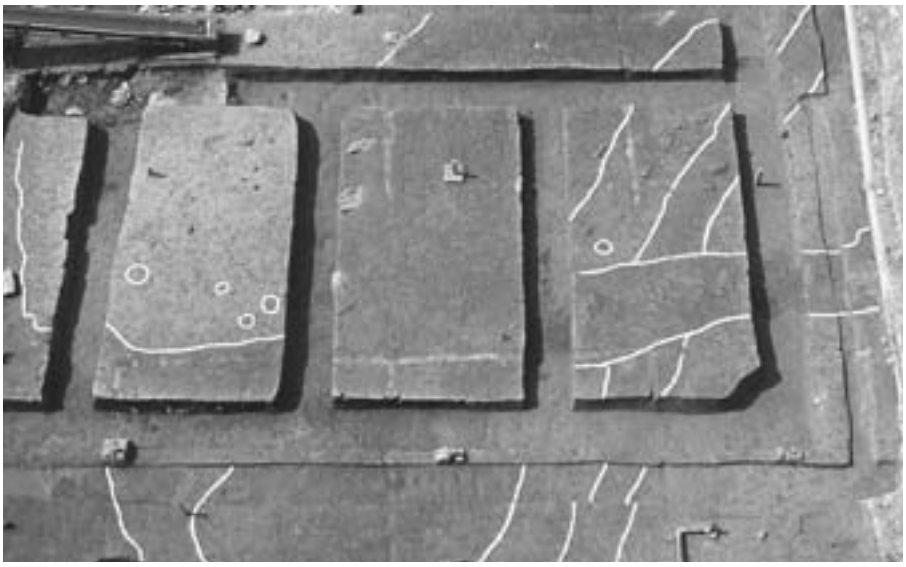
図版 27

第 5 層（弥生前期包含層）
出土土器 C

第 5 層（弥生前期包含層）
出土打製石庖丁

第 5 層（弥生前期包含層）
出土磨製石庖丁

溝 SD201 ～ SD204・
SD210

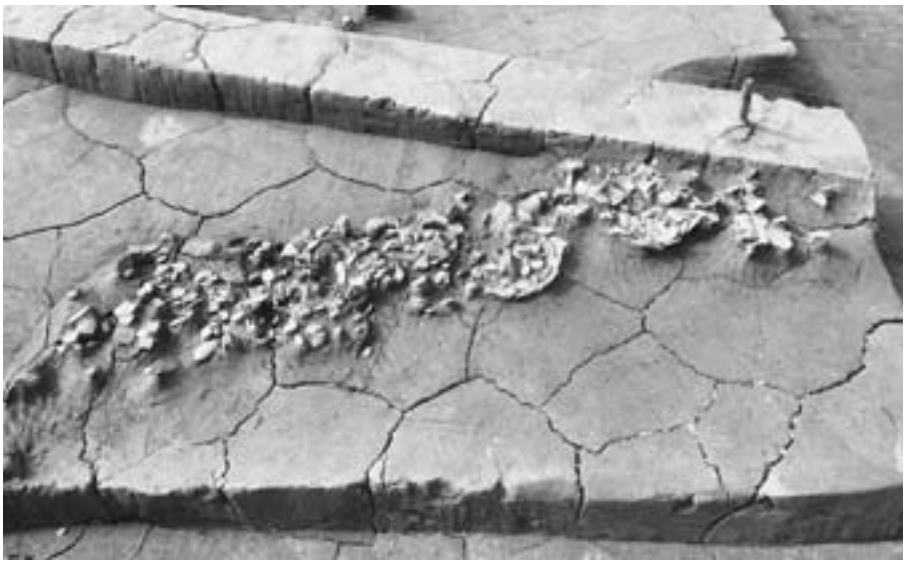


溝 SD205 ～ SD209
検出状況

溝 SD205 ～ SD209

図版 29

溝 SD205 土層



溝 SD205
遺物出土状況 1

溝 SD205
遺物出土状況 2

溝 SD205
遺物出土状況 3

溝 SD205
遺物出土状況 4

溝 SD205
遺物出土状況 5

図版 31

溝 SD205
勾玉形石製品出土状況

溝 SD205 全景

溝 SD207 検出状況

溝 SD207 全景

溝 SD207 土層

図版 33

溝 SD207
遺物出土状況 1

溝 SD207
遺物出土状況 2

溝 SD207
遺物出土状況 3

溝 SD207
遺物出土状況 4

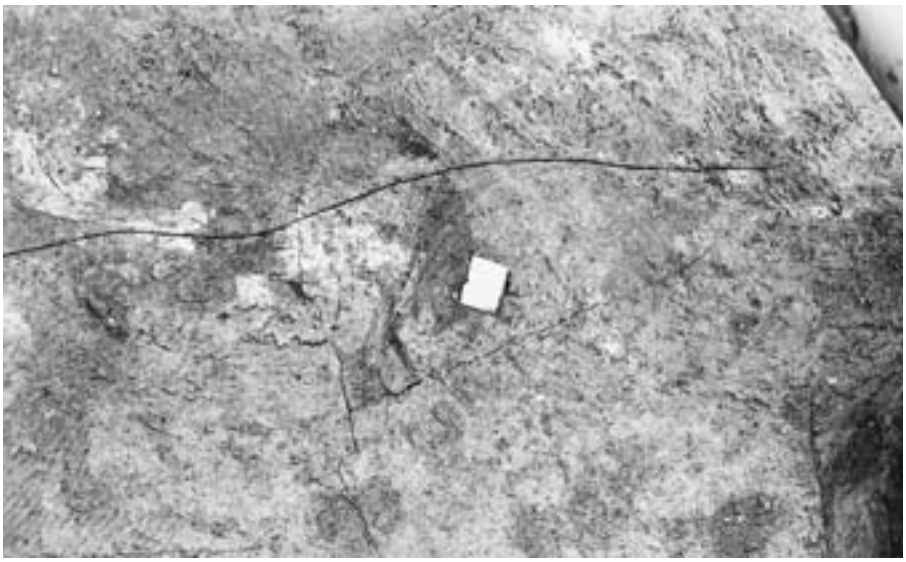
溝 SD207
遺物出土状況 5

溝 SD207
遺物出土状況 6

図版 35

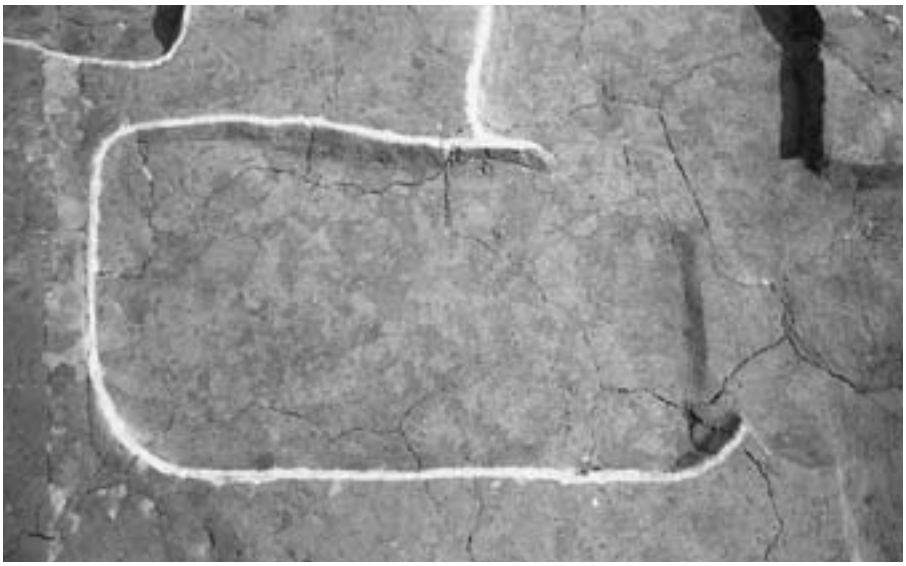
溝 SD209
遺物出土状況 1

溝 SD209
遺物出土状況 2



溝 SD209
遺物出土状況 3

土坑 SK203



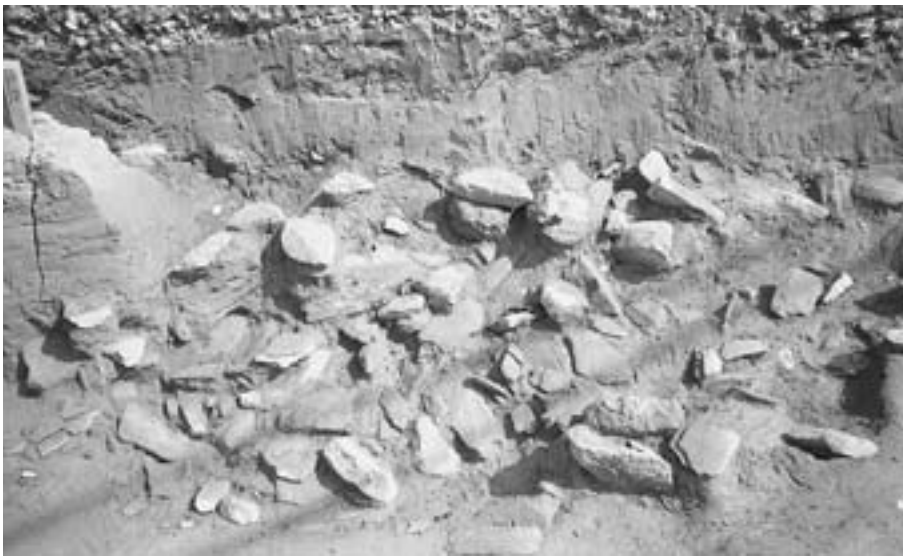
土坑 SK204

土坑 SK205

図版 37

土坑 SK206

竪穴住居 SB201



溝 SD102 集石 1

溝 SD102 集石 2

溝 SD102 出土鏡

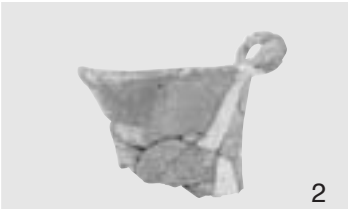
溝 SD102 出土漆椀

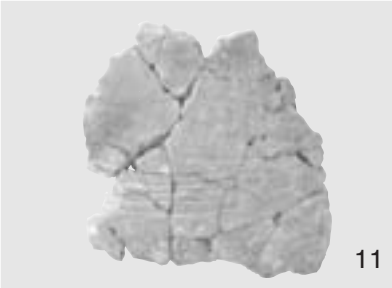
図版 39

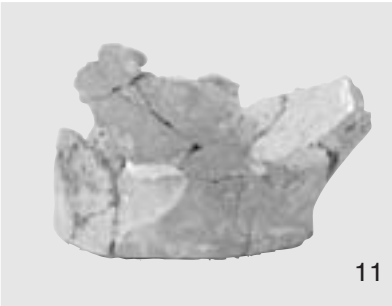
溝 SD102 出土木製品

土坑 SK101

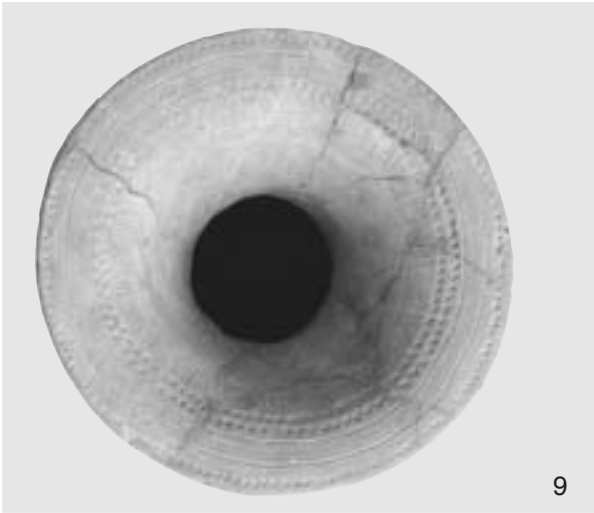
土坑 SK101

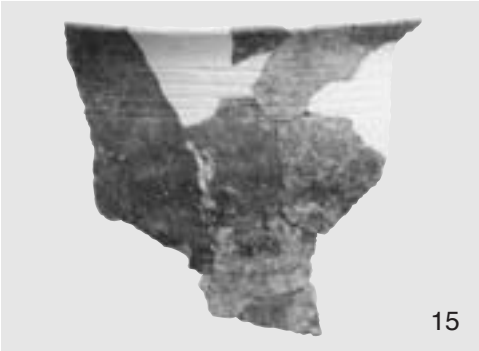


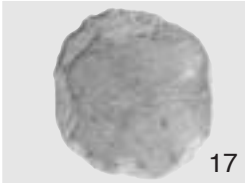


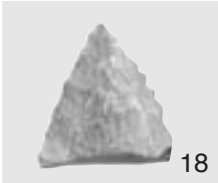


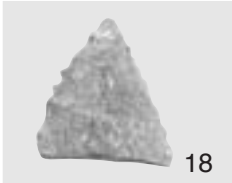
医療技術短期大学地点出土遺物 1

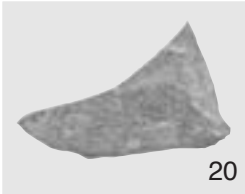


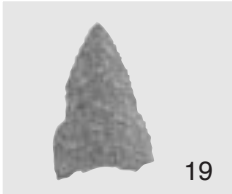








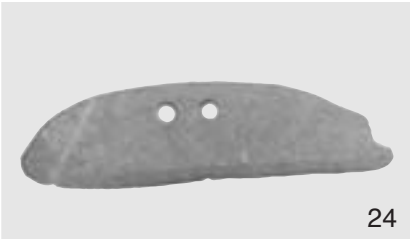


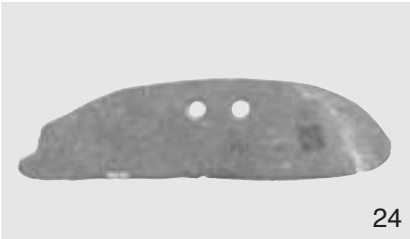


医療技術短期大学地点出土遺物 2

23

23


24

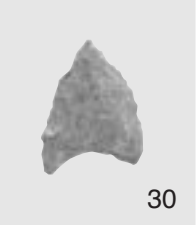

24

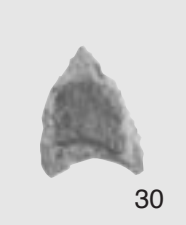
25

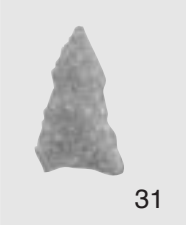
26

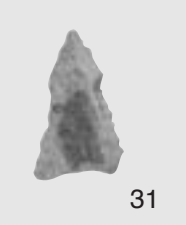
28

29

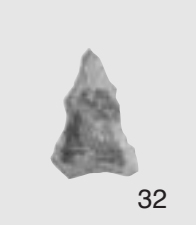

30


30

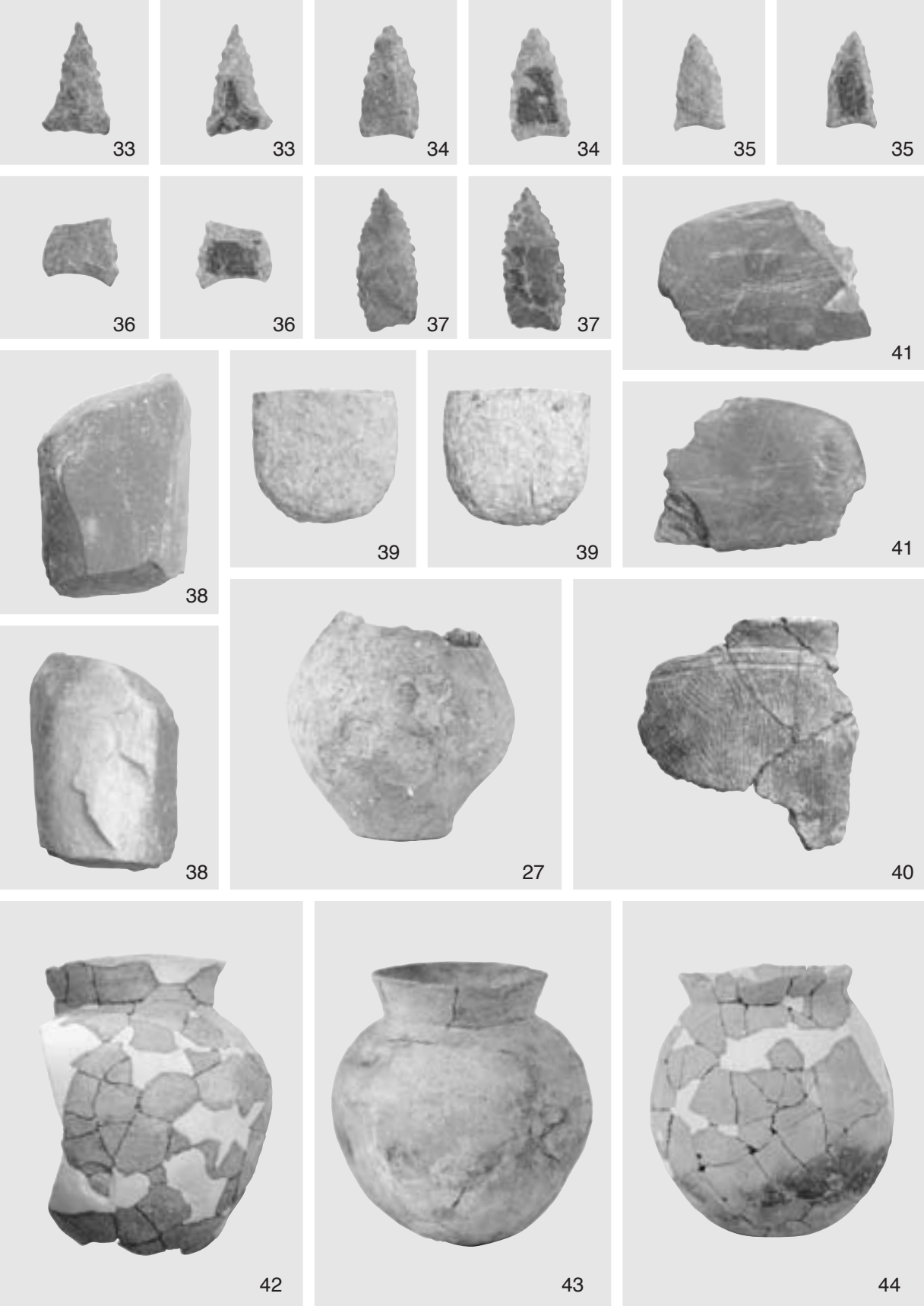

31


31

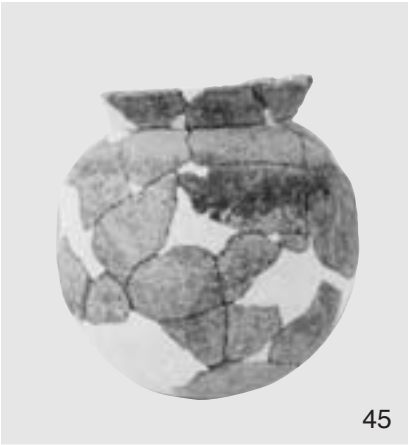
32

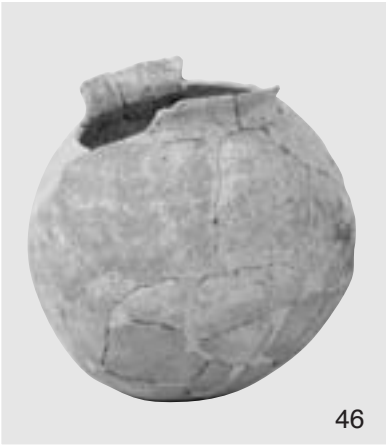

32

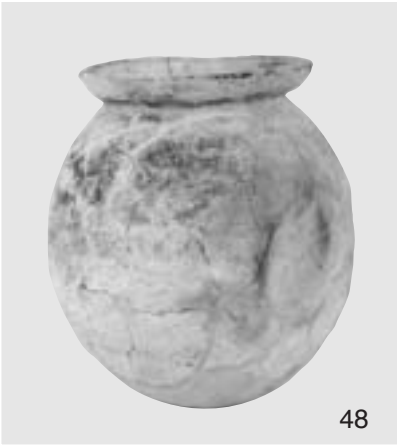
医療技術短期大学地点出土遺物 3



医療技術短期大学地点出土遺物 4

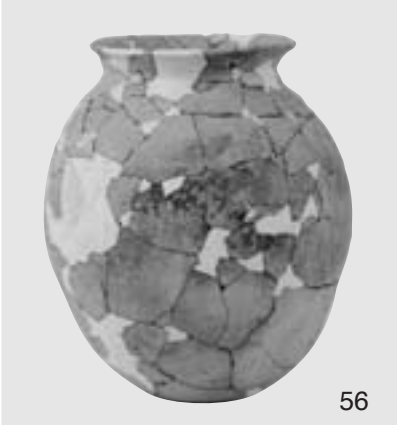

45


46


48

51

55

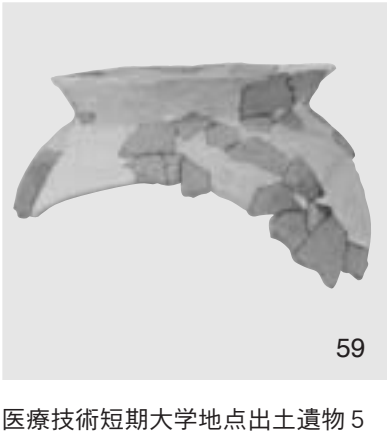

56

57

58

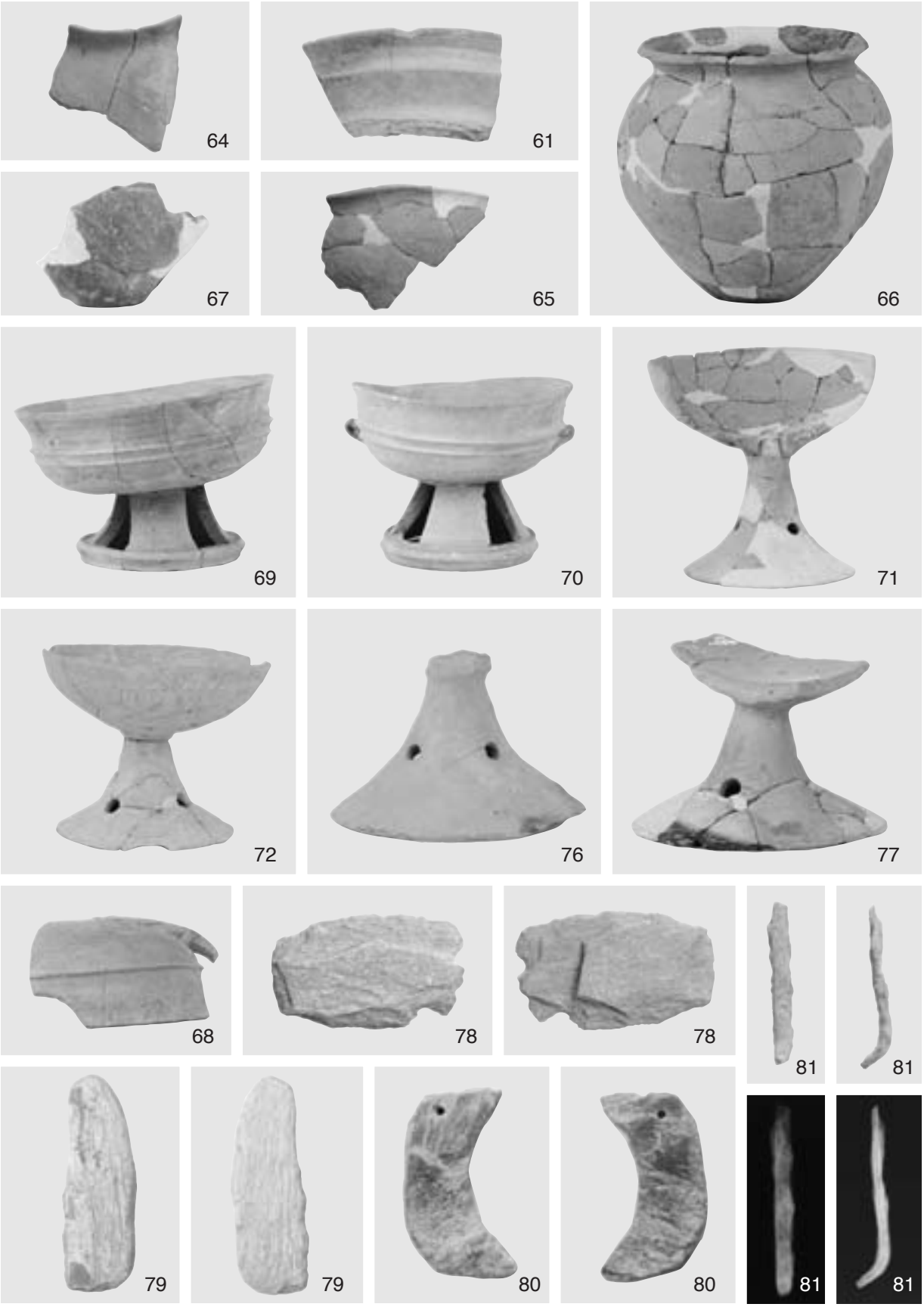
63

50

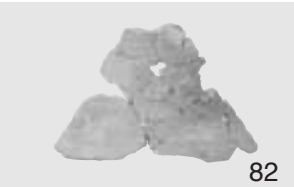

59

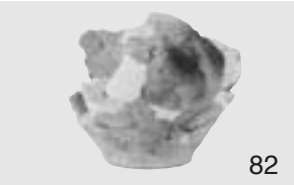
62

医療技術短期大学地点出土遺物 5



医療技術短期大学地点出土遺物 6


82

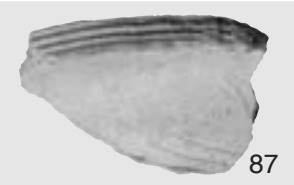

82

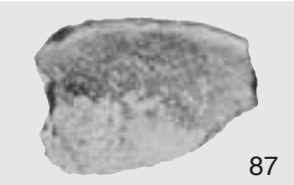
83

84

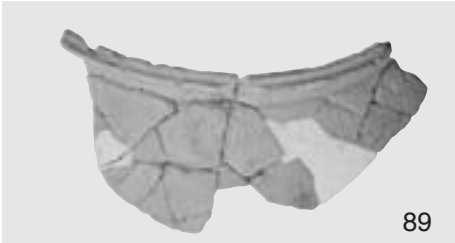
86

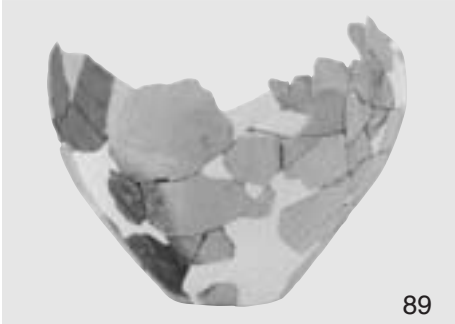
85


87

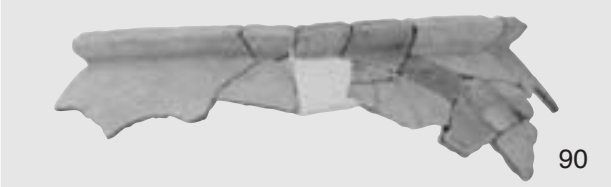

87

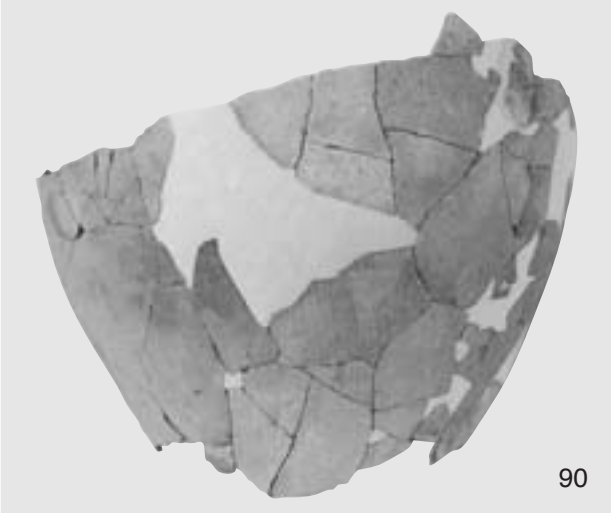
91


89

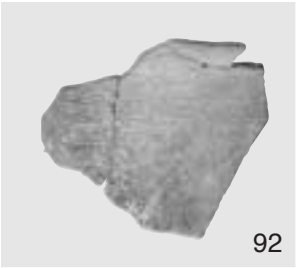

89

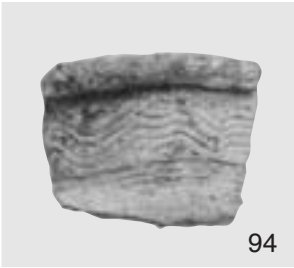
88

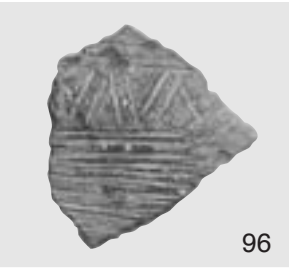

90

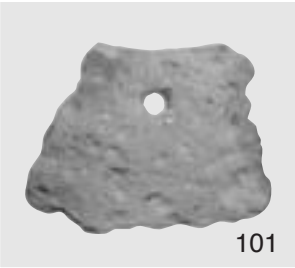

90

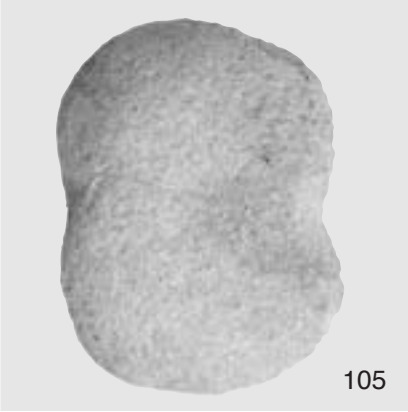
医療技術短期大学地点出土遺物 7

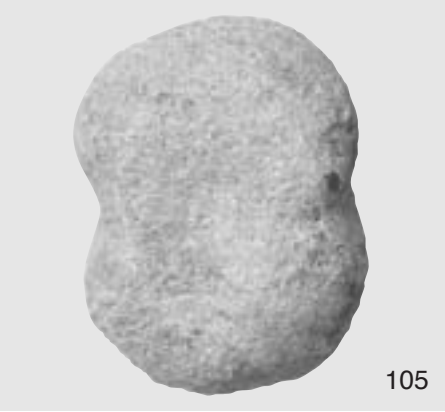


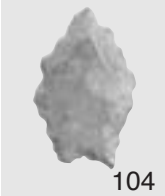


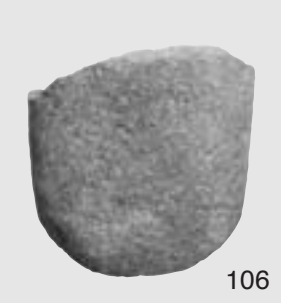


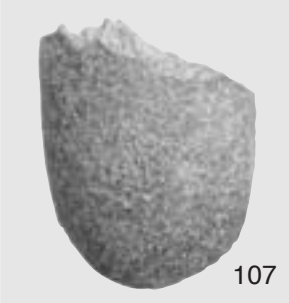


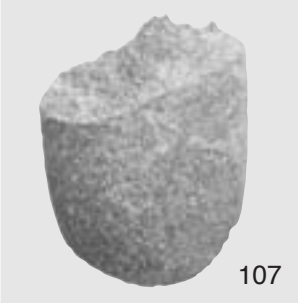


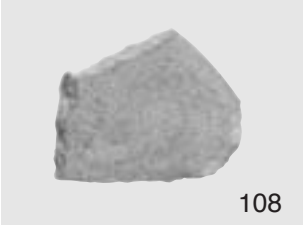


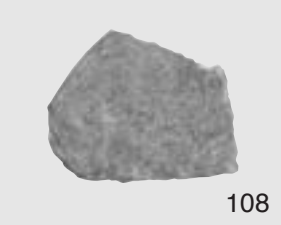


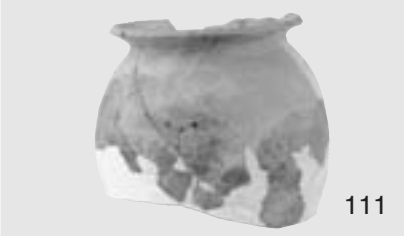


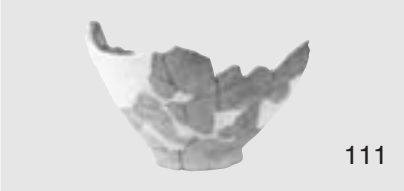






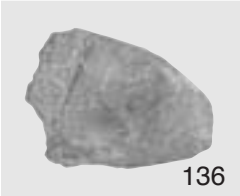


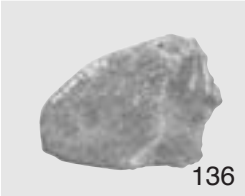


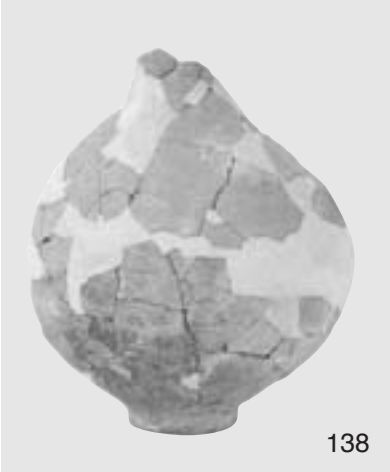


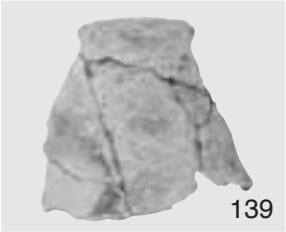
医療技術短期大学地点出土遺物 8

医療技術短期大学地点出土遺物 9

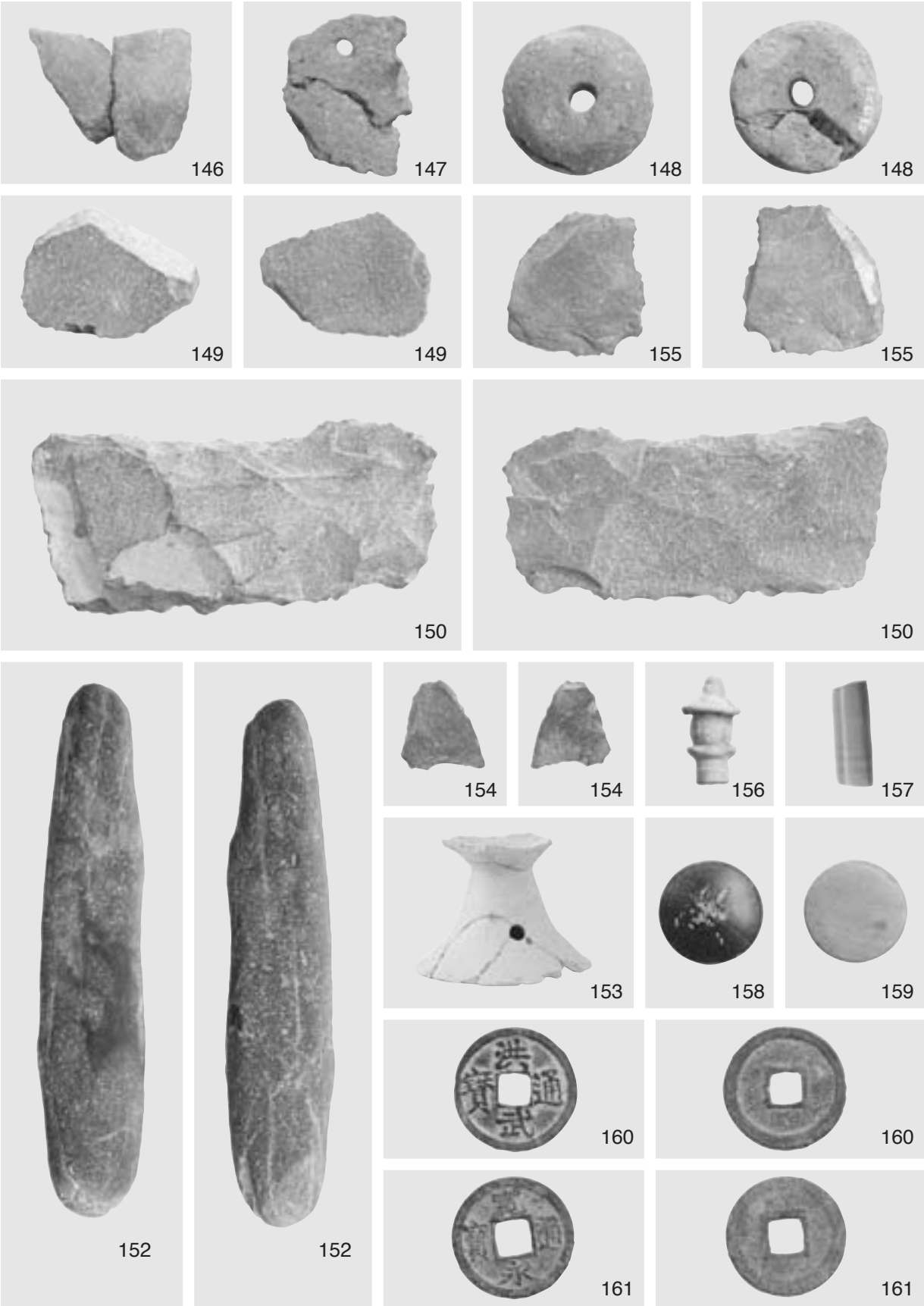








医療技術短期大学地点出土遺物 10



医療技術短期大学地点出土遺物 11

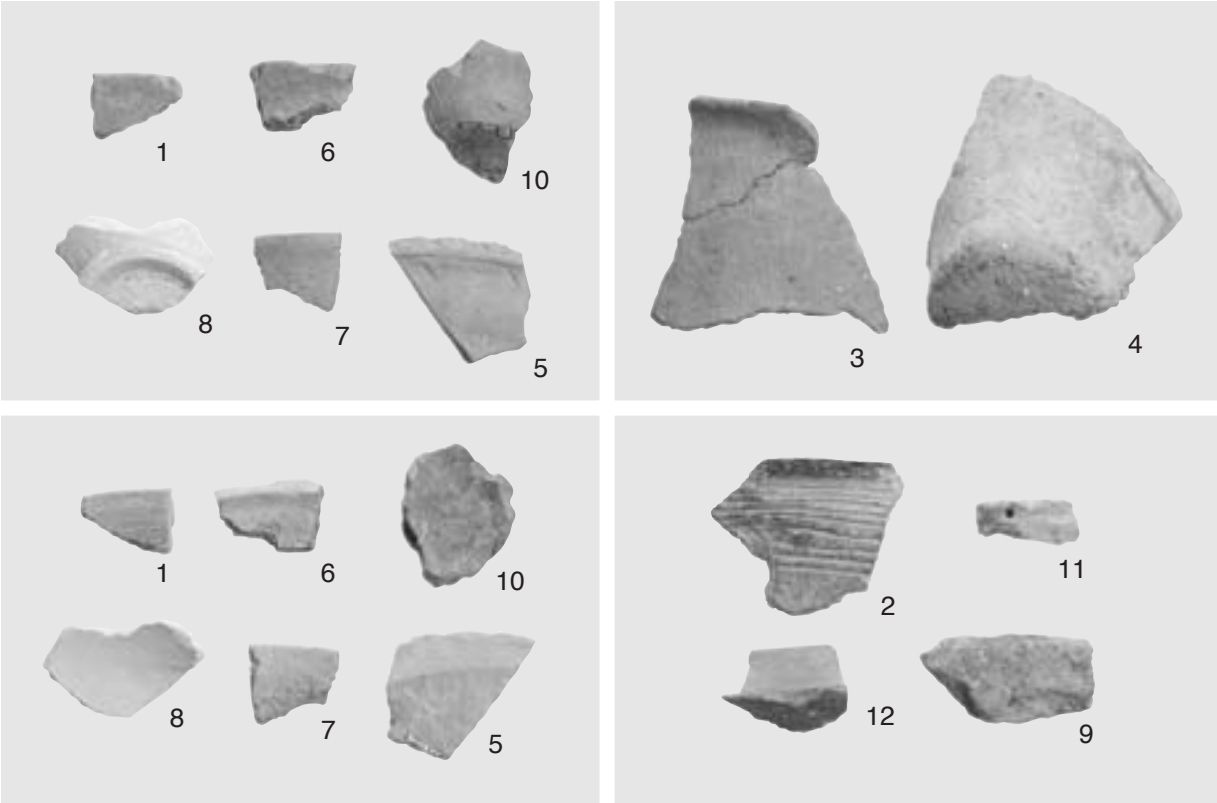
弓道場建設に伴う立会調査

弓道場立会調査（西より）

弓道場立会調査（東より）

弓道場現状（北より）

図版 52



弓道場立会調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しょう（しょう・くらもと）いせき
書名	庄（庄・蔵本）遺跡
副書名	徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書、 弓道場建設に伴う立会調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	中村　豊
編集機関	徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒770－8570　徳島市万代町1－1　　ＴＥＬ 088－621－3164 〒770－8503　徳島市蔵本町2－50－1　ＴＥＬ 088－633－7236
発行年月日	西暦2011年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
庄（しょう）	徳島県徳島市（とくしまけん とくしまし）庄町（しょうまち）1丁目78番地の1・蔵本町（くらもとちょう）2丁目50番地の1	36201	171～173	34度4分9秒	134度30分53秒	19840703～19840810（課外活動共用施設） 19870401～19870831（医療技術短期大学）	157（課外活動共用施設） 870（医療技術短期大学）	徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査、弓道場建設に伴う立会調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
庄	集落	弥生時代前期	溝・土坑	弥生土器・石器	弥生時代前期中葉～後葉の居住域
		弥生時代中期	溝	弥生土器・石器	
		弥生時代後期	溝・竪穴住居	弥生土器・石器	弥生時代後期後葉の居住域
		古墳時代中期	溝	土師器・須恵器・勾玉形石製品	古墳時代中期の祭祀溝
		平安時代	流路	土師器	
		鎌倉時代	溝	瓦器	
		近世～近代	溝・暗渠	柄鏡	

2011 年 3 月 18 日印刷・発行

庄（庄・蔵本）遺跡

－徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う
発掘調査報告書、弓道場建設に伴う立会調査報告書－

編集・発行　徳島県教育委員会
〒 770-8570　徳島市万代町 1－1
ＴＥＬ 088－621－3164

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
〒 770-8503　徳島市蔵本町 2－50－1
ＴＥＬ 088－633－7236･7224

印　　刷　徳島印刷センター
〒 770-8056　徳島市問屋町 165
ＴＥＬ 088－625－0135